

## 目次

■ 共通教育センター	1
■ 法文学部	19
■ 教育学部、教育学研究科	40
■ 理学部	42
■ 医学部医学科	79
■ 医学部保健学科、保健学研究科	90
■ 歯学部	108
■ 工学部	117
■ 農学部、農林水産学研究科	146
■ 水産学部	171
■ 共同獣医学部	195
■ 理工学研究科	216
■ 医歯学総合研究科	253
■ 臨床心理学研究科	263
■ 連合農学研究科	278



共通教育センター

## 令和元年度 共通教育センターFD 活動報告書

令和元年度に共通教育センター（以下、「共教C」と呼ぶ）が（一部総合教育機構として）取り組んだファカルティ・デベロップメント(FD)の取り組みとその成果を、ここに報告する。年度当初に4つの企画（A. 授業改善に資するアンケート、B. 共通教育懇談会、C. FD講演会、D. 外国語部門主催の教員ワークショップ）を提案していたが、このうちBについて令和元年度は実行できなかった。全学初年次必修科目である「初年次セミナー」と「大学と地域」において、高等教育研究開発センターから共教Cへと授業の企画・運営の主体が引き継がれ、授業そのものの内容もまた大きく改訂する取り組みが行われ、それに注力することになった為である。しかしこれら取り組みは、学生を対象とした授業アンケートや多くの教員による経験に基づいたものであり、FD活動として最大規模のものになったと言える。また、二年目となるベストティーチャー賞の推薦も実施し、この賞の意義についての議論が深められたと言える。

### 1. 「授業改善に資するアンケート」の実施と、「授業改善メモ」まとめのウェブ上公開

いわゆる授業アンケートを、前期は7月8日から8月17日まで、後期は1月20日から2月12日にかけて実施した。全ての共通教育科目に共通な質問項目に加え、「初年次セミナー」(I及びII)についてはさらに独自の項目を追加している。これら質問項目のうち前者については、学生の授業履修態度や満足度、そして授業担当教員の授業運営についての資質を問うものになっている。これらの情報は、ベストティーチャー賞推薦者を選定する上で基礎データとなる。一方後者については、受講した学生の達成度に対する自己評価を主に問うものになっている。この中で本年度独自に設定した質問として、受講生の大学での学習や人生における授業内容の意義についてが、挙げられる。教員の中から「大学の授業が有用かどうかはすぐには分かるはずがない」という、この質問設定に対して反対意見があった。しかしこの設問の真の意図は、「この授業を将来的にどの様に意義付けられるのかを深く考えながら受講できたのか」について問うものである。この真の意図はともかく、7割以上の学生が「有用である」と答えていた（少なくとも報告書筆者のクラスでは）。

そして、授業アンケートの結果を受けて教員が自らを振り返る授業改善メモについては、FD委員会により内容を整理した上ウェブで公開された。

授業改善メモまとめ URL: <https://www.kagoshima-u.ac.jp/educenter/staffmember.html>

### 2. 『初年次セミナー』準備ワーキンググループ(初年次WG)の取り組み

平成29年度から開講されてきた、本学の初年次教育において要の科目となる「初年次セミナーI」及び「初年次セミナーII」の授業設計について、初年次WGを発足させて本格的な見直しに取り組んだ。見直しすべき点は多岐にわたるが、そのうち重要な点は以下にまとめられる。

- 授業進行計画の見直し

テクニカル・ライティングやグループプレゼンテーションの再配置、冗長な部分のスリム化を検討し、ソロワークからグループワークへの段階的な移行を意識した。

- 「エビデンス」に基づく公平な成績評価

30以上のクラスの間で公平な成績評価を実現すべく、従来からあった「ルーブリック」に加え、授業担当教員の成績評価に対する裁量を残しつつも、課題ワークの提出実績に基づいた成績評価の方法を確立した。この手法はまた、成績評価に伴う授業担当教員に掛かる過剰な負担軽減することも狙う（必要に応じて個別指導に専念できるとも言える）。

- 「多読のすすめ」の導入

勉学における基礎体力養成とも言える読書の習慣を定着化させる取り組みを、新たに導入した。新聞記事や雑誌、論文、学術書に対する読書量を点数化する取り組みである。

- 「焦点化教育」の導入

「学術倫理」、「人権教育」、「消費者教育」等、大学の教育において社会から導入が期待されている、テーマを特定した教育を、ここでは「焦点化教育」と呼ぶ。他大学では導入が先行しているが、本学でも「初年次セミナーII」の後半から導入することにした。

これら項目は全て、学部混成クラスで成立し、また成人していく初年次学生がすぐにでも備えるべき「ジェネリック」なスキルを扱うものであり、令和2年度の講義で順次取り込んで行くことになった。

### 3. 『大学と地域』準備ワーキンググループ(大地 WG)の取り組み

地域貢献を目指す本学では「地域人材育成プラットフォーム」と呼ばれるカリキュラムを構築している。「大学と地域」は、その中で入口となる初年次必修科目であり、平成29年度から開講されてきた。「初年次セミナー」同様、授業設計について大地 WG を発足させて本格的な見直しに取り組んだ。その主な内容を以下にまとめる。

- 「大学と地域コーディネート委員会」発足の提言

地域の課題について話題講義を提供して下さる学内外からの「話題提供者」（学長や県知事も含む）の募集や講義への派遣を扱う、共教C内に委員会組織が必要であることを提言した。この委員会は、令和元年12月の共教C運営委員会を経て設置が承認された。

- クラス編成及び話題提供方法の変更

主要分野を7つ（「稲盛アカデミー」を含む）に絞り、火曜日及び金曜日合わせて14クラスに再編成した上で、各クラスでは全ての分野について順次受講する方式を採用することにした。これにより、クラス間の受講生数の偏りと、希望する分野を受講できないという一部学生からの不満の原因を解消することになる。

- グループワークの積極的導入（令和2年度はCOVID-19禍により導入中止）

15回の講義のうち、5回をポスター作成及び発表に割り当てるグループワークの実施を検討した。8人ずつ最大25グループに受講生を分けて、manabaを利用して受講生間の討論を積み上げて、グループでまとめ上げた地域で解決すべき課題についてポスター上で解説するというものである。

これらの点は、学生が地域の課題について多角的視点に基づいて学習し、課題解決に向けた現実的な取り組みを提案する能力を高めることにつながると期待される。

#### 4. FD 講演会の開催

9月30日13:30から共通教育棟1号館1階111号講義室にて、山本裕子先生（三重大学地域人材教育開発機構・准教授）をお招きし、表題「基礎から学ぶ成績評価」にてご講演を頂いた。当日は、共教C教員に留まらず全学から教員が集まり、40名以上の参加があり盛況となった。

講演の内容は、授業の成績評価に関する理論的なものであった。特に、①相対評価ではなく到達度に基づいた評価を行う為の理論と実践例（指導と評価の一体化など）と、②学生のパフォーマンスを評価する為のルーブリックの活用について焦点が当てられた。①については、特に、同じ科目名で多数クラスにおいて同時に開講される本学の「初年次セミナー」において大変参考になる知見が得られた。その中でまず、相対評価に拘ると成績上位にいつまでも到達できない学生達の動機付けに影響を及ぼすことが示された。そして、ルーブリック内容の事前告知によって、授業を通して学生が身につけなければいけない内容とそのレベルについて理解が浸透することにも触れている。②については、具体的なルーブリック作成法と活用法について論じられた。授業の目的に合わせて複数の評価項目を設定することがポイントであり、「ルーブリックに記載された内容しか学生が注意を払わなくなる」という参加者からの懸念についても、授業担当教員によるルーブリックの設計に関わってくる問題として捉え、ルーブリックを柔軟に活用してはどうかという提言があった。

講演会の後半では、参加した教員らによるグループワークが行われた。題目は、担当する授業（共通教育や専門科目）、さらに卒業研究の評価で参考にするルーブリックの試作である。講演会には全学から教員が集まってグループを形成した為、対象の授業は専門色の濃いものは扱えなかった。しかし、卒業研究についても学部によらず、ルーブリックを用いた成績評価ができることが重要な点だと言える。つまり、課題発見・課題の背景に関するまとめ・研究方法の明確化・結果の取りまとめ・結果の解釈、それぞれについて到達レベルを設

定したルーブリックというものである。ルーブリックは、共通教育科目では令和2年度開講の講義でさらに導入が進むはずである。

## 5. 大学 IR コンソーシアム学生調査結果(平成 30 年度実施分)の評価・分析について

共教 C の FD 委員会では、平成 30 年度実施分の「大学 IR (Institute Research) コンソーシアム学生調査」に対する評価・分析を行った。表 1 では、その結果で得られた知見や知見に対する解釈についてまとめた。

表 1: 大学 IR コンソーシアム学生調査 (平成 30 年度分) で得られた知見や結果の解釈

	注目した知見	知見に対する解釈	改善・対応策
大学での 学びの 実態	<ul style="list-style-type: none"> <li>・教育への満足度： 共通教育科目に対して 46%の 1 年生が満足している。その一方初年次教育に対しては 23%に留まる。</li> <li>・授業を通じた学習経験： 定期的な小テストやレポート： 1 年 57%、3 年 53%</li> <li>出席の重視： 1 年 39%、3 年 41%</li> <li>授業課題のため Web 上情報を利用した： 1 年 42%、3 年 48%</li> <li>インターネットを使って授業課題を受け、提出した： 1 年 41%、3 年 35%</li> <li>・授業内外学習状況 授業や実験に出る： 20 時間以上 1 年 45%、3 年 24%</li> <li>授業時間外学習、復習をする： 20 時間以上 1 年 2%、3 年 4%</li> <li>1-2 時間</li> </ul>	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 「初年次セミナー」に対応した設問だと考えられる。共通教育科目全般に比べて、この講義が依然不評であることを物語る。</li> <li>2. 過半数の学生が週に 10 時間以上の授業に出席し、授業の半数以上で課題が課されているにも関わらず、週に授業時間外学習を 20 時間以上行っている学生は 10%に満たない。過半数の学生が 5 時間未満である。この傾向は 1、3 年で変わらない。出席が重視されると認識している学生が半数近くいることから、授業さえ出ていれば良いとの認知が横行していると思われる。</li> <li>3. 課題のためにインターネットを利用する学生が半数近くいる反面、読書を全くしない学生がまた半数近くである。電子媒体での読書がアンケートにどのように反映されているか不明で</li> </ol>	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 今後の学術的動機付けにも直結するはずなので、内容の精査や充実感を与える様な授業進行や課題設定が必要。</li> <li>2. 出席でなく、学術的成果（試験、レポート、発表等）で単位評価することを徹底し、その認知のための周知を行うことが肝要である。</li> <li>3. 電子媒体での文献調査をどの程度行っているのか、本当に活字を読むことが少なくなっているのか、調査の必要がある。文献を読む量が減ることは学力低下に直結するので、本を読む重要性について教育することが必要である。</li> <li>4. 教員が上で学生が下であるという認識を両者ともに放棄し、学術の下での平等を教育すべきである。そのためには「こう</li> </ol>

	<p>1年 26%、3年 27% 3-5 時間</p> <p>1年 30%、3年 24% 授業時間外に教員と 全然面談しない</p> <p>1年 79%、3年 67% 読書（マンガ・雑誌 除く）を全くしない</p> <p>1年 40%、3年 39% ・能力／スキルの 変化、専門分野や 学科の知識が 大きく増えた</p> <p>1年 19%、3年 32% コンピュータの操作 能力が大きく増えた</p> <p>1年 16%、3年 19% 人間関係構築能力が 大きく増えた</p> <p>1年 12%、3年 18% 他人と協力して遂行 する能力が大きく増 えた</p> <p>1年 11%、3年 18%</p>	<p>あるが、文献調査を全くし ていないのであれば、これ が時間外学習の短さの原因 の一つではないか。</p> <p>4. 7割以上の学生が時間外 に教員と面談していない。 教員と学生の距離を端的に 示している。</p> <p>4. 専門知識やコンピュー タの能力が増えたと感じる 学生が多いが、一方高学年 では、コミュニケーション 能力の向上を実感している 学生が増える。少人数クラ ス、実験、ゼミなど協働し て成果を出す科目が増える 為であろう。</p>	<p>しなければいけない」と いう教育ではなく、「なぜ こうするのか」という 丁寧な説明が必要であ る。</p> <p>5. 旧態依然とした能力向 上から脱せていない。AI 時代に新たに要求される リーダーシップの能力、 数理的な能力、グローバ ルな問題の理解について 重点化を図る必要があ る。</p>
<p><b>英語運用 能力の 熟達度 及び 英語学習 の状況</b></p>	<p>※本調査の分析につ いて</p> <p>①2018年度1年生の 入学時と現在（2018 年11月）における英 語力（聞く力・読む 力・会話力・表現 力・書く力）の熟達 度について</p>	<p>※本調査を使用した共通教 育の学生の英語力は、2018 年度とそれ以前のデータ を使用した正確な比較・分 析を行うことが困難。（理由 説明省略）</p> <p>①各能力を主要層の B1 から C2 項目に注目した結果 （会話力に関しては A2.1 から C2）、学生は入学時 から半年間で、全ての能力 において伸びていると実感 しているようだ。データ からは読み取れないが、入 学時</p>	<p>※毎年、定期的に同じ 方法を用いてアンケート を実施するべきである。</p> <p>①引き続き、学生が必要 としている英語力を把握 しながら、カリキュラム 改善を図る。</p>

	<p>②2016 年度共通教育の英語カリキュラム改訂後の変化について：改訂前の 2015 年度と改訂後の 2017 年度との比較（各年度の 11 月時点の結果で比較。2018 年度は過年度の調査対象者が異なるため比較対象から除く。）</p> <p>③2016 年度入学者（2018 年度の 3 年次生）の 1 年次と 3 年次の英語力の変化</p> <p>④英語学習の状況（2018 年度前期後期共通教育センター manaba 調査結果より）</p>	<p>から自身の英語力に自信がなかった可能性もある。 ※C2 は英語学習者として最も能力が高いレベルの項目を意味する。</p> <p>②・1 年次生の入学後の外国語運用能力について、カリキュラム改訂後「増えた・大きく増えた」と答えた学生の割合が上がっている（2015 年度：31.3%、2016 年度：35.3%、2017 年度：42.4%）。</p> <p>・主要層の項目に注目した結果、全ての能力において伸びている。聞く力、読む力、会話力、表現力において特に B1、B2 の層を中心に、書く力は B2、C2 の層が伸びており、全ての能力の中で最も伸びている。</p> <p>③全ての能力において B1 以上の項目になるにつれ、1 年次より 3 年次では割合が下がり、望ましい結果とは言えない。おそらく、2 年次、3 年次に英語を学ぶ機会が少ないことが主な原因だと推測する。また、3 年次になると専門性が高くなるためとも考えられる。</p> <p>④授業外学修時間において「30 分未満」「30 分～1 時間」が、若干上がっている。時間外学習において、週 60 分に達している学生は 6 割程度と思われる。また、90 分に達している学生は 3 割程度と思われる。</p>	<p>②・引き続き、カリキュラムが学生のニーズに適合しているか検討し、さらなる改善を図る。</p> <p>・聞く力、読む力、会話力、表現力、書く力を育成するためには、4 技能の統合型授業を主体とし、持続的な授業外学修が重要となる。授業外学修においては、課題の工夫を検討する必要がある。</p> <p>③3 年次の学生に関しては、学部での英語教育がカギとなり、4 年間を通した英語教育を考えるべきである。</p> <p>④授業担当者が授業外学修を促し、英語力に応じて、予習復習を中心とした課題の提示方法にもう少し工夫をする必要がある。</p>
--	---	--	--



## 6. ベストティーチャー賞受賞者についての取り組み

共教Cでは、平成30年度にベストティーチャー賞に選出された鄭芝淑先生（共通教育センター准教授）の講義（韓国語入門Ⅰ）について、11月27日1限目に共通教育棟2号館1階213号講義室にて公開授業を企画した（鄭先生ご本人のご好意により、その日に限定せず見学を可能にして頂いた）。明快な板書、座学に終始しない工夫された韓国語の対面練習、受講生に対して「友達」と呼ぶ親近感の持てる授業運用を披露して頂いた。

そして令和元年度については、森裕生先生（高等教育研究開発センター・助教）をベストティーチャー賞に推薦することにした。森先生は初年次セミナーⅠと「初年次セミナーⅡ」を担当しているが、この両方において「授業改善に資するアンケート」では受講生から好意的なコメントが寄せられている。より具体的には、授業内容に対する分かり易い解説、グループワークにおける受講生自らが考えたいくなるような工夫、丁寧な課題設定、受講生一人一人に対する丁寧な対応、等、授業進行において様々な工夫について、コメントでは挙げられていた。

なお、ベストティーチャー賞推薦者の選考は今回で2回目になり、幾つかの課題が見えてきた。「総合的な評価によって選考する」ことになっているが、何をもって「ベスト」のティーチャーにすべきかについて、注目すべき事項やその評価方法に至るまで様々な意見が出てくるのは必定である。学会等で行われる顕彰とは大きく異なり、「顕著な成果」とみなして授業によって推薦者以外の教員と差別化を図るのは難しいのが実情である。従って、選考過程において毎回時間を要することになる。実際、授業アンケートの集計結果の数値化やその結果の不確かさや信頼性について、FD委員会での議論が白熱化した。また、選考が3回目、4回目になってくれば、過年度の選考結果についても振り返る必要があるだろう。しかし、選考手順に関しては細かくルール化・明文化することは敢えてせず、委員が入れ替わっていく中で選考の度に優れた授業担当者像について振り返り議論し、委員会構成員による多面的な評価・選考を行うことは、それなりに有意義だと考えられる。

そして、ベストティーチャー表彰の本来の目的が、共通教育全体における質的向上にあることを忘れてはならない。そうであるならば、顕彰を繰り返して年を追う毎に、優れた教育実践を行ったとみなされる教員が増えていかなければならないはずである。最終的にベストティーチャーとして推薦されるのは毎年たった1名に絞られるとしても、それ以上の長きにわたる質的向上にむけた努力に対しても、将来の選考時に考慮されるべきであろう。

## 7. 外国語教育部門主催の教員ワークショップ

令和元年度内で2度開催された。1回目は、前述の鄭芝淑先生（初修外国語=今回は韓国語）による発表、2回目は既習外国語(=英語)に関する招待講演に基づいたものだった。

## 7.1. 第1回共通教育センター教員ワークショップ

8月22日（木）10:30～12:00にかけて、共通教育棟3号館325号教室にて開催した。前半では、鄭芝淑先生が「韓国語の統一授業について」という題目で発表を行った。担当講義である「初級韓国語」で実施している統一授業について、到達目標の統一、評価方法の統一、学習過程の統一のための教員間の連携や、その効果および問題点について報告がなされた。また後半では、出席者や、共同で授業に当たる非常勤講師の先生も交え、活発な質疑応答が行われた。

鄭先生の報告では、統一授業に関わる重要な実践例が多く示され、「初級韓国語」を担当する非常勤講師との連携や協働に加え、授業内での学生への対応や授業外学修のあり方等についても語られた。大学において教育の質保証が求められる流れの中で、その内容は他の初修語科目のみならず、英語やその他共通教育科目を担当する専任教員・非常勤講師にとっても多くの示唆に富むものであり、今後の授業内容や教員間の連携を考える上でも、またセンター内の教員や非常勤講師の意見交換の場としても、有意義なワークショップとなった。

当日の参加人数は合計16名（グローバルセンター1名、共教C10名、非常勤講師5名）だった。事後アンケートでは14名から回答があり、ワークショップについて「とても満足」が13名（不明1名）であった。自由記述からは、報告内容について「とても役立ちました」「参考になりました」「勉強になりました」「有意義」などの回答が多く見られた。また、質疑応答の時間を多くとった点についても、「多くの先生方の多様な視点に触れることができた」「非常勤の方のご意見も聞けたのがよかった」などの肯定的な意見が見られた。また、要望として、「他の初修語」や「会話の教育」に関するワークショップの開催や、「模擬授業」の実施を求める意見が出た。



図1 第1回共通教育センター教員ワークショップにおける鄭先生による講演の様子

## 7.2. 第2回共通教育センター教員ワークショップ

9月24日（火）10:00～12:45にかけて、共通教育棟1号館4階Common Room 2にて開催した。講師に東京電機大学工学部の広石英記教授（教育改善推進室長、日本PBL研究所理事）をお招きし、「教養と専門教育をつなぐPBL」という題目で講演頂いた。参加対象者は、外国語教育に関わっている全教員（専任教員、非常勤講師）またその他、本ワークショップに関心のある方とした。

今回は、近年高等教育機関で盛んに導入されているプロジェクト学習（Project-based Learning）の教育方法の意義や手法について学んだ。その際、汎用的能力の獲得を志向したこの学習法と、専門的な知識・技能の熟達を志向した問題基盤型学習（Problem-based Learning）という、二つの“PBL”の特性の違いについて学んだ。さらに、具体的な実践事例に基づき、本学教員が担当する授業に応じたPBLをデザインする基本的考え方について学んだ。その後、3、4人のグループに分かれ、PBLに基づいた授業プランを提案した。

当日の参加人数は合計24名（専任教員：教育学部1名、歯学部1名、共教C14名、その他3名 / 非常勤講師：英語1名、地学実験1名、異文化理解1名、その他1名）だった。事後アンケート（回答者18名）では、16名が「ワークショップは有意義だったと非常に思う」、2名が「少しそう思う」と回答した。感想として次の様なコメントがあった。

・「PBLという言葉は知っていても、具体的にどのように授業に取り入れることができるかが理解できていなかったなので、それを理解する良い機会でした。」

・「PBLという言葉からシラバスや授業を通じて私なりの判断で理解し進めていましたが、今日、根本的な所から組織的に教えることができ、大変有益な機会でした。ハンドアウトやメモを見返して、私なりに実践しながらさらに理解を深めていきたいと思います。」

・「グループワークもあってPBLについて話し合うことが出来てよかったですと思います。」

・「PBLのprojectとproblemの違いがいまいちよく分からなかった点が非常にクリアになって良かった。また、国内・海外での具体的な実践例も紹介してもらえたのも良かった。」

本ワークショップを通して、外国語教育部門（既修外国語）を中心により充実した共通教育の英語授業を目指し、シラバスの見直しを重ねながら学生のニーズに応えられるように授業内容の改善の糸口を模索してきた。今回のトピックでもあるPBLはその一環であり、外部講師による講演を通して見解を広げ、また教員同士のコミュニケーションと情報交換の場を設けた。今後の課題としては、ワークショップのトピック選びを工夫し、言語習得を重点におきながら、他の科目にも関連できるような内容の模索をすることである。また、より多くの教員が参加できるように使用言語にも考慮することも挙げられる。今後も、本ワークショップを通して授業改善に役立つ学びの場を設けていきたい。



図1 第2回共通教育センター教員ワークショップの開催風景

## 8. FD 活動への教員参加実績

共教C教員のFD企画参加率は表2の通りである。共教C独自企画であるFD講演会と授業改善メモ提出の参加率がひとときわ高いが、全学及び共教Cで企画された教員ワークショップへの参加も比較的高い。その一方で、共教C内で実施されたベストティーチャー賞受賞者の公開授業の参加率が低かった。これは、公開授業と指定された期日がたった1日しかなかったからだと考えられる。通常授業の形態であれば、期間をより長くとっても公開授業は実施可能であるはずであり、そうすれば参加率も向上されると期待される。ともあれ、合計参加率は、目標の75%を超えている。

表2 各FD企画における専任教員参加率

合計参加率		87.2 % (専任教員 39 名中 34 名 参加)
企画別参加率	若手教員FD研修会	5.3 % (専任教員 38 名中 2 名 参加)
	FD・SD 合同フォーラム	10.3 % (専任教員 39 名中 4 名 参加)
	学生・教職員ワークショップ	7.7 % (専任教員 39 名中 3 名 参加)
	第1回教員ワークショップ	26.3 % (専任教員 38 名中 10 名 参加)
	第2回教員ワークショップ	40.5 % (専任教員 37 名中 15 名 参加)
	共通教育センターFD講演会	56.8 % (専任教員 37 名中 21 名 参加)
	ベストティーチャー賞受賞者の公開授業	15.4 % (専任教員 39 名中 6 名 参加)
	授業改善メモ	69.2 % (専任教員 39 名中 27 名 参加)
	学部FD講演会	10.3 % (専任教員 39 名中 4 名 参加)

## 9. まとめ

共教CにおけるFDの取り組みは、初年次教育・教養教育・体育／健康教育・外国語教育・情報教育という広い分野にわたりながらも、各分野間で互いに参考にできる内容について情報交換しながら繰り広げられているところに、大きな特徴がある。またどの分野においても、大学入学時の学生を相手に、その時々の入学生の特質や社会情勢を良く観察した上で、講義の内容や運用方法について柔軟に修正・発展させていくことが必要であろう。大きな時代のうねりに翻弄されながらも、学生を勇気付け、学問への動機を確立させて行き、大学生活を有意義に過ごすのに必要なスキルを高めるのに、何をどうやって教授するのかについて、FD活動を通して探求する姿勢を持ち続けることが大切である。令和元年度のFD活動は、多忙化する厳しい状況にありながら、質・量ともにまずまずの成果があったのではないかと振り返る。次年度以降で、その成果が実際の授業でどの様に反映されていくのか、検証が必要となるであろう。

大学 IR コンソーシアム学生調査結果（平成30年度実施分）の評価・分析について

共通教育センターFD委員 今井 裕

	注目した知見	知見に対する解釈	改善・対応策
<p><b>【1年生のみ】</b>            本学への志望度及び高校時代の経験</p>			
<p>大学での学びの実態</p>	<p>・教育への満足度            共通教育の授業に対して46%の1年生が満足している。            その一方で初年次教育（ここではフレッシュマンスーパー、基礎ゼミを指す）に対しては、その数値が23%に留まっている。</p> <p>・授業を通じた学習経験            定期的な小テストやレポートが課される1年57%3年53%            出席することが重視される1年39%3年41%            授業課題のためにWeb上の情報を利用した1年42%3年48%</p>	<p>1. 初年次教育が共通教育科目全般に比べて、満足度が低い。</p> <p>2. 過半数の学生が週に10時間以上の授業に出席し、授業の半数以上で課題が課されているにも関わらず、週に授業時間外学習を20時間以上行っている学生は10%に満たない。過半数の学生が5時間未満である。この傾</p>	<p>1. 今後の学術的動機付けにも直結するはずなので、内容の精査や充実感を与える様な授業進行や課題設定が必要かと思われる。</p> <p>2. 出席だけでなく、学術的成果（試験、レポート、発表等）で単位評価することを徹底し、その認知のための周知を行うことが肝要である。</p>

	<p>インターネットを使って授業課題を受け、提出した1年41%3年35%</p> <p>・授業内外での学習状況、授業や実験に出る</p> <p>20時間以上 1年45%3年24%</p> <p>授業時間外準備学習、復習をする</p> <p>20時間以上 1年2%3年4%</p> <p>3-5時間 1年30%3年24%</p> <p>1-2時間 1年26%3年27%</p> <p>授業時間外に教員と面談する</p> <p>全然ない 1年79%3年67%</p> <p>読書をする(マンガ・雑誌を除く)</p> <p>全然ない 1年40%3年39%</p> <p>・能力・スキルの変化</p> <p>専門分野や学科の知識</p> <p>大きく増えた 1年19%3年32%</p> <p>コンピュータの操作能力</p> <p>大きく増えた 1年16%3年19%</p> <p>人間関係を構築する能力</p> <p>大きく増えた 1年12%3年18%</p> <p>他の人と協力して遂行する能力</p>	<p>向は1、3年で変わらない。出席が重視されると認識している学生が半数近くいることから、授業さえ出ていると良いとの認知が横行していると思われる。</p> <p>3. 課題のためにインターネットを利用する学生が半数近くいる反面、読書を全くしない学生がまた半数近くである。電子媒体での読書がアンケートにどのように反映されているか不明であるが、文献調査を全くしていないのであれば、これが時間外学習の短さの原因の一つではないか。</p> <p>4. 7割以上の学生が時間外に教員と面談していない。教員と学生の距離を端的に示している。</p>	<p>3. 電子媒体での文献調査をどの程度行っているのか、本当に活字を読むことが少なくなっているのか、調査の必要がある。</p> <p>文献を読む量が減ることは学力低下に直結するので、本を読む重要性について教育することが必要である。</p> <p>4. 教員が上で学生が下であるという認識を両者ともに放棄し、学術の下での平等を教育すべきである。そのためには「こうしなればいけない」という教育ではなく、「なぜこうするのか」という丁寧な説明が必要である。</p>
--	---	---	---

	大きく増えた 1年11% 3年18%	<p>5. 専門知識やコンピュータの能力が増えたと感じる学生が多いが、一方高学年では、コミュニケーション能力の向上を実感している学生が増える。少人数クラス、実験、ゼミなど協働して成果を出す科目が増える為である。</p>	<p>5. 旧態依然とした能力向上から脱せていない。AI時代に新たに要求されるリーダーシップの能力、数理的な能力、グローバルな問題の理解について重点化を図る必要がある。</p>
英語運用能力の熟達度及び英語学習の状況	※本調査の分析について	<p>※本調査を使用した共通教育の学生の英語力は、2018年度とそれ以前のデータを使用した正確な比較・分析を行うことは困難である。理由は次の2点が挙げられる。</p> <p>a. 2017年度以前と2018年度の調査対象者が異なっている。そのため、前者の英語力が比較的高い：</p> <p>共通教育の英語授業は学生の英語力に応じてクラス分けをおこなっている。2017年度以前は中級と上級レベルの学生さんのみを調査対象にしているが、2018</p>	<p>※毎年、定期的に同じ方法を用いてアンケートを実施するべきである。</p>

	<p>①2018年度1年生の入学時と現在(2018年11月)における英語力(聞く力・読む力・会話力・表現力・書く力)の熟達度について</p>	<p>年度の調査は、全てのレベルの学生(上級、中級、初級)が対象となっている。従って、2017年度以前の調査は比較的英語力がある学生が回答している。実際、2017年度現在(11月)と2018年度現在(11月)の学生B1項目からC2項目の割合を比較した場合、全ての英語能力において2018年度の方が低くなっている。</p> <p>b. 2017年度以前と2018年度の調査対象授業が異なり、調査環境が異なる。2017年以前は英語、2018年は初年セミナーである。また、調査人数が前年度と異なる(2017年:429名→2018年:1229名)。</p> <p>①各能力を主要層のB1からC2項目に注目した結果(会話力に關してはA2.1からC2)、学生は入学時から調査実施時の11月まで、全ての能力において伸びて</p>	<p>①引き続き、学生が必要としている英語力を把握しながら、カリキュラム改善を図る。</p>
--	--	---	--



	<p>②2016 年度共通教育の英語カリキュラム改訂後の変化について：改訂前の 2015 年度と改訂後の 2017 年度との比較（各年度の 11 月時点の結果と比較。2018 年度は過年度の調査対象者が異なるため比較対象から除く。）</p>	<p>いと実感しているようだ。データからは読み取れないが、入学時から自身の英語力に自信がなかった可能性もある。 ※C2 は英語学習者として最も能力が高いレベルの項目を意味する。</p> <p>②・1 年次生の入学後の外国語運用能力について、カリキュラム改訂後「増えた・大きく増えた」と答えた学生の割合が上がっている（2015 年度:31.3%、2016 年度：35.3%、2017 年度：42.4%）。</p> <p>・特に主要層である B1 から C2（会話力に関しては A2.1 から C2）の項目に注目した結果、全ての能力において伸びている。聞く力、読む力、会話力、表現力において特に B1、B2 の層を中心に伸びている傾向がある。書く力は B2、C2 の層が伸びており全ての能力の中で最も伸びている。</p>	<p>②・引き続き、カリキュラムが学生のニーズに適合しているか検討し、さらなる改善を図る。</p> <p>・聞く力、読む力、会話・表現力、書く力を育成するためには、4 技能の統合型授業を主体とし、持続的な授業外学修が重要となる。授業外学修においては、課題の工夫を検討する必要がある。</p>
--	--	--	---

	<p>③2016年度入学者(2018年度の3年次生)の1年次と3年次の英語力の変化</p>	<p>③1年次と3年次のデータを比較した場合、全ての能力においてB1以上の項目になるにつれ、1年次より割合が下がり、望ましい結果だとは言えない。1年次、2年次の学生を中心に担当している共通教育の教員が3年生の英語教育の分析を行うのは難しい面があるが、おそらく、2年次、3年次に英語を学ぶ機会が少ないことが主な原因だと推測する。また、3年次になると専門性が高くなるためとも考えられる。</p>	<p>③3年次の学生に関しては、学部での英語教育がカギとなり、4年間を通して英語教育を考えるべきである。</p>
	<p>④英語学習の状況(2018年度前期後期共通教育センターmanaba調査結果より)</p>	<p>④授業外学修時間において「30分未満」「30分～1時間」が、若干上がっている。時間外学修において、標準としている週60分に達している学生は6割程度とされる。また、90分に達している学生は3割程度と思われる。</p>	<p>④授業担当者が授業外学修を促し、英語力に応じて、予習復習を中心とした課題の提示方法にもう少し工夫をする必要がある。</p>

大学生活に対する意識



法文学部・  
人文社会科学研究科

# 令和元年度 法文学部 ファカルティ・デベロップメント活動報告書

令和元年度の鹿児島大学法文学部、大学院人文社会科学研究所のファカルティ・デベロップメント活動(以下、FD活動と呼ぶ。)の取組とその成果を、ここに報告する。

## 第1章 FD活動への取組状況

### 1. 令和元年度の取組について

令和元年度の法文学部、人文社会科学研究所のFD活動は、平成 29 年度に法文学部の改組に伴う新たな教育カリキュラムが開始されたことや、全学で教育支援システム manaba(朝日ネット)が使用可能になり、それを踏まえたFD活動自体の考え方を見直しを行ったことを受け、これまで、その考え方を核としたFD活動の理解を共有し、より充実した取組を推進する取り組みを行ってきた。平成 30 年度には、その取り組みの定着と改善点を見出す年と位置付け、組織内の体制の確立を目指した。令和元年度は、この体制の下、平成 30 年度著作権法改正の施行などを含む外的環境の変化への対応に重点を置き、教育方法の振り返りの取り組みをめざした。また、この2年の間に、映像配信などを用いた授業参観を実施するなど、遠隔授業のノウハウの蓄積を行ってきたが、図らずも、2月になると、次年度の教育に新型コロナウイルス感染症による影響が予想されたことから、遠隔授業の実施方法などについてのワークショップやその映像配信による研修を実施することができた。

以下、本報告書では、主として法文学部を対象とする活動内容を報告する。

### 2. FD活動計画と各取組の特徴

令和元年度までに確立している法文学部のFD活動は、下記の事項に取り組むこととして計画されている。令和元年度の各取組については、別に記載するので、その特徴のみを簡単に説明する。

#### (1)FDワークショップ

FDワークショップは、定例教授会の前の 30 分間を使い、FD活動の計画の説明や告知、実施の成果の報告、そこで取り上げられたトピックのディスカッションを行うものである。

#### (2)授業アンケート

授業アンケートは、各授業についての状況を受講生に回答してもらい、それを踏まえて授業の状況を把握したり、受け手目線での授業改善を図る気づきの機会である。特に令和元年度は、引き続き manaba を使い、インターネットを介して、前期/後期それぞれに実施した。質問内容は、基本的に前年度のものを引き継いだ。なお、全学でベスト・ティーチャー賞が設けられていることから、学部に

において設けられたエクセレント・レクチャラー制度に学生の意向を反映するため、各授業の担当教員がそれに相応しい場合に学生が推薦できる設問を加えた。

### (3) 授業参観

授業参観は、教員相互に授業を参観することで、他の教員の授業運営や技術から、自分の授業方法を改善する気づきを得るための取組である。平成30年度より、授業参観は随時実施可能として、取り組み重点期間を設ける形で取り組んでいる。各教員には、各学期1回は参観を行うことを奨励している。また、協力を申し出た教員の授業を収録した映像を配信し、それを視聴する方法も継続的に実施している。

### (4) 授業実践発表会

授業実践発表会は、オープンキャンパスや学祭の機会に、各教員の授業実践を発表する機会を設け、本学志願者や高校の進路指導担当教員、来学した保護者などに、学生によるゼミでの学習内容のポスターや教員による特色のある授業の取組を紹介するポスターセッションを開催し、教育成果を伝えようとするものである。平成30年度より、ゼミや教員の取り組みに加えて、改組後に設けられた新たなコースのカリキュラムを紹介するポスターを掲出している。

### (5) FD研修

FD研修は、他の大学のFD活動の取組や、FD活動そのものの改善のための情報収集を行うために、学外の組織等で行う研修や調査である。

### (6) FD講演会

FD講演会は、その年のFD活動の取組の目標に沿って講師を選定し、その取組についての紹介をしてもらうものである。

### (7) FD活動の情報共有

法文学部では、司法政策教育研究センターの協力を得て、manabaとは別のFD活動の情報共有用のCMSを活用し、そのサイトを学部構成員全員が閲覧できるようにしている。

### (8) 授業アンケートの所感と対応／FD活動への評価調査

年度末に個々の教員レベルで、授業アンケートへの所感と対応を含む、FD活動についての評価について報告書を作成してもらい、FD活動そのものの自己評価を通じて改善の気づきを確保する取組みを行った。Google Formsを用いて実施された。

### (9) その他

法文学部では、全学のベストティーチャー賞に対応して、エクセレント・レクチャラー賞を設け、その受賞者から全学に推薦する体制を整えている。

また、「学生/教員FDワークショップ」を開催して、学生の生の声を交えたFD活動の取組みを実施している。

## 3. FD活動の実施計画

令和元年度のFD活動は、下記のスケジュールで計画された。

番号	実施計画	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月		
1	定例委員会	第1回委員会	第2回	第3回	第4回		第5回	第6回	第7回	第8回	第9回	第10回	第11回		
2	授業参観・視聴	全体の 実施計画の 確認	通常実施		重点実施			通常実施			重点実施	報告書作成			
3	FDワークショップ		第1回	第2回	第3回	第4回		第5回			第6回	第7回	第8回	報告書作成	
4	FD講演会		実施計画策定			講師と交渉			第1回実施	講師と交渉・準備		第2回実施	報告書作成		
5	授業実践発表会		検討・依頼・作成		OPで実施	作成		学祭で実施	報告書作成						
6	FD研修		検討/調査				研修		検討/調査	研修	報告書作成				
7	授業アンケート		検討	実施	分析	分析結果報告・教員報告書作成	教員報告書公表	検討/調査	実施	分析/教員報告書作成	報告書作成				
8	映像アーカイブの構築		収録					収録				報告書作成			
9	FD活動自己点検評価		前年度分報告	FD活動の取組									実施		
10	FD活動の情報発信活動		実施												
11	エクセレントティーチャー制度の実施		検討	関係情報収集						情報提供	学部執行部による指名と全学への推薦作業				

#### 4. FD委員会の開催

平成30年度よりFD委員会を定例化していたが、令和元年度は、前期は第1月曜日、後期は随時開催の形で開催した。

#### 5. FD活動への参加状況

##### (1)はじめに

教員のFD活動への参加状況について、企画ごとの参加人数を参考にして確認すると次のようになる。

FD活動として教員が参加する企画は次のようなものである。

- ①FDワークショップ 4回
- ②FD講演会
- ③個別教員によるFD活動報告書
- ④FD活動個別教員報告書
- ⑤教育実践報告会へのポスター提出
- ⑥授業参観
- ⑦教職員学生合同FDワークショップ

##### (2)FDワークショップ参加状況

教授会の前30分を利用するFDワークショップは、前期2回、後期2回の計4回開催され、少なくとも1回は参加したという教員が66名(82.5%)で、より詳しい参加状況は下掲の表の通りである。

これによれば、ワークショップは平均40名を超えており、おおよそ教員の半数超が参加していることがわかる。また、皆勤参加者数は18名であるが、半分以上に参加したという教員が49名61.3%で、FD活動の参加の機会の提供という意味で成果のあった取組と評価できよう。

教員数	80名	
延べ出席人数	165名	
平均出席人数	41.3名	
平均参加回数	2.0回	
100%参加者数	18名	22.5%
0%参加者数	19名	23.8%
50%以上参加者数	49名	61.3%

### (3)FD活動全体の参加状況

(1)に示した 9 つの活動のうち、ワークショップは9回実施しているが、何回参加したとしても1回として、その他を各1回として、FD活動への教員の参加状況を示すと次のようになる。

企画名	ワーク ショップ	講演会	アンケート報 告書	実践 報告会	授業参観	参加 状況
教員数	80	80	80	80	80	80
参加者数	66	42	30	39	29	74
参加率	82.5%	52.5%	37.5%	48.8%	36.3%	92.5%

延べ参加回数	203回
平均参加企画数	2.4回
1企画平均参加人数	40.6名
1企画平均参加率	50.7%

上段の表の「参加状況」に示されているとおり、平成 30 年度はこれらFD活動に1回でも参加した教員数は100.0%であったが、残念ながら令和元年度は92.5%であった。とはいえ、9割を超える参加があることは、教員組織全体としてFD活動への理解は幅広く得られていると評価することができる。

一人あたりの平均参加企画数は2.4回である。さらに、各企画の参加者数は、ワークショップが5回開催されているのを1企画と数えているという偏りはあるが、全体として平均 40.6名 50.7%と半分を越えている。

### (4)まとめ

上記の結果をまとめれば、FD活動への教員の参加度という点では、組織的に十分な取組が行われたと評価することができ、次年度以降もこれが継続することが望まれる。



## 第2章 授業アンケート

### 1. 実施状況

#### (1)実施時期

前期と後期に最終授業の前の週から試験期間の終わりまでの3週間を使って実施した。

前期:7月17日(火)~8月10日(金)

後期:1月15日(火)~2月8日(金)

#### (2)実施方法

manabaを通じて実施。アンケートは、各科目ごとに回答するものであり、アンケートの内容は、平成30年度同様、シラバスに書かれた教育内容とその目標の達成状況を問うた。後期には法文学部エクセレント・レクチャー選考に関連し、授業担当者をエクセレント・レクチャーに推薦するかどうかを問う質問を追加した。アンケートの結果については、各教員はmanabaを通じて確認できるとともに、前期の結果についてはFDワークショップで全体の概要を報告し、また自由回答でなされた回答については、前期、後期ともに回答をランダムに並べ替えたものを印刷配布した。

### 2. 回答状況

#### (1)回答授業率

アンケートはすべての開講科目を対象にしており、令和元年度前期は開講科目251科目中、一人以上が回答した科目が202科目、80.4%であり、後期は開講科目250科目中、一人以上が回答した科目が183科目、73.2%の科目について回答があった。通年では、開講科目501科目のうち回答があった科目が385科目であり、回答率76.8%であった。

	開講科目数	回答科目数	科目回答率
令和元年度前期	251	202	80.4%
令和元年度後期	250	183	73.2%
通年	501	385	76.8%

#### (2)学生回答率

令和元年度の在籍学生数は通年の延べ数で1869人。このうちアンケートに1科目以上回答した学生は1115人で、69.7%であった。

	在籍学生数	回答学生数	回答率
令和元年度前期	1701	932	54.8%
令和元年度後期	1776	649	36.5%

令和元年度通年	1869	1115	59.7%
---------	------	------	-------

回答率の通年平均を学年別でみると、履修登録をした学生のうち1科目以上回答した学生の割合は、1年生74.5%、2年生72.4%、3年生68.6%、4年生23.5%となっており、平成30年度がおおむね60%台後半とどの学年も同程度の回答率だったが、令和元年度は4年生が著しく低い結果となった。

学年	登録学生数	回答学生数	回答率
1年	501	373	74.5%
2年	460	333	72.4%
3年	430	295	68.6%
4年	395	93	23.5%
総計	1869	1105	59.1%

### 3. 回答結果の分析(通年平均)

以下、授業内容に関するアンケートの質問項目ごとの回答結果の分析を示す。授業方法による学生の捉え方の違いを把握するために、「講義」「演習」「実験」「実習」別の結果も示す。

(1)シラバスに示された「授業概要」を反映した授業になっていたか。

質問 2 この授業の内容は、この科目のシラバスに書かれた「授業概要」を反映したのものになっていましたか。

- ( )十分になっていた
- ( )だいたいになっていた
- ( )あまりになっていなかった。
- ( )全くなっていなかった。

	講義	演習	実験	実習	総計
1 十分になっていた	61.1%	71.8%	83.3%	71.7%	63.4%
2 大体になっていた	35.4%	27.2%	16.7%	26.8%	33.6%
3 あまりになっていなかった	2.7%	1.0%	0.0%	1.5%	2.3%
4 全くなっていなかった	0.8%	0.1%	0.0%	0.0%	0.6%
総計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%

回答した学生の6割以上が、授業内容について、各教員がシラバスに記載した「授業概要」を反映したものに「十分になっていた」と回答した。「だいたいになっていた」を含めると95%を超えており、授業概要を適切に反映した授業が実施されたと判断でき

る。

(2)「学修目標」に向けた授業になっているか。

質問3 この授業の内容は、この科目のシラバスに書かれた「学修目標」を達成することを旨とした内容になっていましたか。

- ( )十分になっていた。
- ( )だいたいになっていた。
- ( )あまりになっていなかった。
- ( )全くなっていなかった。

	講義	演習	実験	実習	総計
1 十分になっていた	59.5%	69.0%	83.3%	72.6%	61.7%
2 大体になっていた	36.5%	30.1%	16.7%	25.8%	34.9%
3 あまりになっていなかった	3.0%	0.8%	0.0%	1.5%	2.6%
4 全くなっていなかった。	1.1%	0.1%	0.0%	0.0%	0.9%
総計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%

授業が学修目標に向けたものになっているかについては、「十分になっていた」との回答は実験の評価が高く、演習、実習も7割前後である。「十分になっていた」との回答は、講義では6割弱であるが、「だいたいになっていた」を含めると講義、演習、実験、実習のいずれも95%を超えており、授業において各教員により学修目標に向けた取組が行われていると判断できる。

(3)「学修目標」に対して成績評価方法は適切か

質問4 この科目の成績評価方法は、シラバスに書かれた「学修目標」の到達度を確認するために適切であると思いますか。

- ( )十分適切である。
- ( )おおよそ適切である。
- ( )あまり適切でない。
- ( )全く適切でない。

	講義	演習	実験	実習	総計
1 十分適切である。	58.5%	68.2%	66.7%	73.2%	60.8%
2 おおよそ適切である。	37.6%	29.9%	33.3%	24.9%	35.7%
3 あまり適切でない。	2.8%	1.7%	0.0%	1.5%	2.5%
4 全く適切でない。	1.1%	0.1%	0.0%	0.3%	0.9%

総計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%
----	--------	--------	--------	--------	--------

学修目標に対する成績評価方法について、「十分適切である」との回答が実習において最も高く 7 割を超えている。講義では 6 割弱であるが、「おおよそ適切である」を含めると講義、演習、実習のいずれも 95%を超えており、学修目標への到達度を確認するために適切な方法がとられていると評価されていると判断できる。

#### (4)学修目標への到達度

質問5 この授業を通じて、この科目のシラバスに書かれた「学修目標」をどの程度達成できたと感じますか。

- ( )十分達成できた。
- ( )ある程度達成できた。
- ( )あまり達成できなかった。
- ( )全くできなかった。

	講義	演習	実験	実習	総計
1 十分達成できた	40.9%	51.9%	66.7%	56.9%	43.5%
2 ある程度達成できた	51.2%	45.1%	33.3%	40.9%	49.7%
3 あまり達成できなかった	6.4%	2.7%	0.0%	1.2%	5.5%
4 全く達成できなかった。	1.5%	0.4%	0.0%	0.9%	1.3%
総計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%

教員が示した学修目標への到達度については、「十分達成できた」との回答が実験において最も高く6割5分を超え、実習で5割5分、演習で5割程度、講義で4割である。「ある程度達成できた」を含めると講義、演習、実習のいずれも 9 割を超える。

(1)～(3)の授業に対する教員への評価に比べて、「十分に到達した」という自らへの評価がやや低いのは例年のことであり、今後は、学生に自信を持たせる指導法がひとつの課題と言えるかもしれない。

#### (5)教育目標への当該科目の貢献度

質問6 法文学部の教育目標をまとめて言うと、みなさんが「社会科学あるいは人文科学に関する基礎的体系的な知識を修得し、社会や人間についての理解を深め、情報化・国際化・多様化・複雑化等に伴う社会的諸問題や地域の問題の発見と課題解決に役立つ知見やスキルを得る」ことです。

この科目を受講したことは、みなさんがこの教育目標のいずれかを達成することにどの程度貢献していますか。

- ( ) 十分貢献している。
- ( ) まあまあ貢献している。
- ( ) あまり貢献していない。
- ( ) 全く貢献していない。

	講義	演習	実験	実習	総計
1 十分貢献している	52.4%	60.2%	33.3%	59.4%	54.0%
2 まあまあ貢献している	42.1%	37.6%	66.7%	36.0%	41.0%
3 あまり貢献していない	4.1%	1.9%	0.0%	4.3%	3.8%
4 まったく貢献していない	1.4%	0.2%	0.0%	0.3%	1.2%
総計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%

受講した科目が学部の教育目標にどの程度貢献しているかについて、なぜか実験において「十分経験している」との回答が3割程度と低くなっている。演習、実習は6割程度、講義は半数程度の学生が受講した科目について「十分貢献している」と回答した。「実験」については、改めての検討が必要であるが、「まあまあ貢献している」を含めるとすべての授業タイプで 95%を超えており、学部の授業カリキュラムの一部として適切な授業を展開していると判断できる。

#### (6) 授業の「よかった点」、「気付いた点」の記載

質問7 この授業のよかったところを記載して下さい。(特になければ「特になし」と記載。)

質問8 この授業について、気付いたことがあれば記載して下さい。(特になければ「特になし」と記載。)

質問7については前期2049件、後期1092件の記載がなされた。また質問8については前期583件、後期246件の記載がなされた

ここで得られた回答については、ランダムに並べ替えたものを、教授会前に開催されるFDワークショップで印刷配布した。

#### (7) エクセレント・レクチャーへの推薦

令和元年度後期より法文学部エクセレント・レクチャー表彰制度が設けられるのに伴い、新たに質問9, 10を追加した。

質問9 優れた教育を行った教員を表彰する法文学部エクセレント・レクチャー

表彰制度が設けられます。あなたはこの授業の担当者をエクセレント・レクチャーとして推薦しますか。

質問 10 設問9で「はい」を選んだ場合、その理由をお書きください。(回答は任意。)

質問 9 への回答数は前期は922件、推薦理由の記述があったのは前期320件、後期は533件の推薦数、172件の理由記載があった。

### 第3章 授業参観

#### 1. 実施方法

今年度の授業参観は、通年実施を前提とし、前期/後期それぞれに重点実施機関を設けて、FD委員会より、授業参観を行うことを促した。重点期間は、前期は、前期6月24日(月)から7月5日(金)、後期は11月25日(月)から12月6日(金)であった。

また、これまでに映像収録をした授業を、特定のURLとID/PWをかけたインターネット上のサイトから配信し、その視聴による参観・報告をしてもらう試みを行った。

各教員には、おおむね次のような考え方を示して取り組んでいただいた。

---

#### (1) 授業参観の目的

授業参観の第1の目的は、先生方に授業技術についての研修の機会を確保していただくことです。授業を公開していただくことは、同僚同士での研鑽に協力していただくという側面があります。

次いで、個々の授業の実施状況の確認による、法文学部の組織としての教育への取組や質の保証という面にも関係します。ひとりでも多くの先生方が授業参観をすることで、法文学部の教員の授業への取組の積極性を示していただければと思います。また、幅広い授業が参観されることが、法文学部の授業の質の保証に貢献することになります。

授業参観は、参観される授業の問題点探しという見方もありますが、参観した先生方にとっての気づきの機会と考えていただければ幸いです。

#### (2) 授業参観報告書

報告いただく内容は、実施されている授業の様子、参観した先生方の気づき、授業担当の先生へのメッセージで構成されています。

報告書に注記していますが、今年度のFD活動の観点として、授業がシラバスに記載された「学習目標」を達成することに資する取組になっているかに注目することになっています。また、授業参観の観点として、「アクティブ・ラーニング」「学修支援システム(manaba)」に注目することをあげています。これらの観点から、参観報告書を記載いただけるとありがたいです。むろん、それ以外の感想や指摘を含め、各先生方の授業構想や実践に資する記載を歓迎いたします。

---

#### 2. 授業参観報告書

授業参観報告書では、次のような回答を求めた。

---

今年度のFD活動の観点として、授業がシラバスに記載された「学習目標」を達成することに資する取組になっているかに注目することになっています。また、授業参観の観点として、「アクティブ・ラーニング」「学修支援システム(manaba)」に注目することをあげています。

これらの観点から、参観報告書を記載いただけるとありがたいです。むろん、それ以外の感想や指摘を含め、各先生方の授業構想や実践に資する記載を歓迎いたします。

1. ①担当教員が採用している授業の進行方法や授業の形式(レクチャーや双方向多方向の議論を含むなど)と、②授業全体の雰囲気や学生の様子(能動的学修姿勢が感じられるかなど)について記載して下さい。
2. この授業を参観して、自分の授業のために役立つような気付きや参考になったことを記載して下さい。
3. この授業を参観して、担当教員に、上記の今年のFDの観点などからのメッセージや助言などをお願いします。

次ページ／裏面に、授業参観に関する、上記以外の自由な感想を記載して下さい。

---

### 3. 実施状況

授業参観は、80名の教員のうち 25名が取り組んだ。

## 第4章 授業実践発表会

### 1. はじめに一実施の経緯

授業実践発表会は、次の経緯で平成 29 年度より実施することになった新たな取組であり、2つの側面がある。第1に、法文学部に所属する演習(ゼミ)がその活動内容や成果について報告し、共有する場としての側面である。第2に、コースや教員が提供する講義の独自の工夫や特徴を共有する場としての側面である。法文学部 FD 委員会がこうした活動を実施する理由は大きく2つある。1つはFD活動がこれまで以上に多面的な活動としての性格を持つことの重要性が高まっている点である。いま1つは、FD活動の対象を拡げていくことの重要性が高い点である。

そこで、FD活動の視点として新たに大学受験を控えた受験生や保護者、あるいは地域社会からの視点を取り入れることを志向した。また、従来の立ち講義だけでなく、学生の主体的な学習によって進行される演習についてもFD活動の対象として捉えることを志向した。こうした理由から、演習(ゼミ)の活動内容・研究成果を中心として法文学部が用意するコースのカリキュラムや特徴的な講義について、受験生をはじめとして地域の方々に幅広く公開し、よりよい教育活動のための刺激を得る場として、授業実践発表会を実施することとしたのである。

### 2. 実施の概要

実施日程:2019年8月3日(土)、2019年11月16日(土)

実施場所:総合教育研究棟1階

方法 :ポスターセッション形式(一部、学生による解説有)

周知方法:対教員 ⇒以下の実施要項をメール等で周知

対学生等⇒オープンキャンパスの学部説明会等で周知

実施要項:それぞれ、下記の文面をメールと紙媒体で配布し、協力を仰いだ。

実施要項にはそれぞれサンプルとなるポスターも添付した。

実施準備:オープンキャンパスでは写真部よりポスター貼り出し用パネルを借用した。

鹿大祭では理学部よりポスター貼り出し用パネルを借用した。

いずれも学生アルバイトを活用した。

ポスター解説:オープンキャンパスでは、高校生に対して、そもそもゼミがどのようなものであるかを説明することも重要であったことから、4～5名の学生に常時待機してもらい、質問への対応をお願いした。

鹿大祭では学生がサークルの出店等で都合がつかず、展示のみとした。

### 3. 実施状況

80名の教員のうち、39名がこの取組に参加した。(以下は、掲出例)

## 第5章 F D研修

### 1. 平成30年度著作権法改正の施行に向けた対応等について

令和元年度のFD研修では、平成30年度著作権法改正を受けて施行待ちになっていた35条についての今後の展望と、改正前後の教育現場での取り組み方や組織的な対応について、神奈川大学法学部の公文孝佳法学部長と中村壽宏教授を訪ねて、聴き取りを行うとともに、教育手法についてさまざまな先端的な工夫で知られている中村教授の取り組みについて、さまざまな教材や器具、ICTの動員について、現地で見聞を深めた。

そもそも研究活動や授業における他人著作物の利用については、教育現場では、法に基づく理解が共有されているわけではなく、流れのなかで「やっつけてしまっている」、というのが現実であるという認識から、改正前には教育のための利用であっても公衆送信に載せることが違法であることと、改正によって、どのような使い方であれば適法なのかの線引きの「考え方」をどのように組織的な理解にするのかという課題について意見交換を行った。

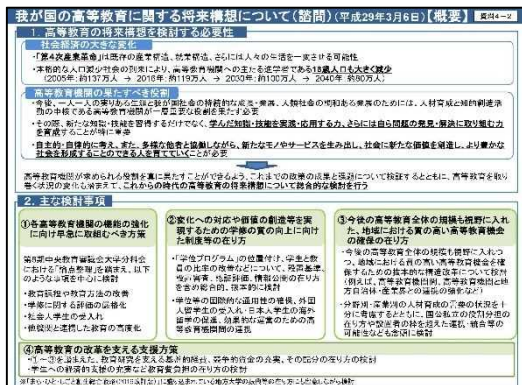
### 2. 臨床法学教育学会第12回年次大会への参加

臨床法学教育学会は、理論と実務の架橋を目指す法学教育方法を中核として、アクティブ・ラーニングをはじめとする、近時の新しい教育方法の導入や、文部科学省の政策について積極的に取り上げて活動している学会である。

2019年6月30日(日)に開催された第12回年次大会のメイン・シンポジウムでは、文部科学省高等教育局大学振興課大学改革室の室長補佐である高橋浩太郎氏が「高等教育改革の基本的考え方と現状－2040年に向けた高等教育のグランドデザイン(答申)の内容を踏まえて」というタイトルでの基調講演を行い、高橋氏とともに同専門教育課専門職大学院室室長の大月光康がパネリストとなって、法学教育を中心としながら今後の大学教育のあり方についての検討が行われた。

この成果を学部にはフィードバックするとともに、武隈教育担当理事と高等教育開発センターとの情報共有を行った。





## 第6章 FD講演会

### 1. 実施状況

日時:12月18日水曜日16時から17時30分(予定)

タイトル:「著作権法改正が大学教育に与える影響

—その理論と現実および著作権法改正の動向—

場所:法文学部1号館201号室

講師:中村 壽宏 教授(神奈川大学)

### 2. 講演会概要

講演の主な内容は、最近の著作権法の流れを踏まえ、平成28年改正以降の最近の著作権法の改正の流れを踏まえ、平成30年改正の概要の説明に始まった。

著作権法の基礎として規定されている権利について説明し、同一性保持権と複製権の解説の上で、著作権の制限として「私的使用」「引用」「授業における他人著作物の利用」を取り上げ、権利者の主張と教育機関側の主張を対比させながら、「他人の著作物を含む資料の複製の実行者」「他人の著作物を含む資料の収集・保存」「他人の著作物を含む資料の複製の部数」「配付資料・投影資料等における他人の著作物の加工」に加え、「試験問題に他人著作物を利用する場合」について、具体例を踏まえながら紹介した。これらの議論を踏まえて、改正35条の施行までの流れが紹介され、「補償金とライセンス制度」「大学の補償金負担額」が言及された。

最後に「著作権の侵害」「調査権侵害に対する制裁」が紹介され、その回避方法として「著作権者からの明治の承諾を得ること」「著作権法32条による引用の要件を満たすこと」「パブリックドメインの素材を利用すること」「ライセンス実施方法が明記された素材の利用を行うこと」が紹介された。

### 3. 参加者

本講演会の参加者は、法文学部から42名のほか、研究推進部社会連携課、法文学部事務部などからの参加があった。

## 第7章 FD活動の情報共有

### 1. シラバス・システムの活用

2017年度以来、法文学部FD委員会の記録として、司法政策教育研究センターの協力を得て、当該センターが活用している「シラバス・システム」と呼ばれるCMSを「情報提供サイト」として活用し、サイト上の「講義計画と記録」のページに、定期的開催されるFD委員会の議事録や、法文学部の教員を対象としたFDワークショップの概要の紹介など、FD関連情報を集約し、教員は各自IDおよびPWを入力することで、これらの情報や記録を随時閲覧できる環境を整えている。

## 第8章 アンケートへの所感と対応とFD活動への評価

### 1. はじめに

令和元年度のFD活動においても、授業アンケートへの教員による所感と対応の報告と合わせ、FD活動への評価を当アンケートを実施した。この報告と調査については、Google Forms を用いて行われた。

提出者数は、30名であった。

	作成者数	教員数	作成率
令和元年度	30	80	37.5%

### 2. 授業アンケート結果への所感と対応

後期の授業の授業アンケートの結果についての所感と対応については、次のような結果であった。

#### ○授業アンケートの結果への所感

Q1. 担当した授業のアンケートの結果について、全体としての印象を選んで下さい。

	ほぼ予想通り	1	2	3	4	ほぼ予想外
		1	2	3	4	総計
令和元年		56.7%	33.3%	3.3%	6.7%	100.0%

#### ○授業アンケートへの自己評価・気づきや今後の対応

Q2. アンケート結果から得られた担当する授業についての「自己評価」や「気づき」、それへの今後の取組について記載して下さい。【積極的に良い点を挙げていただければと思います。】(回答方法は任意ですが、科目名を挙げたり、講義／演習別の傾向や質問ごとの結果の傾向や採用している授業の工夫などに触れてご回答いただければと思います。)

前期と後期を合わせて、回答例は下記の通りである。

○アクティブ・ラーニングを行っており、それに伴う感想として予想の域を出ない回答であった。
○おおむね授業での狙い通りの受講生の反応・感想だったように思われる。
○テキストの内容だけでなく、必要な情報等は加えて伝えるようにしている
○とくに例年と変化はない。こちらが意図する効果をあげられているといえる。
○感想等を鑑み、認知心理学講義について、認知現象のより分かりやすい例示の方法を探求したいと思います。
○基礎知識のない学生にもわかりやすいように、図や映像資料をつかった点が好評であったと思う。
○苦情はありませんでした。
○好意的な評価は多いが、逆に批判がない点は問題でもある。熱心に回答する学生のみが高評価をつけている可能性もあり、重要なのは興味を持たなかった多くの学生たちの感想や率直な意見の方である。
○講義科目において、レジュメに基づく授業の進め方への評価が高い
○数が少ないのでなんともいえないが、評価してくれた学生が回答してくれたように思う。
○特に書く資料を作り込んでいることは、学生にも評価されていると思われる。
○発話に工夫が見られた。
○毎回、教員が受講生からの質問や感想に対してコメントし、より理解が深まるようにしていた点。

○その他の授業アンケートについての報告など

回答例は下記の通りである。

○できるだけ質問等には丁寧に答えるようにしている
○マナバを有効に使った双方向のやり取りに関する評価は高かったと思う
○やはりインタラクティブな授業を学生は好み、やる気が維持されるので、今後もより工夫したい。
○レポートやプレゼンに対して、できるだけ「個別」で、「ポジティブ」なフィードバックを行っていますが、そのフィードバック(指導)に対する感想が今年は多かったように思います。

○わかりやすさを重視した授業で、学生からわかりやすかったという感想が多かったため、今後も同じような形で進めていければと思う。
○一定の評価を得ていると思われる。したがって、現行の方法を大きく変化させるつもりはない。引き続き、新しい現実のトピックスを取り入れて、より充実した講義内容になるように努める。
○回答数が上がるような授業をしないといけないと感じる。
○学生のニーズを再検討する必要があるだろう
○学生の関心にばらつきがあり、学期を通して興味を持続させるのは難しいので、前半と後半で進め方などを変えてみた。
○学生の質問に対するフィードバックをすることにより、理解度、そして授業に対する満足度が高まることが確認できる。今後も続けていきたい。
○活発な議論が展開されていたので、自分の授業にも取り入れたい。
○講義において具体的な練習問題を増やしたところ、上位層の得点が上がったが二極化が進んだ。アンケートには記載がないが、演習については学生の能力の状況が全く予想できないことからニーズとのミスマッチが想定され工夫が裏目に出ている状況が想定される。今後の課題であるが、複数の教材を提示するなど今後とも改善を図りたい。
○講義科目において、レジュメに基づく授業の進め方への評価が高いため、今後も継続したい
○事前学習を明確に示したほうが授業の理解度があがるようなので、その点でより工夫をしていきたい。
○授業ごとに感想や意見に対するアンサーは、今後も継続したい。また外部からのゲスト講師を招いて現場の話を学生に聞かせることも継続したい。
○授業のスピードを上げるために工夫したい。
○授業の途中で respon 等を用いて学生から意見を聞いて授業改善につなげようと思った。
○授業概要だけでなく、学修目標も授業の冒頭に説明した方が良かったと感じた。次回から改善したい。
○真面目に課題に取り組んだ学生の授業評価は高いと思われる。
○全体の構成は、科学の進展に伴い常に再考する余地があり、授業のストーリーも改善することで、学生が理解しやすくなるだろうと思っているので、折に触れ改善したい。
○比較的専門外の人でも参加可能な演習形式(アジア歴史・文化演習 B1)を採用しているため、受講生が授業課題に能動的に取り組むことが出来ていたように見受けられた。

Q3. 上記のほか、今回の授業アンケートの所感と対応の報告として記載すべきことがあれば、記載して下さい。(ないときは、特になしと記載して下さい。)

回答例は下記の通りである。

○演習については少人数であり身ばれしてしまう場合が多いので、manaba は使えないことになるが、こちらの google フォームなどを利用してある程度まとまりのある単位でアンケートを実施した方が意見を得られるのではないか。
○回答に責任を持たせるため、学生には記名式で回答させたほうが良い(教員に知らせる必要はない)。
○学生から褒められてもあまり信じられない結果です。ゲームに熱中した層と真面目に授業を聞いていた層の間にどんな違いがあるのかを知りたいと思いました。
○授業アンケートに対するマンネリ化があるのか、年々回答率が下がってきている。確実に授業内で実施する等しなければ回答率を上げることは難しいように思われる。
○少人数授業だと、回答率が低いため、全体としても個人としても、何らかの対策を講じる必要があるように思いました。
○話すスピードが速いことがあるようで、注意したい。ただし、ゆっくり話すと「良い声なので、眠くなります」と言われるジレンマがある。

### 3. 授業アンケートへの意見とFD活動への意見

○授業アンケートの内容や実施方法への評価

Q4. 今回の授業アンケートの質問内容や実施方法について、評価をお願いします。

高く評価できる 1 2 3 4 まったく評価できない

	1	2	3	4	総計
回答数	6	19	5	0	30
回答率	20.0%	63.3%	16.7%	0.0%	100.0%

回答者の5分の1の教員が今回のアンケート調査の内容と方法について「高く評価できる」としており、8割超程度の教員が肯定的な回答をしている。回答率が 4 割弱であることを考えると、教員全体の少なくとも 3 割強の教員からは肯定的評価が示されたことになる。

○授業アンケートの内容や実施方法についての気づき

Q4-1. Q4の回答に当たり気付いたことや理由を記載して下さい。

回答例は下記の通りである。

○アンケートそのものに学生が慣れてしまっているので、結果の妥当性を諮りかねる
○アンケート協力要請が足りなかった、もっと積極的にアンケートに答えてほしいと伝えるべきでした。

○ウェブでの回答は簡便でいいが、回答数を挙げる工夫が必要である
○この形式ではどうしても学生任せになるので、その点が難しいと思う。
○マナバで記入させるのは良いのですが、少し記入しにくいように思います。
○学修目標を、ちゃんと理解して回答しているのかが心配
○学生が匿名で自由に意見を書ける場は大事だと思う。
○学生にとっては毎回同じようなアンケートに辟易している意見もでている。
○教員の気づきを再確認できるから。
○質問内容には特に異論はないが、実施方法の工夫が必要に思われる。
○授業中にレスポンドアンケートをとると、非常に回収率が良い。manaba からだと下がるのだろうか。QR コードを作れば良いのかもしれないが、学生版と教員版で URL が同じなのか、自信がない。
○真面目に講義を聞き、真面目に取り組んだ学生の意見はみえます。真面目だからこそ、真面目にアンケートにもこたえてくれます。しかし、それ以外のマジョリティの反応はどうだったのか気になるところです。どうやったら知れるのでしょうか。
○他の先生方の取り組みとの比較が出来るように工夫して欲しい。

○令和元年度の法文学部の FD 活動への評価

Q5. 授業アンケートを含め、今年度の法文学部のFD活動についての評価をお願いします。

	高く評価できる	1	2	3	4	まったく評価できない
		1	2	3	4	総計
回答数		8	18	3	1	30
回答率		26.7%	60.0%	10.0%	3.3%	100.0%

令和元年度の FD 活動について、回答した教員の26.7%が「高く評価できる」と回答しており、肯定的評価をした教員が 85%強という結果であった。教員全体の3割強が肯定的に評価しているという結果である。

○令和元年度の FD 活動全体への評価に当たっての気づきや今後への提案・意見  
Q5-1. Q5に回答するに当たり、お気づきのことや今後のFD活動に向けてのご提案・ご意見を記載して下さい。

回答例は下記の通り。令和元年度の FD 活動について、さらなる改善が必要であるとの認識を示す記載がよせられ、来年度以降に向けての建設的な提案の記載が見られた。

【回答例:抜 粋】

○いろいろと反省点や改善点が分かりました。
○いろいろな情報は参考になることがある
○これまでの実績を踏まえ、継続して頂きたいと思います。
○ご苦勞をお察ししております。回収率の向上や、教員の積極参加については、改善の余地があるだろうと思うものの、具体的な策は、僕も思いつきません。
○ワークショップ等のスケジュールについて、事前に周知されるとありがたい
○簡素な項目で全体的評価が分かるいいFD活動だと思います。
○教員個人の取り組みでは限界がある。アクティブ・ラーニングをするなら、アクティブ・ラーニングをしている教員の講義を参観しあい、意見交換をすとか、アクティブ・ラーニングをする科目としない科目の分担を話し合うとかしないといけないと思う。
○形骸化せずに、より実のある議論や情報共有につながればいいかと思いますが、難しいですね…
○今の形で進めていければと思います。
○昨年のエクセレントレクチャー選定根拠が未だに示されていない。
○年に1, 2回のFD講演会はあってもよいように思います。
○良い事例について参考にしたいので、少し長めにFDを実施する日があっても良いかと思います。

なお、紙幅の事情ですべてを報告できないが、FD講演会の実施方法について教員がより主体的に参加できるようさらなる工夫が必要であるという指摘や、FD委員会からの学部成員への連絡の不十分さや、個々のFD活動の実施告知や告知から締切までの期間が不十分であること、実施された企画の参加者数や偏り、成果の共有についての不十分さ等を指摘する記載も見られた。

## 第9章 令和元年度FD活動として注目すべき取り組み

令和元年度のFD活動において取り上げるべき取り組みとして、下記がある。

### (1) 学生を交えたFDシンポジウム

平成30年度より設けられたエクセレント・レクチャラー制度で選出された先生方に登壇いただいでるシンポジウムと、法文学部における学生FD活動の紹介とグループ討議をプログラムとする取り組みを行った。当日のプログラムを映像収録し、学部教員に対して、オンデマンド配信を行った。

日時:2019年12月4日(水)13時00分~15時00分

場所:学習交流ホール(学習交流プラザ2階)

題目:「学生のFD活動の実践と課題」

第1部:パネルディスカッション

「授業の改善と課題について」(13時05分～13時55分)

1. 昨年度のエクセレント・レクチャーの先生方によるパネルディスカッション(南先生、農中先生、日野先生、竹内先生、飯田先生)
2. 質疑応答

第2部:法文学部における学生FD活動の紹介とグループ討議  
(14時05分～14時55分)

1. 法文学部法経社会学科地域社会・経済コースゼミ代表者会議の報告
2. 学生によるグループ討議
  - ・授業改善への要望
  - ・カリキュラム等への意見

## (2)新型コロナウイルス感染症の広がりへの対応

令和2年3月に入り、新型コロナウイルス感染症の広がりが予想され、4月以降の授業に影響を与える可能性が高まったことから、遠隔授業の実施方法についてのワークショップを行った。

○法文学部FDワークショップ「Online 授業をやってみよう！」

日時:2020年3月30日(月) 13:30～14:30

場所:一応、集まりたい方は、総研棟3F マルチメディア教室  
それぞれ可能な場所で参加。

講師:米田憲市(法学コース/司法政策教育研究センター長)

内容:zoom を使った実践構想として、高度なことは目指さず、授業としてだけであればよいのではと言う最低限のモデルの提案とその条件を示します。

## 第10章 令和元年度FD活動のまとめ

令和元年度のFD活動は、平成30年度の到達点からの後退も見られる部分もあるが、取り組むべきプログラムが定着し、新たな取り組みや緊急時の機動的な取り組みを行うことができた。当報告書を執筆している時点で振り返れば、それまでの組織的な取り組みにより、新型コロナウイルス感染症対応のための遠隔授業を中心とする授業の実施や学部運営にもスムーズに対応する基盤が構築されていたと評価したい。

アンケートなどにおける教員の指摘に、より充実したFD活動や具体的な提案を含むものが多くみられるようになったことは、FD活動から授業改善・カリキュラムの改善に対する情報を得るという基本的なサイクルのなかに埋め込まれたことの反映と言えよう。

令和元年度末に認識されている新型コロナウイルス感染症の広がりが、4月以降の授業形態やカリキュラム運営に影響を与えることは不可避であり、FD活動のあり方についてもそれに適応した新たな方法が求められることになろう。





教育学部・  
教育学研究科

# 令和元年度 教育学部、教育学研究科 FD活動報告

## はじめに

令和元年度の教育学部教育改善委員会の活動計画は、前年度の活動を踏襲する形でスタートしました。主なトピックスについては以下の章で詳しく報告します。

本年度の活動で特筆すべき取組や改善事例は、学生FD活動の改善と授業改善の方策にあると考えます。

学生FD活動の改善については、以前より課題に挙がっていた学生主体の組織の構築に向けて一歩進んだといえます（5章参照）。これまで教員が担っていた学生FD委員の選出方法が、次年度より学生主体で選出し引き継ぐ方法に変更することになりました。その背景には、教員の働きかけのみならず、学生のFD活動に対する動機の高まりがあると言えます。この機運は、活動に積極的な前年度リーダーの働きかけや全国学生FDサミットへの参加（4章参照）等が効果的だったものと思われます。このほかにも学生FD活動は、受講計画に関するピアサポートの実施やFDシンポジウム（3章参照）を受けて学部教務委員会と学部教育改善委員会に対して改善要望書の提出といった新たな取り組みを起こしました。

授業改善の方策については、授業参観や授業アンケートといった授業改善に直接かかわる活動へ参加率の向上が難しいことから、発想を変えて良い授業の方法を積極的に周知する方策について検討しました（7章参照）。ベストティーチャー賞受賞者の取り組みの紹介に加えて、受賞者の取り組みを参考に授業の工夫に関する指標を作成し、授業アンケート評価の高かった教員の授業の工夫を教授会などで積極的に紹介する体制を整えました。

このような学部委員会の活動に対して、学部教員の参加状況は次の通りです。

合計参加率		96.3 %（専任教員 81名中 78名参加）			
企画別 参加率	前期授業参観	13.6 %	（専任教員	81名中	11名参加）
	前期授業アンケート	50.6 %	（専任教員	81名中	41名参加）
	若手教員FD研修会	1.2 %	（専任教員	81名中	1名参加）
	講演会①	79.0 %	（専任教員	81名中	64名参加）
	FD・SD合同フォーラム	1.2 %	（専任教員	81名中	1名参加）
	講演会②	81.5 %	（専任教員	81名中	66名参加）
	学生・教職員ワークショップ	2.5 %	（専任教員	81名中	2名参加）
	後期授業参観	4.9 %	（専任教員	81名中	4名参加）
後期授業アンケート	43.2 %	（専任教員	81名中	35名参加）	

以下、各取り組みについて報告します。

- 1章 授業アンケート回答の分析
- 2章 教育学部授業公開報告
- 3章 教育学部・教育実践総合専攻合同FD シンポジウム
- 4章 学生FD サミット2019 夏 with 学生FD 会議
- 5章 学生FD 委員会の活動
- 6章 教育学研究科教育改善のための調査
- 7章 その他

## 1章 授業アンケート回答の分析

### 1. 実施方法

令和元年度の授業アンケートは、前期及び後期の学部開講授業科目について、担当教員1名につき1科目を選択し紙媒体にて実施した。実施期間は、前期は令和元年7月16日～8月2日、後期は令和2年1月22日～2月5日に行った。また、実施教員へのフィードバックは、学科事務を通して紙媒体にて返却を行った。

また、昨年度同様質問項目12は、ベストティーチャー賞候補者選出に際して評価する数値として位置付けた。

### 2. 質問項目

質問項目を表1に示した。

表1 授業アンケートの質問項目

1	授業はシラバスの内容に沿ったものでしたか？
2	授業中は能動的に学ぶことができましたか？
3	授業内容は理解できましたか？
4	第1回から最終回までの授業を体系的に理解することができましたか？
5	シラバスに記載されている学習目標を達成できましたか？
6	教師の説明は分かりやすかったですか？
7	資料（板書、プロジェクター、配布資料等）の内容は授業の理解を助けるものでしたか？
8	授業中は質問や発言がしやすい雰囲気でしたか？
9	授業時間外に教師に質問をしましたか？（オフィス・アワーやメール・manaba 上での質問も含む）
10	この授業について毎週平均で何時間くらい予習・復習をしましたか？
11	授業はあなたの興味関心の増大や知識の獲得など、自分にとって得るものがありましたか？
12	授業は全般的にみて満足するものでしたか？
13	この授業の良かった点や感想等を自由に書いて下さい。

質問1、5については、（そう思う、だいたいそう思う、あまりそう思わない、そう思わない、わか

らない)、質問2～4、6～8、11及び12は、(そう思う、だいたいそう思う、あまりそう思わない、そう思わない)、質問9は、(はい、いいえ)の何れかを回答し、質問13については、自由記述とした。

### 3. 結果

表2 質問項目の平均値

質問項目	R1 前期	R1 後期
1	3.44	3.44
2	3.43	3.36
3	3.26	3.34
4	3.29	3.73
5	3.02	3.02
6	3.52	3.52
7	3.49	3.52
8	3.24	3.28
9	0.11	0.18
10	1.29	1.42
11	3.41	3.43
12	3.46	3.48

質問項目1～12の平均値を表2に示した。質問項目3、4、7～12において、前期より後期の方が高い値を示した。質問項目2の「授業中は能動的に学ぶことが出来たか」においては、前期より後期の方が低い値を示した。質問項目1、5、6においては、前期と後期同じ値を示し変化が見られなかった。

質問項目13の自由記述においては、「子どもと触れ合う機会や模擬授業があつてよかった。」「授業での目標を達成するためにどういった手順で授業を行うと児童が十分理解するかしっかり考えてこの授業を受けれたと思う。先生が直接子どもたちに説明して学ばせるより児童が自分たちで気づいて考え目標を達成できる授業を展開していきたい。」「とにかく先生の人柄が良かったので、発言もしやすく能動的に学ぶことができました。」など前期後期ともに授業に関する良い点を記入したものが多くみられた。

しかしながら、授業の改善点についても以下のように幾つかの記載があつた。「すごく難しすぎる内容だったので、もう少し簡単にしてほしいと思う。」「話すだけでなく、板書等をしてほしい。」「講義を時系列順に整理し、流れをわかりやすくしてほしい。重要点を示してほしい。」「テストの難易度が高い。」「授業中に質問できるのはよいが、教室で声に出して言いづらいのでmanabaなどで質問を受け付けてほしい。」などが挙げられた。今回の結果より、個々の教員が授業に対して不断の努力を重ねる事の重要性や学生の「能動的学修推進」に向けた取組みが今後の課題の一つである事が示唆された。

## 2章 教育学部授業公開報告

## 1. 授業公開の実施計画

### (1) 授業公開の目的と枠組み

鹿児島大学ファカルティ・ディベロップメントに関する指針にあるFDの定義には「大学、部局等、そして教員が、本学の教育理念を実現するために、カリキュラム及び授業の内容や方法を開発・改善することにより、教育の質の向上をはかるとともに、学生支援を行う自発的な取組」とあり、各教員が自発的に自身の教育方法を向上・改善させて行くことが求められている。また、本学部の教育改善委員会においても「教員同士が相互に授業を公開・参観することにより、各教員が授業方法・授業運営の改善をはかり、教育の質的向上を目指す」ことを目的として設定し、今年度も授業公開・参観を実施した。

なお、授業公開にあたっては教職大学院と連携し、学部・大学院の全教員が両方の授業を参観できるようにした。

### (2) 授業公開の実施手順

昨年度と同様、都合により公開できない科目の調査を行い、それ以外の科目はすべて、授業者への事前連絡なしで参観できることとした。加えて、新任教員には前期のみ、個別にメールで授業参観の呼びかけを行った。

### (3) 授業公開不可科目調査

事前に教授会で実施手順について説明したのち、前期は6月19日(水)～26日(水)、後期は11月18日(月)～27日(水)の期間で授業公開不可科目の調査を行った。調査内容は、公開不可科目の曜日・時限・科目名と参観者を受け入れられない理由であった。

調査の結果、前期は3名から6科目、後期は2名から2科目が公開不可科目として届けられた。参観者を受け入れられない理由は、ゲストティーチャーの講義、スペース不足、受講生に対するブレッシャーへの配慮、等であった。

### (4) 授業公開不可科目一覧と授業参観報告書書式の提示

授業公開不可科目調査の結果と授業参観報告書の書式を全教員宛にメール添付で送信した。

授業参観の対象は授業公開不可科目一覧に記載されている授業と教職大学院の実習科目を除くすべての授業とし、授業参観後に授業参観報告書の提出を求めた。

### (5) 授業公開および授業参観の実施

授業公開は、前期は7月1日(月)～12日(金)、後期は12月2日(月)～13日(金)の期間に実施した。

## 2. 授業参観の実施状況

学部教員76名(特任教員を含む)、教職大学院教員13名のうち、前期は13名14件(前年度18件)、後期は4名4件(前年度11件)の報告書が提出された(教職大学院の教員が教職大学院の授業を参観したものを除く)。参観報告書の提出数は過去最低となったが、学部教員が教職大学院の授業を参観したものは6件(33%)あった。教職大学院は授業を常時開放しているが、学部の授業参観期間を活用して教職大学院の授業を参観した教員が一定数いたようである。学部・大学院改革の一環で教職大学院の授業を担当するにあたり、その準備として一定の役割を果たしたものと考えられる。

## 3. 授業参観報告書における記述(授業方法に関する部分を中心に一部を抜粋)

- 抽象的な理論を述べるだけでなく、教員自身が経験した現場でのエピソードなど、具体的な実体験を例に出し説明されていたので、学生にとってわかりやすい内容となっていた。
- 学生に対して頻繁に質問を投げかけることで、学生に考えさせる機会と意見を述べさせる機会を与えていた。また学生の意見を否定せず、まずは受け入れることで意見を述べやすい環境が作られていた。
- 模擬授業担当学生に授業の中で課題を与え、考えさせており、担当学生も積極的に動き、アイデアを出していた。ただ単に学生に参加させるだけでなく、如何により良い授業にするか共に考えさせており、参考になった。
- 受講生に自由に発言させる雰囲気や的確な助言の内容・タイミングなど、自身の授業改善に役立てたいと考える。
- 課題レポートを manaba で出しているとのことで、ICT も活用した取り組みは大変参考となりました。
- 発表内容や指導内容を受けて、受講生間での突っ込んだ意見交換、改善点の指摘やそれに対する反論の時間を設けられれば更に良いと思われた（時間の都合もあると思うが）。

#### 4. 授業公開に関するまとめ

専門が異なれば授業内容も異なるのが当然であるが、「よい授業」に共通する方法はある。今回の参観報告書からは、よい授業に普遍的な特徴のいくつかが垣間見えた。参観報告書からも他の教員の工夫や熱意を感じ取り、自身の授業に取り入れようという意欲的なコメントが多く寄せられた。

よい授業とは何かを考え、自身の授業を見直すきっかけとして、授業参観を役立てていただければ幸いである。参観者が少ないというのは数年来の課題であり、この課題をいかに克服するかが当委員会に残された宿題である。

### 3章 教育学部・教育実践総合専攻合同 FD シンポジウム

#### 1. 開催の趣旨

教育学部・教育実践総合専攻合同 FD シンポジウム（以下、シンポジウムと略す）は、教育改善委員会が学生 FD 委員会と共同で開催するシンポジウムである。シンポジウムの主たる目的は以下の2点である。

- (1) 教育学部および教育学研究科教育実践総合専攻における教育活動を改善するための知見や方策について、学生と教職員で共有すること
- (2) 共有した知見や方策を文書等として蓄積し、実際の改善に活用すること

上記の目的を達成するため、本シンポジウムでは、学生の視点から出された不満や疑問点などを出発点として、学生と教職員が対等な立場で意見交換を行うことを趣旨としている。

#### 2. シンポジウムの概要

今年度のシンポジウムは以下のとおり開催された。

- ・開催日時 2019年12月10日(火) 5限(16:10から17:40)
- ・会場 第2講義棟 講義室B
- ・テーマ よりよい授業を作るには ―学生と教職員の役割を考える―
- ・参加者数 18名(学生10名、教員8名)
- ・当日の流れ
  - 16:10 - 16:15 開会あいさつ(教育改善委員会委員長 浅野先生)
  - 16:15 - 16:25 趣旨説明(学生FD委員会シンポジウム班班長 平山さん)
  - 16:25 - 17:20 グループ討議
  - 17:20 - 17:30 全体発表
  - 17:30 - 17:40 全体のまとめと閉会あいさつ(教務委員会委員長 藤田先生)

### 3. 学生FD委員会からの趣旨説明と問題提起

昨年度のFDシンポジウムでは、「学生と教員がともに考える学び ―作れ、新しい授業のカタチ―」をテーマとして、学生・教員それぞれにとってのよい授業のあり方や、それをどのように実現するか等について、グループディスカッションを通して考えの共有を行った。そこでの議論を踏まえ、今年度のシンポジウムでは、より焦点を絞り、かつ具体的な手立てなどについて考えることができるよう、「学生の家庭学習」をテーマとした。

はじめに、学生FD委員会からの問題提起として、以下の点が紹介された。

- ・大学設置基準や鹿児島大学学則等により、1単位当たりの学習時間数は45時間であると定められている。
- ・教育学部の授業時間が30時間(15回×みなし2時間)であることから、1単位科目については毎週1時間、2単位科目については毎週4時間の家庭学習が必要である。
- ・昨年度の授業評価アンケートの結果から、毎週平均の家庭学習時間が1時間から30分程度であり、特に講義科目における予習・復習時間の確保が課題である。
- ・その他、学生からは、グループワークでの課題(宿題)では、異なる学科のメンバーで集まることが難しい、グループ内での負担感の差が感じられる、成績・評価がどのように行われているかが不透明である、等の意見がある。

### 4. グループ討議と全体での共有

上記の問題提起を受け、はじめにワークシートをもとに各自の考えを整理する時間を設けた。学生用のシートには、具体的にどのような授業でどのような課題が出されていたか、どのくらいの時間を家庭学習に費やしているか、グループ課題に対してどのように考えているか等の項目が、教員用のシートには、それぞれの授業でどのような課題を課しているか、またグループ課題を課している場合には、その意図等を振り返るための項目が用意されていた。

各自でワークシートに記入した後、4～5名程度のグループで討議を行った。各グループには学生FD委員が1名、ファシリテーターとして参加し、議論をすすめた。議論の内容や展開はグループごとに異なるが、いずれのグループについても、「家庭学習にかんする問題点や課題は何か」と「その問題点を解消・改善するための具体的な手立ては何か」という2点について議論をするように促した。

グループ討議の後、全体で考えを共有した。その際に出た主たる意見は以下の通りであった。

- ・グループ学習やグループ課題の意図や狙いが教員と学生の間で共有されていない。教員は、協同して課題に取り組むことで、多角的な視点や考えに触れることや、グループで協働的に取り組む力などを求めていることが多く、必ずしも分担を想定しているわけではない。
- ・シラバスで課題の内容や趣旨などを明記するとともに、初回のガイダンス等で説明し、理解を得る必要がある。
- ・グループワークだけで評価したり、それを全員の評価として採用することは稀であり、実際はグループワークを基にした個人課題などで評価していることが多い。
- ・グループでの貢献度をどのように測定し、評価するかが難しい。準備で貢献していても見えにくいのではないかと懸念がある。
- ・TA や SA のサポートがもう少しあるとグループワークがうまくいくのではないかと。
- ・そもそも課題がないと勉強しないということでもいいのか。
- ・課題を manaba から提出させることで、ポートフォリオとして一元化して蓄積できる。期末試験の前やレポート作成で振り返ったり、就活の自己分析などにも役立つ。多くの授業での積極的な利用を求めたい。

## 5. 全体のまとめ

最後に、藤田教務委員会委員長より、シンポジウムの議論の総括をいただいた。

グループでの課題や評価の方法などはある程度教員個人に委ねられているところもあるが（また、授業がすべて面白いという期待が妥当であるかどうか、という点も指摘があった）、シラバスの記載内容やその記述の充実については、教務委員会から各教員に要請を行うとのことであった。また、学生 FD 委員会の活動について、学生目線で、大学や学部にも訴えるようなテーマや議論をして、要望書等として挙げてもらいたいとのことであった。

## 6. 今年度の成果と今後の課題

最後に、出席者（学生 10 名、教員 8 名）から回答を得たアンケートの結果を報告する。

現在の家庭学習状況の認識（項目 1、2）について、学生の認知度が高いのは、今回の FD シンポジウムの参加者の多くが学生 FD 委員であり、事前にこれらの事項について共有していたためである。一方、教員のほうでは、項目 1 に 1 件、項目 2 について 1 件、「いいえ」の回答があった。これらの事項については、シラバスの作成における家庭学習欄の記載や授業評価アンケートの結果が十分に周知されていないことを示唆する。

家庭学習の分量（項目 3、4）について、平均としては、学生・教員ともに、課題の量が多いとは感じておらず、また学生は、自身の学習時間を短く感じているようであったが、どちらの項目についても、回答のばらつきが大きいようであった。個々の授業における課題の質と量については、各教員の裁量に委ねられているところが大きく、ばらつきがあるのではないかと考えられる。

シンポジウムでの議論について（項目 5、6、7、8、9）の数値はいずれも高く、充実した議論ができたと考えられる。とりわけ、例年シンポジウムの課題として挙げられていた「議論が具体的でない」という点については、家庭学習というテーマに絞ったディスカッションを行うことによって、参加者にとって満足いく議論が可能となったのではないかと考えられる。

表 4 FD シンポジウム事後アンケート結果

	学生 (n = 10)	教員 (n = 8)
--	-------------	------------



項目	はい	いいえ	はい	いいえ
(1) 1 単位につき 45 時間の学習という考え方について知っていましたか	5	5	7	1
(2) 家庭学習時間の平均がおよそ 30 分から 1 時間であることを知っていましたか	8	2	7	1
	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>
(3-1) あなたは自分の家庭学習時間が少ないと感じていますか (学生のみ)	3.20	0.63	--	--
(3-2) あなたは学生の家庭学習時間が少ないと感じていますか (教員のみ)	--	--	2.88	0.99
(4-1) あなたは教員が出す課題の量が多いと感じていますか (学生のみ)	2.50	0.71	--	--
(4-2) あなたは自分が出す課題の量が多いと感じていますか (教員のみ)	--	--	1.75	1.04
(5) グループディスカッションにおける議論は、有意義でしたか	3.90	0.32	3.75	0.46
(6) グループディスカッションにおける議論は、具体的でしたか	3.90	0.32	3.75	0.46
(7) グループディスカッションにおける議論に、積極的に参加できましたか	3.70	0.48	4.00	0.00
(8) グループディスカッションを通して、教員・学生の考えを理解することができましたか	3.80	0.42	3.88	0.35
(9) グループディスカッションを通して、自分の考えが深まったり変化したりしましたか	3.80	0.42	3.88	0.35

注. 項目 1、2 は「はい」・「いいえ」の回答者数、それ以外は 4 件法 (4: とてもそう思う ~ 1: まったくそう思わない) による回答の平均値と標準偏差

## 4章 学生FD サミット2019 夏 with 学生FD 会議

### 「大学はつまらない? ~今、私たち学生にできることは~」 in 北翔大学

#### 1. 引率教員報告

委員会の目的である教育改善に関する調査研究のため、2019年8月27日(火)、28日(水)の2日間にわたり北海道江別市の北翔大学において開催された学生FDサミット2019夏 with 学生FD会議「大学はつまらない? ~今、私たち学生にできることは~」に学生2名を帯同して参加しました。

比較的涼しく小雨の降る中開催されましたが、会議全体を北翔大学の北翔アンビエントという学生グループが運営し、総勢45大学238名(教職員49名、学生189名)の参加という学生サミットとしてはかなり規模の大きな熱気ある会議だったように思います(写真1)。

会議は、1日目午後の受付を済ませた後、まず「学生FDの父」と言われる木野茂先生の挨拶を含むオープニング、次いで各大学の活動を紹介するポスターセッション、情報交換会と続き、2日目は、午前中に会議タイトルのテーマについて班ごとに議論するしゃべり場、午後には各班の議論内容



写真1 メイン会場

を共有する発表会とクロージングという内容で構成されていました。以下、セッションごとに報告します。

### 【オープニング】

当然ながら学生の司会進行で進められましたが、司会、周りのサポートまた映像等から学生の熱意が十分に伝わってきました。参加校紹介では大学の魅力をアピールしました（写真2）。また、学生FDの父と呼ばれる木野先生からは、学生FD立ち上げのお話と学生へのエールが送られました。そして、驚くべきは、文部科学省高等教育局高等教育企画課高等教育政策室の担当者による「全国学生調査」の実施についての説明が組み込まれていたことでした。これは運営側の働きかけではなく、文科省から依頼があったということで、説明では学生の声が大学に届くということが強調されていました。



写真2 鹿児島大学紹介

### 【ポスターセッション】

鹿児島大学を含めて22大学がそれぞれの取り組みをまとめたポスターを掲示し、2時間じっくりと情報交換しました（写真3）。学生は、ポスター前での説明者と他大学の情報収集者とで交代しつつ、初対面にも関わらず積極的に熱く語っていたのが印象的でした。以下、いくつかの大学の取り組みを紹介します。



写真3 ポスターセッション

#### ・SAの積極活用（嘉悦大学）

授業のアシスタントを担うSAを組織化しており、定期的な全大会議にて、教育改善につながる事項、例えば教員に教育改善方法を提案したりといった企画を立案したり、SAの昇給（時給1,950～3,000円）を決定したりしている。

#### ・入学当初のピアサポート（神奈川大学）

入学前ガイダンスや入学当初期において学生が新入生の学生生活全体をサポートしている。

#### ・学生から教員への提案

レポート書き方講座を依頼している（九州工業大）

学生が受けたい授業を企画し専門の近い教員と相談の上、新設科目を開講している（日大文理学部）

コミュニティスキルの指導を依頼している・教員は協力的である（中京学院大短期大学部）

#### ・教員紹介一覧の作成

教員紹介冊子（島根県立大など）や教員図鑑（下関市立大）を作成し配布している。

### 【情報交換会】

ポスターセッションの流れのまま、同じ会場にて開催されました。未成年者の参加もあるためノンアルコールの会でしたが、ポスターセッションの延長の雰囲気が残っていたためか、学生間や教職員間で活発な情報交換がなされました。話題はポスターセッションの内容から大学生活まで幅広く、ここで親睦を深めて翌日のしゃべり場につなげる意図が成功していたように思います。

#### 【しゃべり場】

参加者238名を、概ね学生5名・教員1名・職員1名の計28班に分け、各自昼食持ち寄りにて10時から13時半まで話し合い活動を行いました（写真5）。

テーマは「大学ってつまらない？」という教員の立場からするとセンセーショナルな問いかけでしたが、筆者の班では議論がその問いに終始しないよう、問いの先の自分たちにできることに進むよう、また学生主体で進むよう議論を方向付けました。ほかの班でも状況に応じて教員側が議論の焦点を誘導しているものと思われました。自己紹介後、「しゃべり場の進め方」資料に従って、大学に対して感じていることを共有し、大学は「つまらない」か「つまらなくない」かについて班の意見を決定した後、発表準備として模造紙に内容をまとめるという流れで進めました。

学生の持つ大学のイメージは、「授業が一方向的でつまらない、アクティブラーニングの授業は楽しい、内容が難しすぎる、難しい授業について学生同士の勉強会が開催されて良い、授業中にのびタイムを設ける教員の工夫が有難い」等であり、また問題点に対しては改善したいが方法がわからないといった学生の思いが印象的でした。

#### 【発表会・クロージング】

話し合いの内容をまとめたポスターを活用した発表会で意見を交換しました。発表会は7班1会場で行われ、最後はメイン会場に全班のポスターが掲示されました。メイン会場では意見交換の時間が設定されていたわけではありませんでしたが、ポスター前で積極的に意見交換する姿がみられました。

以上、全体を通して最も強く感じたことは、いずれの大学にも教育改善に意欲の高い学生が相当数おり、教員の関わりがなくても（ないほうが）面白く有意義な取り組みをしているということです。鹿児島大学にも同様の学生が相当数いると思われ、そのような学生FDにつなげるためには、学生主体の組織化が課題といえます。この課題は以前から本委員会でも指摘されており、その体制作りに向けて進めておりますが、本調査を終えて本年度の成果にますます期待を寄せることとなりました。また、学生FD委員に対しては、各大学の様々な取り組みを参考にしつつ、またその活動の輪を全学へと広げて積極的に取り組んでほしいと思います。

## 2. 参加学生報告 ～学生FDサミットに参加してみて～

(1) 報告者：教育学部 中等教育コース技術科2年 松木菜那



写真4 情報交換会の様子



写真5 しゃべり場の様子



写真6 発表会の様子

私は、北翔大学で行われた2019年度夏学生FDサミットに鹿児島大学教育学部学生FD委員の代表として参加した。去年の夏にも京都光華女子大学・短期大学部で行われた学生FDサミットに参加したため、大体の流れは把握していたが、ポスターセッションなどは初めてだったため改めて他大学の取り組みについて学ぶことができる良い機会となった。

ポスター作成やポスターセッションでは、同行した先生や先輩、FD委員の方にアドバイスを頂きながら他大学に取り組みや課題を伝えることができた。他の大学のポスターを見てたくさん質問などしたのだが、やはり鹿児島大学教育学部とは違い、サークルのような形でしている大学が多いため自主性が強いことに気づいた。他の大学の取り組みとしては、実際に授業を作り、提案したり教職員の紹介パンフレットを作ったり、しゃべり場を行ったりと特徴のある活動が多かったように感じた。私が鹿児島大学について紹介しているときによく言われたこととしては、「ソフトボール大会を自主的に企画し、教育学部内で親睦を深めていることはとてもいい」ということだ。しかし、改善点として「自主的に集めた方がいい」という意見や「教育学部内で絞らない方がいい」というような意見があった。この意見は、私も学生FD委員として活動している中でよく思っていたことだった。

今の鹿児島大学学生FD委員の現状として、先生からの推薦のような形で成り立っており必ず学科から2名は出すということで自主的になる人は少ないように感じる。このことからか、途中で来なくなる人も少なくはない。この課題点は早急に解決しなければならないと考えている。また、鹿児島大学は教育学部内だけにとどまっているため、他の学部と共同になればさらに多くの意見を獲得することができ、視野が広がるのではないかと考える。

次に、しゃべり場では「大学はつまらない？」をテーマに話し合いを行った。様々な意見が上がったが、私たちのグループは「大学はつまらなくはない」という意見になった。様々な大学から学生や教員が集まったため、自分の知らないような他大学の現状について知ることができた。「大学は自由だから楽しい」「先生たちとの関わりが全くないからつまらない」などその大学によって学生の率直な意見を聞くことができた。逆に教員からは「学生との距離の縮め方が難しい」というような意見も上がった。普段は学生としての立場でしか生活をしていなかったため、教員側からのこのような意見は新鮮だった。このようにして、普段聞くことのできない教員からの意見を聞くことができることもしゃべり場の良いところだと考えている。鹿児島大学でも隔週火曜日の昼休みにFD委員で集まっているが、決まった人しか意見を出さず、あまり活発な意見交換ができていないように感じる。このことから、もっと教員と学生が意見交換できる場を増やした方がいいと考える。

今回、FDサミットに参加して鹿児島大学の問題点や他大学の活動など様々なことを学ぶことが出来た。このことをこれからの鹿児島大学教育学部学生FDの活動で生かしていきたい。

## **(2) 報告者：教育学部 中等教育コース技術科3年 横田美紅**

2019年のFDサミットは北翔大学で行われ、鹿児島大学教育学部学生FD委員の代表として全国学生FDサミットに参加した。学生FD委員の仕事は、前年度に引き続いて参加している身ではあったが、前年度初めて鹿児島大学教育学部学生FDに参加させて頂いたときには、「FD」という言葉も知らなければ、聞いたことすらなかった。何も分からないまま、活動に参加して徐々に知ることができた。また、全国FDサミットに参加するのは今回が初めてだった。鹿児島大学での学生FDの活動内容しか知らない身で、全国の大学ではどのようなFD活動が行われているのか全く見当がつかなかった。また、鹿児島大学学生FDでの活動も大まかにしか分かっておらず、実際にどのような活動をしているのかを知っているだけで深くは知らなかった。今回、全国FDサミットに参加さ

せていただけることが決まり、本校のFD活動について、改めて知ることができた。どのような人員構成で、活動を行っている状況なのかを、他の大学の人に伝えられる状態になることができた。

今回の北翔大学における「学生FDサミット2019夏 with学生FD会議」は8月27日と28日の2日間を通して行われた。この2日間を通しての全体の大テーマが「大学はつまらない？今、私たちにできることは」というものであった。大学生の中には大学を「楽しい」「面白い」「つまらない」と感じている人が様々だ。では、なぜそのように感じるのだろうかというところを、全国と同じ大学生の立場から考えていった。この学生サミットで教員も含めて学生と一緒にこのテーマについての原因を考え、共有することで全国の大学生がどのように変わっていきけるのかを考えるきっかけになるものだった。実際にこの2日間では、このテーマについてグループに分かれて話し合う他にも、他の大学におけるFD活動について知ることができ、ポスターセッションというものがあつた。私たち鹿児島大学教育学部学生FDも実際にポスターを制作し、紹介することができた。まず、他の大学でのFD活動を知った感想としては、どの大学も学生が中心となって活動に参加しているということだ。学部で行うというよりは、サークルとして大学全体で行われていた。活動内容としては学生と教員とのしゃべり場を設け、飲食をしながらリラックスした環境で話をしたり、実際に単位認定された授業を作ったりであった。また、他大学のFDの学生から本校のFD活動について寄せられた感想としては、「教育学部だけでFD活動が行われていることから、他の学部も巻き込んでFD活動が行えたら良いということ」、「FDの構成メンバーとしては自主的に集まったものでないが、各教科に所属する学生が均等に集められている点は活動するとき効率が良い」「ソフトボール大会は各教科内や他教科の人たちと交流を深める良い機会だ」ということであった。

全体テーマの結論としては、やはりつまらないという意見や、つまらなくないという意見など様々な意見が出たが、それぞれが自身の大学について考える良い機会となったのではないかと感じた。実際に他大学の人たちと関わることで気づけた点も多く見つかった。しかし、その発見を実際に本校の活動に取り入れることができていないのが現状であるので、鹿児島大学教育学部学生FDの今後の課題としては、現在の骨組みを残しながらも、新たな骨組みの付け加えと、FD以外の学生にも知ってもらえるような活動をする肉付けが必要であると思った。そうすることで、学生FDの本来の目的が達成されるのではないかと感じた。

## 5章 学生FD委員会の活動

### 1. 学生FD委員会の概要

学生FD委員会は、本学部の授業や教育の改善のためのFD活動を担う学生主体の組織で、各専修から選出された2名の委員によって構成されている。具体的な活動としては、全国学生FDサミットへの参加や学部・大学院合同シンポジウムの企画・実施、ソフトボール大会の運営、履修支援等のピアサポート活動などを行っている。

今年度のFD委員会では、昨年度までの活動の反省を踏まえ、継続的な活動の土台を作り、来年以降に活動を繋げていくこと、また、活動を学部全体に広げて行くことを目標に掲げ、活動を行った。構成委員を、学生・教員間で授業について話し合う機会を設ける「FDシンポジウム班」、学生の履修登録などの支援をする「ピアサポート班」、ソフトボール大会を催す「ソフトボール班」の3

班に分け、各班に班長1人と班員6～7人を割り振り、それぞれの活動に向けて準備を行った。(学生FD委員会委員長 久富祐)

## 2. 各班の活動と振り返り

### (1) FD シンポジウム班

FD シンポジウム班では、まず、鹿児島大学教育学部における教育活動について、実際教育を受ける学生がどのように感じているのか、どのような点に不満を感じ改善してほしいと思っているのかを学生側から提案し、教員側と対等な立場で意見交換をすることにより解決を目指していくことをシンポジウムの開催目的として設定し、共有した。また、今年度のテーマ決定にあたっては、委員長を中心に話し合いを重ね、FD委員のシンポジウム班が中心となって行ったが、話し合いを重ねる中で、昨年のシンポジウムから何が変わったのか目に見えてわからないという疑問が上がった。昨年は、授業のカタチを考えるというテーマでディスカッションを行っているが、FD委員の中には、昨年と変わった様子がなく、授業に対する不満を持っている学生が多くいた。そのため、今回は授業をより良くするにはという大きなテーマに、「家庭学習時間の担保と単位数」というサブトピックを設けて、より具体的にディスカッションを進められるよう努めた。

実際のシンポジウムでは、グループディスカッションに際して、教員側と学生側双方の意見を聞き、対策内容が深められるよう、学生と教員の両方を含む4～5名を1グループとして実施した。また、ディスカッションの内容として、家庭学習時間と単位における問題とその対策をグループごとに挙げてもらうよう促した。

シンポジウムにおいては、まず、学生の家庭学習時間が短いことが問題として挙げられた。原因としては、課題を出す意図が学生に伝わっていないことが挙げられ、オリエンテーションやシラバスをより細かくして意図を伝える必要があるという結論に至った。また、学生のモチベーションを高める方法として、学習の成果をmanabaのポートフォリオで一元化することを取り入れてほしいという意見も出た。さらに、グループ課題における個々の負担の差についても、問題点として指摘された。この問題の対策としては、グループ課題には授業の中でおさめるようにすること、また、個人点と団体点を設け、グループ課題への貢献度を成績に反映することが挙げられた。

今回のシンポジウムでは、家庭学習時間と単位数に焦点を当てたディスカッションを行ったことで、前回よりも具体的な対策が挙げられ、改善につなげていきやすいと考えられた。一方、今回のシンポジウムの課題としては、シンポジウムに参加する学生や教員の人数が少なく、より多くの人意見を聞くことができなかったことが挙げられる。シンポジウム開催の案内の方法などを工夫し、より多くの人にシンポジウムに参加してもらう必要があると感じた。(FD シンポジウム班班長 平山幸穂)

### (2) ピアサポート班

ピアサポート班は8名体制で活動を行った。

具体的な活動としては、まず、学生FD委員会の活動の周知徹底を図るため、また、2020年度前期にむけての活動を見据え、2019年度後期の履修の際に履修日程の一覧表をプリントで作成し配布した。このときは50枚余りが利用された。

また、履修申請の科目選びについて、入学時のオリエンテーションで配布される『教育課程』の参考の仕方をよく理解できていない学生が多い現状に鑑みて、この冊子の読み方を解説するパンフレット『履修登録のすすめ』を作成した。このパンフレットは主に、学期が始まるまでの日程一覧、

卒業するために必要な単位数や科目のジャンル（共通教育、専門科目など）別の注意事項、複数の免許取得の際の科目履修における注意事項を解説した。また、複数免許取得においては自分の専修領域以外の知識が不可欠であることから、各専修の3年生の学生FD委員を中心に一言アドバイスを掲載した。

このパンフレットは2020年1月末に完成した。70部を作成して教務系の事務室に設置し、各専修のLINEで告知して自由に持ち帰れるようにしたところ、2月第1週の時点で10部余りを残すのみとなった。人数制限のかかる科目のエントリー当日には増刷を見込んでいる。

自分たちの仕事が学生に役立つことで、委員各自が使命感を持てるようにこの結果はピア班で共有したい。特にシンポジウム後の会合では、委員の積極的な参加が見られ、パンフレット完成の達成感も少なからず共有できた。今後の課題としては、一部不参加の委員も出たことと、『教育課程』の学年をまたいだ検討が不十分だったことが挙げられる。活動開始時に具体的な見通しを共有することと、余裕を持った計画を練ることで改善を期する。（ピアサポート班班長 長田慎治）

### （3）ソフトボール班

ソフトボール班は8名体制で、学祭期間中に開催するソフトボール大会の企画・運営を行った。具体的な活動内容は、事前準備（告知案内の作成、グラウンド・道具等の予約、参加申し込みの受付、参加チーム確定後の日程、トーナメント作り、当日の仕事シフトの作成、参加賞・景品の準備）と当日準備（会場設営、グラウンド作り、後片付け）である。下記のスケジュールで準備をすすめた。

9月中 グラウンド・道具の予約（グラウンド予約は教育学部学生係、道具予約は共通教育1号館の学生係）\*なるべく早めに

10月第1週 大会の告知（文書を作成し、各専修の委員が専修全体に共有）

10月第2週 参加申し込み受付（今年度の参加費は1チーム2,000円）

10月第3週 参加チームトーナメント抽選

10月第4週～11月第1週 当日の日程表、トーナメント表、仕事のシフト作り

11月第2週～当日 参加賞・景品の準備、当日の机や椅子の準備

#### 【2019年度 ソフトボール大会 大会概要】

- ・参加チーム：9チーム（専修）
- ・大会方式：予選リーグAパート（4チーム）、Bパート（5チーム）を行い、各パート2チームが決勝トーナメントに進出
- ・試合時間：1試合45分
- ・ルール等：(1) 投球は基本下投げ（スローピッチング）で行う。ただし、双方の合意があった場合にのみウインドミル投法も可能。  
(2) 女子学生が試合に出場した場合、その人数×1点が点数に加点される。
- ・景品：商品券（1位7,000円、2位5,000円、3位3,000円）、参加賞500mlお茶1本

8人の班員だけで事前準備は行うことは可能であるが、当日の運営を行うことは厳しいところがあるため、FD委員会全体の協力を得ながら、当日の運営を行うことができた。今年度のソフトボール大会は、雨のため午前中の予選リーグまでの開催となってしまったが、その中でも他専修、他学年との交流を深める活動となったと思う。しかし、大会には女子学生が多くを占める専修の参加は

なく、参加している専修もほとんどが男子学生である。学生同士の親睦を深めることを目的とした活動であるならば、すべての専修が参加しやすい、男女ともに楽しめる競技の実施を来年度に向けて、検討していくことが今後の課題である。(ソフトボール班班長 宇藤山暢)

### 3. 今年度の成果と今後の課題

この1年間を通して、初等・中等の領域ごとに履修登録の雛形を作成することができた。またFDシンポジウムでは、学生・教員間のそれぞれの授業観や、そのズレを話し合い、どちらともそれぞれへの要望や、改善すべき点が見えてきた。

一方で、この教育学部学生FD委員会という組織は、自主的に集まって行われるサークル活動の一環である他大学とは形態が異なり、各領域から数名が選出され、構成されているため、他大学よりも自主性・主体性が少なく、活動的でない組織になってしまうことが多い。また、学生FD委員会の活動や存在そのものが学生に知られていないことも多い。したがって、今後のこの組織の展望として、我々の作成した履修等のパンフレットをより広く活用したり、多くの学生が参加できる活動を企画したり、また教育学部全体を巻き込み、学生にとっても、教員にとってもより良い大学生活を送ることができるための支援をできる組織になるような活動を継続したいと考えている。(学生FD委員会委員長 久富祐)

## 6章 教育学研究科教育改善のための調査

### 1. はじめに

これまで教育学研究科では、毎年大学院生を対象として、教育改善のための資料を集めることを目的としてアンケート調査を実施してきた。本年度は、教育学研究科の2専攻のうち教育実践総合専攻において教育改善を行うための調査を実施した。本章では、アンケート調査の結果の報告と考察を行う。

### 2. 調査の実施方法

令和元年度の教育改善のための調査を以下の方法で実施した。

- 調査実施時期 2019年12月3日から27日
- 教育実践総合専攻1・2年次生
- 調査実施方法 Web回答方式(匿名)
- 通知方法 教務係よりメール配信
- 質問項目 平成30年度の調査項目に準ずる質問内容

通知方法については、上記の他に大学院共通科目担当者に依頼し、授業中にアンケートに回答するよう周知してもらった。その結果、1年次生7名、2年次生6名の合計13名から回答が得られた。前年度の回答者は10名だったので、回答者数は前年度より若干改善が見られた。

### 3. 結果と考察

#### (1) 研究科、教育実践総合専攻、学修コース共通科目について

研究科共通科目、教育実践総合専攻共通科目、学修コース共通科目について、満足している点と改善してほしい点に関する意見は以下の通りであった。



### ●満足している点

- 自分のテーマ以外の、教育学のことが学べる。
- 他の専攻の院生と学び合う時間は貴重な経験となった。
- 様々な分野で研究している先生方の講義を受け、自分の分野での教育に関する共通点などを見出し参考にすることができた。また、グループ活動が多く、同世代の意見を聞くことができ刺激になった。
- 他専修の学生と様々な意見交換ができる点。
- 遅い時間の授業にも関わらず、いつもきちんと教えてくださるので、満足しております。
- 何人かの先生が教えているので、様々な分野に触れることができ良いと思います。
- 実践的な内容や、専門性の高い内容についての学習ができている。
- グループ討議ができる。
- 他コースの学生と一緒になので、学びが深まる気がする。
- ディスカッションをする授業が多く、人の考えに触れて刺激をもらうことができるから。
- 専門性が高く、現場で活かせるような内容を詳しく学べる。

### ●改善してほしい点

- 複数の先生で1つの授業を持っている。そのため、それぞれの学びの内容が深くならないものもある。先生が計画的に講義して下さる場合には、3回ほどの時間でも充実している。
- 19時からの時間で授業を行わないでほしい。
- まだ時間数を増やしてもいいと思う。
- 1年では週1回あるが、2年以降もあってよい。
- 夜ある講義は、体力的、精神的にきつい。
- 6限目の授業は、社会人を対象にした夜間授業であるが、(それに該当する方がいらっしゃらない場合は)、授業時間を繰り上げて(5時間目とかに)行うことはできないだろうか。その年の入学者の編成に合わせて弾力的に時間割を組む方法はないだろうか。
- 授業3、4回ごとに先生が変わる授業があり、いろいろな分野のことは学べるが深く学ぶことができない。

研究科共通科目、教育実践総合専攻共通科目、学修コース共通科目について大学院生が満足している点は、専門分野を横断して学ぶことができることであると考えられる。しかし、専門分野を横断した講義であるため、一つ一つの内容を深く学ぶことができないという不満にもつながっている。また、開講時間に関する不満も挙げられている。これは社会人大大学院生の受講を考えるとやむを得ない部分であり、時間割の編成時期などを考慮すると改善するのは現状難しいと考えられる。

## (2) 学修コース専門科目について

学修コース専門科目について、満足している点と改善してほしい点に関する意見は以下の通りであった。

### ●満足している点

- 自分が求める学びを深めることが出来た。
- 他分野との共通点を見出し、自分の分野に関することの視野が広がった。

- いつも丁寧にご指導いただいています。
- 本の内容を章分けて、個人担当後でグループ相談のやり方で、いいと思います。
- 学部生の頃には学べなかった専門的な知識や先行研究なども学ぶことができています。
- 自分の知りたいことをより深く学べる。
- 専門を学べるので良い。
- 教職を中心とはしているが、自分の分野に近いことを学べる点。
- 専門性が高く、現場で生かせそうな内容を詳しく学べる。

#### ●改善してほしい点

- 学修コースは同じでも専門分野が異なる学生が集まって授業を受ける。専門外の学生は、ほぼ素人であるため、各内容が浅いものになりがちだと感じる。
- どの分野の先生方も、全ての分野に共通することを考えて講義してくださっていたが、他分野のことを聞けるせっかくの機会なので、専門的な話も聞きたかった。
- 学会等、出張で休講になるのはやむを得ないと思いますが、個人的な都合や仕事で複数回休講になってしまったのは残念でした。
- 本の内容が理解しにくい時があります。
- 鹿大以外から来た院生には、もう少し丁寧にしてほしい。
- レベルが高すぎるあまり、半分は理解できない科目がある。

学修コース専門科目について大学院生が満足している点は、その授業内容の専門性にある。一方で、改善してほしい点は、その専門性故に内容が高度すぎる場合があることである。この点は、受講生の子備知識やこれまでの学習状況を考慮に入れて授業計画を柔軟に行うことで改善できるのではないかと考えられる。

### (3) 研究・学習環境について

研究・学習環境（設備・備品・消耗品など）について、満足している点と改善してほしい点は以下の通りであった。

#### ●満足している点

- 学内のパソコンが使える。ヘッドホンなども整っている。
- 院生用の研究室がありがたかった。
- 今の環境で十分です。
- 研究室などの個人場所がいい。
- 使いやすい教室などが多くて勉強に集中しやすい。
- 機器の数が多し。
- 院生が使える部屋がある点。
- さまざまな実験を行うことが出来る施設がある。

#### ●改善してほしい点

- 専修ごとに、院生が使えるプリンターが欲しい。図書館などで印刷するので、コピー代がかさんでしまう。
- 院生室が狭い。
- 印刷機の使うことなど。

- プレハブの建物が遠いし寒い。
- 壊れて使用不可の機器が多い。修理してほしい。使用可能な物と混在させないで、定期的に点検してほしい。
- 文系研究棟の水道やトイレを綺麗にしてほしい。
- 必要な設備や備品、消耗品等が足りず、研究が進まない。

研究・学習環境については、院生用の研究室がある点や研究・学習用の機器が揃っている点を評価する意見が寄せられている。一方で、研究室が狭いこと、コピー機、プリンターが足りないことに関する不満の声が寄せられた。これらの不満点を改善することは、昨今の予算状況を考えると難しいかもしれないが、検討の余地はあると思われる。

#### (4) 研究成果の発表についての感想・意見

アンケート調査時点では、すでに口頭発表を行ったものが4名おり、さらに4名がこれから行う予定であると回答していた。また論文執筆については5名がすでに執筆を行っており、その他の回答もすべてこれから行う予定であると回答していた。研究成果の発表（口頭発表/論文執筆/作品・演奏・競技等）について大学院生から寄せられた意見などは以下の通りであった。作品・演奏・競技等に関する意見は「特になし」のみだったので記載していない。

##### ●研究成果の発表に関する指導・支援に関して満足している点

###### 口頭発表

- 研究成果の発表については学会の入会金、会費、参加費全て全額自己負担で負担は大きかったが、その分あるものが大きかった。
- とても丁寧にご指導いただいています。本当にありがとうございます。
- 先生は個人考えを尊重してくれて細かいところを見てくれるので、ありがとうございます。
- ゼミなどで、細かい点まで指導していただきありがとうございます。
- 専門性の高い教員に教わっている。
- 先の進路を見据えて指導してくれる気がする。
- 納得するまで細かく指導をしてくれる点。
- 教員が親身になって、対応してくれる。

###### 論文執筆

- 指導教官に何度も指導していただき投稿することができた。
- とても丁寧にご指導いただいています。本当にありがとうございます。
- 先生は論文の進め方をアドバイスしてくれました。
- やや厳しめにしてくれるところは、良い。
- 論文の書き方を学べる点。
- 先輩のアドバイスが役に立っている。

##### ●研究成果の発表に関する指導・支援について改善してほしい点

###### 口頭発表

- 研究成果の発表に関する講義がない。そのため、担当教官によって指導や支援の頻度・充実度にかなり差がある。
- 現職でなければ、希望する学会全てに参加することは経済的に難しいと思う。
- 研究発表のイベント、他人のアドバイスをもらうことができたらいいと思います。

- 日頃のゼミ時間を増やしてほしい。もっと議論したい。
- ゼミを月2くらいでもいいので、しっかりと行ってほしい。

#### 論文執筆

- 熱心に指導していただけないと感じることがある。論文執筆のための授業がなく、授業時間外での指導になることも要因かと考えている。
- 研究紀要は大学院生は第一筆者となれないため、研究実績として外部に提出するとき不利だと感じた。
- ゼミで議論する時間を増やしてほしい。
- 詳しく、どこがどのように駄目かを伝えた上でアドバイスして欲しい。

大学院生から寄せられた意見を見る限り、研究発表にまつわる点においては指導教員によって、満足かそうでないかが大きく異なるようである。専攻全体で対応できそうなものとしては、学会参加への経済的援助と研究成果の発表方法に関する講義を要望する声あげられている。研究発表に関する授業は様々な分野が混在する当専攻の性質上難しいかもしれないが、ある程度分野をまとめて行えば対応できる可能性はあるのではないかと考えられる。

#### (5) その他大学院での学習や生活全般について

今までの質問内容以外で、大学院生から寄せられた感想、意見は以下のとおりであった。

- 指導教官によって、できることに差があるように感じる。どの学生も同じように研究成果の発表や論文指導などが受けられるようにしてほしい。
- 長期履修生制度で仕事を続けながら大学院で学ぶことができたのでとてもありがたかった。
- 他学年の院生とも授業を受けてみたい。バチバチに論議したい。
- 証明書発行機の故障が多くて大変困る。
- 校舎の改修工事の粉塵が多いときがあるので、散水などの対策をしてほしい。
- 喫煙所がなくなったことにより、大学周辺のポイ捨てが増えている気がする。
- 院生研究室よりも人数的にゆとりがあり、落ち着いて研究を進めることのできる部屋が欲しい。

#### 4. おわりに

このアンケート調査を通して、本専攻の大学院生にとって良い点と改善を要する点を明らかにすることができた。改善すべき点としてあげられたものの中には、教員側の意識を少し変えるだけで修正できるものも含まれているので、これらの意見にはある程度対応できるのではないかと考えられる。研究室や設備といった環境面に関することは直ちに対応することが難しいかもしれないが、ある程度対応を検討すべきであろう。

昨年度に引き続き、今年度も Web 回答方式でアンケートを行った。教務係からのメール配信に加えて、共通科目担当の先生方にアンケートへの回答を呼びかけていただいたが、それほど回答数に改善は見られなかった。来年度以降にもしこのアンケートを行うのであれば、実施方法、実施期間、周知の方法などの見直しが必要ではないかと思われる。

## 7章 その他

## 1. 教育改善の方法・方策を取り扱った講演会

不登校学生への対応をテーマとして、2回の講演会を開催しました。前半には不登校になる際の心理的背景と支援方法・関わり方について、後半には不登校から復帰に向けての支援方法について以下の通りお二人にご講演をお願いしました。

○前半：9月17日（火）13時～13時半

講演者：関山 徹 先生（教職大学院）

演題：無気力状態に陥った学生の理解と対応

○後半：10月15日（火）13時～13時半

講演者：伊地知 信二 先生

（保健管理センター）

演題：学生支援の原則と課題

（右図参照）

いずれのご講演も、全教員が身近な問題として感じている重要な内容で有意義だったと思われまます。



図1. 学生支援のあるべき姿

図2. 吉米地レポート(JASSO, H19年)

## 2. ベストティーチャー賞受賞候補者の選考方法の検討と取り組み紹介

ベストティーチャー賞に関する全学的な判断基準が示されたことを受けて、また教育学部の選考対象者に教職大学院の専任教員が含まれていなかったことに対応するため、前年度に制定したばかりの規約の改訂を検討しました。合わせて、選考方法についても多くの時間を割いて議論しました。

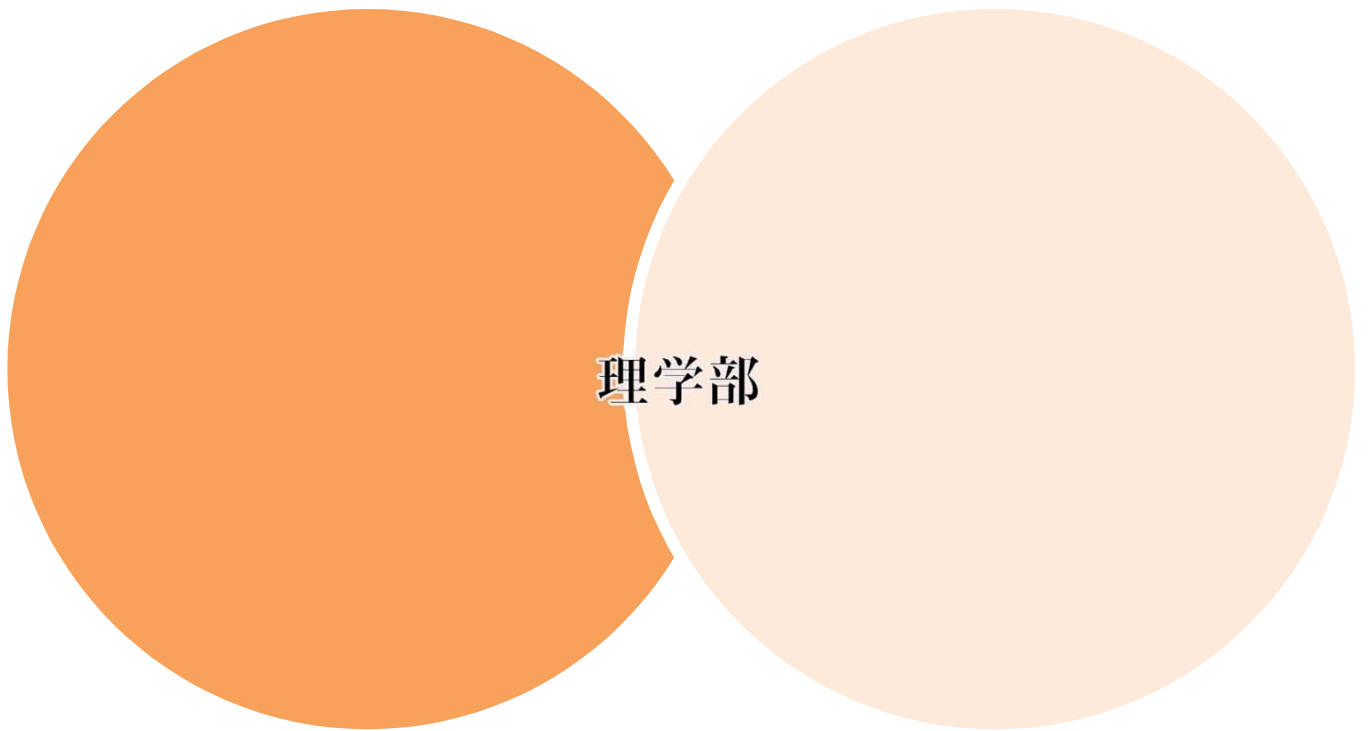
特に、候補者に依頼する選考調書の内容について、前年度の最優秀ベストティーチャー賞受賞者の取り組みを参考に具体的に検討し、授業改善の視点の指標を作成しました。この選考調書の内容、すなわち学生評価の高い教員の授業方法や改善の工夫を、教授会等で公開することで、良い取り組みを積極的に教員に周知する方策をたてました。また、授業アンケートで評価の高かった講義については、次年度の授業参観で推薦することも検討しました。これらの改善が次年度の授業アンケートの結果の向上につながることを期待しています。

大学IRコンソーシアム学生調査結果（平成30年度実施分）の評価・分析について

教育学部FD委員 浅野 陽樹

	注目した知見	知見に対する解釈	改善・対応策
【1年生のみ】 本学への志望度及び高校時代の経験	<p>本学第1志望者が55%と過去最高で、他大学・他学部と比べても高い。同様に、現役率89%も過去最高で、学内で比べると高い。</p> <p>また、2017年に限って、高校時の成績上位層の入学者が52%と例年より低く、他学部と比べても低い。</p>	<p>教育学部では、2017年度入生からの学部改組・入試改革により、募集単位の大括り化と第2・第3希望学科の選択幅の拡大を進めた。その結果、初年度の2017年度は、高校時成績上位層の受験者が減る等の受験生の戸惑いが予想され、改革の効果が見え辛かったが、2018年度は改革の効果が表れ、現役生を中心に教育学部を第一志望とする受験生の割合が高まったものと考えられる。</p> <p>また、第1志望者55%には本学の他学部志望者が少なからず含まれると考えられ、教員養成学部目的に鑑みると、さらなる向上が望まれる。</p>	<p>引き続き経過を注視し、改革の効果を確認するとともに、第1志望者の割合を高めるべく入試に面接を導入する。</p>
大学での学びの実態	<p>① 1年生の「一般的な教養が増えた」と感じる学生の割合が減り続けている。他大学・他学部と比べて、前年までは同等以上だったが、2018年は62%と7~8%低い。</p> <p>② 上級生の「授業中に学生同士が議論をする」回答が94%と他学部・他大学と</p>	<p>① 1年生の一般的な教養に対する学部としての特別な取り組みはなく、理由については判然としない。</p> <p>② 教育学部教員は、学部の特性上、あるいは実指導に教員全体で携わる体制の</p>	<p>① 引き続き原因を検討する。また、共通教育で学習した教養の大切さを意識づけることが大切かもしれない。</p> <p>② 次の段階として、グループ演習の内容の充実</p>

	<p>比べて 20%以上高く、漸増傾向にある。同質問に対する 1 年生の回答も同様に 83%と高い。同様に、「リーダーシップ能力」、「他の人と協力して物事を遂行する能力」が増えた回答も他大・他学部と比べて高い。</p> <p>この傾向は、大学生活に対する意識に関連する各項目でも同様の傾向がみられる。</p>	<p>ため、教員のアクティブラーニングに対する意識が高く、結果として授業中にグループ演習を設定する授業が多く、その影響が表れていると推察する。また、これらの学生同士の議論の機会が多いことからリーダーシップや協働の能力が培われたと感じているものと思われる。</p>	<p>を図るべく、ベストティーチャー賞受賞者の演習方法を公開するなどの教育改善に努める。</p>
<p>英語運用能力の熟達度及び英語学習の状況</p>	<p>1 年生および上級生ともに読む力および書く力が他学部・他大と比べて低い。</p>	<p>1 年生の英語圏への渡航経験の無い学生の割合が 90%以上と学内で最も高いことから、外国に対する興味の低い学生が多いことが要因かもしれない。ただし、1 年生・上級生ともに年次変動が大きいことから一過性の可能性も否定できない。</p>	<p>引き続きデータを注視するとともに、英語に関わる機会を増やす方法を検討する必要がある。</p>
<p>大学生活に対する意識</p>	<p>1 年次においては、「将来の仕事と授業内容の結びつき」「教員と話をする機会」「大学のなかでの学生同士の一体感」がそれぞれ 58%、35%、54%と他大・他学部と比べて 10%以上高い。</p> <p>上級生になると、それぞれ 70%、55%、69%と高まり、さらに「大学での経験全般」についての満足度は 81%と学内で最も高い値を示している。</p>	<p>1 年次より教職に関わるカリキュラムを編成していること、1 年次 9 月の学校体験実習で教師職への意識付けを図っていること、また同実習で多くの教員が事前・事後指導と引率に関わっていることの結果であると考える。また、全学年において同様の態勢で関わっていることが上級学年になってさらに意識が高まる結果につながっていると思われる。しかしながら、教員養成学部であることから「大学での経験全般」については 90%以上を目指したい。</p>	<p>教職に関わる 4 年間の学び、特に実践的科目群それぞれを整理し、1 年次当初より 4 年間を見通しつつ教師としての自己形成が図れるよう内容を再構成する。また、1 年次の教職に関わる演習・実習を充実させる。</p>





# 令和元年度理学部 FD 活動報告書

理学部 FD 委員会委員長 富安卓滋

令和元年度に理学部で実施した FD 活動の概要と課題点などについて、以下に沿って報告する。

- (1) 学生による Web 授業評価アンケートの実施（期末：7月、1月）
- (2) FD 講演会・講習会の開催（令和元年7月、令和2年3月）
- (3) 学生・教職員の FD 活動への参加状況

尚、令和元年度は、以下の計3回の理学部 FD 委員会を開催し、下記の各学科 FD 委員の協力のもと、理学部教員による FD 活動を実施した。教員の皆様のご協力と、Web アンケート処理に対応していただいた事務職員に心より感謝してお礼の言葉としたい。

- 第1回：令和元年6月12日、  
第2回：令和2年1月8日、  
第3回：令和2年2月5日、

## 令和元年度 鹿児島大学理学部ファカルティ・ディベロップメント委員会

委員長	相場 慎一郎		平成31年4月1日～令和元年9月30日
	富安 卓滋		令和元年10月1日～令和2年3月31日
委員	愛甲 正	数理情報科学科	平成31年4月1日～令和2年3月31日
委員	三井 好古	物理科学科	平成31年4月1日～令和2年3月31日
委員	池永 隆徳	生命化学科	平成31年4月1日～令和2年3月31日
委員	相場 慎一郎	地球環境科学科	平成31年4月1日～令和元年9月30日
	富安 卓滋	地球環境科学科	平成31年4月1日～令和2年3月31日

### (1) 学生による授業評価アンケートの実施

理学部における授業評価アンケートの目的は、学生による授業評価を通じて、授業担当の各教員が自らの授業の改善の手がかりとすること、さらに、その活動を通し学科のカリキュラム等教育システムの改善につなげていくことにある。受講学生の率直な声を担当教員にフィードバックすることで、個々の授業や学科のカリキュラムをより有益なものにすることができれば、理学部での教育をより充実したものにしていける。

今年度も昨年度に引き続き manaba を利用して授業アンケートを行なった。manaba 授業アンケート項目は、昨年度から一部変更し、19項目とした（図1）。

○あなた自身について

1.1 出席状況

1. 一度も欠席しなかった
2. 1～2回の欠席
3. 3～4回の欠席
4. 5回以上欠席した

1.2 あなたは、この授業の受講人数は適切だと思いますか。

1. 多すぎる
2. やや多い
3. 適切
4. やや少ない
5. 少なすぎ

○授業のわかりやすさについて

1.3 先生の説明は、あなたにとってわかりやすかったですか。

1. わかりやすかった
2. わりとわかりやすかった
3. ややわかりにくかった
4. わかりにくかった

1.4 使用した教科書、参考書、配布資料などの教材は役に立ちましたか。

1. 役に立った
2. わりと役に立った
3. あまり役に立たなかった
4. 役に立たなかった
5. これらの教材は使わなかった

1.5 黒板の板書は読みやすく書かれていましたか。

1. 見やすかった
2. わりと見やすかった
3. あまり見やすくなかった
4. 見やすくなかった
5. 板書はしなかった

1.6 スクリーンに投影される文字や図表（パワーポイント、実物投影機、OHP などを含む）は読みやすく作成されてきましたか。

1. 見やすかった
2. わりと見やすかった
3. あまり見やすくなかった
4. 見やすくなかった
5. パワーポイント等は使わなかった

1.7 先生の声は聞き取りやすかったですか。

1. 聞き取りやすかった
2. わりと聞き取りやすかった
3. あまり聞き取りやすくなかった
4. 聞き取りやすくなかった

1.8 総合的に見て、この授業はわかりやすかったですか。

1. わかりやすかった
2. わりとわかりやすかった
3. ややわかりにくかった
4. わかりにくかった

○授業運営について

1.9 シラバス（講義要項）に即した内容の授業が行われていたと思いますか。

1. そう思う
2. わりとそう思う
3. あまりそう思わない
4. そう思わない

1.10 先生は私語を注意するなど、受講生が講義に集中できる環境を作っていたと思いますか。

1. そう思う
2. わりとそう思う
3. あまりそう思わない
4. そう思わない
5. 私語はなかったので注意する必要がなかった

1.11 授業の開始時間、終了時間は守られていたと思いますか。

1. そう思う
2. わりとそう思う
3. あまりそう思わない
4. そう思わない

1.12 総合的に見て、この授業の運営はどうでしたか。

1. よかった
2. わりとよかった
3. あまりよくなかった
4. よくなかった

○学習成果について

1.13 あなたは講義中に熱心に受講したと思いますか。

1. そう思う
2. わりとそう思う
3. あまりそう思わない
4. そう思わない

1.14 受講の結果、新しい知識を得ることができましたか。

1. できた
2. わりとできた
3. あまりできなかった
4. できなかった

1.15 受講の結果、新しいものの見方や考え方を得ることができましたか。

1. できた
2. わりとできた
3. あまりできなかった
4. できなかった

1.16 この授業へのあなた自身の取り組み、この授業から得られたことなど総合的に見て、あなた自身の自己評価はどうですか。

1. よかった
2. わりとよかった
3. あまりよくなかった
4. よくなかった

○授業の難易度と進度について

1.17 授業の難易度はあなたにとって適切でしたか。

1. 適切であった
2. わりと適切であった
3. あまり適切ではなかった
4. 適切ではなかった

1.18 授業の進み方のペースは、あなたにとって適切でしたか。

1. 適切であった
2. わりと適切であった
3. あまり適切ではなかった
4. 適切ではなかった

1.19 総合的に見て、授業の難易度と進度は適切でしたか。

1. 適切であった
2. わりと適切であった
3. あまり適切ではなかった
4. 適切ではなかった

図1 令和元年度の manaba を利用した授業 Web アンケート項目

平成 30 年度に引き続き、令和元年度（平成 31 年度）の授業アンケートは、一部の不定期実施科目、集中講義を除く、教職専門科目、一非常勤講師担当科目を含むほぼすべての科目を対象に、今年度から開始した manaba を使った Web アンケートによって行われた。アンケートの設問は、図 1 に示している。このアンケートは、前期、後期の期末に、10 日から 14 日程度の期間をとって実施された。中間期でのアンケートも担当教員の任意で実施された。

manaba 上で回答されたアンケートは教員がそれぞれ確認できるようになっており、担当教員は、その授業アンケート結果を参照し自己分析を行うことが可能となる。理学部としては、アンケートの集計結果を保存し、必要に応じて学部および学科のカリキュラム改善のための基礎データとして活用できるようにしている。また、ベストティーチャー賞候補者選出のための参考資料として利用することが可能である。

理学部での授業評価アンケートは平成 13 年度より実施されているが、その際に集計結果を教員評価のための資料として利用しないことと決めている。これは授業改善以外の目的にアンケートを転用することは授業改善の面では逆効果であるという専門家の意見とも一致している。

表1 令和元年度FDアンケート状況

	前期	後期	通年
科目数（科目）	186	192	378
延べ受講人数（人）	6818	7485	14303
延べ回答総数（人）	1014	1651	2665
回答率，%	14.9	22.1	18.6

令和元年度のアンケート回答数は、前期 1526 件、後期 1771 件だった。昨年度は、それぞれ 3139 件及び 2039 件だったことから、前期は、昨年度の 48.6%、後期は、昨年度の 86.9%、通年では昨年度の 63.7%とかなり低下していた。回答率をみると、昨年度は、前期 60.7%、後期 39.8%と低下傾向にはあったが、今年度前期は 14.9%とさらに低下していた。後期で 22.1%とやや持ち直したが何もしなければ再び低下する可能性が高い。紙によるアンケートから Web アンケートへ変更になったのは、昨年度からであるが、昨年度の FD 報告書によると、「Web アンケート実施前、Web アンケートでは大きく回答率が低下することが危惧されていた」との記載がある。

今年度は、年度途中で委員長が交代するなどもあって、学生や教員に対する継続した働きかけが十分にできなかったことが、回答率の低下に大きく影響した可能性がある。また、今年度は、IR コンソーシアムのアンケートも実施されたことから、アンケート疲れもあったのかも知れない。何れにせよ、科目によって、回答率には大きく違いが出ており、アンケートの取り方も影響を与える可能性はある。例えば、講義時間中に時間を確保し、アンケートへの回答を促すことができれば、回答率の改善も期待できることから、講義担当教員に対してもアンケートへの理解と協力を求める必要があろう。実際 3 年性を対象とした IR コンソーシアムのアンケートは、回答率は約 50%となっており、来年度以降の回答率の上昇は、十分に可能である。

今年度のアンケートは、講義に関して、「授業のわかりやすさについて」、「授業運営について」、

「学習成果について」、「授業の難易度と進度について」の大きく 4 つのカテゴリーを設けている(図 1)。それぞれの項目のまとめに相当する問いである、

- 1.8 総合的に見て、この授業はわかりやすかったですか。
  - 1.12 総合的に見て、この授業の運営はどうでしたか。
  - 1.16 この授業へのあなた自身の取り組み、この授業から得られたことなど総合的に見て、あなた自身の自己評価はどうですか。
  - 1.19 総合的に見て、授業の難易度と進度は適切でしたか。
- に対する回答を表 2 にまとめた。

表 2 各項目まとめの問いに対する回答割合

設問	前期 (回答数 : 1526人)				後期 (回答数 : 1771人)			
	1	2	3	4	1	2	3	4
1.8	回答数, 人 626	609	204	87	714	700	262	95
	(%) 41.0	39.9	13.4	5.7	40.3	39.5	14.8	5.4
1.12	回答数, 人 828	569	86	43	968	663	107	33
	(%) 54.3	37.3	5.6	2.8	54.7	37.4	6.0	1.9
1.16	回答数, 人 578	730	175	43	686	847	200	38
	(%) 37.9	47.8	11.5	2.8	38.7	47.8	11.3	2.1
1.19	回答数, 人 689	621	160	56	756	759	206	50
	(%) 45.2	40.7	10.5	3.7	42.7	42.9	11.6	2.8
合計	回答数, 人 2721	2529	625	229	3124	2969	775	216
	(%) 44.6	41.4	10.2	3.8	44.1	41.9	10.9	3.0

表 2 を見ると、いずれの項目においても、回答 1 と 2 で 80%以上を占めており、回答 4 は、3 - 4% と最も少なくなっていた。回答したほとんど全ての学生は、講義に対して満足していると見ることができる。また、前期、後期でも数値的にもほとんど違いがなかった。今年度は、設問も変更になったことから、昨年度まで行われていたレーダーチャートを作成して教員へ返却することは行わなかったが、回答が 4 択となっているものは、すべて 1 が評価の高いものとなる。各問いについて全体の平均を求めて教員へ通知すれば、それぞれの教員は独自で平均値との差について考察できることになる。来年度はそのような対応を検討しても良いであろう。

## (2) 理学部 FD 講演会・講習会

### ○ 講習会

時間外学習の取り組みについて、7月と3月に教授会前後の時間を利用して、講習会が行われた。会場からの活発な発言もあり、時間外学習および教育の質保証に関する理解が深まった。

令和元年度 理学部 FD 講習会「授業時間外学習の実例紹介」

日 時：令和元年 7月 17日 (水) 教授会終了後、30分程度

場 所：理系先端研究棟 2階会議室

概 要：

1. 理学科カリキュラムにおける授業時間外学習の役割について 岡村学部長
2. 授業時間外学習の実例紹介 (1) 小山副学部長
3. 授業時間外学習の実例紹介 (2) 岡村学部長
4. 質疑応答

令和元年度 理学部 FD 講習会「授業時間外学習実施について」

日 時：令和 2 年 3 月 3 日（火） 11：00～11：30（臨時教授会開催前、30 分程度）

場 所：理系先端研究棟 2 階会議室

概 要：

1. 「学びの質保証、理解の質保証」について及び授業時間外学習の注意点 岡村学部長
2. 授質疑応答（20 分） 回答担当：岡村学部長、小山副学部長、中尾教務委員長

#### ○講演会

令和元年度の理学部の FD 講演会は、徳山大学前学長岡野啓介先生を講師にお迎えして、「学生の主体性を促す教育改革」というテーマで、令和 2 年 3 月 13 日（金）10 時～11 時 30 分に、理学部 2 2 0 講義室で講演していただく予定で準備を進めて来た。講演では、岡野先生が、徳山大学で手掛けてこられた①EQ 教育プログラム、②アクティブラーニング、③地域に向き合う学生教育、などについてお話頂く予定であり、講演前日の 3 月 12 日には、岡野先生と、理学部 FD 委員会委員との意見交換を行う予定でもあった。（注：『EQ=Emotional Intelligence Quotient』は「心の知能指数」と訳される、「情動知能」の尺度。『EQ 教育プログラム』は、行動科学をベースに開発した診断やトレーニングを通じて、「自立した一人の人間として社会を力強く生きていく力」＝“人間力”を育てる、徳山大学独自の教育プログラム。）残念ながら、コロナウィルスの蔓延により、令和元年度の講演会は 2 月 28 日に中止が決定された。

### (3) 学生・教職員の FD 活動への参加状況

学生・教職員ワークショップへの参加を含め、各部局の FD 講演会や学内・学外の教育関連の講演会への参加は、教員の教育スキルの向上だけでなく、FD 活動に対する意識の啓発においても重要である。

令和元年度では、60 名の常勤の教員のうち 56 名（93%）が、何らかの FD 活動に参加しており、部局としての FD 参加達成目標 75%をクリアした。今年度は、上にも書いたように、3 月に予定していた理学部 FD 講演会がコロナウィルスの流行を鑑み中止となった。外部の講師による講演は、新しい視点で

表3 令和元年度専任教員のFD参加率				
合計参加率		93 %	(専任教員 60 名中)	56 名参加)
企画別参加率	授業参観	8 %	(専任教員 60 名中)	5 名参加)
	理工学研究科理学部工学部合同FD講演会	58 %	(専任教員 60 名中)	35 名参加)
	理学部FD講習会(7月)	65 %	(専任教員 60 名中)	39 名参加)
	理学部FD講習会(3月)	77 %	(専任教員 60 名中)	46 名参加)
	学生・教職員ワークショップ	2 %	(専任教員 60 名中)	1 名参加)
			%	(専任教員 名中)
		%	(専任教員 名中)	名参加)

“外”から自分たちの取り組みを客観的にみる機会となる貴重なものである。その機会が失われたのは、残念であったが、それ以外の活動にも多くの教員が参加し、その参加率は、昨年度の87%を上回るものとなった。参加率が高かったのは、講演会や講習会であり、これらは、教授会と抱き合わせで開催されたため、教員にとっては、時間確保がやりやすく参加率の向上につながったと考えられる。授業参観には、5名の教員が参加した。昨年の7名に比べて微減したが、特に明確な働きかけを行わない中で、複数の講義で自主的に授業参観が行われていたことは、FD意識が根付いて来たことを示す結果と考えられる。来年度からは、1学科5プログラムへの改組も行われ新しいカリキュラムがスタートする。プログラムの枠にとらわれずに、積極的な授業交流が行われれば、理学部全体の教育力の向上につながることを期待できる。

大学IRコンソーシアム学生調査結果（平成30年度実施分）の評価・分析について

理学部FD委員 富安 卓滋

	注目した知見	知見に対する解釈	改善・対応策
【1年生のみ】 本学への志望度及び高校時代の経験	高校3年生当時の学習経験として、「H. 授業以外に興味のあることを自分で勉強した」と回答した学生が68%おり、この割合は、全国や本学の平均値から10%以上高い。	自然科学分野で興味を持った現象について勉強していた学生が理学部を志望した可能性がある。	自主的に学ぶ姿勢を大学の教育体制の中で、伸ばす取り組みができていないのか検証が必要。
大学での学びの実態	(1) 平均よりもやや低い程度ではあるが、「L 取りたい授業を取れない」と回答した1年生が37%いる  (2) 「I. 授業をつまらなく感じた」学生が、1年生で75.2%、3年生で78.8%いた。  (3)	(1) 1年生の3割以上の学生が希望する教科を受講できていないことになる。3年生では、22%と減少していたが、学生の学ぶ気持ちを下げてしまう原因の一つともなりかねない  (2) 全国や本学でも、ほぼ平均的な数値ではあるが、3/4の学生がつまらないと感じている。  (3)	(1) その実情はもう少し深く調査されても良いのかも知れない。  (2) その理由や、どのようなときにそう感じるのかなど情報を集めることも必要。  (3)

	<p>オフイスワーカーなど、授業時間外に教員と面談する時間は、1年生76%、3年生77%が全くないと回答していた。</p> <p>(4)</p> <p>1年生、3年生ともに、「C. 専門分野や学科の知識」と答えた学生が、86%、91%と最も高い。</p>	<p>学生が特に面談の必要を感じていないというところも知れない。</p> <p>(4)</p> <p>カリキュラムに沿って行われる教育が身につけているというところである。</p>	<p>理学部では、4年生からは、研究室配属されるため、特に実験系の研究室では、ほぼ毎日指導教員と顔をあわせることにはなる。</p> <p>(4)</p> <p>3年次までの学習を踏まえ、4年生で卒業研究に取り組むことになる。</p>
<p>英語運用能力の熟達度及び英語学習の状況</p>	<p>1年生の回答からは、入学時に比べると、聞く力、読む力、会話力、表現力、書く力のいずれの項目でも、調査までの間に英語運用能力レベルは上昇したと言える。3年生は、いずれの項目も、1年生の入学時の回答よりも、レベルが低い回答結果だった。</p>	<p>入学後レベルが低下したということになるのか、もともと高校までの英語指導に変化があったのかは判断ができない。</p>	<p>2018年度生が3年生になったときの調査で、その点の評価が可能となる。</p>
<p>大学生活に対する意識</p>	<p>(3)</p> <p>いずれの項目もほぼ平均的なところにあるが、50%以上が満足と回答した項目は、12項目中4項目だった。その4項目のうち二つは、C. 授業の全体的な質、K. 大学の経験全般についてだった。逆に</p>	<p>(3)</p> <p>講義そのものや全般的な大学における経験には、一定満足していると言える。初年次生を対象としたプログラムについて、満足度がなぜ低いのかは授業アンケートなどの情報をもとに、改</p>	<p>(3)</p> <p>満足していない原因がわかれば対応策も考えられよう。</p>



	<p>30%以下の回答は3項目あり、B. 初年次生を対象とした教育プログラム、F. 教員と話をする機会、G. 学習支援や個別の学習指導だった。上級生でも、Gのみ30%を下回っていた。</p> <p>(4)</p> <p>「B. 実験室の設備や器具」については、1年生63%、3年生66%が満足と回答しており、これらは、いずれも全体の平均を10%以上上回っている。</p> <p>(7)</p> <p>90%を超える学生が経験したいと答えた項目は、A. 専門分野をしっかりと身につける 94%とB. 専門分野だけでなく、幅広い知識を身につけ視野を広げる 96.5%だった。</p>	<p>善点を探る必要がある。オフイスアワーなどの設定もあるにも関わらず、F. Gの満足度が低いのは、利用に何らかの抵抗があるもしくは、学生は何か違うものを求めている可能性がある。</p> <p>(4)</p> <p>実験実習を重要なものと位置付け整備している理学部の体制が理解されているものと言える。</p> <p>(7)</p> <p>学生の内部質保証にBが含まれるのであれば、必ずしも「講義」(とその予習復習)に縛り付けるのではなく、自由に講義を取りに行き時間を確保できる体制を作ることにも必要なのではないだろうか。</p>	<p>(4)</p> <p>引き続き、適切な整備を進める</p> <p>(7)</p> <p>学生は時間割上の空き時間を利用して興味のある講義を受講し、必ずしも試験は受けなくてもきちんと出席すれば、大学が修了証を渡すというようなシナテムができれば、学生の自主的学習を促すことにもつながる可能性はある。「単位にはならなくても、自己研鑽のための講義を受けるのは当然のこと」というような文化が鹿児島大学の中に醸成されれば、人材育成としても意義あるものとなるのではな</p>
--	---	--	---

いろいろか。

2020年1月

理学部における大学 IR コンソーシアム学生調査結果（平成 30 年度分）の評価・分析

理学部 FD 委員会委員 富安卓滋

## 1. 本学への志望度および高校時代の経験（1年生のみ）

理学部を第一志望とした学生は、47%である。また、現役合格生は、82%である。これらは、ともに、全国および本学の平均的な数値である。

高校3年生当時の学習経験として、「H. 授業以外に興味のあることを自分で勉強した」と回答した学生が68%おり、この割合は、全国や本学の平均値から10%以上高い。自然科学分野で興味を持った現象について勉強していた学生が理学部を志望した可能性がある。

## 2. 大学での学びの実態

### (1) 授業を通じた学習経験

・「A 体験的に学ぶ」1年生 69%、3年生 77%と2/3が該当していた。実験、実習が理学部のカリキュラムとして重要なものと位置付けられている結果と考えられる。一方で、「B 仕事に役立つ知識やスキルを学ぶ」1年生 53%、3年生 52%と半分程度が該当すると回答した。ともに他学部と比較して10%以上低い値であるが、基礎的な知識をしっかりと学び、物事の原理をしっかりと理解することを目指すものであり、自然な結果と考えられる。

・「L 取りたい授業を取れない」と回答した1年生が37%いるのは、平均よりもやや低い程度ではあるが、3割以上の学生が希望する教科を受講できていないことになる。3年生では、22%と減少していたが、学生の学ぶ気持ちを下げってしまう原因の一つともなりかねないので、その実情はもう少し深く調査されても良いのかも知れない。

### (2) 授業内外の学習状況

「I. 授業をつまらなく感じた」学生が、1年生で75.2%、3年生で78.8%いた。全国や本学でも、ほぼ平均的な数値ではあるが、3/4の学生がつまらないと感じているのは、その理由や、どのようなときにそう感じるのかなど情報を集めることも必要かもしれない。

### (3) 週当たりの活動時間

#### A. 授業や実験に出る時間

1年生では、>20時間 54%、16-20時間 22%、3年生では、>20時間 38%、16-20時間 24%だった。3年生では、やや減少傾向が見られたが、進学に必要な単位を取得したことにより、出なければならない講義が少なくなったことも理由の一つと思われる。

る。

B. 授業時間外に、授業課題や準備学習、復習をする時間

1年生では、3-5時間 31%、1-2時間 23%、6-10時間 22%、3年生では、3-5時間 38%、1-2時間 26%、6-10時間 14% となった。3年生では、受講科目が少なくなった場合、結果的に週当たりの授業のための時間外学習時間は短くなる。3時間以上学習する学生の割合は、1年生 53%、3年生 52%で大きな違いはなかった。

C. 授業時間外に、授業に関連しない勉強をする時間

1年生 <1時間 37%、しない 26%、1-2時間 23%、3年生 <1時間 34%、1-2時間 31%、しない 20%となった。1年生と比べて、3年生は、1時間以上勉強する学生が多い。授業のための時間が短くなった分、就職試験の勉強などに取り組み始めたためかも知れない。

D. オフィスアワーなど、授業時間外に教員と面談する時間

1年生 76%、3年生 77% が全くないと回答していた。オフィスアワーは設定されていることから、学生が特に面談の必要を感じていないということかも知れない。また、理学部では、4年生からは、研究室配属されるため、特に実験系の研究室では、ほぼ毎日指導教員と顔をあわせることにはなる。

E. 部活動や同好会に参加する」時間

1年生 3-5時間 22%、1-2時間 18%、0時間 18%、6-10時間 14%、3年生 3-5時間 20%、0時間 33%、1-2時間 12%となった。1年生に比べて、3年生は0時間が多かった。部活動を続けられなかったケースや、11月までで、3年生は引退する部活も少なくないためその影響も考えられる。

F. 大学外でアルバイトや仕事をする時間

1年生 0時間 37%、6-10時間 19%、11-15時間 15%、3年生 6-10時間 19%、11-15時間 17%、0時間 16%、16-20時間 16%。3年生は、1年生に比べて、0時間が半分以下である一方で、16-20時間割合が増加した。就活のための旅費の捻出などもその理由として考えられる。

H. 個人的な趣味活動をする

1年生 3-5時間 23%、11-15時間 23%、1-2時間 15%、3年生 6-10時間 30%、3-5時間 20%、1-2時間 17%。1年生に比べて、3年生では、11-15時間の割合が下がり、6-10時間の割合が高い。趣味活動の時間をバイトや授業以外の勉強に回した結果と解釈できる。

#### (4) 入学後の能力の変化

1年生、3年生ともに、「C. 専門分野や学科の知識」と答えた学生が、86%、91%と最も高い。カリキュラムに沿って行われる教育が身につけているということである。一方で、リーダーシップの能力は、それぞれ、22%、33%であり、3年生の33%は、全国や大学全体としてみても、10%以上低い。リーダーシップは、必ずしも授業で育まれるものではなく、部活動やアルバイトなど授業以外の場面で育まれるものである。専門の教科の中でそのような科目はなく、1年生、3年生で大きな変化がないのは仕方のない部分もある。3年生では、プレゼンテーション能力が57%で、他学部に比べても低いが、4年生で卒業研究を進める中で、必然的に身につけることになると考えられる。

### 3. 英語運用能力の熟達度及び英語学習の状況

#### (1) 1年生の英語運用能力の熟達度

##### 1. 聞く力

入学時から現在で、A1：35-23%（減）、A2：30-34%（増）、B1：25-34%（増）とレベルは上昇している傾向が見られた。

##### 2. 読む力

入学時から現在で、A1：12-10%（減）、A2：17-17%（-）、B1：47-48%（微増）、B2：19-20%（微増）とレベルはわずかではあるが上昇している傾向が見られた。

##### 3. 会話力

入学時から現在で、A1.1：20-12%（減）、A1.2：29-25%（減）、A2.1：21-24%（増）、A2.2：19-29%（大幅増）とレベルは明らかに上昇していた。

##### 4. 表現力

入学時から現在で、A1：24-16%（減）、A2：23-17%（減）、B1：41-53%（増）とレベルは上昇している傾向が見られた。

##### 5. 書く力

入学時から現在で、A1：18-15%（減）、A2：26-23%（減）、B1：38-39%（微増）、B2：12-17%（増）とレベルは上昇している傾向が見られた。

#### (2) 上級生の英語運用能力の熟達度

##### 1. 聞く力

A1：39%、A2：37%、B1：21%は、1年生の入学時と比較して低い。

##### 2. 読む力

A1：12%、A2：32%、B1：46%、B2：8%は、1年生の入学時と比較して低い。

##### 3. 会話力

A1.1：22%、A1.2：34%、A2.1：20%、A2.2：16%は、1年生の入学時と比較して

やや低い。

#### 4. 表現力

A1：39%、A2：19%、B1：37%は、1年生の入学時と比較してやや低い。

#### 5. 書く力

A1：24%、A2：34%、B1：33%、B2：7%は、1年生の入学時と比較して低い。

### (3) 入学時、1年生、上級生の英語運用能力熟達度の比較

1年生は、入学時に比べると、調査までの間に英語運用能力レベルは上昇したと言える。一方で、対象群が異なるので、単純に比較することはできないが、上級生は、2018年度生の入学時のレベルよりも低い傾向が見られた。入学後レベルが低下したということになるのか、もともと高校までの英語指導に変化があったのかは判断ができない。2018年度生が3年生になったときの調査で、その点の評価が可能となろう。

### 5. 大学生活に対する意識

#### (1) 大学への適応感

1年生と3年生を比較すると全ての項目で、3年生が上回っていた。また、50%を下回る回答は見られなかったことから、適応していると言える。

#### (2) 大学生活の充実感

1年生81%、上級生92%が充実していると回答している。

#### (3) 大学教育に対する満足度

1年生は、いずれの項目もほぼ平均的なところにあるが、50%以上が満足と回答した項目は、12項目中4項目だった。その4項目のうち二つは、C. 授業の全体的な質、K. 大学の経験全般についてであり、講義そのものや全般的な大学における経験には、一定満足していると言える。逆に30%以下の回答は3項目あり、B. 初年次生を対象とした教育プログラム、F. 教員と話をする機会、G. 学習支援や個別の学習指導だった。初年次生を対象としたプログラムについて、満足度がなぜ低いのかは授業アンケートなどの情報をもとに、改善点を探る必要がある。オフィスアワーなどの設定もあるにも関わらず、F. Gの満足度が低いのは、利用に何らかの抵抗があるもしくは、学生は何か違うものを求めている可能性もある。満足していない原因がわかれば対応策も考えられよう。

上級生でも、Gのみ30%を下回っていたことから、オフィスアワーでは満たされない何かがあると考えられる。一方、30%を超えていたが、平均から10%以上下回ったのは、E. 将来の仕事と授業内容の結びつき(37%)である。前にも述べたが、基礎的な学問を習得することに主眼が置かれていることから、この内容の講義はほとんどない。4年生に進学して、卒業研究を遂行する中で、研究の延長線上に仕事との結びつきを実感するケースは少なく

ない。3年生でのアンケートでは、学部の特性として仕方のない結果と言える。A. 所属学科の講義 61%、C. 授業の全体的な質 59%、と、講義では2/3の学生が満足しており、K. 大学での経験全般について、72%の学生が満足と回答していた。

#### (4) 大学設備に対する満足度

「B. 実験室の設備や器具」については、1年生 63%、3年生 66%が満足と回答しており、これらは、いずれも全体の平均を10%以上上回っている。実験実習を重要なものと位置付け整備している理学部の体制が理解されているものと言える。

#### (5) 学部卒業後の予定進路

1年生では、就職 39%、進学 38%、わからない 21%、3年生では、就職 51%、進学 37%、わからない 12%だった。比較はできないが、単純に考えると、1年生の時には、わからない（進学か就職か決めかねていた）と回答した学生が、3年生では、就職を選んだという見方ができる。大学院に進学することのメリット（魅力）などを折に触れて伝える必要があるかも知れない。

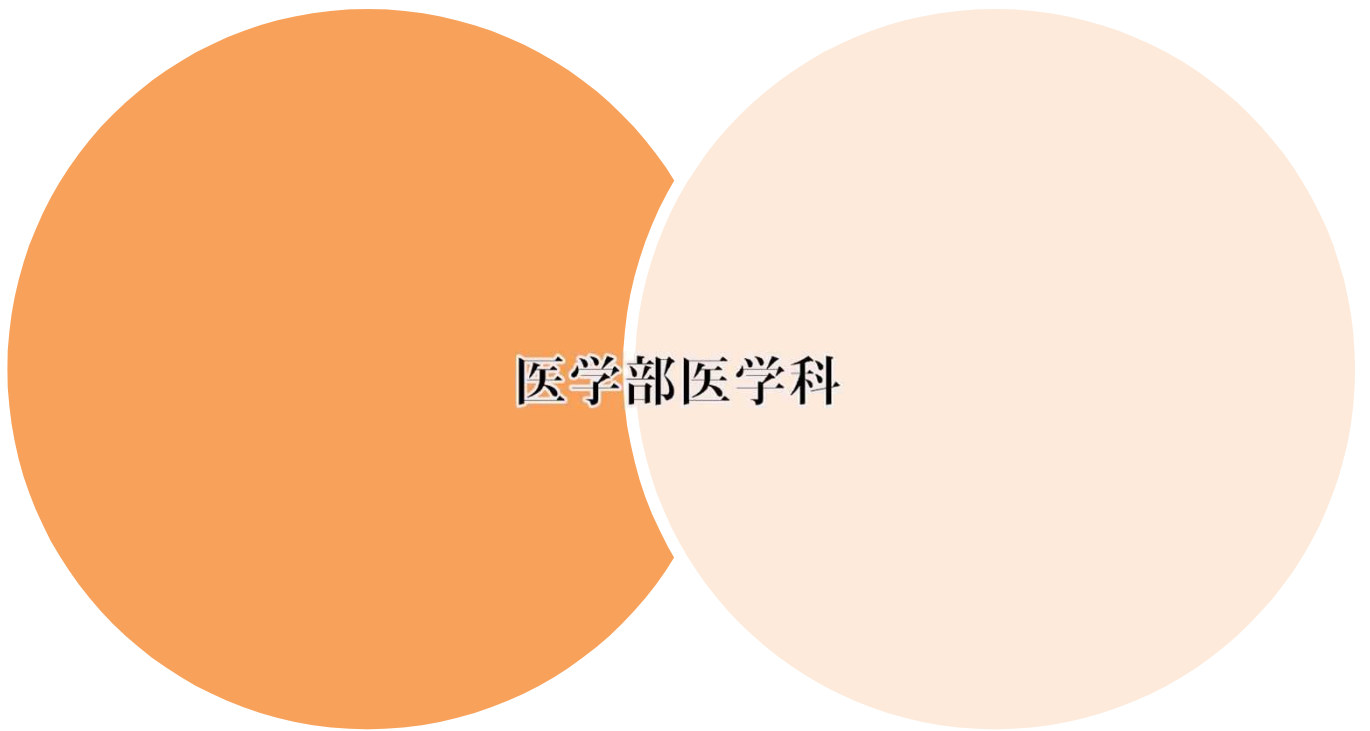
#### (6) 将来展望の有無

1年生では、見通しを持っている学生が、75%、3年生では、81%だった。ほぼ平均的な数値だった。3年次で8割の学生が見通しを持っている。

#### (7) 卒業後に備えて大学在学中に経験したいこと（上級生のみ）

90%を超える学生が経験したいと答えた項目は、A. 専門分野をしっかりと身につける 94%とB. 専門分野だけでなく、幅広い知識を身につけ視野を広げる 96.5%だった。学生の内部質保証にBが含まれるのであれば、必ずしも「講義」（とその予習復習）に縛り付けるのではなく、自由に講義を取りに行く時間を確保できる体制を作ることも必要なのではないだろうか。単位の上限が設定されている中で、受講できる科目は厳選されているので、時間割上は、空き時間ができてくる。学生はその時間を利用して興味のある講義を受講し、必ずしも試験は受けなくてもきちんと出席すれば、大学が修了証を渡すというようなシステムができれば、学生の自主的学習を促すことにもつながる可能性はある。もちろん講義担当教員の負担が著しく増加することが無いようにすることは前提となるが、そのような「単位にはならなくても、自己研鑽のための講義を半期に一つくらい受けるのは当然のこと」というような文化が鹿児島大学の中に醸成されれば、社会を担う人材を育成する大学として意義あるものとなるのではないだろうか。

以上



医学部医学科



# 令和元年度医学部医学科 FD 活動報告

## 1. はじめに

医学部医学科では、1)『学生による授業評価アンケートの実施と、アンケート結果のフィードバックに対する教員からの意見収集』、2)『教員の国内研修』、3)『学内・学外講師による医学教育講演会及び研修会』を実施した。

3)ではとくに、一般社団法人 日本医学教育評価機構（以下、JACME）による医学教育分野別評価受審の結果を受けて、今後の医学教育の改善に資するために、改善指摘事項に挙げられた「診療参加型臨床実習」に関連する医学教育研修会を実施した。上記3つの活動計画に基づき、中期目標及び年度計画に掲げられた「専任教員のうち75%以上のFD活動参加」の達成を目標に定め、令和元年度のFD活動を行ったので報告する。

## 2-1. 学生による授業評価アンケート

本学科では全授業科目（実習を含む）を対象とした学生による授業評価アンケートを平成23年度から実施しており、令和元年度も同様に実施した。まず1年生から4年生までの専門教育科目53科目については、学習と授業に対するアンケート用紙を学務課医学教務係から科目責任者に配布し、科目責任者が試験時（試験を実施しない科目については授業最終日）にアンケートを実施した。

1年生から4年生までのアンケートは、学生の学習の実態とカリキュラム、教員の指導方法について具体的な改善点を明らかにするために実施し、学生自身の学習に対する自己評価（4項目）、科目について（8項目）、講師の指導について（5項目）、全体評価（1項目）の各項目について5段階の評定尺度で回答し、さらに自由記述欄に自由な意見を記載してもらった。なお、結果は医学教務係が速やかに集計した後、結果及び自由記述内容を科目責任者に報告した。

次に5年生の臨床実習では、実習開始前のオリエンテーション時にアンケートの目的や内容、実施方法を説明した後、それぞれの診療科での実習について、2週間ごとの実習終了時に授業評価アンケートを実施した。また、6年生の選択実習では、約4ヵ月間の実習の後に各自が選択をした実習先（学内、鹿児島県内、海外）について、6年次OSCE（Objective Structured Clinical Examination：客観的臨床能力試験）終了時にアンケートを実施した。

5年生から6年生までのアンケートは、自身の学習に対する評価（6項目）、

実習計画・実施について（5項目）、指導について（1項目）、全体評価（1項目）の各項目について3～11段階での評定尺度における回答を集計し、自由記述欄に自由な意見を記載してもらった。

なお、アンケート用紙は記名式で、学生の記載後は学生自身によって学務課医学教務係に届けられ、教員や指導医の目に触れることが無い状況で実施した。

## 2-2. アンケート結果

全てのアンケート結果は医学部 FD 委員会医学科部会、医学部教務委員会医学科部会、医学科会議にそれぞれ報告した。以下にアンケート結果の概要を記載する。

1年生から4年生までの専門教育科目全 53 科目中 50 科目から計 3916 枚（平均 78 枚/科目）、5年生の臨床実習では前期（3月下旬から9月中旬）1035 枚、後期（9月下旬から翌3月上旬）1580 枚の計 2615 枚（平均 109 枚/診療科）、6年生の選択実習では 348 枚の回答が得られた。

アンケートの自身の学習に対する評価という項目について、1年生から4年生までの専門教育科目（【別表1】参照）においては、評価平均が 3.68～3.96 と自主的な学習が十分に行われているとは言えない状況であるが、5年生の臨床実習（【別表2】参照）では評価平均が 4.04～4.22、6年生の選択実習（【別表3】参照）では評価平均が 4.20～4.33 と学年が進むにつれて自主的な学習に対する意識の向上が見受けられる。

また、臨床実習においては診療参加型実習の比率を増やしていくことが求められている中、学生の回答における診療参加型の割合は5年生の臨床実習では平成 30 年度が 37.2%に対して令和元年度は 36.1%とわずかに減少し、6年生の選択実習では平成 30 年度の 44.0%に対して令和元年度においても 44.0%と横ばいで推移している。今後も引き続き、診療参加型実習推進のための取り組みが重要と考えられる。

【別表1】授業評価アンケート集計結果(1年生～4年生)

自身の学習に対する評価	1 全く行わ なかった	2	3 どちらとも いえない	4	5 非常に 行った	該当なし	評価平均	SD
積極的に学習した(質問・予習・復習)	0.6	2.4	23.0	47.6	20.5		3.68	0.64
教科書や参考文献で広く、深く学習した	1.4	6.6	26.9	40.9	18.4		3.73	0.60
原理の理解や臨床への応用を考えながら学習した	0.4	3.0	23.9	46.1	20.8		3.96	0.73
グループ学習ではグループのために貢献した	0.7	2.1	23.9	41.5	23.1	15.4	3.89	0.70
科目について	1 全くそう 思わない	2	3 どちらとも いえない	4	5 非常に そう思う		評価平均	SD
シラバスには必要な情報がわかりやすく記載されていた	0.5	2.1	28.8	41.0	21.8		3.82	0.79
学習内容は有用である	0.5	1.8	15.5	44.9	31.6		4.17	0.75
効果的な学習方法が用いられた	0.4	2.6	21.3	44.3	25.7		3.98	0.80
他の授業との関連や発展がよく理解できた	0.4	2.8	21.2	43.7	26.0		4.01	0.77
科目の教育目標に合った評価(範囲、内容、レベル)だった	0.4	2.2	21.1	45.2	25.4		3.99	0.79
学習した領域への興味、関心が高まった	1.0	2.7	19.5	39.2	26.0		4.08	0.78
難易度は	1 難しい	2	3 適切	4	5 易しい		評価平均	SD
	8.5	19.8	56.7	9.0	2.2		2.85	0.72
時間は	1 長い	2	3 適切	4	5 短い		評価平均	SD
	2.3	4.7	69.5	15.8	4.2		3.11	0.63
講師の指導について	1 全くそう 思わない	2	3 どちらとも いえない	4	5 非常に そう思う	該当なし	評価平均	SD
講義・実習等がよく準備されていた	1.0	2.4	16.8	45.6	28.9		4.02	0.81
理解を促すための工夫がされていた	1.1	3.0	18.2	44.0	28.2		4.00	0.83
質問を促し、積極的に質問に応じてくれた	0.9	2.1	20.7	42.1	28.9		4.06	0.78
学習領域の講師として適切であった	1.0	1.7	15.5	43.9	32.6		4.17	0.76
授業を担当した複数の講師は連携して効率的に指導した	1.3	3.0	19.4	41.5	28.2	4.2	3.96	0.91
全体評価	1 全くそう 思わない	2	3 どちらとも いえない	4	5 非常に そう思う		評価平均	SD
この授業を来年度の学生にも勧めたいと思う	1.4	2.0	20.4	41.1	29.9		4.04	0.81

【別表2】授業評価アンケート集計結果(5年生)

自身の学習に対する評価	1 全く行わ なかった	2	3 どちらとも いえない	4	5 非常に 行った		評価平均	SD
積極的に実習した	0.0%	1.2%	14.1%	56.2%	28.5%		4.12	0.68
実習に関連する項目を自主学習した	0.0%	0.9%	13.9%	58.2%	27.0%		4.11	0.66
診療のルールに従って行動した	0.1%	0.4%	12.5%	53.1%	33.9%		4.20	0.67
患者・スタッフに医学生として礼儀正しく振る舞った	0.1%	0.6%	12.1%	51.8%	35.4%		4.22	0.67
グループメンバーを助け、協働して学習した	0.1%	1.1%	20.2%	52.1%	26.6%		4.04	0.72
実習計画・実施について							平均	SD
主な実習方法は								
診療参加型							36.1%	2.12
模擬診療型							18.9%	1.49
見学・講義							45.3%	2.31
指導について	1 全くそう 思わない	2	3 どちらとも いえない	4	5 非常に そう思う		評価平均	SD
指導医はあなたの学習を熱心に支援した	0.3%	0.3%	8.3%	31.3%	59.7%		4.50	0.69
全体評価	1 全くそう 思わない	2	3 どちらとも いえない	4	5 非常に そう思う		評価平均	SD
この授業を来年度の学生にも勧めたいと思う	0.4%	0.8%	8.5%	32.3%	58.0%		4.47	0.72

【別表3】授業評価アンケート集計結果(6年生)

自身の学習に対する評価	1 全く行わ なかった	2	3 どちらとも いえない	4	5 非常に 行った		評価平均	SD
積極的に実習した	0.0%	0.3%	10.1%	49.6%	40.1%		4.29	0.65
実習に関連する項目を自主学習した	0.0%	0.6%	8.9%	49.0%	41.5%		4.31	0.65
診療のルールに従って行動した	0.0%	0.6%	9.5%	46.7%	43.2%		4.33	0.67
患者・スタッフに医学生として礼儀正しく振る舞った	0.0%	0.6%	9.2%	48.0%	42.2%		4.32	0.66
グループメンバーを助け、協働して学習した	0.3%	1.4%	13.9%	46.7%	37.7%		4.20	0.75
実習計画・実施について							平均	SD
主な実習方法は								
診療参加型							44.0%	2.76
模擬診療型							19.7%	1.84
見学・講義							35.9%	2.79
指導について	1 全くそう 思わない	2	3 どちらとも いえない	4	5 非常に そう思う		評価平均	SD
指導医はあなたの学習を熱心に支援した	0.0%	1.2%	4.6%	30.1%	64.1%		4.57	0.64
全体評価	1 全くそう 思わない	2	3 どちらとも いえない	4	5 非常に そう思う		評価平均	SD
この授業を来年度の学生にも勧めたいと思う	0.0%	0.9%	4.7%	28.9%	65.6%		4.59	0.62

### 2-3. アンケート結果のフィードバックに対する教員からの意見収集

以前から授業(実習)評価アンケートの結果を各担当教員にフィードバックしていたが、平成28年度からそのアンケート結果等に対する各担当教員からの意見収集を開始した。

実施方法については、授業(実習)評価アンケート結果とともに意見収集のための様式をメールで送付し、各科目の責任者及びコースコーディネーターが担当教員の意見を取りまとめた上で、様式に記入し、学務課医学教務係に提出するという形で行った。

様式については、授業評価アンケート集計結果にみられる学生の要望・傾向等の分析及び評価について、学生の要望・傾向等に対する授業科目への反映について、その他(授業評価アンケートに対するご意見など)という3項目を用意し、それぞれに対する意見を記入してもらった。

意見収集の結果として、32科目延べ66名の教員から回答が得られた。学生の意見等を今後の授業に反映させる必要があるという意見が大多数であり、PDCAサイクルの活性化という当初の目的が十分に達成されたと考えられる。今後は教員からの意見を踏まえ、必要とされる教育的素養について議論を行い、それらを改善できるようなFD研修会の開催を検討していく予定である。

### 3. 教職員の国内研修

国内研修については、医学教育や診療参加型臨床実習に関連する研修等に教職員が参加することとした。

これを受け、令和元年度は1名の教職員が令和2年1月25日～26日に岐阜大学で開催された「第75回医学教育セミナーとワークショップ」に参加した。このワークショップへの参加によって、Institutional Research（IR）についての必要性・効果を学ぶとともに、情報収集を十分に行うことができた。

#### 4. 学内・学外講師による医学教育講演会

##### 4-1 『Up To Date 活用術』

日時：令和元年5月29日（水）17：00～18：00

主催：医学部FD委員会医学科部会

会場：臨床講義等2階 第4講義室

講師：宮森 大輔（広島大学病院 総合内科・総合診療科 助教）

対象者：本学の教職員・研修医・学生

参加者：33名

目標：UpToDate を実際に利用しながら説明してもらうことで、UpToDate の理解を深め、診療参加型臨床実習への応用を図る。

総評：UpToDate の概要・機能・検索方法を学んだ。UpToDate を活用することで、最新の有用な情報を医学教育の場に役立てられることがわかり、大変有意義な研修となった。



##### 4-2 『manaba 利用講習会』

日時：令和元年7月18日（木）16：00～17：00

主催：医学部FD委員会医学科部会

会場：共通教育棟6階マルチメディア情報演習室

講師：森 裕生

（鹿児島大学 総合教育機構高等教育研究開発センター 助教）

対象者：本学の教職員・研修医

参加者：22名

目標：今年度から桜ヶ丘キャンパスで導入される、学習管理システムmanaba の導入に伴い、manaba の使用方法について習得する。

総 評：manaba の使用方法を学ぶことで、医学科の授業を効率よく運営できると推測された。また、respon 等を活用して授業に役立てられることがわかり、大変有意義な研修となった。



#### 4-3 『医学科新任教員 FD 研修会』

日 時：令和元年 11 月 5 日（火）15：00～15：45

令和元年 11 月 26 日（火）15：00～16：00

主 催：医学部 FD 委員会医学科部会

会 場：基礎講義実習棟 第 1 講義室

講 師：河野 嘉文（医学部長）

橋口 照人（医学部教務委員会医学科部会長）

田川 まさみ（医歯学教育開発センター長）

西 順一郎（FD 委員会医学科部会長）

対象者：医学部医学科の教職員

参加者：31 名

目 標：鹿児島大学医学部医学科の教育目標、教育理念、カリキュラムを理解し、本学の教員として求められる教育への関わり、責務を認識する。

総 評：平成 30 年度 11 月以降・令和元年度に医学科教員として採用された教員を対象に教育理念やカリキュラム、鹿児島大学の医学教育の特色と課題について講話をおこなった。また、グループワークを実施し、自由に意見交換することで、上記目標の達成に大変有意義であった。

#### 4-4 『e-ポートフォリオ利用講習会』

日 時：令和元年 12 月 18 日（水）15：30～16：10

主 催：医学部 FD 委員会医学科部会

会 場：共通教育棟 4 階 401 講義室

講 師：田川 まさみ（医歯学教育開発センター長）

対象者：本学の教職員

参加者：15名

目 標：学習者の教育到達目標と達成状況を確認し成績入力を行うシステムである e-ポートフォリオの使用方法を習得し、教育内容・方法の改善に資する。

総 評： e-ポートフォリオでは学生が学習に対する振り返りを入力し、教員はフィードバックを随時入力することができる。アウトカム基盤型教育を行っている医学科では、e-ポートフォリオを活用することで、教育に役立てられることがわかり、大変有意義な研修となった。

#### 4-5 『入学試験面接評価者講習会』

日 時：令和元年 12 月 24 日（火） 15：00～17：00

主 催：医学部 FD 委員会医学科部会，医学部入試委員会医学科部会

会 場：保健学科会議室

講 師：河野 嘉文（医学部長）

柴田 昌宏（入試委員会医学科部会長）

田川 まさみ（医歯学教育開発センター長）

対象者：医学科入学試験面接担当予定教員

参加者：26名

目 標：本学科のアドミッションポリシーに基づく評価基準に従った公平で信頼性の高い面接評価を行いながら、受験生の能力を引き出す方法について、講義やグループワークで習得する。

総 評：面接評価者にとって面接の進め方や評価基準の標準化がより重要となる一方で、面接質問事項は多様化が求められている。今回の講習会は、受験対策を行ってきた学生について、「準備した答え」以上を聞き出し、受験生の資質・能力を明らかにするためにはどのように質問の工夫を行えばよいかを考えるグループワークを行った。次年度以降も講習会を継続して実施していくことが望ましい。



#### 4-6 『学生に飽きさせない講義を目指して』『学生の学習態度を考える』

日 時：令和2年2月17日（月）16：30～17：30

主 催：医学部 FD 委員会医学科部会

会 場：臨床講義棟2階第4講義室

講 師：林 敬人（法医学分野 教授）

田川 まさみ（医歯学教育開発センター長）

対象者：本学の教職員・研修医

参加者：33名

目 標：診療参加型実習の具体的内容や進め方について、知識を習得し、教育内容・方法の改善に資する。

総 評：昨年度の医学科ベストティーチャー賞受賞者である林教授に、授業で実践している工夫について講演してもらい、学生に飽きさせることなく集中が持続するような講義の実践方法を学んだ。その後、医歯学教育開発センター長の田川教授が、学習の自律性について講演し、学生の学びを積極的に支援していくことの必要性を学んだ。今後の講義内容や医学生支援を考えるうえで大変有意義であった。





#### 4-7 『医学生の医行為に関する最新情報』

日 時：令和2年3月9日（月）16：00～17：00

主 催：医学部 FD 委員会医学科部会

会 場：臨床講義棟2階第4講義室

講 師：鈴木 康之（岐阜大学 医学教育開発研究センター 教授）

対象者：本学の教職員・研修医・学生

参加者：29名

目 標：医学生の医行為について最新の知見を得ることにより、教育内容・方法の改善に資する。

総 評：医学生の医行為については現在内容の再検討が進められており、その検討内容の最新情報や、診療参加型実習、指導医の役割と自己評価に関する講演があった。臨床実習に携わる教員が多く参加し、臨床実習を実践していくための知識の習得に繋がった。臨床実習についての理解を深め、今後の学生の医行為を考えるうえで大変有意義な研修会となった。



#### 5. おわりに

令和元年度は前述の3つの活動計画に基づいて本学科のFD活動を行ったが、最終的な専任教員の参加率は76.8%（医学科所属教員数142人中109人参加）となり、目標に定めた「専任教員のうち75%以上のFD活動参加」は達成された。令和2年度に向けてはJACMEによる医学教育分野別評価の評価を受けて、引き続き医学教育の体制を見直し、教育体制をより充実させるようなFD活動を行っていくことが、本学科の今後の発展に非常に重要である。

また、本学科の教育が卒業後の学習等にどのような影響を与えているかを考察し、カリキュラム改善の一助となるよう卒業生アンケートを実施しているが、回収率が低く十分な評価ができていないため、データ収集方法を改善する必要がある。今後もFD活動を通じて、本学科の大学教育及び医学教育の現状を分析し、継続的な改良につなげていくことで学生の教育環境改善に貢献していく予定である。

大学 IR コンソーシアム学生調査結果（平成 30 年度実施分）の評価・分析について

医学部(医学科)FD 委員 西 順一郎

	注目した知見	知見に対する解釈	改善・対応策
【1年生のみ】 本学への志望度及び高校時代の経験	高校時代に授業中質問をまったくしなかった学生が 31.0%みられた。	受動的教育に慣れている実態がみられる。	学生の質問をうながす講義方法が求められる。
大学での学びの実態	1年生では、授業の全体的な質に、満足している学生が 40.4%にすぎなかった。上級生では、授業をつまらなく感じた学生が 50%みられた。	授業内容に学生が十分満足していない実態がみられる。	アクティブラーニングなど主体的な学習をうながし、講義内容に工夫をこらす努力が必要である。
英語運用能力の熟達度及び英語学習の状況	入学時と比べて、会話力が 1 年生ではあまり伸びていなかったが、上級生では格段に伸びていた。	英会話能力の向上がみられており、自主学習の成果がみられている。	TOEFL など外部での英語検定受験を積極的に促し、さらに英語学習への意欲を高めることが重要である。
大学生活に対する意識	1 週間あたりの読書時間がゼロの学生が 26%、1 時間未満が 22%だった。	大学生で読書をしていない学生がいること、スマートフォンや PC による情報収集に偏っている実態がうかがえる。	読書の楽しみを見いだせるような機会を作る工夫が必要である。



医学部保健学科・  
保健学研究科

# 令和元年度 医学部保健学科・保健学研究科 FD 活動報告

## 医学部保健学科 FD 活動

### はじめに

令和元年度医学部 FD 委員会保健学科部会の活動として以下を実施した。

- 1、学生による授業評価アンケート及び学生アンケート結果に対する教員のフィードバックアンケート
  - 2、授業評価アンケート実施方法の改訂
  - 3、FD 講演会の実施
    - a) 多面的・総合的に評価する入学者選抜に向けた面接に関する講演会
    - b) 学内または学外講師による保健学教育講演会または研修会（理学療法学専攻）
    - c) 学内または学外講師による保健学教育講演会または研修会（作業療法学専攻）
  - 4、ベストティーチャー賞推薦のための学生アンケート
  - 5、FD 活動への教員参加状況の把握
- 以下にその概略を述べる。

### 1、学生による授業評価及び学生アンケート結果に対する教員のフィードバック

#### クアンケート

##### 1) 方法

実習、演習と非常勤講師による授業を除く全ての授業科目を対象に、学生による授業評価を実施した。学生による授業評価は各授業の最終後に学生に周知し、manaba で回答してもらった。アンケート結果は、学務課で取りまとめることとし、回答学生が教員には特定されないことを十分に周知したうえで実施した。授業評価のアンケート項目以下の通りである(表 1)。

表 1. 令和元年度授業評価アンケート

質問内容	5	4	3	2	1
出席状況は良好だった。	非常に 良好だった	かなり 良好だった	良好だった	良くなかった	非常に 良くなかった
授業に意欲的に取り組む努力をした。	非常に努力した	かなり努力した	努力した	あまり 努力しなかった	努力しなかった
授業の予習あるいは復習をした。	非常に 予習復習をした	かなり 予習復習をした	予習復習を した	あまり 予習復習を しなかった	予習復習を しなかった
授業科目にふさわしい内容であった。	非常に ふさわしかった	かなり ふさわしかった	ふさわしかった	あまり ふさわしく なかった	ふさわしく なかった
シラバスの内容は明確であった。	非常に 明確であった	かなり 明確であった	明確であった	あまり 明確でなかった	明確でなかった
授業内容はシラバスに 沿ったものであった。	非常に 沿っていた	かなり 沿っていた	沿っていた	あまり 沿って いなかった	沿って いなかった
授業の難易度は以下の通りであった。	丁度よかった	やや 簡単であった	簡単であった	かなり 難しかった	非常に 難しかった
この授業を他の学生にも 勧めたいと思う。	非常にそう思う	かなりそう思う	そう思う	あまり思わない	思わない
この授業は自分にとって 価値があった。	非常にそう思う	かなりそう思う	そう思う	あまり思わない	思わない
授業が一方的な知識の伝達だけでな く、双方向（アクティブ・ラーニング の導入など）に行われた。	非常にそう思う	かなりそう思う	そう思う	あまり思わない	思わない
シラバスに記載されていた学習目標を 達成できましたか	非常にそう思う	かなりそう思う	そう思う	あまり思わない	思わない

## 2) 学生による授業評価アンケートの結果

前期開講分は70科目に依頼し、70科目からアンケートを回収した(科目回収率100%)。後期開講分は65科目に依頼し、65科目から回答を回収し得た(回収率100%)。前期開講、後期開講別にアンケートの中の各項目について評価点(1～5)の平均値と標準偏差を求めた。点数が高いほど評価が良いことを示している。令和元年度前期開講科目と後期開講科目の平均点を表1に示す。

表 2. 平成 30 年度学生による授業評価の前期・後期別の点数の比較(平均点)

質問項目	前期開講科目 (70 科目)		後期開講科目 (65 科目)	
	平均	標準 偏差	平均	標準 偏差
出席状況は良好だった。	4.68	0.22	4.67	0.22
授業に意欲的に取り組む努力をした。	4.15	0.28	4.16	0.36
授業の予習あるいは復習をした。	3.31	0.50	3.12	0.62
授業科目にふさわしい内容であった。	4.25	0.32	4.35	0.36
シラバスの内容は明確であった。	4.08	0.34	4.25	0.34
授業内容はシラバスに沿ったものであった。	4.07	0.34	4.25	0.37
授業の難易度は以下の通りであった。	4.27	0.49	4.27	0.56
この授業を他の学生にも勧めたいと思う。	4.01	0.43	4.18	0.45
この授業は自分にとって価値があった。	4.16	0.35	4.28	0.40
授業が一方的な知識の伝達だけでなく、 双方向(アクティブ・ラーニングの導入など)に行われた。	3.91	0.41	3.79	0.52
シラバスに記載されていた学習目標を達成できましたか	3.83	0.29	3.95	0.34

\*各質問項目に対して 1 点から 5 点の 5 段階で評価

### 3) 結果の解釈

#### ① 学生自身の自己評価

授業への出席状況、意欲的に取り組む努力、予習・復習の実施状況、学習目標の達成度など、学生自身の自己評価については、前期科目と後期科目で顕著な差異は認められなかった。出席状況(4.7点)や意欲的に取り組む姿勢(4.2点)に関しては比較的到自己評価が高い一方で、予習・復習の実施状況(3.1~3.3点)は自己評価が低く、学習目標の到達度も4点を下回った。

#### ② 授業に関する評価

授業科目の内容に関する項目として、「授業科目にふさわしい内容であった」、「シラバスの内容は明確であった」、「この授業を他の学生にも勧めたい」、「この授業は自分にとって価値があった」については、いずれも4点以上の評価であり、一定の授業の質が確保されていると考えられた。

#### ③ アクティブ・ラーニングに関する評価

全般的な授業評価は良好であったが、「授業が一方的な知識の伝達だけでなく、双方向(アクティブ・ラーニングの導入など)に行われた」という項目に関しては、前期(3.9点)、後期(3.8点)ともに4点を下回り、アクティブ・ラーニングの導入が積極ではない科目も伺われた。自由記載アンケート

においても、「スライドを流しただけだった」、「講義形式のみだった」、「生徒が発言する機会があまりなかった」との意見もあり、授業科目の学習目標にも依存すると思われるが、アクティブ・ラーニングの導入を今後も積極的に進めていく必要があると考えられた。

#### 4) 学生授業評価アンケート集計結果の教員へのフィードバックに対する授業担当教員からの意見

前期の回収率は70科目中43科目(科目回収率61.4%)、後期の回収率は65科目中20科目(科目回収率30.8%)であった。今年度から実施方法を紙面からmanabaに移行したこともあり、教員フィードバックの周知が不十分であり、実施時期についても配慮が必要と感じられた。教員フィードバック回収率の向上に向けて、これらの点を改善する必要があると考えられた。

教員からのフィードバックアンケートは各教員が担当する授業科目に対する学生の授業評価アンケートを、教員が自己評価するものである。評価の項目は、学生の自身に対する学習の評価、科目に対する学生からの評価、講師に対する学生からの評価、全体評価の4項目である。学生アンケートの自由記述には、多くの教員が学生コメントに対する改善策を考えており、教員にとって貴重なフィードバックとなっていると思われた。

## 2、授業評価アンケート実施方法の改訂

令和元年度での授業評価アンケートは、これまで実施方法から見直しを図った。平成30年度までは、学生からの授業評価アンケート、ならびに授業評価アンケート結果の教員フィードバックに対する教員からのアンケート(以下、教員フィードバックアンケート)は紙媒体で実施してきたが、令和元年度よりmanabaを活用した。授業評価アンケートならびに教員フィードバックアンケートの回収率をまとめると、以下のような結果となり、アンケートの回収率を向上させることが課題として考えられ、来年度以降の対策を検討する。

### <平成30年度>

#### ・前期授業

授業評価アンケート回収率: 97%(科目平均)

教員フィードバックアンケートの科目回収率:66%

#### ・後期授業

授業評価アンケート回収率: 82%(科目平均)

教員フィードバックアンケートの科目回収率:67%

### <令和元年度>

#### ・前期授業

授業評価アンケート回収率:45%(科目平均)

教員フィードバックアンケートの科目回収率:61%

#### ・後期授業

授業評価アンケート回収率:35%(科目平均)

教員フィードバックアンケートの科目回収率:31%

### 3、FD 講演会の実施

#### a) 多面的・総合的に評価する入学者選抜に向けた面接に関する講演会

講演会名:保健学科入学者選抜における面接試験を考える

講師:講師は鹿児島大学大学院医歯学総合研究科・医歯学教育開発センター・社会・行動医学 医歯学教育学講座・教授 田川 まさみ 先生

日時:令和元年 12 月 19 日(木) 18:00~19:00

場所:医学部共通教育棟 4 階 401 講義室

参加者:保健学科教員の 61%(30 名/40 名) が参加した。

面接の際の評価の視点、評価方法等を共有化し、より多面的・総合的に評価できることを目的に 2019 年 12 月 19 日(木)18:00-19:00 に「保健学科入学者選抜における面接試験を考える」のタイトルで鹿児島大学医学部保健学科 2019 年度第1回FD講演会を実施しました(主催:鹿児島大学医学部FD委員会保健学科部会)。講師は鹿児島大学大学院医歯学総合研究科・医歯学教育開発センター・社会・行動医学 医歯学教育学講座の田川 まさみ 教授にお願いした。テーマを絞ってワークショップ形式の講演会で参加者に面接について考えさせる講演会であった。面接の標準化のためのルーブリックの意義についても理解できた。参加者は看護学専攻 23/30=76%、理学療法学専攻 4/10=40%、作業療法学専攻 3/9=33%、全体では 30/40=61%であった。

鹿児島大学  
医学部保健学科  
Kagoshima University Faculty of Medicine School of Health Sciences


## 鹿児島大学医学部保健学科 2019年度第1回FD講演会

タイトル

### 「保健学科入学者選抜における 面接試験を考える」

講師 田川 まさみ 教授  
鹿児島大学大学院医歯学総合研究科  
医歯学教育開発センター  
社会・行動医学 医歯学教育学講座

面接の際の評価の視点、評価方法等を共有化し、より多面的・総合的に評価できることを目的に本講演会を開催します。多くの教員のご参加をお待ちしています。



◆日時: **2019年12月19日(木)** 18:00-19:00  
◆会場: **401講義室**  
◆主催:鹿児島大学医学部FD委員会保健学科部会  
◆お問合せ:医歯学総合研究科等学務課保健学教務係 (内線:6724)  
◆参加申込み:事前の参加申込みは必要ありません。



b) 学内または学外講師による保健学教育講演会または研修会(理学療法学専攻)

講演会名:①大学での臨床実習教育体制における地域臨床実習の在り方と取組例

②対話的学習を重視した総合臨床実習教育の取り組みについて

講師:①樋口 由美 氏(大阪府立大学大学院 総合リハビリテーション学研究所 教授)

②講師 福迫 剛氏(鹿児島赤十字病院リハビリテーション課第一課長)


日時:令和元年 11 月 29 日(金)13:00-15:30

場所:鹿児島大学桜ヶ丘キャンパス共通教育棟 503 講義室

共催:鹿児島大学医学部保健学科理学療法学専攻

参加者:臨床実習指導者、学内教員、外部希望者の計 41 名

理学療法士作業療法士学校養成施設指定規則の一部改正に伴い、通所リハビリテーションまたは訪問リハビリテーションにおける地域臨床実習を行うことが義務付けられた。これまでの病院等における臨床実習では主に回復期のリハビリテーションを習得するが、地域臨床実習では生活期の理学療法の実際を学ぶ実習であり、これまでの臨床実習とは異なる視点での教育・指導が必要である。樋口氏の講演では、大阪府立大学で実践されている地域臨床実習の内容や、学内教育、卒後教育についてご説明いただいた。また、理学療法士の臨床実習では臨床・クラークシップの導入が進められているが、施設によりその取り組みにばらつきがある。福迫氏のご講演では、指導者-学生間、学生間の対話の中で思考過程を学ぶ機会を設けることの重要性、およびその具体的な進め方についてご講義いただいた。臨床実習における学習効果を高めるためには、学内での学習と学外の臨床実習に関わる指導者が共通した理解で、連携を図りながら教育に携わる必要がある。そのため、保健学科部会におけるFD活動の一環として、本講演会を企画した。今回の講演会は、教員と臨床実習指導者で共通認識を醸成する機会となった。



鹿児島大学  
医学部保健学科

**鹿児島大学医学部FD委員会保健学科部会主催**  
**2019年度第2回FD講演会**

**演題①** 「大学での臨床実習教育体制における地域臨床実習の在り方と取組例」

講師：樋口 由美氏  
(大阪府立大学大学院 総合リハビリテーション学研究所教授)

**演題②** 「対話的学習を重視した総合臨床実習教育の取り組みについて」

講師：福迫 剛氏  
(日本赤十字社 鹿児島赤十字病院リハビリテーション課第一課長)

令和2年度からの理学療法士・作業療法士学校養成施設指定規則の改正に伴い、カリキュラムの改定や実習指導の在り方を再考する必要があります。  
特に実習指導における教育の質向上に努めるべく、学内外における臨床実習指導に関わる指導者間の情報の共有や教育指導方針の統制が課題であることから、臨床実習教育に携わる方を講師に招き、教員・臨床実習指導者を対象に現場での臨床実習指導の在り方や最新の動向などについて講演します。

◆日 程：2019年 **11月29日** (金) 13:00～ 受付  
13:30～15:00 演題①  
15:00～15:30 演題②

◆会 場：桜ヶ丘キャンパス 桜ヶ丘共通棟503講義室(5階)

◆主 催：鹿児島大学医学部FD委員会保健学科部会

◆お問 合 せ：医歯学総合研究科等学務課保健学教務係 (内線：6724)  
isggh@kuas.kagoshima-u.ac.jp

◆参加申込み：事前の参加申込みは必要ありません。

c) 学内または学外講師による保健学教育講演会または研修会(作業療法学専攻)

講演会名:地域作業療法～地域の魅力と活動の実際～

講師: 古谷 正登 氏(三田尻訪問看護ステーション, 作業療法士 (鹿大保健学科 5 期生))

日時: 令和 2 年 1 月 29 日(水)11:00～12:30

場所: 鹿児島大学桜ヶ丘キャンパス保健学科研究棟 601 講義室

共催: 鹿児島大学医学部保健学科作業療法学専攻, 作業療法の魅力を伝える研修会

参加者:保健学科教員 7 名、学生 33 名の計 40 名

保健学科作業療法学専攻では、学生が主体となって企画するアクティブ・ラーニングの一つとして「作業療法の魅力を伝える講演会」を開催し、臨床現場で活躍する作業療法士を招き、各領域の臨床作業療法の実践を学ぶ機会としている。今回は、訪問での精神・身障・老人・発達様々な疾患に対応する作業療法の技術のほか行政との連携など地域作業療法の実情を講義していただいた。学生には臨床実習での心構えや地域作業療法の考え方、教員には今後の地域実習に向けての実践例として講義の組み立て方に大変参考になるものであった。

**第9回**  
**—作業療法の魅力を伝える講演会—**  
**お知らせ**  
(対象 医学部学生・教職員)

・講演テーマ  
**地域作業療法～地域の魅力と活動の実際～**

・講師 **古谷 正登**  
三田尻訪問看護ステーション(山口県)作業療法士  
(鹿児島大学医学部保健学科作業療法学専攻5期生)

訪問看護ステーションから、主に精神障害者、神経難病患者、発達障害者を対象にアウトリーチを实践。地域包括ケアの構築を目指して様々な取り組みを行っている。

・日時 **2020 年1月 29 日(水)**  
**11:00～12:30**

・場所 **医学部保健学科東研究棟5階**  
**601講義室**  
(主催)鹿児島大学 医学部 保健学科 作業療法学専攻  
鹿児島大学 医学部 FD委員会 保健学科部会  
\*本講演会は、FD研修会としても位置づけられています。

## 4、ベストティーチャー賞推薦のための学生アンケート

令和元年度医学部保健学科でのベストティーチャー賞を選出するにあたり、以下の要領で保健学科所属の1～4学年の全学生を対象としたアンケートを実施した。

### <2019年 保健学科ベストティーチャー賞候補者に関するアンケートの要領>

対象:2019年12月現在で保健学科に在籍している1～4年生

実施期間:2019年12月13日(金)～2020年1月14日(火)

アンケート内容

過去1年間(2018年後期、2019年前期・後期)を振り返って、自分にとって最も有意義であった授業科目とその担当教員(授業を実施した教員)を1つのみ挙げてください。候補の選出にあたっては、以下に示す5つの観点を参考にしてください。また、その授業および教員に関して、5つの観点を1～5点(5点が最も良い)で評定してください。有意義であったと感じた理由やベストティーチャーとしての推薦理由を記載してください。

①回答者の在籍している専攻

②有意義であった授業科目と担当教員(授業を実施した教員)

③②で選んだ授業と教員に関して、以下の観点から1～5点(5点が最も良い)で評定してください。

③-1. 授業の実施方法(教材等の分かりやすさ、理解度の確認など)

③-2. 授業への教員の熱意(授業の準備状況、配布資料の工夫など)

③-3. 能動的学習の促進(アクティブ・ラーニングの活用、学生自身による思考の促進など)

③-4. 授業時間以外の学習支援(自己学習の促進、宿題・レポートなどへの取組など)

③-5. 学習目標の達成(内容の理解度、目標の達成度、講義に対する満足度など)

④②で選んだ授業と教員に関して、有意義と感じた点およびベストティーチャーとしての推薦メッセージがあれば、ご記入ください

### <アンケート結果の回収概要>

・回答期間:2019年12月13日～1月14日

・対象:学科在籍中の1～4年生490名

(看護学専攻327名、理学療法学専攻83名、作業療法学専攻80名)

・回答数:看護学専攻81名(24.8%)、理学療法学専攻31名(37.3%)、作業療法学専攻43名(53.8%)

### <アンケート結果の活用>

学生アンケートからの推薦者リストをFD委員会で供覧し、各専攻における得票数上位1名につき、各専攻のベストティーチャー賞候補者を専攻するうえでの資料とした。

また、学生アンケートからベストティーチャー賞として推薦のあった科目、学生からの推薦コメントは、被推薦教員にフォードバックした。

### <令和元年度ベストティーチャー賞>

各専攻1名ずつの教員をベストティーチャーに選出し、4月開催の教授会で表彰した。

## 5、FD活動への教員参加状況の把握

令和元年度の医学部保健学科におけるFD活動への参加率は87.5%であった。授業アンケートフィードバック、全学企画の講演会、学科内企画の講演会による活動への参加状況を把握した。

合計参加率		87.50 %	(専任教員 48 名中 42 名 参加)
企画別 参加率	授業アンケートフィードバック	54.17 %	(専任教員 48 名中 26 名 参加)
	令和元年度共通教育センター FD講演会	8.33 %	(専任教員 48 名中 4 名 参加)
	保健学科理学療法専攻企画 FD講演会	25.00 %	(専任教員 48 名中 12 名 参加)
	保健学科看護学専攻企画 FD 講演会	60.42 %	(専任教員 48 名中 29 名 参加)
	保健学科作業療法専攻企画 FD講演会	12.50 %	(専任教員 48 名中 6 名 参加)

## 終わりに

学生の授業評価アンケートには、今年度よりアクティブ・ラーニングに関する項目を追加し、授業での実施状況の把握をしたところ、他のアンケート項目に比べて低い評価であり、改善の余地があるものと考えられた。授業評価アンケート、教員フィードバックの実施方法を manaba へ変更し、学生や教員への周知や実施時期などの改善が次年度以降の課題のひとつと考えられる。本学科の課題を整理したうえで、重要度の高い課題に対するFD研修会などを企画していく予定である。

大学 IR コンソーシアム・アンケート結果（平成 30 年度）の評価・分析について

医学部(保健学科)FD 委員 牧迫 飛雄馬

	注目した知見	知見に対する解釈	改善・対応策
<p><b>【1年生のみ】</b>                      本学への志望度及び高校時代の経験</p>	<p>① 本学が第 1 志望であった割合（46.9%）は全学（45.2%）と同程度であったが、将来の見通しを持っていないと回答した学生の割合（1.6%）は、全学（20.1%）と比して大幅に低かった。</p> <p>② 高校時代（3年生）の経験として、自発的に作文の練習をした学生の割合（時々・頻繁にした：42.2%）が全学（21.6%）に比して多かった。</p> <p>③ 高校時代（3年生）の経験として、授業の予習や復習、宿題を頻繁にした学生の割合（70.3%）が、全学（50.9%）に比して多かったが、授業以外に興味のあることを頻繁に自分で勉強した学生の割合（7.8%）は、全学（19.6%）に比して少なかった。</p>	<p>① 半数以上の学生が本学を第一希望とは考えていない現状であるが、本学科の専門性を希望し、目的意識を持って入学する学生が多いと考えられる。</p> <p>② 保健学科では小論文を受験科目に課す大学も多いため、受験対策として準備していることが推察される。</p> <p>③ 授業の予習や復習、宿題へのエフォートが大きく、授業以外に興味のあることに時間を割くことが制限されるのかもしれない。また、保健学科で学ぶ専門性が高いため、入学後の学習に期待度が高いためかもしれない。</p>	<p>① 第 1 志望者の割合増大を目指し、オープンキャンパスなどで高校生向けに本学科の魅力伝える活動を継続していく。</p> <p>② 現状維持とする。</p> <p>③ 時事などの社会情勢も含めた授業科目とは直接的に関係しない事柄についても入学後に興味・関心が持てるような学習環境を考慮していく。</p>
<p>大学での学びの実態</p>	<p><b>【1年生】</b>                      ① 仕事に役立つ知識やスキルを学ぶ</p>	<p>① 1 年次から週 1 回の専門科目受講</p>	<p>① 上級生から下級生への履修取得方</p>

<p>学習経験がなされている一方、取りたい授業を履修登録できなかった学生が多かった。</p>	<p>②週あたりに「授業や実験に出る」時間が20時間以上と回答した学生の割合(56.9%)が、全学(46.1%)に比べて多いが、授業時間以外の学習時間(課題や準備学習、復習、授業に関連しない学習)は、全学と比して顕著な差異は認められなかった。</p>	<p>②指定のカリキュラムに準じているため、授業時間の削減は困難であるが、授業以外の時間の使い方についての現状を教員にも共有し、活用方法を模索する。</p>	<p>法の伝達などを行っており、継続していく。</p>
<p>③「オファイスワーカーなど、授業時間外に教員と面談する」時間が全然ないと回答した学生の割合(92.3%)が、全学(78.4%)に比べて多かった。</p>	<p>③一方、学科所属の教員が担当する授業科目は非常に限られるため、授業時間外に所属教員と接する時間は非常に少ないと考えられる。</p>	<p>③専門科目が1年生では少ないため、学科所属教員と接する時間が限られる。1年次からの教員との交流機会の拡大を検討する。</p>	<p>④外国語の運用に接する頻度を授業の内外で検討する必要がある。</p>
<p>④専門分野や学科の知識や他の人と協力して物事を遂行する能力については、変化を感じている学生が多かったが、外国語の運用能力や数理的な能力については、変化を感じている学生</p>	<p>④グループワークやアクティブラーニングを積極的に取り入れつつある成果と考えられるが、一方で外国語による課題や授業運営の機会</p>	<p>④グループワークやアクティブラーニングを積極的に取り入れつつある成果と考えられるが、一方で外国語による課題や授業運営の機会</p>	<p>は非常に少なく、外国語の運用能力</p>

	<p>が少なかった。</p> <p><b>【3年生】</b></p> <p>①「仕事に役立つ知識やスキルを学ぶ」、「授業内容と社会や日常生活のかわりについて、教員が説明する」、「授業の一環でボランティア活動をする」といった機会が多く、「授業の進め方に学生の意見が取り入れられる」と回答した学生も多かった。</p> <p>②「インターネットを使って授業課題を受けたり、提出したりした」と回答した学生の割合（72.1%）は、全学（89.6%）に比して少なく、「授業をつまらなく感じた」、「授業中に居眠りをした」と回答する学生の割合が、全学に比して多かった。</p> <p>③「教員に親近感を感じた」と回答した学生の割合（65.1%）は、全学（39.9%）に比して多かった。</p> <p>④週あたりに「授業や実験に出る」時</p>	<p>に向上が得られていないものと考えられる。</p> <p>①上級生では1年次に比べて、専門科目が増え、専門職としての仕事を見据えた知識や技術に接する機会が増えているためだと考えられる。また、臨床実習を通じて現場で体験する機会が増えていることが大きな要因であると考えられる。</p> <p>②桜ヶ丘キャンパス内の通信環境設備の不足さや教員のインターネットを使って授業スキルの問題が影響している要因であるとと考えられる。</p> <p>③上級生では、実技・演習や臨床実習が増え、学科所属教員と密に接し、連携する機会も増えるためであると考えられる。</p> <p>④専門科目の習得が必要であり、臨</p>	<p>①現状維持とするが、専門科目が増える3年次まで、学習意欲の維持させることも課題のひとつと考える。</p> <p>②桜ヶ丘キャンパス内の通信環境設備の充実の検討を図る。</p> <p>③教員間での格差が生じないように情報の共有に努める。</p> <p>④現状維持とする。</p>
--	---	---	---

英語運用能力の熟達度及び英語学習の状況	<p>間が20時間以上と回答した学生の割合(51.2%)が、全学(33.2%)に比して多かった。</p> <p><b>【1年生】</b></p> <p>①英語運用能力の熟達度の聞く力、読む力、会話力、表現力については、入学時ならび現在ともに全学と比して顕著な差異は認めないが、書く力については、入学時にB2以上と回答した学生の割合(26.2%)が、全学(15.2%)に比して多い傾向であり、現在においても書く力がB2以上と回答した学生の割合(32.3%)は、全学(22.2%)に比して高い傾向にあった。</p> <p>②英語圏への渡航経験は、10日未満と回答した学生の割合(18.5%)は、全学(9.9%)に比してやや多い傾向であったが、顕著な差異は認められなかった。</p> <p><b>【3年生】</b></p> <p>①英語運用能力の熟達度については、聞く力、読む力、会話力、表現力、書く力のいずれにおいても、全学と比して特徴的な傾向は認められなかった。</p>	<p>床実習のための準備や卒業研究の開始などで授業や実験に要する時間が多いものと推察される。</p>	
	<p>①英語を活用した授業に限られるため、大学入学後における聞く力、読む力、会話力、表現力の向上につながっていないものと考えられる。</p> <p>②興味のある学生の積極的な行動がある一方で、必要性をあまり感じていない学生もおおきく、格差が生じているものと考えられる。</p>	<p>①入学後の英語の活用機会を再度見直す必要がある。</p> <p>②大学での海外渡航制度などの周知を図る。</p>	<p>①入学後の英語の活用機会を再度見直す必要がある。</p>



	<p>②英語圏への渡航経験は、8割以上が渡航したことがないと回答し、全学と比較して顕著な差異は認められなかった。</p>	<p>②興味のある学生の積極的な行動がある一方で、必要性をあまり感じていない学生もおり、格差が生じているものと考えられる。</p>	<p>②大学での海外渡航制度などの周知を図る。</p>
<p>大学生生活に対する意識</p>	<p><b>【1年生】</b></p> <p>①9割以上の学生が学生生活は充実していると回答しており、特に「将来の仕事と授業内容の結びつき」について、高い満足度が得られている。</p> <p>②一方、「初年次生を対象とした教育プログラム内容」や「授業の全体的な質」についての満足度は低く、「大学教員と顔見知りになる」割合も低かった。</p> <p><b>【3年生】</b></p> <p>①「大学が求める水準に応えて学習する」、「時間を効果的に使う」、「大学教員と顔見知りになる」といった項目において、高い適応を感じていた。</p>	<p>①1年次から専門科目に触れる機会があり、少人数の専攻が多く、上下学年での情報共有の機会もあり、将来の仕事に結びつけた経験につながっているものと考えられる。</p> <p>②しかし、1年次では学科所属教員が担当する科目は非常に少なく、教員との接点は限られる。</p> <p>①上級生では、実技・演習や臨床実習を通して、学科所属教員と密に接する機会や、より専門的な内容を学習する時間が増えるため、満足度の向上につながっているものと考えられる。</p>	<p>①現状維持とする。</p> <p>②学科所属教員と接する時間が限られる。1年次からの教員との交流機会の拡大を検討する。</p> <p>①現状維持とする。</p>

	<p>②9 割以上の学生が学生生活は充実していると回答しており、特に「将来の仕事と授業内容の結びつき」に関する満足度が高く（92.5%）、「授業の全体的な質」や「教員と話をする機会」、「大学での経験全般について」は、75%以上の学生で満足度の高い回答が得られた。</p>	<p>②本学科の学生支援・教育体制が上級学年においても機能しているものと考えられる。授業の質の改善や臨床実習指導体制の充実が功を奏しているものと感ぜられる。</p>	<p>②現状維持とするが、少人数制のゼミとなる際には、教員間での大きな格差が生じないように、情報の共有を図る。</p>
--	---	--	---

# 保健学研究科 FD 活動

## はじめに

令和元年度 FD 委員会保健学研究科部会の活動として以下を実施した。

1、修了学生における修学達成度などに関するアンケート(保健学研究科運営委員会との共同)

以下にその概略を述べる。

### <2019年度 保健学研究科 博士前期課程修了者へのアンケートの要領>

対象:保健学研究科博士前期に在籍しており、2020年3月に修了を予定している者 27名

実施期間:2020年2月27日～3月7日

#### アンケート内容

満足度を5点が最も満足度が高いとして、1～5点で評定してください。

①大学院での講義内容や講義方法について

②研究指導について

③事務手続きや書類に関して

達成度を5点が最も達成度が高いとして、1～5点で評定してください。

④自身の達成度について

努力度を5点が最も努力度が高いとして、1～5点で評定してください。

⑤自身が努力した程度について

⑥在学中に最も学びになったことについて、教えてください。

博士前期課程を卒業(修了)するにあたり、以下についての自己評価をお教えてください。

⑦保健学に関する優れた専門的知識と技術を獲得できた

⑧地域の保健・医療において、高度専門職業人として果たすべき役割を実践する能力を獲得できた

⑨研究を行うための基礎的な能力を獲得できた

博士前期課程を卒業(修了)するにあたり、カリキュラムに対しての評価をお教えてください。

⑩豊かな人間性と広い視野を獲得できるように大学院全学横断的教育プログラムや、博士前期課程共通科目によって専門領域以外の様々な人々と共に学べるように編成されていた

⑪専門領域における基礎的能力を補強し、専門的学習を促進するために領域共通科目を配置されていた

⑫高度専門職業人としての優れた知識・技術を修得し、様々な地域における保健医療に関する課題を解決するための研究力、教育力を獲得できるように専門科目(特論・特別演習・特別研究)が配置されていた

⑬他専門領域を理解し、協働できるようになるために、他領域の専門科目を修得できるように編成されていた

本学の大学院への進学について

⑭本学の大学院への進学を周りの人に勧めたいと思いますか。

⑮修士論文発表会後に他分野の大学院生や教員との情報交換を行うような懇談会が必要だと思いますか。

⑯修士論文発表会後に他分野の大学院生や教員との情報交換を行うような懇談会が開催された場合、参加したいと思いますか。

⑰調査結果は、学内での教育改善や学外で情報収集を目的にご報告させていただき予定ですが、個人情報はその中には一切含まれませんのでご安心ください。

調査結果を報告することに同意していただけますか。

### <アンケート結果の回収概要>

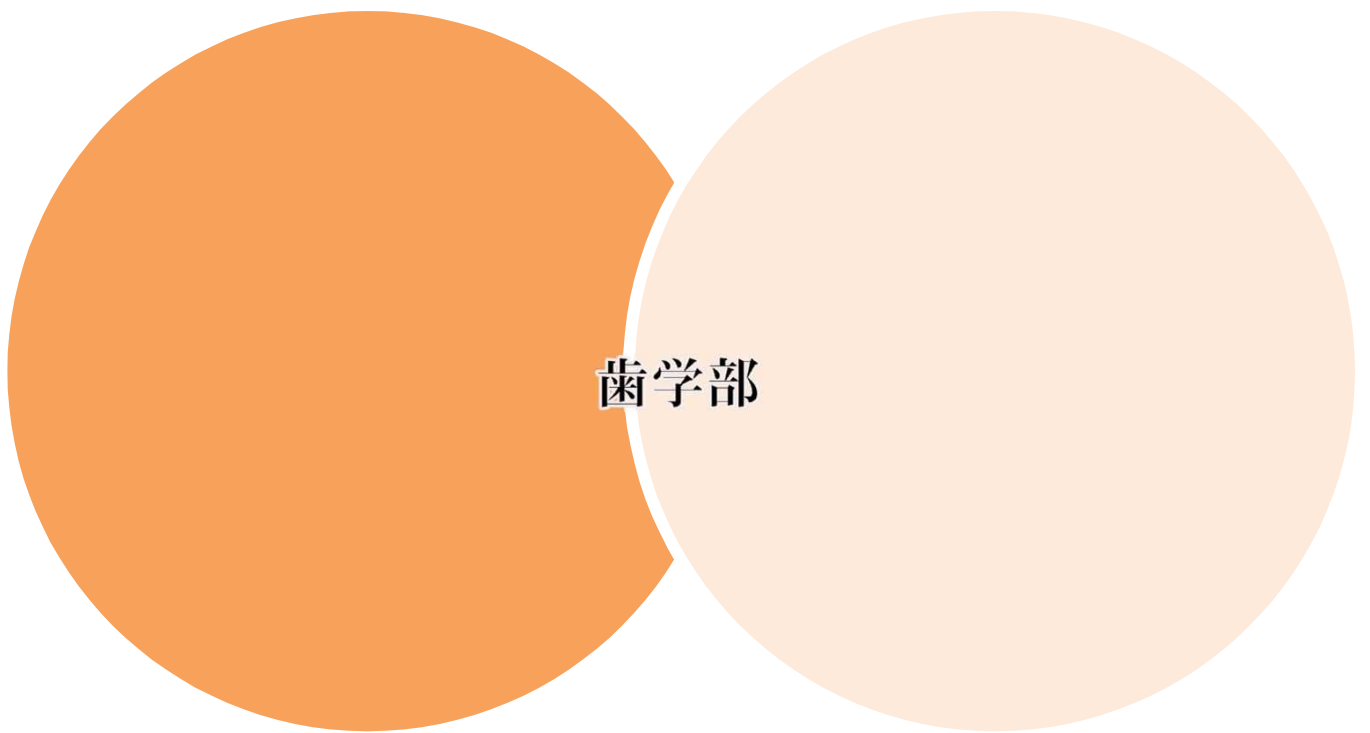
回答数: 修了予定者 27 名のうち 21 名 (77.8%) から回答を得た。

ディプロマポリシーの 3 項目(「保健学に関する優れた専門的知識と技術を獲得できた」、「地域の保健・医療において、高度専門職業人として果たすべき役割を实践する能力を獲得できた」、「研究を行うための基礎的な能力を獲得できた」)に対する到達度は、いずれも 2 名 (9.5%) が 5 段階の 2「不可(獲得できたが修士として不十分)」と自己評価し、19 名 (90.5%) が 3 以上であった。自身の達成度の高さはディプロマポリシーの 3 項目すべての到達度の高さと有意な正の相関関係 ( $r_s=0.56\sim 0.67$ ) を認め、自身の努力度の高さは専門的知識と技術の獲得の到達度と関連した ( $r_s=0.50$ )。授業や講義の満足度の高さは、専門的知識と技術の獲得 ( $r_s=0.50$ ) および高度専門職業人として果たすべき役割の实践能力の獲得 ( $r_s=0.44$ ) と関連した。

### 終わりに

保健学研究科博士前期課程在学中における自身の達成度の高さは、本大学院で定めるディプロマポリシーの到達度に直結しており、講義の満足度の高さは専門的知識と技術や实践能力の獲得に対する到達度に寄与すると考えられた。学生自身の達成度を高める教育体制の充実を図るとともに、ディプロマポリシーに準じた学修成果を客観評価できるアセスメントポリシーの整備が重要であろうと考えられ、次年度以降の課題のひとつと考えられた。

(文責 医学部 FD 委員会保健学科部会長 牧迫飛雄馬)



## 歯学部 FD 活動報告

### 1. はじめに

歯学部 FD 委員会では、学部教育や学部組織、研究、および国際交流などの多面的な領域について、教員の能力開発に関わる様々な活動を企画、実施している。令和元年度は委員長が交代し、これまでの FD 活動を踏まえ、その目的の達成に向けて、5 回の FD 講演会を企画、開催した。鹿児島大学の目標は「75%以上の参加」であるが、全教員（125 名）のうち FD に 1 回も参加しなかった教員は 22 名であり、参加率は 82%で目標に達した。FD の効果は参加率のみでは測れないところもあり、今後も形式的ではなく、教員の教育能力の向上に資する実質的な FD 活動が必要であると思われた。主な活動項目リスト、ならびに各活動について、その概要を記載する。

#### 1) 令和元年度の事業リスト

- ・ 学生による授業評価
- ・ 授業公開・授業参観による教員相互の評価
- ・ FD 講演会「歯学教育認証評価へ向けた領域別評価」の開催
- ・ FD 講演会「国際標準と歯科 ISO/ TC106 の動向」の開催
- ・ FD 講演会「CBT の作問に関する FD 講習会」の開催
- ・ FD 講演会「2018 年度歯学部自己評価報告」の開催（新型コロナウイルス感染症予防にて WEB 開催）
- ・ FD 講演会「歯科医師国試の現状と対策」の企画（新型コロナウイルス感染症対策にて無期延期）
- ・ 令和元年度鹿児島大学歯学部ベストティーチャー賞表彰の実施

### 2. 歯学部 FD 委員会の活動状況

#### 1) 令和元年度歯学部 FD 委員会 委員構成

委員長：杉村光隆（歯科麻酔全身管理学分野 教授）

委員：中村典史（口腔顎顔面外科学分野 教授）

西谷佳浩（歯科保存学分野 教授）

田松裕一（解剖法歯学分野 教授）

事務所掌：歯学教務係

#### 2) 令和元年度歯学部 FD 委員会 開催状況

##### (1) 第 1 回歯学部 FD 委員会（令和元年 5 月 9 日開催）

場所：医歯学総合研究科棟 1 7 階カンファレンス室

議題 1. 令和元年度の FD 活動について（資料 1）

2. 令和元年度前期科目授業評価アンケートの実施について（資料 2）

##### (2) 第 2 回歯学部 FD 委員会（令和元年 8 月 21 日～9 月 6 日開催）メール会議

議題 1. 6 月の授業公開・授業参観レポートと授業改善シートの自己評価委員会への報告について

2. 企画 1（経費要求書 1）「共用試験歯学系 CBT 作問および歯科医師国家試験出題基準のための研修会および講習会」の実施について

3. 国際標準に関する講演について

4. ベストティーチャー賞について
5. 今年度 FD 予算 (23 万円) の有効活用

(3) 第3回歯学部 FD 委員会 (令和元年 12 月 4 日 (水) 17:05~18:10 開催)

場所: 医歯学総合研究科棟 1 7 階カンファレンス室

- 議題
1. ベストティーチャー賞の選定について (資料 1)
  2. 今年度の FD 活動について (資料 2)
  3. 令和 2 年度 FD 活動計画の素案作成について

(4) 第4回歯学部 FD 委員会 (令和 2 年 2 月 29 日~3 月 13 日開催) メール会議

- 議題
1. 令和 2 年度 FD 活動計画の確定
  2. ベストティーチャー賞の候補者の最終選考

### 3. 学生による授業評価

歯学部 FD 委員会では、年間の FD 活動の一環として「学生による授業評価」について、歯学部教育委員会と共同で一昨年度更新した評価票を用いて実施した。この授業評価は令和元年度に開講した全ての授業を対象に、各科目の授業の終了時に無記名式で適宜実施した。評価対象者は各授業担当教員であり、職位は教授、准教授、講師、助教であるが、得られた記入済み調査票は OCR により読み込み処理後、集計作業が行われ、結果は科目毎に PDF 化された。

各科目の集計結果を各分野へ配布し、学生の意見や指摘事項について、次の授業へすぐに生かせるような PDCA サイクルを構築している。そのため、授業を提供する教員のモチベーションが上がり、調査の手法としてはある程度機能したと考えられる。また、自由記載欄には多くのコメントが寄せられ、授業改善に直接つながるような内容が多かった。昨年同様、全ての授業において学生からの授業評価を得て、個々の授業科目責任者は学生視点のフィードバックをもとに授業内容、方法等を見直し、授業改善シートを提出している。

評価を受けた全ての科目のアンケート結果は鹿児島大学歯学部のホームページ、<http://w3.hal.kagoshima-u.ac.jp/limit/committee/committee08/43-2016-10-26-05-00-27.html> に公開されており、令和元年 5 月現在、平成 27 年度から 30 年度のアンケート結果は学内専用で閲覧可能である。今後は、各科目担当責任者から提出された授業改善シートを活用し、学生の意見も反映させた授業改善の取り組みが課題である。

### 4. 授業公開・授業参観における教員相互の評価

歯学部教員の授業公開・授業参観による相互評価は、全学的な取り組みの一環として例年実施しているが、参観を受けるか否かは教員の自主性に任されているため評価が行われた授業は少なく、教員相互評価としての効果は限定的であったと思われる。本年度は授業公開・授業参観の指定時期である 6 月および 12 月に授業を行っている教員を対象に、歯学部自己評価委員会 (分野別歯学教育認証評価実施部会) の教授の中から一人ずつ評価者としてマッチングさせ、授業参観ならびに授業評価を行った。評価者は参観レポートを作成し、参観直後に授業担当教員にフィードバックし、そ

れを踏まえて教員は授業改善シートを提出して完結とした。ただ、6月と12月の期間外に授業を行う教員は評価を受ける機会がないため、今後は期間を弾力的に設けて全教員の授業公開・授業参観を目指す。加えて、提出された授業改善シートが次の授業でどのように活用されたかを評価することが次の課題である。

#### 5. 令和元年度第1回歯学部FD講演会

- 1) 講師：歯学部自己評価委員会 各領域リーダー 杉浦 剛教授 他
- 2) 講演タイトル：「歯学教育認証評価へ向けた領域別評価」について
- 3) 日時：令和元年5月16日（木）17:30～19:00
- 4) 場所：歯学部第3講義室
- 5) 参加者：歯学部教職員85名
- 6) 内容

「歯学教育認証評価へ向けた領域別評価」は、今後、本学が受審予定の歯学教育認証評価を想定し、歯学部自己評価委員会がこれまで領域別に検討してきた。本講演会では、その検討内容を紹介し、受審に向けた取り組みについて、歯系教員の理解を深めることを目的とした。また、本取り組みの一環として、6月に実施予定の「授業公開・授業参観」についても案内した。

#### 6. 令和元年度第2回歯学部FD講演会

- 1) 講師：経済産業省 産業技術環境局  
国際標準課 課長補佐（医療）加藤 二子 様
- 2) 講演タイトル：「国際標準と歯科 ISO/ TC106 の動向」
- 3) 日時：令和元年10月9日（水）17:15～18:15
- 4) 場所：歯学部第3講義室
- 5) 参加者：歯学部教職員63名
- 6) 内容

国際標準化機構で1962年に設置された歯科のTC（技術部会）であるTC106の最近の動向と、なぜ日本がISO活動を産学官で推進しているか、ルールメイキングの重要性も踏まえて説明された。

#### 7. 令和元年度第3回歯学部FD講演会

- 1) 講師：鹿児島大学歯学部  
田口則宏教授（歯科医学教育実践学分野）  
松本祐子助教（歯科総合診療部）  
岩下洋一朗助教（歯科医学教育実践学分野）  
川島雄介講師（顎顔面放射線学分野）  
後藤哲哉教授（歯科機能形態学分野）  
田松裕一教授（解剖法歯学分野）
- 2) 講演タイトル：「CBTの作問に関するFD講習会」
  - (1) 今年度の作問体制、作問割り振り、スケジュール、作問ソフトについて



- (2) PC セキュリティ
  - (3) 放射線画像利用の手続き
  - (4) どんな問題がボツになるのか
  - (5) 視覚素材の重要性
  - (6) 質疑応答
- 3) 日 時：令和2年1月22日（水） 17:30～19:00
- 4) 場 所：歯学部第3講義室
- 5) 参加者：歯学部教職員 75名
- 6) 内 容

共用試験歯学系 CBT において、より質の高い作問を行うとともに、作問の教育活動上の意義に対する認識を深め、教員の教育能力開発に資するために、学内の CBT 作問委員会コアメンバーおよびアドバイザーが講師を務める講習会を開催した。

#### 8. 令和元年度第4回歯学部 FD 講演会

- 1) 講 師：歯学部自己評価委員会 各領域リーダー
- 2) 講演タイトル：「2018年度歯学部自己評価報告」
- 3) 日 時：令和2年3月6日（金） 17:30～19:00  
⇒ オンライン講習 第1回 3/10～16、第2回 3/27～4/3
- 4) 場 所：歯学部第3講義室 ⇒ オンライン講習
- 5) 参加者：歯学部教員 ⇒ オンライン講習受講者 124名/146名（総数）85%
- 6) 内 容

「歯学教育認証評価へ向けた領域別評価」は、今後、本学が受審予定の歯学教育認証評価を想定し、歯学部自己評価委員会がこれまで領域別に検討してきた。本講演会は、その検討内容の紹介並びに受審に向けた取り組みに関する歯系教員の理解を深めることを目的としており、受講後には manaba を用いた 21 問からなる小テストを実施し、正答率は 80%であった。

※ なお、本講演会は新型コロナウイルス感染症対策のため、講演会は manaba を活用したオンライン講習となった。

#### 9. 令和元年度第5回歯学部 FD 講演会

- 【第1部】 1. 2018年度ベストリサーチャー賞表彰  
(杉浦 歯学部研究体制委員会委員長)
2. 令和元年度ベストティーチャー賞表彰  
(杉村 歯学部 FD 委員会委員長)

#### 【第2部】

講演タイトル：「歯科医師国試の現状と対策」  
講 師：解剖法歯学分野 田松 裕一 教授

内 容：問題の領域分け、配点、合格基準など教員として知っておきたい国試の実施状況を解説したのち、東京歯科大学における国試対策の例を示し、鹿大歯学部の合格率アップに向けた教員の対応について考えることを目的とする。

※ なお、本表彰並びに講演会は新型コロナウイルス感染症対策のため、講演会は次年度へ無期延期とし、表彰は3月23日、歯学部長室で簡素に執り行われた。

#### 10. ベストティーチャー賞の実施

ベストティーチャー賞は平成30年度鹿児島大学で「鹿児島大学ベストティーチャー賞」表彰制度が制定されたことにより、歯学部でも鹿児島大学ベストティーチャー賞候補者1名を推薦する必要が生じた。ちなみに、「鹿児島大学ベストティーチャー賞」の審査項目として以下の3点が示された。

- (1) 授業において、卓越した指導力で教育効果の高い授業を実践した者
- (2) 教育方法の工夫又は改善に取り組み、顕著な教育成果をあげた者
- (3) その他ベストティーチャー賞に相応しいと認められる者

歯学部についてベストティーチャー賞候補者を選定するにあたり、「歯学部ベストティーチャー賞選定のための教員授業評価実施要綱」に則り、以下の方法及び学生のアンケートにおける評価基準で選出した。

方法：

2年次生から4年生次生の学生に対して、今年度前期・後期に授業を受けた教員の中から次の項目に相当する教員を1名選ぶ。なお対象の教員は常勤で各科目で2コマ以上の授業を担当したものを対象とする。

学生がベストティーチャーを選考するときの評価項目は、

- ・授業方法や学びへの工夫がなされているか（技法）
- ・教育に対する姿勢や取り組みが優れているか（熱意）
- ・授業を受けることによってその科目に対する関心が深まったか（理解）

の3項目を選考基準であることを学生に説明したのち、今年度前期・後期の科目担当教員の中から、総合的に優れていると思う教員を各学生は1人選ぶ。集計して各学年のトップの教員を歯学部のベストティーチャー賞とし、その中から最も得票率の高い1名を鹿児島大学のベストティーチャー賞の歯学部推薦者とする。鹿児島大学のベストティーチャー賞の歯学部推薦者は、各学年のベストティーチャー賞から歯学部FD教員及び学部長により選出する。

以上の方法により、2年次生から4年生次生の3学年に対し、令和2年1月にアンケートを実施後、アンケート結果をもとに2月29日～3月13日の第4回歯学部FD委員会を開催し、各学年の選出による歯学部ベストティーチャー賞受賞者を確定するとともに、3人の受賞者の中から1名を鹿児島大学のベストティーチャー賞の歯学部推薦者に決定した。その後、3月23日、歯学部長室で表彰を行った。

#### 11. 特筆すべき事項と改善例

今年度は委員長が交代し、基本的には前委員長を引き継いだ。FD 活動の趣旨に鑑み、教員の教育能力の向上に資する取り組みを目標にした。教育に加えて、研究、臨床、地域貢献等、各教員の多忙な日常業務の中での効率的な運営を念頭に置いたが、参加率だけを見れば 82% と目標を達成できた。

歯学部では令和 3 年度、分野別歯学教育の認証評価のトライアルを受審予定で、歯学部自己評価委員会ではそれへの準備を継続しているが、今年度はその状況を歯学部教員に周知するために、年度初めと年度末に FD 講演会を企画した。第 1 回 FD 講演では、本取り組みの一環として、長年の懸案であった授業公開・授業参観についても説明し、6 月と 12 月の 2 回、自己評価委員を評価者として、授業担当者とのマッチング調査を行い、授業参観を実施した。評価者の授業参観レポートを元に授業担当者にフィードバックし、授業改善シートを提出して完結とした。ただ、FD 活動の趣旨を踏まえると、個々の教員の今後の授業にどのように反映・改善されるかが、最大の関心事であり、その評価並びに評価法が問われるところである。またそれが具体的に把握できて初めて PDCA サイクルを回せたと考えられる。これは次年度の取り組みに繋がることであるが、FD 活動上、最大の特筆性とも言えよう。次年度は評価者と各教員が参観前に前年度の授業改善シートを回顧し、それを踏まえて参観を含めた日常授業に臨むことが一つの方策と考えられる。ただ、新型コロナウイルス感染症対策にともなう遠隔授業という前例のない事態となっており、対面授業の参観が困難であるため、例えばコンテンツ評価など、遠隔授業の評価法の検討が必要となる。

教員の意欲向上と大学教育の活性化を図ることを目的として平成 30 年度に制定された「鹿児島大学ベストティーチャー賞」表彰制度に則って制定された歯学部ベストティーチャー賞の表彰を行った。単なる学生の人気投票に陥ることなく、教員の教育技術の向上に繋げるには、評価の高い授業はどのような授業かということについて、ベストティーチャー賞表彰者の模擬授業もしくは講演は必要であると思われる。現在、各教員の教育技術に関してはほとんど個人的な努力に任されているため、他の教員の授業参観などによる教育法を検証する機会や情報がほとんどない。従って、今後は従来の学生による評価と授業参観・授業評価での教員による評価を組み合わせ、重層的かつ複眼的に情報交換を進める必要があると思われる。

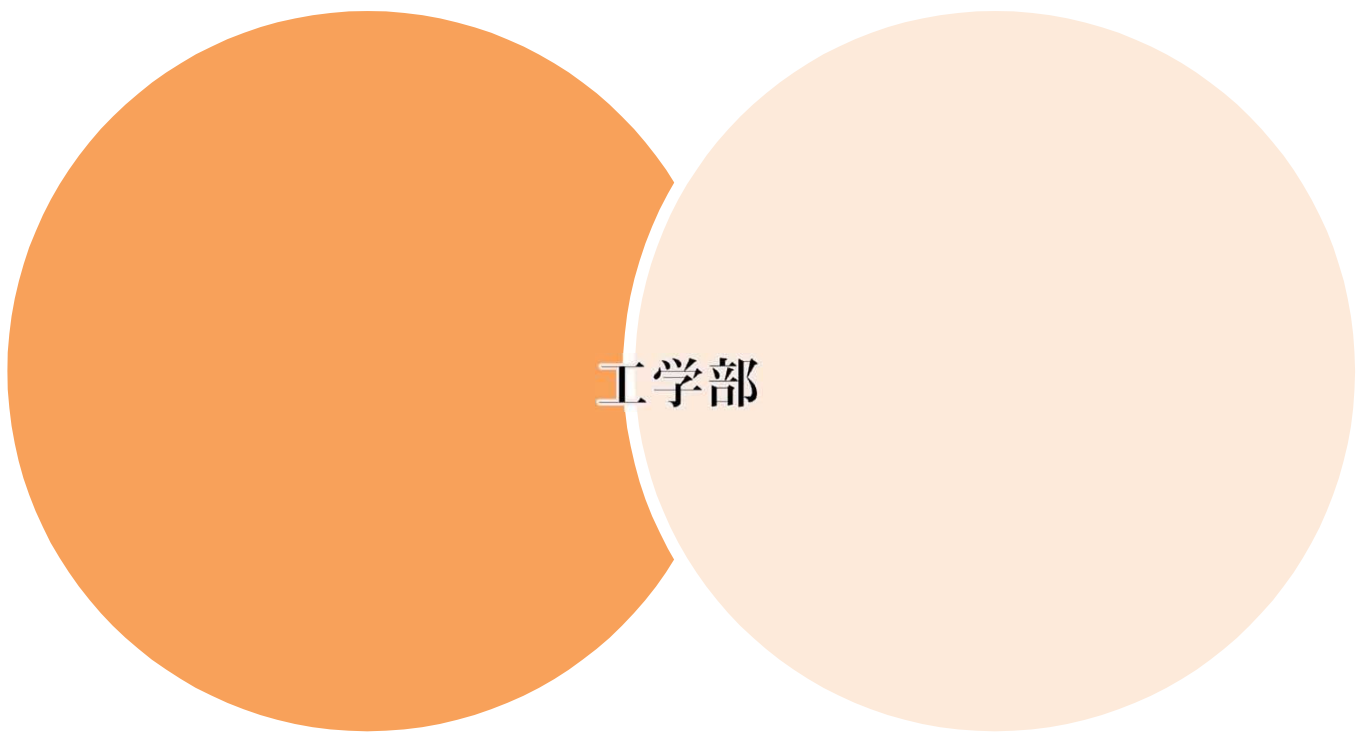
今年度末は、新型コロナウイルス感染症対策に追われ、3 月に予定した FD 講演のうち、一つは manaba でのオンライン形式となり、分野別歯学認証評価のコンテンツの確認と小テストが実施された。FD 活動でのこのような取り組みは、初めてであり、教員個々の受け止め方は千差万別であろうが、少なくとも manaba の利用価値が認識されることになったと考えられる。新型コロナウイルス感染症対策は年度末から年度初めにかけて続いており、遠隔授業への導入的役割を果たしたかもしれない。また、歯学部の関心事である歯学部国家試験対策については、対面形式での講演は無期延期に追い込まれたが、歯学部学生のためにも次年度、オンライン形式での講演を検討する予定である。

大学 IR コンソーシアム学生調査結果（平成 30 年度実施分）の評価・分析について

歯学部FD委員  
杉村 光隆

	注目した知見	知見に対する解釈	改善・対応策
【1年生のみ】 本学への志望度及び高校時代の経験	Q16 より、多浪生が多く、かつ第一志望の割合が低く、Q19 から、問題解決法の探索、インターネットでの情報確認、授業以外で興味ある関心事項の探求、取り組んだ課題に関する教官との意見交換、読書に関して、いずれも全学を下回ったこと。	受験時代の反動と開放感が背景にあり、探求心や好奇心が低下傾向にある。	入学しやすくし、卒業を難しくするようなシステムにしないと、現状での改善策はなかなか難しいかもしれない。 現状で対応するには、斬新で魅力的な教育法を取り入れる必要があるかもしれない。そのためには教官の教育法の改善が望まれるが、これもなかなか簡単ではない。
大学での学びの実態	Q4 より、体験学習や授業のテーマの設定、進め方に対する意見を活用する点で優れている一方で、授業内容と日常の関わりに関する(教員の)説明が少なく、実学的な学びが伴わないこと。 Q5 より、提出物に期限を守らない、欠席、遅刻が多い一方で、学修相談は多い。 Q6 より、予・復習をしないが、部活で	体験学習やPBLによる学生主導での授業構築等では成果を上げているようだが、実学的な知識吸収力、探求力に繋がっていない。 教養課程での学びを疎かにしている可能性がある。 学修意欲は今一つだが部活は熱心で、コミュニケーション力、プレゼンテーション力が磨かれて将来の職種上、好ましい可能性がある。	国家試験を想定すれば、もっと低学年での歯学関連カリキュラムを取り入れても良いかもしれないが、歯学部では「歯科医療人である前に良識豊かな人間であれ」と謳っており、教養は人間を養うために歯科医師にとつては必須であり、いかに魅力ある授業を作るかが鍵と思われる。

	<p>の活動が活発である。 Q7より、教養、問題解決能力に欠けるが、人間関係構築力、コミュニケーション力、プレゼンテーション力で勝る。</p>		
<p>英語運用能力の熟達度及び英語学習の状況</p>	<p>Q8より、「聞く」「読む」「書く」「読む」いずれも伸びしろが小さい。</p>	<p>入学時での英語力が勝っているのは、まさに受験の賜物と考えられ、伸びしろが期待できないことが予想される。</p>	<p>国際社会に通用するために、十分とは言えないため、これまでも国際的な医療人育成のためのカリキュラムを構築してきたが、さらに国際歯科・人間科学分野の創設の検討等、前向きな取り組みを展開している。</p>
<p>大学生活に対する意識</p>	<p>Q11より、充実度では上回っている。 Q10より、教官や学生同士での交流を深め、大学が求める水準に応えようとしている。</p>	<p>人間関係を大切にし、大学への思いもあり、その結果として充実した学生生活を構築しようとしている。</p>	<p>充実度は高いので、いかに維持してゆくかが大切であるが、やはり鹿大生としての進取の気性を理念とした取り組みから、学生への刺激を継続することが肝要である。</p>



工学部

# 令和元年度 鹿児島大学工学部 F D 委員会活動報告書

## はじめに

各大学は、個々の教員の教育内容・方法の改善のため、全学的にあるいは学部・学科全体で、それぞれの大学等の理念・目標や教育内容・方法についての組織的な研究・研修（ファカルティ・ディベロップメント）の実施に努めるものとする旨の提言が「21 世紀の大学像と今後の改革策について」（平成 10 年 10 月 26 日大学審議会答申）においてなされた。それを受けて、平成 11 年 9 月 14 日より大学設置基準において努力義務が規定された。工学部においても、F D 委員会は、個々の教員が限られた時間の中で行う教育効果の改善の試みを支援し、学部教育全体の質を向上させるための活動を継続的に実施している。

本報告書は、令和元年度の活動報告である。委員と学生係職員が協力して作成した。評価アンケートのデータ処理等は学科事務支援室の皆さんに作業していただいた。これらさまざまな協力に感謝を申し上げます。本報告書を読んでいただき、F D 委員会自体の改善のために委員会活動に関する忌憚のない意見をお寄せいただければ幸いです。

令和元年度鹿児島大学工学部ファカルティ・ディベロップメント委員会  
委員長 甲斐 敬美

## 令和元年度 鹿児島大学工学部ファカルティ・ディベロップメント委員会委員

- |     |       |                       |
|-----|-------|-----------------------|
| 委員長 | 甲斐 敬美 | （工学部副学部長，第 1 号委員）     |
| 委員  | 松崎健一郎 | （機械工学科，第 2 号委員）       |
| 委員  | 重井 徳貴 | （電気電子工学科，第 2 号委員）     |
| 委員  | 柴田 晃宏 | （建築学科，第 2 号委員）        |
| 委員  | 鮫島宗一郎 | （環境化学プロセス工学科，第 2 号委員） |
| 委員  | 三隅 浩二 | （海洋土木工学科，第 2 号委員）     |
| 委員  | 大橋 勝文 | （情報生体システム工学科，第 2 号委員） |
| 委員  | 中島 常憲 | （化学生命工学科，第 2 号委員）     |

## 第1章 鹿児島大学の中期目標と工学部のFD活動

鹿児島大学の中期目標には、【A1】「進取の精神」を發揮して課題の解決に取り組むことのできる多様な人材を育成する。【A3】教育目標の達成に向け、体系的カリキュラムを整備するとともに、学修成果を可視化し、教育内容・方法の改善サイクルを確立し、全学的な教育の内部質保証システムを整備する。といったことが掲げられており、充実したFD活動の実施が求められている。工学部FD委員会では令和元年度もこの中期目標の達成を目指して活動を行った。工学部では、全7学科の教育が日本技術者教育認定機構(JABEE)の認定プログラム教育、あるいはJABEEに準拠した教育を行っている。これまで継続的に実施してきた授業アンケートによる授業改善などのFD活動は、JABEEの求める教育改善のためのPDCAサイクルに取り込まれた形で実施されている。令和元年度の第1回工学部FD委員会において、年度内に次の活動を実施することが決定された。1) 授業アンケートの実施と授業計画改善書の作成、2) 授業公開と授業参観の実施、3) FD講演会の実施、4) 学外FD研修会への学部教員の派遣、5) 授業評価アンケートの分析、6) 報告書の作成。

## 第2章 工学部FD講演会および鹿児島大学FDワークショップ

令和元年度の第1回の工学部FD講演会は、令和元年8月22日(木)15:00から16:30まで「科学研究費申請におけるtips」というタイトルで稲盛会館にて実施された。工学部においては卒業論文研究がデザイン能力や問題解決能力を鍛えるために大いに役立っている。ただし、研究環境の整備や研究を進めるためには自己収入では不十分であり外部資金が必要である。科学研究費はすべての分野の基礎研究から応用研究まで申請対象となりえ、この研究費を獲得することが教育研究の充実につながる。採択の可能性を高めるためには申請書の書き方も重要なポイントとなる。特に科学研究費の審査員を何度も経験すると、後にどの申請が採択されたか分かるため、どのような申請をどのような書き方で行えばよいかといういわばビッグデータを頭の中に蓄積することができ、審査委員の経験者は自分自身の申請の採択率を向上させることもできる。本講演会はそのような知識を広く組織内で共有することによって組織としての採択率の向上、ひいては教育研究の質の向上につなげることを目的として実施した。講演者としては工学部の中で過去に複数回科研費の審査員を経験し、そのことがすでに公開されている方の中から、過去10年間に継続して科研費を獲得してきた以下の3名の方を選んだ。

吉田 昌弘 教授 (環境化学プロセス工学科)

高梨 啓和 准教授 (化学生命工学科)

甲斐 敬美 教授 (環境化学プロセス工学科)

毎年、1ポイント足りないために採択に至らない教員であれば、ひとつの工夫で継続して採択されるようになる可能性は十分にあると思われる。そのようなきっかけに本講演会が寄与できていれば幸いである。講演会への参加者は、55名(工学部教員:37名, 他学部教員:11名, 事務・技術職員:7名)であった。

2回目の工学部FD講演会は、令和元年11月20日(水)15:00から15:45まで、工学部教授会の開催前に理工学総合研究棟プレゼンテーションルームにて開催した。工学部の授業アンケートに予習・復習の時間に関する項目があり、アンケートが開始されて数年は上昇したが、ここ10年は頭打ちで、ほとんどの学生が「1~2時間」である。ただし、科目間での差も大きく、改善の余地はあり、もう少し自発的な学習



をすることは授業内容を理解するために必要と考えられる。そこで、今回の講演会では、積極的な課題への取り組みや自発的な予習・復習を促すための工夫や提案について、2018年度工学部エクセレント・レクチャー受賞者の7名の先生方にリレー方式でお話いただいた。

- 小山 雄資 准教授（建築学科）
- 満塩 勝 助教（化学生命工学科）
- 酒匂 一成 准教授（海洋土木工学科）
- 福原 稔 教授（機械工学科）
- 加藤 龍蔵 准教授（情報生体システム工学科）
- 堀江 雄二 教授（電気電子工学科）
- 五島 崇 助教（環境化学プロセス工学科）

講演会への参加者は96名（工学部教職員84名、他学部教員4名、事務職員8名）であった。他に、理工学研究科、理学部との合同および第1回知財セミナーとして令和元年7月27日（土）13時～17時40分、稲盛会館で第1回理工学研究科FD講演会が開催された。工学部教員も27名が参加した。また、令和元年度の第2回理工学研究科FD講演会は、理工学研究科地域コトづくりセンターと理工学研究科FD委員会の共同主催として企画され、令和2年1月15日（水）13時30分～14時45分、総合研究棟プレゼンテーションルームで開催された。工学部教員の参加者は94名であった。これら理工学研究科FD講演会の詳細は令和元年度理工学研究科FD報告書に掲載されている。

## 2. 2 学外FD研修

令和元年8月20日に建築会館会議室（東京都湊区）で開催された日本技術者教育認定機構（JABEE）建築分野受審・審査セミナー（主催：一般社団法人日本技術者教育認定機構、協力：日本建築学会）に参加した。本セミナーは2部構成で行われ、前半ではJABEE専務理事の三田清文氏から「JABEEの動向」および「企業のJABEE参加のメリット」、JABEE建築分野審査会委員長の古賀一八氏より「2019年度基準改正について／受審審査における注意点」、最後に明治大学教員でJABEE審査委員会委員の田中友章氏より「建築系学士修士の受審審査における注意点／国際認定の現状」、以上三件の講演が行われた。後半の部は受審校からの話題提供であり、摂南大学の柳澤学氏より「エンジニアリング学士受審校からの話題提供」、武庫川女子大学の田崎祐生氏より「建築系学士修士受審校からの話題提供」、以上二件の報告が行われた。

「JABEEの動向」では、1999年以降2018年までのJABEEのあゆみ、認定の特徴、認定審査結果、認定プログラム修了生の累計数、認定プログラム数の推移、国際認定との関係といった、これまでの経緯と成果に関する報告のほか、JABEEの認知度に関する独自の調査結果や、それを受けた広報活動や審査と基準改定についての説明があった。大学の就職説明会の会場にて企業の採用担当者、大学卒業生（OB、OG）にアンケートした結果、JABEEを知らない方が7割であったという報告より、一般業界ではまだまだJABEEを含む教育の国際認証の重要度が認知されていない現況であることが示された一方、ワシントン協定（エンジニアリング系全般）、キャンベラ協定（建築設計系）といった国際協定の実効性が高まっているという説明もあり、我々としては状況を読むのが難しい状況との印象を受けた。こうした点について、三田氏の続く報告ではJABEEは企業への働きかけを強化していることが報告された。

2019年度基準改定の説明でポイントであると思われた点は、1)一斉審査と個別審査の区別をなくした。2)機関別認証と分野別認証(JABEE 他)の相互乗り入れ、以上の二点であった。とくに、今後はエンジニアリング系学士の受審は、受審校および審査側相互の負担軽減を主な理由として一斉審査を主流とする方向性であることが示された。その他、細かな技術的問題としては、判定段階を4段階から3段階にする(適合(A)と懸念(C)→満足(S)に統合)、認定基準(共通基準)項目の大括り化(26→11項目に減)など、ここでも負担軽減を意図した改定がなされたことが説明されたが、未だ新基準での審査でも、従来の基準に拘泥して細かい議論をする傾向もあり指導に苦慮していること、あるいはとくに建築分野についてはエンジニアリング系の「一斉審査」のさい、他分野の審査団に建築の総合性を説明するのに苦慮した(摂南大・柳沢氏)との意見もあり、新基準の意図の浸透にはまだ時間が掛かっている様子であった。

建築系学士修士/国際認定の現状については、キャンベラ協定には現在8つの国/地域が正式加盟し、日本は暫定加盟に留まっているが、2019年中にJABEEがキャンベラ協定に正式加盟される見込みが示された。この分野に関しては、ようやく国際的同等性の実効性が確保されてきた感がある。資格における「教育要件」の同等性の証明は実務要件・試験要件の国際互換性へと発展が見込まれ、今後の本学/大学院における教育の国際化を考えるうえで一つの検討材料であると理解した。

以上、JABEE側もこの20年を経過した現在でも国内での社会的認知の点で苦慮している一方、国際認証の進展は着実に進んでいる状況を理解できたことはセミナー参加の大きな成果であった。一方で地方国立大学における財政や人的資源の将来展望、それらを念頭においた組織改革の動向を鑑みるに、JABEE認定の継続、あるいは学士修士一貫プログラムの認定には今後少なからぬハードルが立ちほだかる可能性も感じた。こうした難しい状況のなか、JABEEを含む教育の国際認証の問題は引き続き幅広い情報収集が必要であると感じた。(木方十根, 建築学科)

## 第3章 学生による授業評価とそれを生かした授業

### 3. 1 学部授業評価アンケート分析結果

#### 3. 1. 1 学部平均値の推移とその分析結果

図3.1.1(1)は、講義・演習科目の授業評価アンケート結果の工学部全体の平均値に関して、平成28～令和元年度までの4年分の授業評価の推移を示している。なお、「工学部平均値」は、まず各設問に対する講義・演習科目の評点を学科毎に平均した後、学科ごとの科目数で重みづけて平均化して得られた値であり、学科ごとの科目数の違いが考慮されている。講義・演習科目に関するアンケートの質問項目は、①シラバスの内容と実際の授業との一致性、②授業の今後の有用性、③授業の興味深さ、④授業の理解度、⑤教材等の適切性、⑥レポート等の理解への効果度、⑦授業目標の達成感、⑧文字の明瞭性、⑨声の明瞭さ、⑩教員の熱意度、⑪質問等に対する教員の対応度、⑫レポート等の評価への満足度、⑬出席回数、⑭予習・復習の時間数、⑮総合的満足度である。

図3.1.1(1)より、ほとんどの項目で顕著な改善傾向にあることが分かる。しかしながら、⑭予習・復習に関しては、平成30年度から顕著な低落傾向にある。学生が自宅学習にかかる時間が減少していると考えられ、授業時間外学習が不足しないよう注視し対策を講じる必要がある。また、⑪教員の対応については、ほとんど変化が無く他の項目に比べ低いことから、特に改善することが望まれる。

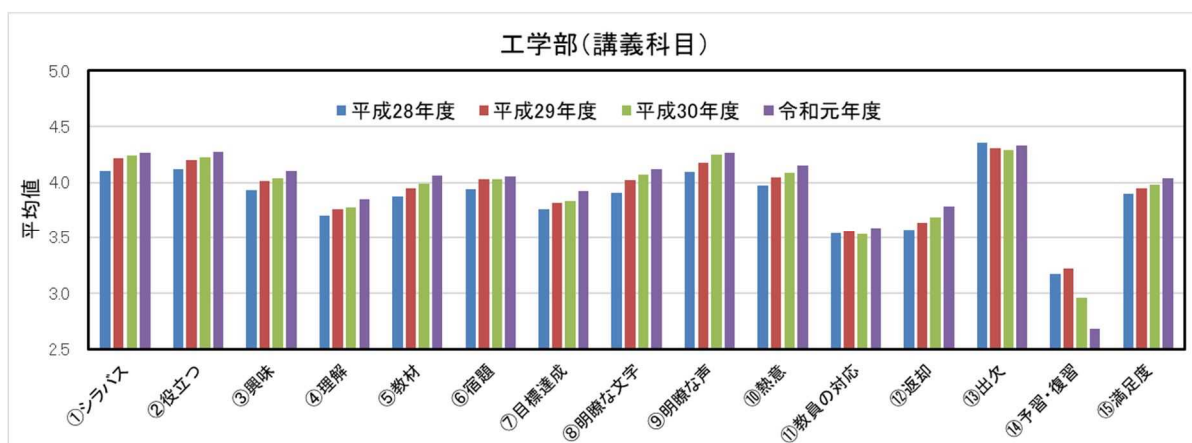


図 3.1.1(1) 講義・演習科目の結果（工学部全体の平均）（平成 28～令和元年度）

次に、平成 28～令和元年度の実験系科目に関する授業評価アンケート結果を図 3.1.1(2)に示す。実験系科目の質問項目は、①シラバスの内容と実際の実験との一致性、②実験グループの人数の適切さ、③実験装置の適切さ、④実験時間の適切さ、⑤教材の理解への貢献、⑥講義との関連、⑦理解度、⑧目標達成、⑨教員の対応、⑩教員の熱意、⑪安全教育の実施、⑫TA の熱意、⑬予習の度合い、⑭主体的に実験に取り組めたか、⑮総合的満足度である。

図 3.1.1(2)より、全体的に講義・演習科目の評点よりも高く、ほとんどの項目で顕著な改善傾向にあることがわかる。⑬予習は改善されていることから、講義・演習科目とは異なり、授業時間外学習は十分に確保されていると思われる。実験系科目については、特に大きな問題は無いと思われるが、講義・演習科目と同様に⑪教員の対応が他の項目に比べ低く変化が無いことから、特に改善することが望まれる。

平成 30 年度後期より、アンケートの実施方法を紙ベースのものから web システム(manaba)を利用したものに変更されているが、概ね前年度までの傾向が持続していることから、その影響はさほど無かったものと思われる。

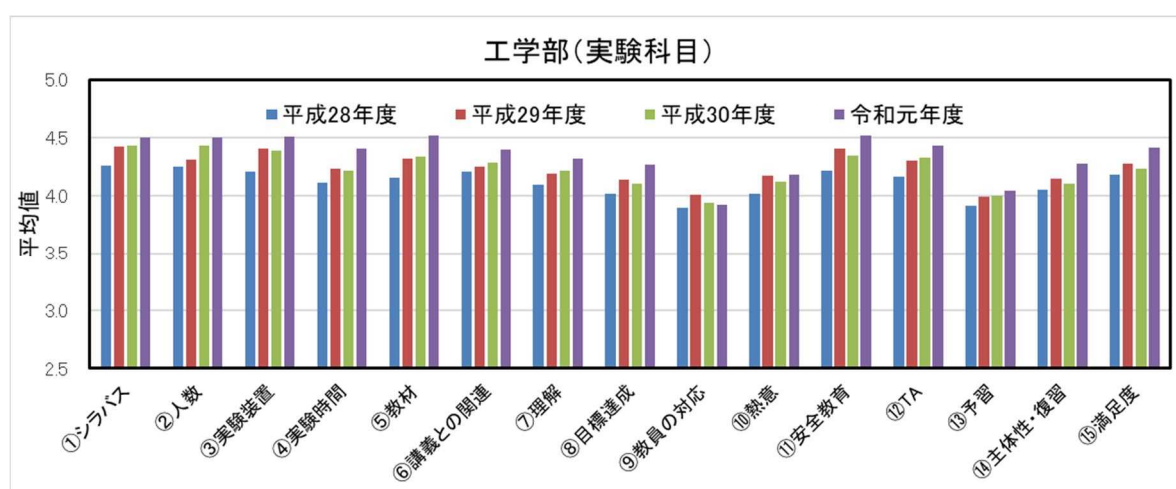


図 3.1.1(2) 実験系科目の結果（工学部全体の平均）（平成 28～令和元年度）

### 3. 1. 2 機械工学科の推移とその分析結果

機械工学科の講義科目に対して実施された授業評価アンケートの評価結果を図 3.1.2(1)に示す。この図は、前期及び後期(1年間)に開講された科目に対する各アンケート項目の評点の平均点について、平成27年度から令和元年度(5年間)までの評点の推移を示している。

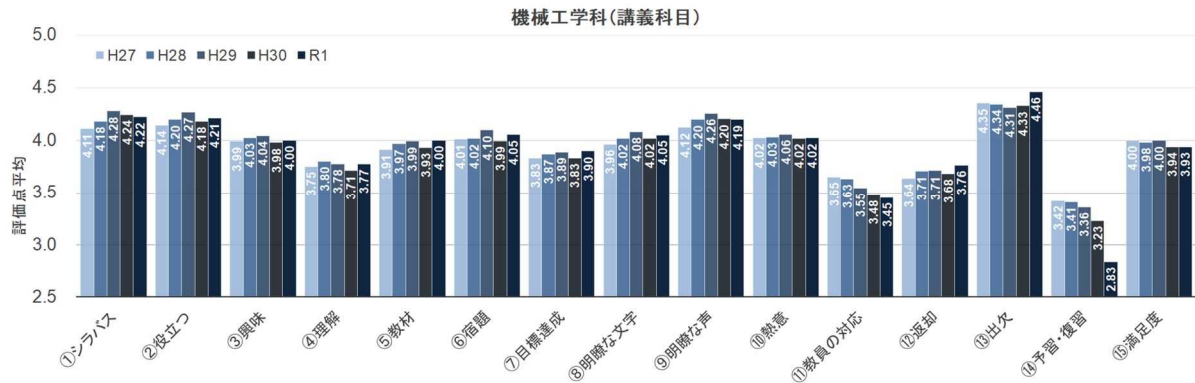


図 3.1.2(1) 過去5年間の開講科目における評価点の推移(平成27~令和元年度)

平成29年度よりアンケートの回答選択項目が「大いにそう思う(5)」、「そう思う(4)」、「どちらとも言えない(3)」、「そうは思わない(2)」、「全くそう思わない(1)」の5段階から、「そう思う(5)」、「どちらかと言えばそう思う(4)」、「どちらとも言えない(3)」、「どちらかと言えばそうは思わない(2)」、「そう思わない(1)」の5段階へと変更となっている点に注意が必要である。この変更により、高い評点の場合より高く、低い評点の場合にはより低く表れると推察される。図3.1.2(1)から、ほとんどの項目の評点は、4前後で推移しており、各教員による継続的な授業改善によって維持されていると考えられる。比較的評点が低い項目に着目すると、まず「④理解」は講義内容の学生への定着を示す重要な項目であり、今後も学生の理解度を上げるための授業改善が必要といえる。また、学生の理解度を上げることは「⑦目標達成」の向上につながるものとする。「⑪教員の対応」は減少傾向を示しており、オフィスアワーなど学生が教員に質問しやすい環境づくりが必要であろう。「⑭予習・復習」の項目も減少傾向を示しており、特に令和元年度では大きく下がった。講義内容や演習・課題の量が大きく変化したとは考えられないので、学生の意識の変化も一つの原因と考えられるが、学生が率先して予習・復習を行うようなさらなる取り組みが必要と思われる。今後も授業評価アンケートの推移を確認しながら授業改善を継続することが重要である。

### 3. 1. 3 電気電子工学科の推移とその分析結果

図3.1.3(1)および図3.1.3(2)に、電気電子工学科の過去5年分(平成27年度から令和元年度)の授業評価アンケート結果の推移を示す。図3.1.3(1)が講義科目を、図3.1.3(2)が実験科目を示している。

講義科目に関しては、①シラバス、②役立つ、⑨明瞭な声、⑬出欠は高い評価を維持し、⑤教材、⑧明瞭な文字、⑨明瞭な声は上昇傾向を示しているものの、④理解、⑦目標達成、⑪教員の対応、⑫返却、⑭予習・復習は低水準のままである。⑪教員の対応と⑫返却に関しては、教員の改善の努力が望まれる。昨年度大きく低落した⑭予習・復習は、前年度よりさらに0.28ポイント低下した。学習時間の低落の傾向は工学部全学科に共通した傾向であることから、学力の低下や学生の興味の変化以外に、学生の生活

スタイルの変化が強く影響していると考えられる。入学後の早い段階で、自宅学習を習慣付けるような指導をしっかりと行っていく必要があると考えられる。実験科目については、ほとんどの項目においても高い評価が得られており改善傾向であるが、今後も高い評価が得られるように改善を続けていく必要がある。

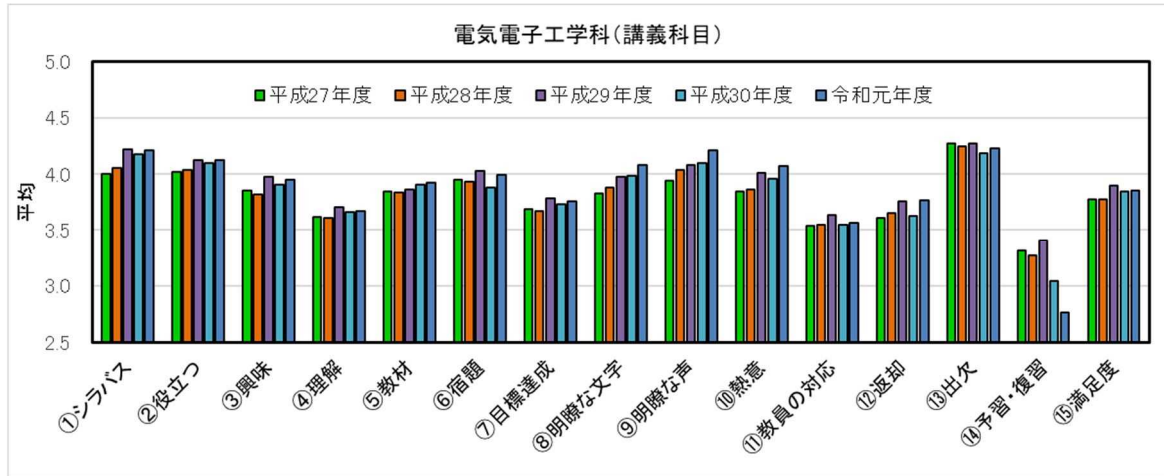


図 3.1.3(1) 電気電子工学科講義科目のアンケート結果の推移 (平成 27～令和元年度)

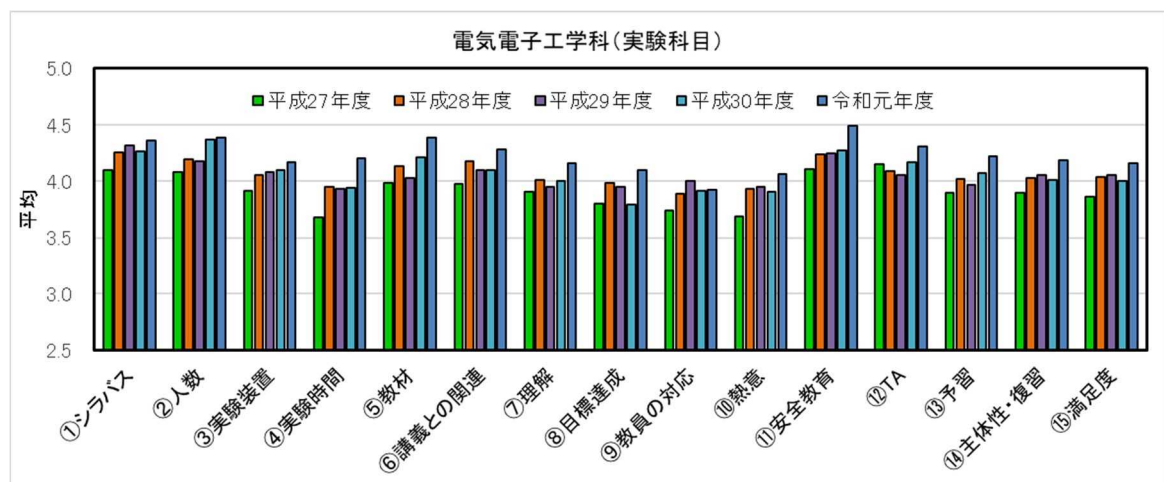


図 3.1.3(2) 電気電子工学科実験科目のアンケート結果の推移 (平成 27～令和元年度)

### 3. 1. 4 建築学科の推移とその分析結果

前年度報告と同様に、建築学科では、建築設計演習の科目が全学年にあり、講義形態は、講義とも実験とも異なるが、アンケートでは、これを講義科目に含めている。また、実験科目は、1 科目だけで比較しにくいので、講義科目についての授業アンケート結果を分析することとする。図 3.1.4 は、建築学科の講義科目の授業評価アンケート(前期および後期)で過去5年間の年度ごとの結果を示している。⑬出欠及び⑭予習・復習を除けば増加傾向にある。⑪教員の対応、⑫返却、⑭予習・復習を除き、評点が4前後の高い水準を推移している。⑫の返却については、教員側の改善が望まれる。⑭予習・復習については、平成 29 年度までは増加傾向にあったが、昨年度、本年度と大きく減少している。設計演習科目がその他科目に比べて非常に高く、従来より科目間における自習時間の偏りの問題が指摘されており、この傾向に拍車が掛かっていることが懸念される。総合的な学習時間が少ないわけではないが、この偏りに対する工夫・調整が喫緊の課題と考える。

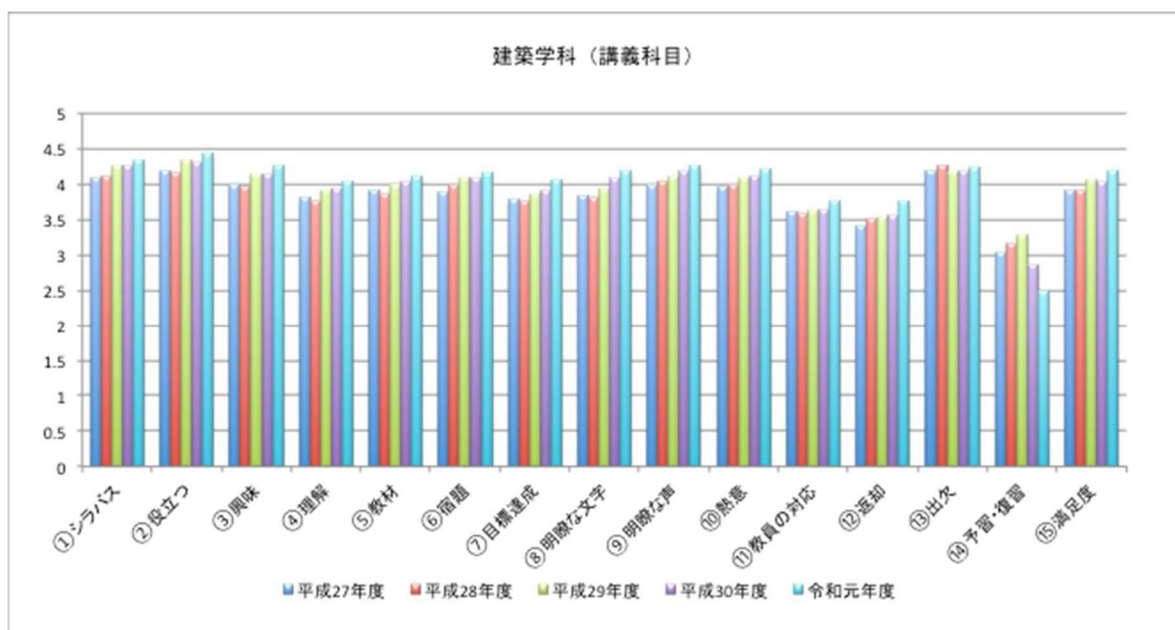


図 3.1.4 建築学科の講義科目の授業評価アンケート（講義科目）の結果  
（平成 27～令和元年度）

### 3. 1. 5 環境化学プロセス工学科の推移とその分析結果

最近3年間(平成29年～令和1年度)の講義科目と実験科目の授業評価アンケート結果を図3.1.5(1)と(2)にそれぞれ示す。教員側の取り組みに関する項目である①シラバス、⑤教材、⑧明瞭な文字、⑨明瞭な声、⑫返却について年次的に向上している。学生が感じている②役立つ、③興味、④理解、⑦目標達成、⑩熱意、⑮満足度は今年度大きく向上した。⑪教員の対応と⑮満足度は前後期ともに工学部平均とほぼ同じであった。例年問題となっている⑭予習・復習に関しては工学部平均に対して前期は100%，

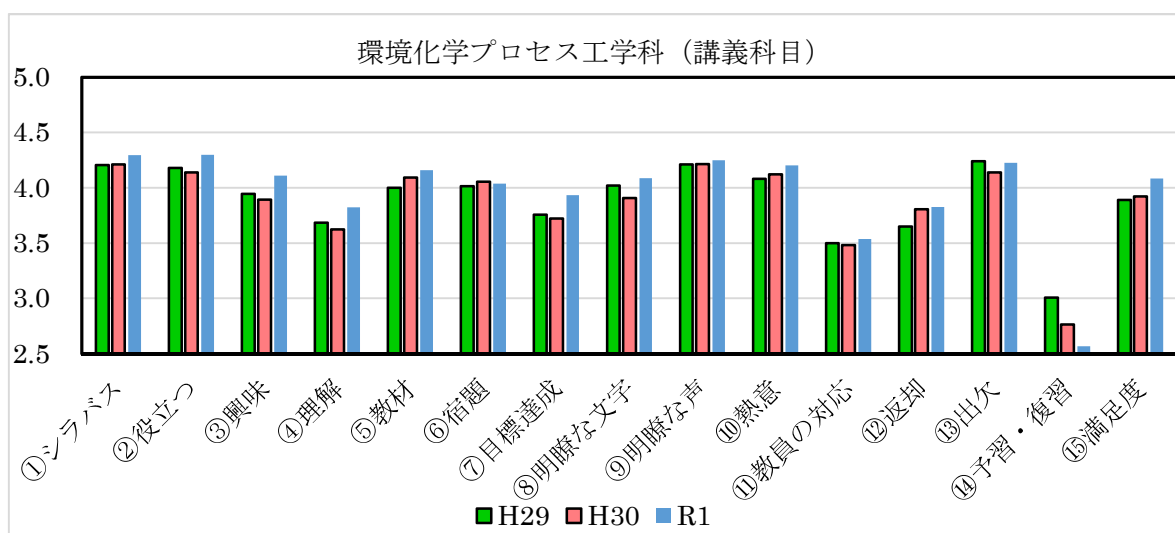


図 3.1.5(1) 環境化学プロセス工学科における講義科目アンケート結果  
（平成 29～令和 1 年度）

後期は 91%とバラツキがあった。低下傾向が続いているため、検討が必要である。実験科目では①シラバス、③実験装置、④実験時間、⑤教材、⑩安全教育等は高いレベルを維持している。⑫TA の対応は工学部平均の 103%と上回っている。しかしながら、⑨教員の対応は低下したが、工学部平均と同じである。また、予習は低下したが、主体性・復習は向上した。⑮満足度は高く、工学部平均の 106%であった。

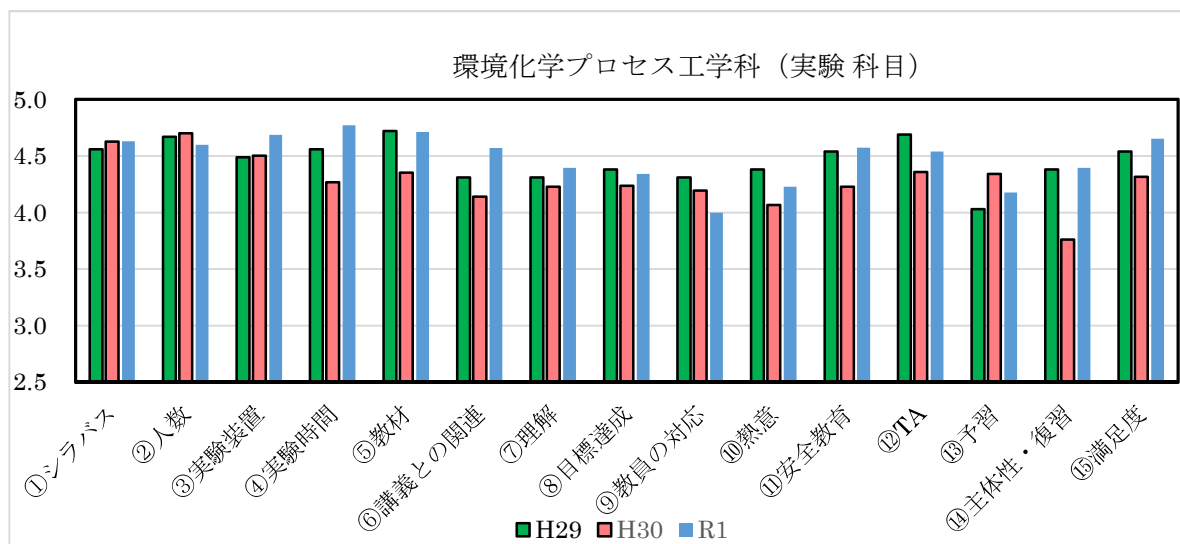


図 3.1.5(2) 環境化学プロセス工学科における実験科目アンケート結果  
(平成 29~令和 1 年度)

### 3. 1. 6 海洋土木工学科の推移とその分析結果

まず、本学科において、平成 28~令和元年度の 4 年間に実施した講義・演習科目の授業評価アンケートの結果を図 3.1.6(1) に示す。本学科における令和元年度の評価は、⑥宿題を除いて、工学部の平均値を上回った。特に、⑥宿題と⑭予習・復習以外は、この 4 年度間で最高の評価を得ている。⑫試験やレポートの返却に対する満足度は、過去 3 年間の落ち込みからV字回復しており、特筆に値するであろう。一方、⑭予習・復習の時間数の評価が平成 28 年度より徐々に低下し、他の項目と比較して大きく下回っており、注意を要する。講義内容やその周辺領域に対して、より大きな関心を学生に持たせるといった工夫や改善が必要である。

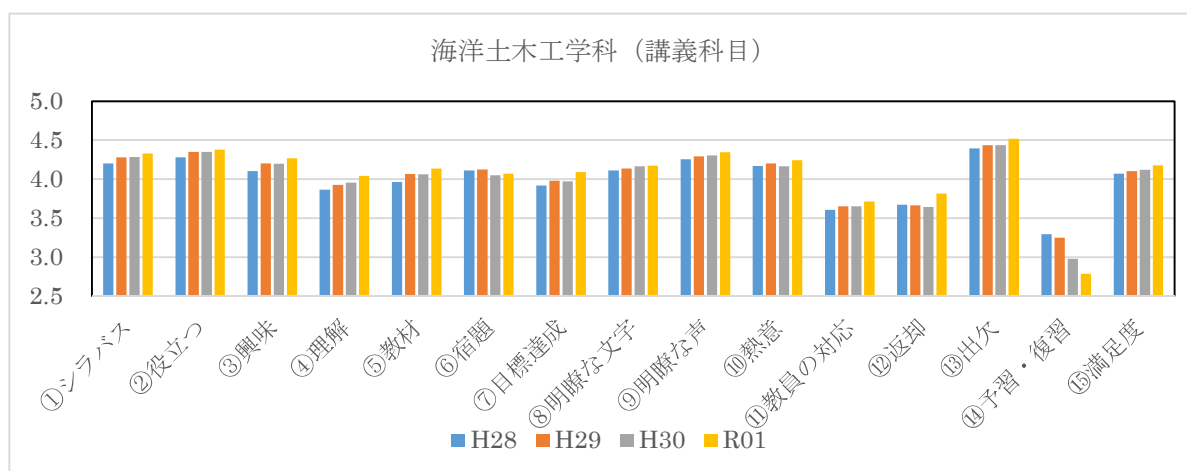


図 3.1.6(1) 海洋土木工学科の講義・演習科目のアンケート結果（平成 28~令和元年度）

次に、本学科において、平成 28～令和元年度の 4 年間に実施した実験系科目の授業評価アンケートの結果を図 3.1.6(2) に示す。ここで、アンケートの実施科目数は、4 科目であった。本学科における令和元年度の評価は、②実験グループの人数の適切さの 1 項目を除いて、工学部の平均値を上回った。この②実験グループの人数の適切さの評価は、平成 29 年度に大きく低下しているが、これは、海洋土木工学科棟の改修工事に伴い、選択科目である実験科目の一つを夏休み期間中の集中講義とする必要があり、受講生数が激減したためであると考えられる。学科棟の改修後は、この評価が戻ったが、前年度に引き続いて工学部の平均値を下回った。①シラバスの内容と実際の実験、③実験装置の適切さ、⑥講義との関連、⑤総合的満足度は、高い評価で安定してきている。⑤教材の理解への貢献、⑦実験の目的の理解、⑧目標達成、⑫TA の熱意は評価が徐々に上昇してきている。ただし、④実験時間、⑨教員の対応、⑩教員の熱意、⑬予習の度合いは、評価が下がってきているし、⑪安全教育の実施、⑭主体的に実験に取り組めたかに関しては、評価が不安定であるので、注意しておく必要がある。

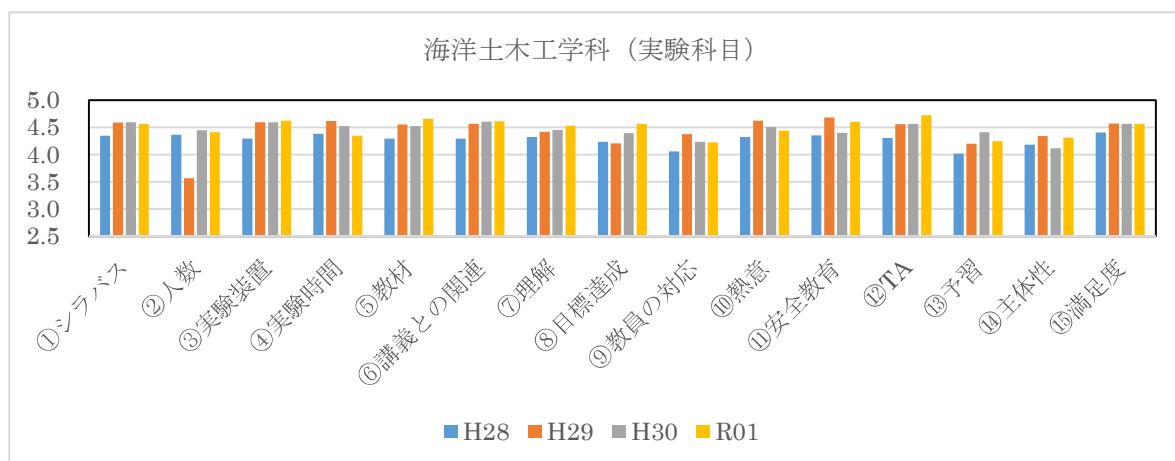


図 3.1.6(2) 海洋土木工学科の実験系科目のアンケート結果（平成 28～令和元年度）

### 3. 1. 7 情報生体システム工学科の推移とその分析結果

平成 21 年度の改組により情報工学科と生体工学科・生体電子工学コースが統合され誕生した情報生体システム工学科が、卒業生を送り出したのは今年度で 8 回目となる。FD 授業評価アンケートは、平成 21～30 年度と令和元年の 11 年間収集されており、これらのデータから経年変化の分析（平成 29,30 年度）と今年度の工学部平均値との比較分析を行うこととする。

講義系科目に関するアンケートの質問項目は、①シラバスの内容と実際の授業との一致性、②授業の今後の有用性、③授業の興味深さ、④授業の理解度、⑤教材等の適切性、⑥レポート等の理解への効果度、⑦授業目標の達成感、⑧文字の明瞭性、⑨声の明瞭さ、⑩教員の熱意度、⑪質問等に対する教員の対応度、⑫レポート等の評価への満足度、⑬出席回数、⑭予習・復習の時間数、⑮総合的満足度であった。

講義系科目の集計結果を図 3.1.7(1) に示す。半分の項目において昨年度の値を上回っており、改善が見られているが、「①シラバス」、「⑧明瞭な文字」は横ばいになり、「⑬出席回数」は 3 年連続で下がっていることから、学生の指導が必要とされ、「⑭予習・復習の時間数」は急激に低下している。この低下は工学部全体に現れているためアンケートの採り方の変更が原因とも考えるため、来年度の変化を注意す



る必要ある。数値的には、「⑩質問等に対する教員の対応度」、「⑭予習・復習の時間数」を除く項目の評価は 3.5 を越えており、ほぼ満足できる水準である。また、今年度の工学部平均値と比較すると、全ての項目において工学部平均を若干下回っており、改善する必要がある。

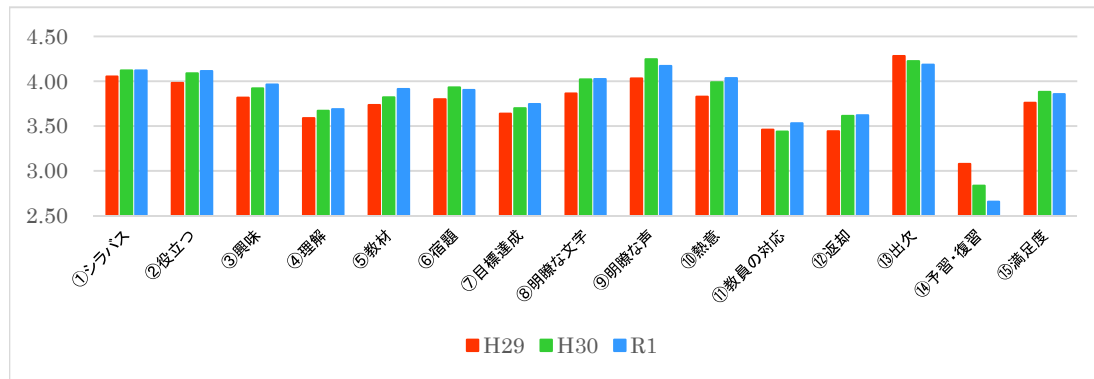


図 3.1.7(1) 情報生体システム工学科の講義科目授業評価アンケート結果の推移 (H29,30, R1)

実験系科目の質問項目は、①シラバスの内容と実際の実験との一致性、②実験グループの人数の適切さ、③実験装置の適切さ、④実験時間の適切さ、⑤教材の理解への貢献、⑥講義との関連、⑦理解度、⑧目標達成、⑨教員の対応、⑩教員の熱意、⑪安全教育の実施、⑫TA の熱意、⑬予習の度合い、⑭主体的に実験に取り組めたか、⑮総合的満足度であった。

実験系科目の集計結果を図 3.1.7(2)に示す。今年度の評価は、すべての項目について 3.5 以上であり満足できる水準である。また、昨年度と比較して「④実験時間の適切さ」、「⑨教員の対応」、「⑬予習の度合い」、「⑭主体性」、「⑮満足度」が若干ながら下がってしまった。一昨年度から実験テーマによってアクティブラーニングの要素を取り入れた動画教材を準備したものがあり、「⑬予習の度合い」は昨年に低下したが、改善した結果、上昇した。「⑫TA の熱意」が年々上昇しているのは、TA への教育と指導が良くなったと考える。講義と同様に実験においても「教員の対応」が 3.5 付近で低迷している。これは情報生体システム工学科の教員数が急速に減少したため、講義と同様に実験の準備等も十分な時間をかけられないなどの問題が生じていると思われる。そのため、各教員の授業負担を考慮した改善を行う必要がある。

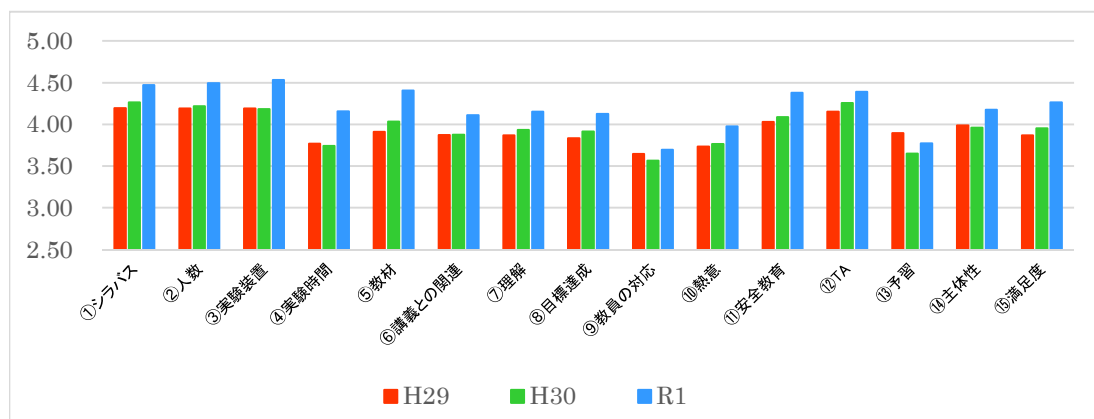


図 3.1.7(2) 情報生体システム工学科の実験科目授業評価アンケート結果の推移 (H29,30, R1)

以上のように、講義系科目及び実験科目のアンケート結果の推移及び分析から、情報生体システム工学科での授業は、アンケート点数の評価としては今年度も昨年度と同様に、教員及び TA の努力により十

分な水準を保っていること分かった。しかし、情報生体システム工学科の教員が減る一方で補充が行われていないため、学生数が同規模の電気・電子工学科に比べ教員数が70%未満と少なく、今年度末に1名の教員が退職するため今年度以上に低下する。このような状況で、十分な教育を行うためには、各教員により一層の改善が求められるが、同時に教員補充等の対策を期待する。

### 3. 1. 8 化学生命工学科の推移とその分析結果

令和元年度のアンケート集計結果を平成29～30年度分と合わせて図3.1.8(1)に示す。図を見ると、項目⑪、⑭を除き評価は概ね4前後となっており、工学部・他学科と比較しても遜色のない結果であった。評価の低い項目の内、まず項目⑭“予習・復習”の評点2.71は昨年度の2.88より低い。一方で⑥宿題や⑮満足度は上昇しており、受講生が宿題とされた課題以外にどのような予習・復習をすればよいのかわかっていないのではないかと考察でき、低学年の間に具体的な予習・復習の実践法を指導していくことが更なる改善に繋がるのではと考える。次に項目⑪“教員の対応”が低く、各教員が学生に対して十分なケアが行えていないことが示された。財政の劣悪化や諸業務の肥大化が最大の本業である教育を侵食し始めていることが危惧される。項目⑫“返却”もH29年度は低かったが、年々改善の傾向にあり、今後の推移を見守る必要がある。レポート等はJABEE用のエビデンスとして保管する教員もいると考えられ、その際、時間的・財政的にコピーする余裕がないことが一因として考えられる。今後、「manaba」等の教育支援ツールを使用し効率的にレポートの管理、返却を行うようになり、少しずつでも改善がなされることを期待する。

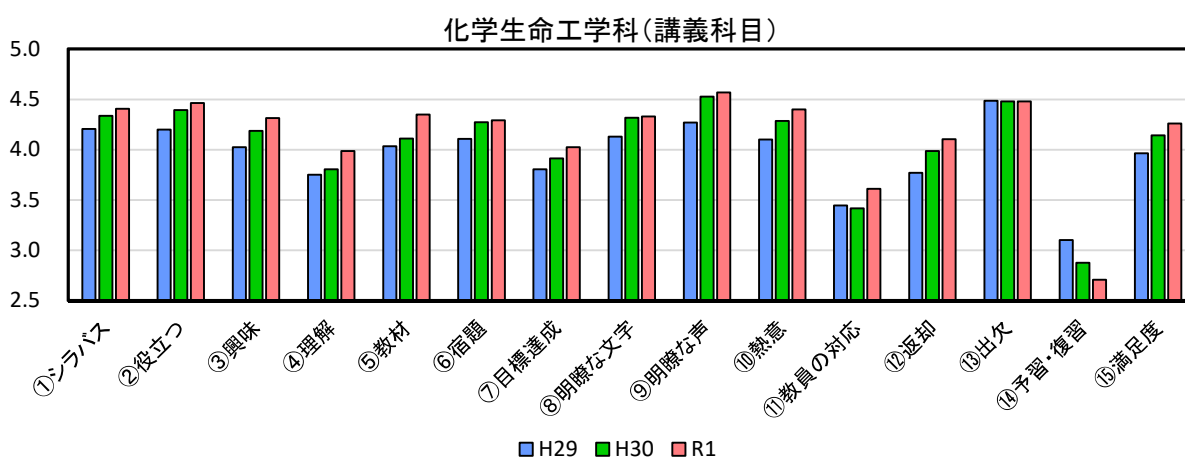


図 3.1.8(1) 化学生命工学科におけるアンケート結果

次に、項目②、④、⑦、⑩、⑮について、平成23年度からの経年変化を図3.1.8(2)に示す。H28年度において一部の項目でポイントが下がる傾向が見られたが、昨年度から本年度にかけてはすべての項目で改善されており、FD活動の成果を読み取ることができる。とくに、④理解と⑮満足度の項目が上昇しており、習熟度が進んでいる様子が読み取れること、②役立つの項目も上昇しており、時代や社会のニーズに即した教育内容に改善されている様子が読み取れることは意義深い。この上昇傾向を維持できるように、FD活動を継続していくことが重要である。

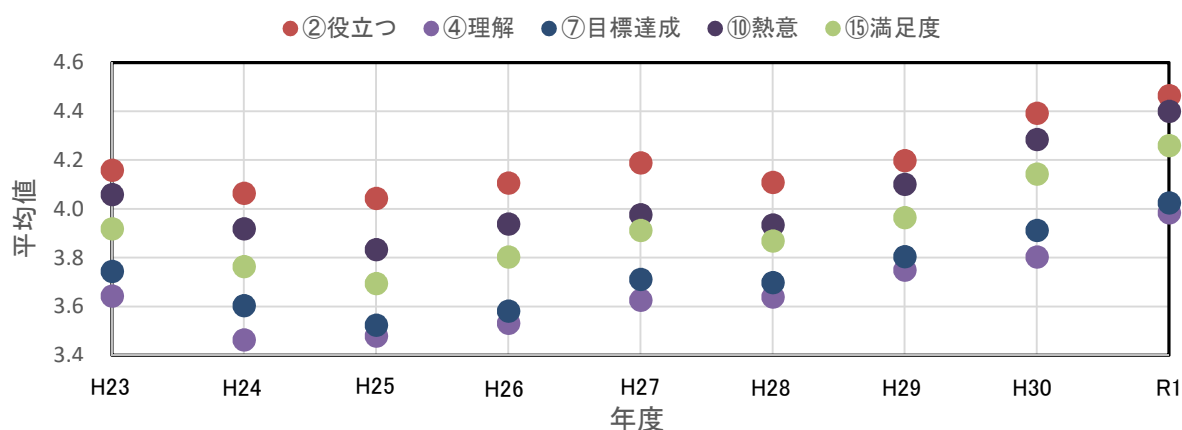


図 3.1.8(2) 化学生命工学科における主要アンケート結果の経年変化

### 3. 2 授業計画改善書の各学科の活用状況

#### 3. 2. 1 機械工学科の活用状況

学科のFD委員が収集した授業計画改善書は、授業評価アンケートの評価点や科目GPAとともに専攻教育評価委員会が整理して分析を行っている。専攻教育評価委員会は、整理した内容と分析した結果を「専攻教育評価委員会報告書」としてまとめている。授業計画改善書は、専攻内に設置されたパソコンのフォルダ内に各年度、各期ごとに整理され、全教員に閲覧できるように公開されている。また、この報告書は冊子とCD-ROMの形で保管され、授業改善を実施する際の資料として利用できるように全教職員に公開されている。

#### 3. 2. 2 電気電子工学科の活用状況

授業計画改善書は、各科目の授業評価アンケート評点とそのレーダーチャート、および授業評価アンケート回答用紙(実施済みのもの)と共に学科事務室や会議室のJABEE用保管庫にて保管され、教員はいつでも閲覧できる。主として工学部FD委員が管理し、JABEE活動の一環として、専攻(学科)FD委員会において授業改善に取り組む資料として活用している。

#### 3. 2. 3 建築学科の活用状況

教員は、授業評価アンケートの集計結果に基づいて、授業計画改善書を作成し、次年度以降の授業に反映させることとなっている。また、授業アンケートの全科目の評点は学科内で閲覧可能であり、問題点を共有することとしている。本学科では、平成19年度より授業満足度の評点と授業担当時間を用いて、教員の教育貢献度を評価するシステムを導入している。この結果も学科内で閲覧可能にしている。しかし、授業改善計画書は各期末に提出することになっているが、各教員からの提出状況は芳しくない。授業アンケートの結果から教員による授業改善の努力は何えることから、授業改善計画書が形式的な書類となっている可能性がある。大学における個人の業務時間の増加傾向から考えるに、授業改善計画書の簡易化など、名を捨てて実を取る改善が必要と考える。

#### 3. 2. 4 環境化学プロセス工学科の活用状況

FD委員会のアンケート調査より返却された前期/後期授業科目の授業計画改善書について、電子フ

ファイル化し教員が自由に学科サーバで閲覧し確認できる体制がある。適宜学科会議や学期末に開催する教員間ネットワークで議論する仕組みを整えている。さらに次学期開講予定科目のシラバスの提示を行っている。カリキュラムについても WG で検討・精査を実施している。今後はこのような継続的な取り組みにより、評価の再確認と改善を図っている。

### 3. 2. 5 海洋土木工学科の活用状況

工学部FD委員会が学生に対して実施する専門科目の授業アンケートの結果に基づき、授業担当教員は、授業計画改善書を作成してFD委員に提出する。FD委員は、これを学科教育システム評価委員会に提出する。また、授業担当教員は、専門科目の学習目標の達成度を自身で評価し、この結果も学科教育システム評価委員会に提出する。学科教育システム評価委員会は、提出された授業計画改善書と学習目標の達成度評価を比較・検討し、学科会議で報告する。そして、学科会議で提起された教育上の問題点等に関して、学科内の基礎科目部会、環境システム科目部会、建設システム科目部会や、JABEE WG および教務委員会で検討し、改善方法を策定する。このような PDCA サイクルを構築し、授業計画改善書と学習目標の達成度評価の両者を活用しながら、教育の点検および改善を継続的に実施している。

### 3. 2. 6 情報生体システム工学科の活用状況

情報生体システム工学科では平成 22 年度より、授業計画改善書を学科事務室に保管し、全ての教員が閲覧可能な状態で管理を行っている。各教員による授業改善への取り組みおよび結果を教員全員で共有することで、学科全体の教育内容の継続的な改善に貢献している。また、学科としての JABEE 申請は行わないことにし、その代わりに学科内で組織している教科グループ WG において、半期に 1 度、全開講科目について担当教員による報告と振り返りを実施し、科目の内容の見直しなどの検討の際に、資料として活用している。

### 3. 2. 7 化学生命工学科の活用状況

授業計画改善書は応用化学工学科応用化学コースの時代から引き続き同一の理念の下で活用を図っている。すなわち、授業計画改善書を、卒業生アンケート集計結果、授業参観報告書およびそれに対する回答書等とともに、各教員が分析、評価し、必要に応じて互いに連携する科目の担当教員グループで作るカリキュラム小委員会において、十分な教育効果が達成されているかどうか討論されている。検討した結果や問題に対する対策は学科内教育プログラム改善検討委員会において報告され、全体カリキュラムとの整合性も考慮しつつ、最も効率の良い方法で運用できるよう検討され、必要な改善がなされている。このように、授業計画改善書等のFD活動書類を資料として、教員間で協力・連携そして切磋琢磨するシステムが構築され、その中で授業内容・方法の改善もなされている。令和元年度は、平成 30 年度に引き続き、授業アンケート評価結果を利用して、エクセレントレクチャー賞を推薦している。

## 第4章 学科におけるFDとJABEEへの取り組み

### 4. 1 JABEE認定プログラムを実施している学科での取り組み

#### 4. 1. 1 機械工学科

機械工学科は、平成16年度にJABEE認定の審査を受けた。平成18年度のJABEE中間審査において、平成16年度に評価Wの指摘を受けていた全ての評価項目を改善している。平成21年度実施のJABEE再審査では、評価Cを受けた項目が10箇所あり、W以下の評価を受けた項目は無く、6年間のJABEE認定継続が認められた。平成27年度実施のJABEE再審査では、評価Cを受けた項目が11箇所あったが、W以下の評価を受けた項目も無く、さらに6年間のJABEE認定継続が認められた。

本学科は、平成22年度から広範囲にわたる機械工学領域の教育研究を3つのコース(生産工学コース、エネルギー工学コース、機械システム工学コース)で分担実施している。各コースは、複数の研究室により構成され、それぞれにコース長をおいている。この3名のコース長と副専攻長から組織される「専攻教育委員会」において、学科の教育プログラムを点検していたが、平成25年度からその役割は「コース長会議」に移管された。この「コース長会議」を基に、学科の教育環境のさらなる改善と実施体制の強化が図られている。学科内には、さらに、教務委員会委員、FD委員会委員、JABEE委員会委員等からなる教育の現状を分析する委員会としての「専攻教育評価委員会」と、JABEE認定のための審査資料作成を行う「専攻JABEEワーキンググループ」があり、平成27年度にはJABEE認定の再審査を受けるため審査項目や評価項目の確認などを検討して、JABEE認定の再審査の実施を行っていた。また、平成26年度は、「専攻教育評価委員会」において、PDCAサイクルの「評価」を実践強化するために運営規程の検討・修正を行うとともに、教育環境に関するアンケートを実施した。さらに、「専攻JABEEワーキンググループ」では、学習・教育到達目標の達成度評価方法を提案して、4年生の卒業時におけるJABEE修了判定の評価を行った。平成27年度より1年生から4年生まで成績の自己点検として「学習・教育達成目標(教育目標)の達成度の自己点検」を続けている。さらに平成26年度からは卒業論文発表時に複数教員による発表評価を「卒業論文発表評価表」により実施しており、評価結果をすべての発表学生にフィードバックしている。これらの委員会およびワーキンググループによって、教育方法や教育改善に関する実質的に活動が実施され、促進するように継続的に検討が行われている。

#### 4. 1. 2 電気電子工学科

電気電子工学科では、平成28年10～11月に、JABEE継続審査を受審し、6年間の継続認定が認められた。今年度は、専攻(学科)FD委員会を計4回開催し、その他専攻会議や電子メールでの議論、シラバス点検、各種アンケートの実施などで学科の教育改善に取り組んできた。今年度の専攻FD委員会を含む学科の教育改善活動は以下の通りである。

- (1) シラバスの点検:専攻FD委員会において、専門教育科目の全シラバスを点検し、シラバスの整備を行っている。
- (2) 授業評価アンケート結果等を活用した授業改善:専攻FD委員会において、科目の成績評価と授業評価アンケート結果、授業計画改善書等をもとに授業の検証を行ない、必要に応じて担当教員と連絡を取っている。
- (3) 新入生アンケートと追跡アンケートの実施:新入時とその1年後にアンケートを行い、学生の実態を

把握し、改善のための資料としている。

- (4) 学生定期面談の実施:各期末の指導教員による学生定期面談を義務化し、指導・助言する体制を整えている。
- (5) 教員間連絡ネットワークの構築:科目間連携会議を基礎科目と各コース専門科目で行い、専攻FD委員会で結果を議論している。
- (6) 社会からの要望調査の実施:来学された企業採用担当者を対象としたアンケート、学科卒業生と学科教員との懇談会、卒業生アンケートを実施し、社会からの要望を聞き取り、教育改善に役立てている。

#### 4. 1. 3 建築学科

建築学科では、昨平成 29 年度に JABEE の継続審査を受審し、6年間の継続認定が認められた。建築学科における最近のFD活動と JABEE 関連の主な取組は以下のとおりである。

- (1) 公開ホームページの更新:ホームページの英語化に伴い、公開ホームページを更新した。また、更新したホームページでは各研究室のページとのリンクや SNS との連携を図り、情報発信の利便性を向上させた。
- (2) 改正建築士法に伴う建築士試験への対応科目の検討と整備:建築士法の改正により一級建築士試験の受験資格が変更になり、その対応として新規科目を立ち上げ、その内容について、教員団で検討を重ね、整備した。
- (3) 教員の教育負担と教育貢献度の評価:教員の教育負担を調べて教育貢献度を評価し、資料に基づいて授業の分担を再検討した。
- (4) 期末および中間授業アンケートの実施:期末授業アンケートだけでなく、中間授業アンケートも実施した。中間授業アンケートは、グループ形式で実施し、進行中の授業の改善を促した。
- (5) 改組に伴うカリキュラムマップの更新:昨年度更新したカリキュラムマップを、改組に伴い整備変更した。
- (6) 改組に伴うシラバス・授業実施記録等の点検:改組に伴うプログラムに関する各授業のシラバス・授業実施記録等に関する点検システムを見直し、それに基づいて点検を行った。

#### 4. 1. 4 海洋土木工学科

海洋土木工学科のFD活動は、JABEE プログラムの実施・点検に沿った教育改善の一環として、次のような確立した手順で行われている。すなわち、工学部FD委員会が学生に対して実施する専門科目の授業アンケートの結果に基づき、授業担当教員は、授業計画改善書を作成してFD委員に提出する。FD委員は、これを学科教育システム評価委員会に提出する。また、授業担当教員は、専門科目の学習目標の達成度評価を行い、この結果も学科教育システム評価委員会に提出する。学科教育システム評価委員会は、提出された授業計画改善書と学習目標の達成度評価の結果を比較・検討し、学科会議で報告する。そして、学科会議で提起された教育上の問題点等に関して、学科内の各委員会で議論し、改善計画を策定する。

なお、本学科では、エンジニアリング・デザイン教育の充実を図っている。まず、3 年次には、「海洋土木デザイン工学 I」において、エンジニアリング・デザインの実例を学ぶ。そして、実際のプロジェクトの調査方法や代替案を立案し、レポートを提出して発表を行う。次に、4 年次には、「海洋土木デザイン工学

II]において、3～4人程度のグループで、知識、情報や技術を駆使して、社会的・技術的な問題点を自ら発見して解決することを体験する。そして、その成果をポスタ・セッション形式で発表する。こうして学生のチーム力を養いながら、課題発見能力や問題解決能力の高い技術者の養成を試みている。更に、本学科では、以前より、アクティブ・ラーニングを幾つかの科目で採り入れている。例えば、「土木技術者倫理」では、技術者に要求される倫理に関して、グループによる調査・発表や、ディベートを行っている。「海岸防災工学」では、防災に関して、グループによる調査・発表や、避難ワークショップを実施している。「海洋土木工学総合演習II」では、技術士による講演とアクティブ・ラーニングを1コマ実施している。

#### 4. 1. 5 化学生命工学科

化学生命工学科の前身である応用化学工学科応用化学コースが、平成18年度の審査によりJABEE認定を受け、平成29年度に認定継続審査を受審し、6年間の追加認定を受けた。JABEEに関する情報は学科ホームページを通じて広く公開されており、学習・教育目標とJABEE基準との対応、学習・教育目標を達成するための授業課題の流れ、授業時間などの情報を閲覧することが可能になっている。また、教育改善のためのアンケート調査が、環境化学プロセス工学科および同窓会との共催による講演会の際に既卒業・修了生を対象に1回、年度末に新卒業・修了生を対象に1回、計2回継続的に実施され、結果は教室会議および学科ホームページを通じて情報共有、公表されている。アンケート項目中の共同利用施設に対する評価結果は学科長名で各施設長等へ送付され、改善等の一助としてもらうとともに、学科と施設等との連絡網の構築を図っている。さらに、工学部統一書式の自己点検表(ポートフォリオ)を活用し、学生自らが自己点検を行い継続して改善する仕組みを導入している。新入生については初年度に重点的なケアが必要であるとの考えから、後期が開始される時期に全学生の面談を担任教員が行い、単位の取得状況、サークル活動やアルバイトと勉強との両立状況、進路の検討状況についてインタビューを実施、指導している。同様に、成績不調者に対しても、インタビューを実施している。これらのインタビューでは、報告の書式を学科独自に作成し、重要なインタビュー項目が欠落しないように工夫している。さらに、インタビューの結果を書面として保管し、必要に応じて、当該学生の過去のインタビュー結果を参照しながらインタビューを実施できるようにしている。これらの活動は平成26年度に工学部で新入生に対して導入されたアドバイザー制度・学生相談員制度に先んじて行ってきたものであり、これらの新制度発足後もそれらと矛盾の無いように自己点検表制度等を継続的に運用している。平成31年4月新入生に対しても、これまでのインタビュー活動から得たノウハウも活用して、学生相談員の活動を効果的に取り入れ、より良い指導をすることができた。

また、授業公開・参観についても積極的に取り組んでいる。具体的には、各教員が年間1科目は必ず講義を公開し、どの科目に誰が参観するかを定め、全教員が必ず他の教員の参観を受ける仕組みを導入している。

以上のような取り組みを継続的に実施しているが、更なる改善を目指し、学科内に教育プログラム改善検討委員会を設置して検討を重ねており、PDCAサイクルを構築している。

## 4. 2 JABEE を受審していない学科での取り組み

### 4. 2. 1 環境化学プロセス工学科

本学科では平成 16 年度より継続してきた JABEE 認定を平成 26 年度に終了し、これに代わる取り組みとして、平成 26 年度入学生より公益社団法人化学工学会の認定資格である「化学工学技士(基礎)」の取得を意識した新カリキュラムを実施しているほか、本学を試験会場とした団体受験を実施している。令和元年度は昨年度に続き 8 月下旬から 9 月上旬に学科教員が講師となり受験対策用の集中講義を行った。合格率は 19% で昨年度の 29% より低下した。4 年生は 10 名受験のうち 5 名が合格して合格率が 50%、3 年生は 32 名が受験し 3 名が合格して 9% であった。目標としている合格率は 60% であり、合格率アップに向けて補習内容の見直しや講義内容の修正など、対策が必要である。

学科のFD活動においては、学期末および学期中間に行われる学生授業アンケートやその結果に対する授業改善計画書の作成、FD講演会への参加などに取り組んでいる。さらに、本学科教職員は、原則として前期末および後期末に開催される教員間ネットワークに参加している。教員間ネットワークは開講期の直前に開催されるもので、各教員がどのような講義を行うのかシラバスを公開して教員間の相互理解を深めている。また、カリキュラム変更等の教務事項の確認を行っている。尚、シラバスおよび授業改善計画書は電子ファイル化して学科のサーバにおかれており、学科教員がいつでも閲覧できる仕組みが整備されている。

学生は毎期ごとに個人の学習達成目標の到達度を再確認・自己評価させる意味で、ポートフォリオを作成している。尚、ポートフォリオを印刷できるコーナーを学科図書文献室に設置している。学部 1, 2 年生には年 2 回、全教員が面談員となり定期個別指導(学生面談)をチーフアドバイザーの教員が企画し実施することで、学修指導ならびに生活指導を行い学生と教員との間のコミュニケーションをとっている。3 年生は後期の研究室配属後に研究室で面談を実施しているほか、4 年生には卒業研究の従事記録を記録させている。また、学生相談員による相談会を実施し、学修、生活について気軽に相談できる機会を設けている。

### 4. 2. 2 情報生体システム工学科

情報生体システム工学科は、平成 21 年度に情報工学科と生体工学科・生体電子工学コースが統合されて新学科となり 11 年間で経過した。今年度は、新学科の卒業生を送り出して 8 年目となる。JABEE への申請は学科としては行わないことに決定し、その代わりに学科内の教科グループ WG を組織し、開講科目とカリキュラムの改善に取り組んでいる。

情報生体システム工学科では、教育企画委員会と、FD推進委員会により、学科の教育改善などのFD活動を担っている。FD推進委員会の下には、教科グループ WG(情報基礎科目、ソフトウェア科目、工学基礎・教養科目、語学科目、実験科目)が設置されており、前期と後期の終わりに全教員による科目ワーキングを開催し、各科目の履修状況、単位取得状況、講義内容、成績評価基準などを報告し、学科の教育内容についての評価・検討を行っている。ここ数年、学生の数学の学力低下が懸念されており、工学基礎・教養科目 WG では、数学に関する授業の内容を科目間で調整している。ソフトウェア科目 WG でも同様に、プログラミング言語に関する講義や演習の内容を検討し、科目間での調整を行った。実験科目 WG では、昨年度末の計算機システムの導入に伴い、実験機器の更新や内容の見直しを検討して



いる。

情報生体システム工学科では、授業計画改善書を教員間で互いに閲覧し、各教科グループWGで積極的に活用できるように学科事務室に保管・管理している。また、1年生には、高校における数学・理科の詳細な履修状況、志望動機、進路希望などを調査する新入生アンケートを実施して、学生への指導の参考にするとともに、カリキュラム改善に役立てている。

学生は毎期ごとに個人の学習達成目標の到達度を再確認・自己評価させる意味で、ポートフォリオを作成し、各期での指導教員の面談時に成績表と学生が作成したポートフォリオの確認を実施している。また、学部1、2年生に対しては、学生相談員による面談会を実施して、学生の学修や生活についての相談を受け付けている。

## 第5章 GPA制度の現状と学習成果

平成18(2006)年度のFD報告書において、GP制度の現状と問題点の整理がなされ、GPAの推移、分布、GP制度とJABEEとの関係、授業アンケート調査結果との関係について調査・検討がなされた。平成19(2007)年度と平成20(2008)年度は年間GPAの推移、年間修得単位数の推移、入学者数に対する卒業生数の割合の推移が調査された。平成21(2009)～平成27(2015)年度も平成20(2008)年度の調査を継続し、GPAと授業アンケートデータの関係が調査され、学習成果と学習の質の関連性についての分析が試みられた。本年度も継続しこれらの調査・分析を試みたが、5.1の年間GPAの推移は平成27年度入学生以降のデータについて報告する。

### 5.1 年間GPAの推移

平成29年度報告書までは、平成15(2003)～平成29(2017)年度入学生の年間GPAの平均値を経過年数別のデータを取り纏め、入学年度による年間GPAの推移について報告してきた。概ね次のような傾向が見られた。1)在学1年目の年間GPAに対し在学2年目の年間GPAが低くなる。2)在学2年目の年間GPAに対し在学3年目の年間GPAが高くなり、在学1年目の年間GPAと同程度まで回復する。詳細は平成29年度のFD報告書を参考いただきたい。

平成28年度に共通教育改革が行われた。初年次教育プログラムが設定され、「初年次セミナーI」、「初年次セミナーII」が開講された。また、グローバル教育プログラムとして、「英語」の他、「異文化理解」が新設された。さらに、これまで基礎教育科目として共通教育で開講されていた数学および物理科目は、共通教育では開講せず工学部で専門教育の一環として位置づけられた。そこで、本項では平成27年度入学生以降の年間GPAの推移について報告する。

図5.1に、履修年度平成27(2015)～平成31(2019)年度の年間GPAの平均値を示す。入手データの都合上、GPAが1.5以上の学生の平均値である。この5年間の1年目の年間GPAの平均は、2.61～2.73であった。共通教育改革の初年次は2.72であったが、それ以降は2.6台に低下している。2年目の年間GPA平均は2.48～2.58であり、従来と同様に1年目比べてGPAは低下した。これは、1年目は学生自身に緊張感があり、講義の多くが共通教育科目であるため、年間GPAが高く、2年目は大学生活に慣れて勉学意欲が希薄になる中、難しい必修の基礎的な科目が多くあり、元々基礎学力の無い学生が勉

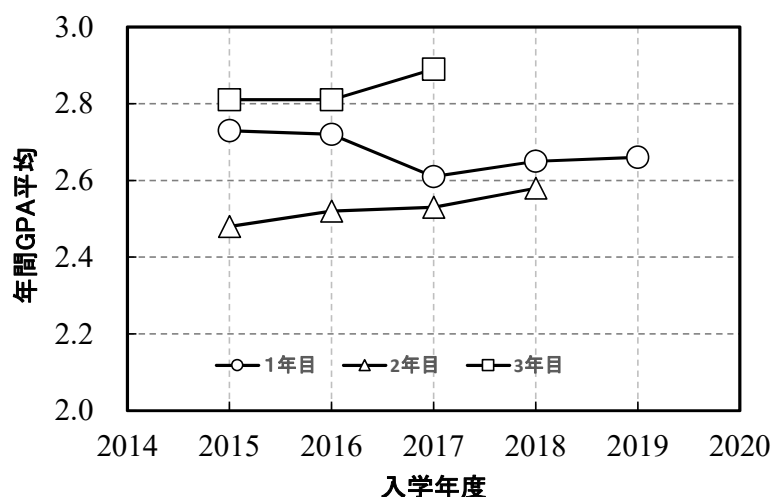


図5.1 入学年度による年間GPAの推移

学について行けなくなって GPA 低下を招いたと考えられる。しかしながら、平成 29 年度以降の 1 年目から 2 年目にかけての低下はごくわずかで、2 年目の GPA は年々上昇している。3 年目の GPA は従来と同様に回復傾向があり、1 年目の GPA と同等もしくは平成 29 年度入学生に至っては 0.28 ポイントも上昇している。3 年目は講座配属や就職を控え、より専門性の高い選択科目に接することでやる気が出たりして、GPA が回復したと考えられる。4 年目は取得単位数が少ないため、比較は行っていない。1 年目から 3 年目にかけての GPA の推移は前述の平成 15(2003)～平成 29(2017)年度入学生とほぼ同じ傾向を示した。尚、平成 28 年度の共通教育改革から 4 年が経過した。その効果については今後の推移を今後の推移を見守る必要がある。

## 5.2 年間修得単位数の推移

図 5.2 に年間修得単位数の平均値を年度ごとに算出した結果を示す。途中年度のデータが欠落しているが、令和 2(2020)年 3 月におけるデータを過去のデータに追加して図に示した。解析は、令和元(2019)年度における在学 1 年目の 1～2 期生、在学 2 年目の 3～4 期生、在学 3 年目の 5～6 期生が令和元(2019)年度に取得した単位数の平均値を求めた。ただし、確定 GPA が 1.5 未満の学生のデータは除いている。

在学 1 年目の 1～2 期生および在学 2 年目の 3～4 期生に取得した単位数は、途中多少の増減はあるが、統計を取り始めてから 2016 年度まで上昇傾向にあったものの、2017 年度で低下が著しい。在学 3 年目の 5～6 期生が取得した単位数(途中年度の解析結果がデータ不足で欠落している)は、年によって大きく変動しており、4 から 6 年の周期で落ち込みが見られるが、おおむね微増の傾向のように見られる。1～4 期では共通教育科目や基礎的な専門科目が主であるが、3～4 期で GPA 値が低下しており、専門科目での息切れが懸念される。最近 3 年間の傾向では、2016 年度から 2017 年度の変化が急激で、学習意欲の低下、もしくは単位取得の動機付けが低下している可能性がある。全国的な学生数の低下による求人数が増加して、就職が売り手市場になっていることも、学生の単位取得にブレーキをかけている可能性がある。学生の貪欲な学習意欲を引き出す方策が必要と考えられる。来年度は、景気の

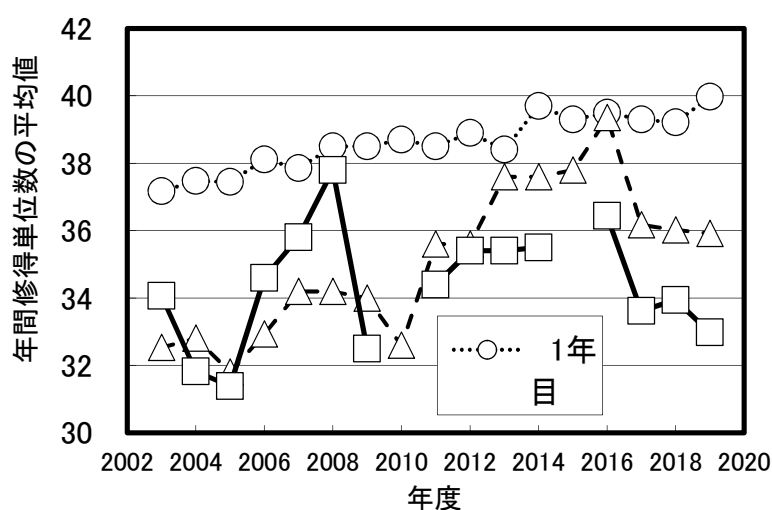


図 5.2 年間修得単位数の平均値

急激な低下が予想されるため、学生の意識改革を行わないと就職率低下を招きかねないので、早急な対策が必要になっている。

### 5. 3 卒業者数と卒業延期者数の割合の推移

図5.3 に、卒業者数と卒業延期者数の合計に対する、卒業者数の占める割合の経年変化を示す。統計を取り始めた平成14(2002)年度以降、この割合は、0.92~0.98 の間で推移している。平成21(2009)年度～平成24(2012)年度の割合が低いが、これは、リーマンショックに伴う景気低迷の影響によると推察される。その後、平成25(2013)年度及び平成26(2014)年度には、0.96 強に回復した。ところが、平成27(2015)年度及び平成28(2016)年度には、再び低下した。これは、平成27(2015)年度に、選考解禁が8月1日に後ろ倒しになったことが大きな原因と考えられる。前年度までの4月選考開始から、スケジュールが大きく変更され、学生が就職活動を進めにくくなった可能性がある。平成28(2016)年度には、面接解禁が6月1日に2箇月前倒しとなったが、事態の好転は、見られなかった。しかしながら、平成29

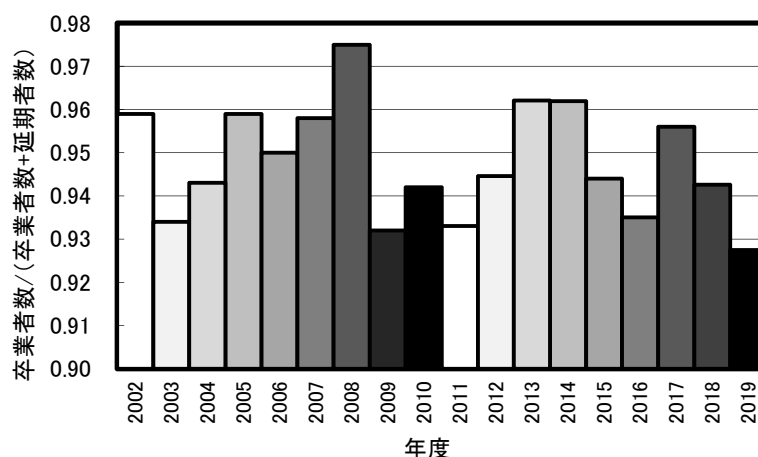


図 5.3 卒業者数と卒業延期者数の合計に対する卒業者数の占める割合の経年変化

(2017)年度には、一転して値が上昇した。この背景に、景気高揚感と労働人口減により企業の求人数が増加して、学生の卒業意欲が高まったことがある。しかし、平成30(2018)年度から2年連続で低下し、令和元(2019)年度は約0.927に至った。前年度まで容易に就職できたことから勉学に費やさなくなっているため、卒業者数の低下が見られる。現在の世界情勢を考えると令和2(2020)年度は景気の急激な低下が予想されるため、就職活動に対する指導・支援が大切である。

## 5. 4 学習成果と質の向上

昨年度に引き続き、これまで蓄積されてきた講義・演習科目の授業評価アンケートから、学生の学習の質と関連があると考えられる「④理解」、「⑦学習目標の達成」、「⑭予習・復習」及び「⑮満足度」の4項目に着目し、これらとGPの科目平均値の関係を調べ、学習成果と質の向上に関して検討する。

### 5. 4. 1 学習成果と質の向上の推移

平成16年(2004年)度～令和元年(2019年)度における、講義・演習科目の授業評価アンケートのうち、「④理解」、「⑦目標達成」、「⑭予習・復習」及び「⑮満足度」の4項目の各評価の工学部平均値と、GPの科目毎の平均値(科目GPA)、すなわち、科目GPAの工学部平均値の推移を図5.4.1に示す。「⑦目標達成」、「⑮満足度」と、「④理解」とが、少しずつ上昇する傾向を示しており、学生は、理解に応じて、達成感及び満足感を得ると考えられる。また、「⑭予習・復習」は、平成17年(2005年)度～平成23年(2011年)度に、平成19年(2007年)度を除いて増加しており、教育改善の効果が現れていると言える。その後、平成24年(2012年)度に評価が低下後、ほぼ一定となったが、平成27年(2016年)度以降は、増加している。しかし、昨年、今年度と低下が著しい。この低下はアンケート実施をmanabaシステムに変更した後に見られているが、manabaシステム導入が直接的に予習・復習の時間に影響を及ぼすとは考えにくく、回答率の変化などアンケートの実施方法との因果関係を詳しく分析していく必要があると思われる。

更に、科目GPAと、「⑦目標達成」及び「⑮満足度」の2項目の評価の工学部平均値を比較すると、平成21年(2009年)度を除いて、変化傾向が類似している。すなわち、受講生の達成感と満足度が得られるような授業を心掛けることが、学生の成績(GPA)の向上につながるということが読み取れる。しかしながら、平成30年(2018年)より予習・復習時間が大きく減少しているにもかかわらず、科目GPAが上昇傾向にあるという一見矛盾した結果が得られている。前段落でも述べたが、manabaシステムの導入により予習・復習が効率よく効果的に行えるようになったのか、あるいは、単にアンケート回収方法に問題があり正確な学生の動向をキャッチできていないのか、経年的に注目し考察する必要がある。

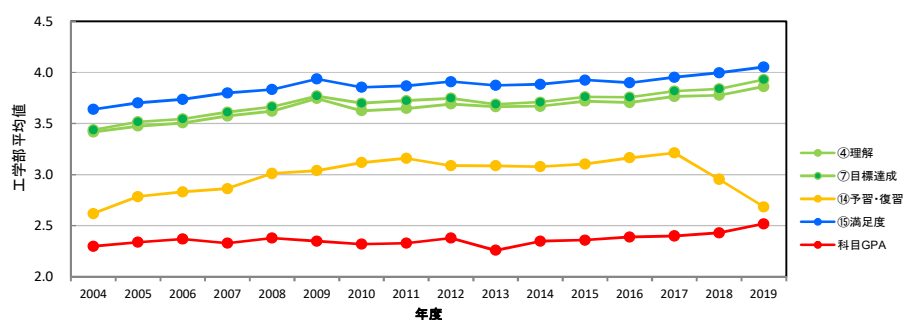


図 5.4.1 授業評価アンケートのうちの4項目の評価及び科目平均GPの工学部平均値の推移

#### 5. 4. 2 令和元年度の学習成果と質の向上

令和元年(2019年)度の前期および後期の科目GPAと授業評価アンケート4項目の科目平均の相関関係を図5.4.2(1), 図5.4.2(2)に示す。「④理解」, 「⑦学習目標の達成」, 「⑮満足度」それぞれの相関値が, 前期 0.32, 0.35, 0.34, 後期 0.21, 0.30, 0.24 となり, 0.2 を越える相関値を示すため弱い相関があると考えられ, この相関から, アンケート評点の科目平均が高くなるにつれ, 科目GPAも高まる傾向が確認できた。一方, 「⑭予習・復習の時間」については, 前期 0.05, 後期 0.06 と低い相関値を示すため, ばらつきが大きく科目GPAとの相関は無いと判断される。これらの傾向は, 平成22年(2010年)度以降変わっていない。近年の報告書でも指摘されているように, 自習をあまりしなくてもよい成績が取れる状況や自習に多大な時間を割いてもよい成績が取れない状況は, 健全とはいえない。各学科で状況を確認する必要があると思われる。

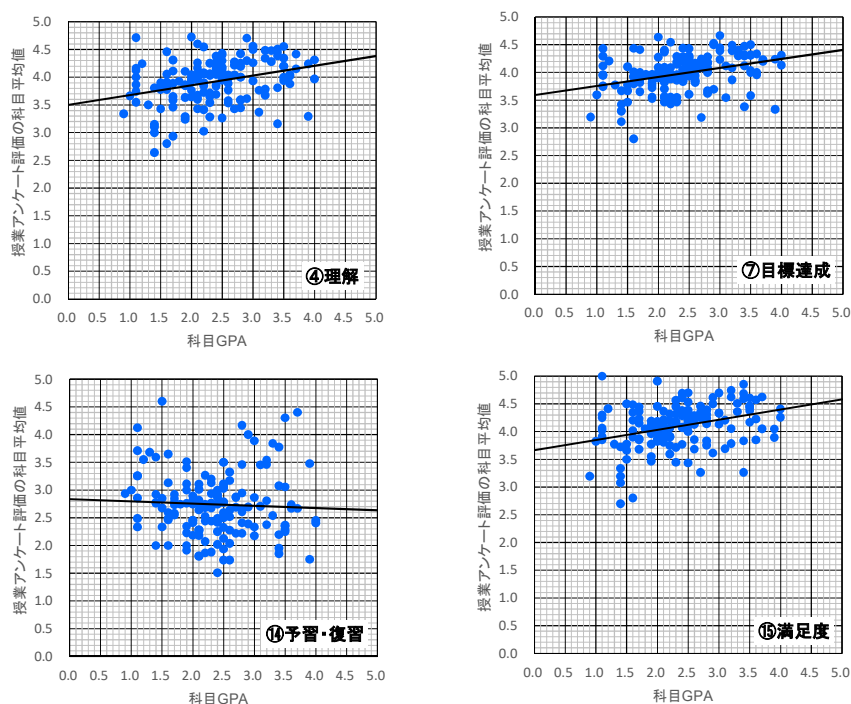


図 5. 4. 2(1) 令和元年度前期の科目平均 GPA と授業評価アンケートの科目平均の相関

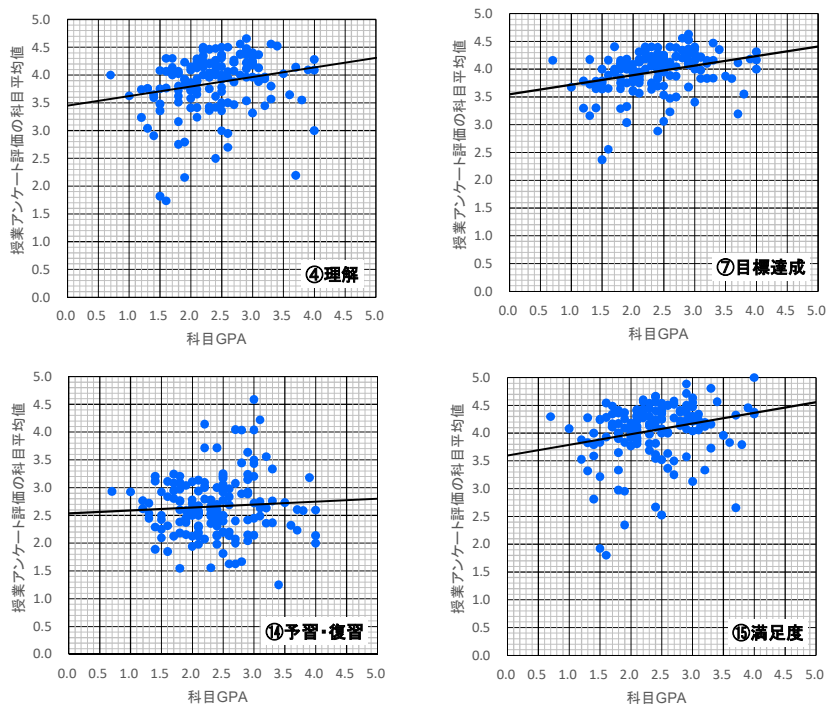


図 5. 4. 2(2) 令和元年度後期の科目平均 GPA と授業評価アンケートの科目平均の相関

## 第 6 章 特筆すべき取り組みや改善事例

工学部では平成 28 年度にエクセレント・レクチャラー表彰制度が制定された。当該年度中に実施した共通教育科目・専門教育科目の実施状況、授業評価アンケート、授業計画改善書などの資料に基づき、各学科で定めた選考方法によりそれぞれの学科よりエクセレント・レクチャラーを 1 名選出し、年度末までに工学部長に報告することになっている。次年度 4 月の教授会において表彰式が実施され、副賞として 1 名につき 5 万円が支給され自己収入に充当される。また、受賞者は工学部ホームページで紹介される。令和元年度の受賞者は次の 7 名である。松崎健一郎 教授(機械工学科)、永山務 助教(電気電子工学科)、曾我和弘 教授(建築学科)、五島崇助教(環境化学プロセス工学科)、審良善和 准教授(海洋土木工学科)、淵田孝康 准教授(情報生体システム工学科)、隅田泰生 教授(化学生命工学科)。また、学期末の授業アンケートにおいて満足度の高い講義を公表して講義の参観の参考にしている。

## 第 7 章 令和元年度の工学部 F D 活動の総括と今後の F D 活動

### 7. 1 令和元年度の F D 活動の総括

第 1 章で述べたように、工学部では令和元年度の第 1 回工学部 FD 委員会において、既に学部に着したこのような活動を本年度も継続して遂行することが決定され、それらの活動が実施された。本年度実施した FD 講演会、新任教員 FD 研修会および学外 F D 研修会への教員派遣の概要は第 2 章でまとめた。各学科における授業評価アンケートの分析と授業計画改善書の活用状況については第 3 章でまと

めた。第4章では学科におけるFD活動とJABEEの関連について記載した。第5章においては、学習成果と質の向上について調査・分析を実施した。

毎年度、各部局において全専任教員の75%以上がFD活動に参加することが求められている。令和元年度に工学部主催および学内で実施されたFD関連の企画に参加した教員は112名中108名で96.4%の教員が何らかの行事に参加した。

## 7. 2 今後のFD活動

工学部は平成16年度から授業アンケートを行い、その結果を受けて各教員が授業改善のための計画を策定しながら、分かりやすい授業の実施を目指してきた。10年間のトレンドで見ると改善はされているが、この数年は変化がなくなっていることや、各科目単位で見るとアンケートの評価には大きな分布が存在する。また、予習や復習などの自宅学習の時間は低いままである。このことはまだ改善の余地が残されていることを示している。

平成28年度から工学部ではエクセレント・レクチャラー表彰制度が実施された。これはその年度に最も優れた教育を行った教員を各学科から1名表彰する制度である。毎年度、表彰された教員による講演会を実施しており、これをきっかけにして、今後さらに分かりやすい授業がなされることと、その結果として学生の講義の理解度が深まり、その授業に対する満足度も向上することが期待される。

大学 IR コンソーシアム学生調査結果（平成 30 年度実施分）の評価・分析について

工学部 FD 委員 甲斐 敬美

	注目した知見	知見に対する解釈	改善・対応策
【1 年生のみ】 本学への志望度及び高校時代の経験	①工学部を第 1 志望としていた学生の割合は大学平均よりかなり低く、約 1/3 である。	①工学部は大学による特徴が出にくく、他県からの入学者は最終的に合格できる可能性によって本学部を選択しているためと考えられる。また、本学部は第 3 志望制をとっているため、第 1 志望でない学科へ入学する場合も多く、そのことも関係しているかもしれない。	①福岡を中心として多くの高校生が参加する毎年福岡で開催されている夢ナビライブに 2018 年度から工学部からも講義を提供し、ブースを設けている。今後もこの取組によって他県の学生に対して本学部をアピールしていく。
大学での学びの実態	①上級生対象の調査結果によると、工学部は「授業を通じた学習経験」の項目において大学平均を 10 ポイント以上下回る項目はない。一方で「教員が提出物に添削をして返却する」および「TA・SA から補助を受ける」という項目は大学平均よりかなり高い。 ②教員に親近感を感じたという項目	①工学部においては、授業アンケートの結果を受けて教員は改善をしている結果と考えられる。また、大学院生による TA を有効に活用するシステムも機能している結果と考えられる。 ②大人数の講義が多いことが考えられる。また、学生実驗では個々の学生とふれあう機会は多	①今後も授業の改善および TA の活用を実施していく。 ②適切な教員数の配置が望まれる。 ③2019 年度の工学部 FD 講演会では授業時間外での学習時間の確保をテーマにした。今後このような取組を継続して学習時間をとるよう指導していく。



	<p>目について1年次は全学部20%程度と低い、上級生になると他学部は50%程度まで上昇するが、工学部はほとんど上昇していない。</p> <p>③上級生においては医歯学系に次いで授業時間外の学習時間は多い。</p> <p>④入学後の能力の変化について、工学部の学生は大学平均よりも10ポイント低いような項目はないが、「卒業後に就職するための準備の程度」はやや低い。「数理的な能力」については全学部の中でも突出して高い。</p>	<p>いはずだが、工学部の教員一人当たりの学生数は多いため、コミュニケーションが薄くなっていると思われる。</p> <p>③単位に必要な学習時間を各教員が認識した上で課題を出しているためと考えられる。</p> <p>④工学の学問体系から考えて「数理的な能力」が高くなるのは当然である。就職の心配がほとんどないことから低学年からの「卒業後に就職するための準備の程度」はやや低いと思われる。</p>	<p>④「数理的な能力」が高くなつたと受け止めてもらえないことは当然として、「卒業後に就職するための準備の程度」に関しては、キャリア関連科目などももう少し将来の仕事に対する意識を持つるような取組を実施することによって、さらに専門科目の学習への意欲を増すことができると思われる。</p>
<p>英語運用能力の熟達度及び英語学習の状況</p>	<p>①英語の運用能力は他学部の学生と同様で、1年次は入学時よりも少し高くなるが、3年次には入学時よりも低下している。特に会話力についてはずっと低いままである。</p>	<p>①1年前後期の英語科目によって、多少とも能力は上昇するが、その後英語のスキルを磨く科目を受講する必要がないため、英語運用能力は大幅に低下していると思われる。</p>	<p>①毎期、必修で英語科目があれば、英語運用能力の維持ができることはアンケート結果から推測できるが、総単位数の関係で導入は難しい。特に会話力については、少人数講義が効果的であるので改善は難しい。</p>
<p>大学生生活に対する意識</p>	<p>①工学部の学生は3年生になって「大学教員と顔見知りになる」および「教員と話をする機会」と</p>	<p>②工学部ではアドバイザー制を実施して教員との面談は行っているが、2年次または3年次で</p>	<p>③4年次の卒業論文になると1年間指導教員の指導を直接受けながら研究を進めることにはな</p>

	<p>いう項目が他学部に比べて非常に低い。</p>	<p>のゼミなどの演習科目も工学部では受講人数が多い。そのため、教員と一対一で話をする機会が少ないことが原因と考えられる。</p>	<p>るが、低学年時にもう少し気軽に相談できる雰囲気をつくるには各学科においてもう少し面談などの機会を増やす必要があるかもしれない。</p>
--	---------------------------	---	--



農学部・  
農林水産学研究科

令和元年度  
鹿児島大学農学部・農水産学研究科  
FD 活動報告書

鹿児島大学農学部 FD 委員会

令和2年4月

## 令和元年度農学部及び農林水産学研究科 FD 活動概要

令和元年度の農学部 FD 委員会は、委員長を含む教員 4 名と教務係長で構成され、学務課長及び技術支援室、教務係の支援を得て運営された。委員会は 5 回実施され、年間計画及び実施上の事項について議論が行われた。

今年度の農学部 FD 委員会が担当、実施した事項としては、授業アンケート、前期と後期に設定された FD 月間（授業参観）、FD 月間内に実施された ベストティーチャー賞連動企画、農林水産学研究科と農学部、水産学部の合同で 9 月に実施されたものと農学部単独で 3 月に実施されたものを含む二回の FD ミニ研修会、第二回農学部ベストティーチャー賞の選考といったことが挙げられる。

### 農学部 FD 委員会による実施事項と成果

- ・授業アンケート：前後期完全 web 化を実現。回答率はやや伸び悩んだものの、安定した高い授業評価を得られた。
- ・授業参観：参加率が 10%以上向上し、半数以上の教員が参加した。
- ・FD 研修会：多数の教員の参加を得て web 学習支援ツールの基礎と農学部の課題を確認できた。
- ・ベストティーチャー賞：授業参観、アンケートを利用して二回目の選考を実施した。第一回ベストティーチャー賞を踏まえた企画も実施した。
- ・参加率は授業参観が 56%、2 回の FD 研修会が 51%、83%、全て合わせて 91%

令和元年度に発足した農林水産学研究科は委員長を含む教員 5 名と農学部教務係長、水産学部学生係主任、両学部の学務課の支援を得て運営された。委員会は 3 回実施され、実施上の事項について議論が行われた。こちらでは授業アンケートと上記ミニ研修会が企画、実施された。

### 今年度の特記事項

- ・FD 参加率が 90%のラインに復帰した。特に授業参観は大幅に向上した。
- ・ミニ研修会のテーマに web を利用した学習ツールの紹介があり、結果的に次年度の遠隔授業の円滑な実施の布石となった。
- ・授業アンケートの完全 web 化を実現。安定した授業評価を得た。
- ・農林水産学研究科 FD 委員会が立ち上げとなり、授業アンケートや企画の実施など実質的な活動も出来た。

## 1. FD 活動組織 (FD 委員会の構成と活動状況)

### 農学部

委員長 畑 邦彦 (農林環境科学科)  
委員 遠城 道雄 (農業生産科学科/農学部教務委員会副委員長)  
委員 後藤 貴文 (農業生産科学科)  
委員 宮田 健 (食料生命科学科)  
事務担当者 吉村 学 (教務係長)  
今村 哲郎 (学務課長)  
Agri-Fish-Web 管理・データ処理 池田日出男 (技術専門職員)

### 農林水産学研究科

委員長 畑 邦彦 (農林資源科学専攻/農学部 FD 委員長)  
委員 後藤 貴文 (農林資源科学専攻)  
委員 宮田 健 (食品創成科学専攻)  
委員 久米 元 (環境フィールド科学専攻)  
委員 安樂 和彦 (水産資源科学専攻/水産学部 FD 委員長)  
事務担当者 吉永 章悟 (水産学部学生係主任)  
吉村 学 (農学部教務係長)

## 2. 委員会

令和元年度はメール会議含めて農学部 FD 委員会は 5 回、農林水産学研究科 FD 委員会は 3 回委員会が開催された。関連がある事項もあるので、以下時系列順に両委員会の議事要旨を示す。

---

### 令和元年度第 1 回農学部 FD 委員会

平成 31 年度 (令和元年度) 第 1 回農学部 FD 委員会

日時：平成 31 年 4 月 23 日 (火) 16 : 30～

場所：共通棟 3F 小会議室

### 議題

1. 令和元年度 (平成 31 年度) の FD 関係諸行事と日程について (資料 1)
2. その他 (今年度の課題について) (資料 2)

## 農学部 FD 関係日程

4 月	年間の活動予定の確認*
5 月	学部に授業参観の日程を示す（前後期）
6～7 月	授業参観** ・アナウンス ・参観可能な科目の確認 ・実施 ・参観報告書のとりまとめ
8 月	シラバス確認と入力のアナウンス
8～12 月	学部 FD 講演会、研修会の企画実施
10～11 月	授業参観（手順は前期と同様）
11 月	IR コンソーシアム学生アンケート実施
2 月	ベストティーチャー賞の選考
2 月～4 月	全学 FD 報告書向けの学部 FD 報告書を執筆 ***
2 月	シラバス確認と入力のアナウンス
3 月	全学 FD 委員会に活動計画書を提出
4 月	学部 FD 報告書を提出

\*Agri-Fish-web について改善意見を聞く

\*\*授業参観の期間と時期を決める

\*\*\*各学部 20 ページの報告書の提出が求められる

<授業参観とその日程について>

<参考> 昨年の日程

（前期）

- 5 月 16 日（水）：公開授業の実施についてのお知らせ（教授会）
- 6 月 4 日（月）～ 6 月 8 日（金）：公開不可能な授業科目調査
- 6 月 11 日（月）～ 6 月 28 日（木）：授業参観予約
- 6 月 18 日（月）～ 6 月 29 日（金）：授業公開（農学部 FD ウィーク）
- 6 月 18 日（月）～ 7 月 6 日（金）：授業参観報告書作成・提出

（後期）

- 9 月 19 日（水）：授業公開の実施についてお知らせ（教授会）
- 10 月 1 日（月）～10 月 5 日（金）：公開不可能な授業科目調査
- 10 月 9 日（火）～11 月 1 日（木）：授業参観予約
- 10 月 22 日（金）～11 月 2 日（金）：授業公開（農学部 FD ウィーク）

- 10月 22日(金)～11月 9日(金)：授業参観報告書作成・提出
- ・教授会でのアナウンスが出来なくなったので、メール以外のアナウンスの手段を模索する必要がある。教務委員会→学科会議など。
  - ・授業参観の参加率が落ち気味なので、何か対策を打てないか？
  - ・昨年度からベストティーチャー賞の投票権が授業参観報告書に付いたので、これを上手く活かさないか？

日程案 期間を変えない(昨年と実施時期はずらす)

(前期)

- 5月～6月上旬：公開授業の実施についてのお知らせ メール？会議？
- 6月 17日(月)～6月 21日(金)：公開不可能な授業科目調査
- 6月 24日(月)～7月 11日(木)：授業参観予約
- 7月 1日(月)～7月 12日(金)：授業公開(農学部FDウィーク)
- 7月 1日(月)～7月 19日(金)：授業参観報告書作成・提出

(後期)

- 10月：授業公開の実施についてお知らせ メール？会議？
- 11月 11日(月)～11月 15日(金)：公開不可能な授業科目調査
- 11月 18日(月)～12月 5日(木)：授業参観予約
- 11月 25日(月)～12月 6日(金)：授業公開(農学部FDウィーク)
- 11月 25日(月)～12月 13日(金)：授業参観報告書作成・提出

日程案 期間を延ばす(FDウィーク→FD月間)

(前期)

- 5月上旬：公開授業の実施についてのお知らせ メール？会議？
- 5月 20日(月)～5月 24日(金)：公開不可能な授業科目調査
- 5月 27日(月)～6月 27日(木)：授業参観予約
- 6月 3日(月)～6月 28日(金)：授業公開(農学部FD月間)
- 6月 3日(月)～7月 5日(金)：授業参観報告書作成・提出

(後期)

- 10月上旬：授業公開の実施についてお知らせ メール？会議？
- 10月 21日(月)～10月 25日(金)：公開不可能な授業科目調査
- 10月 28日(月)～11月 28日(木)：授業参観予約
- 11月 4日(月)～11月 29日(金)：授業公開(農学部FD月間)
- 11月 4日(月)～12月 6日(金)：授業参観報告書作成・提出



## 今年度の課題

- ・今年度の部局年度計画に以下のような記述

「在学生や卒業生を対象とした諸調査の分析結果を資料とした FD 講演会を実施し、全教員の意見交換を通しながら、教育改善策を立案する。可能であれば、夏期休暇中に、高隈演習林管理棟において、若手教員を中心とした FD 研修合宿を行って、改善策を練る。ベストティーチャー賞を活用して授業改善のきっかけをつくる。」

合宿は無理でも夏季休暇中の FD 研修会は企画する必要があると思われる。

- ・授業アンケートの manaba 移行について

昨年度はトラブルが原因で一気に移行する必要があった。そのためか、アンケート回答率がかなり低くなってしまった。何とかして改善できないか？また、修士課程の授業は紙ベースで実施したが、これも移行を検討する必要がある（修士の FD 委員会マター）。

- ・研究科 FD 委員会との関係について

委員長は共通している。これまで大学院の FD 委員会はあまり動いていない状況だったが、今年度は修士課程の組織改編もあり、いくつかの課題で研究科 FD 委員会としての協議の必要が出てくると思われる。

## 議事

- 1) 平成 31 年度（令和元年度）の FD 関係諸行事と日程について（資料 1）

今年度の FD 関係諸行事について委員長から説明があり、それらに基づいて今年度の予定が確認された。授業参観に関しては、参加率の低下が報告されたことから、期間を延ばし、FD 月間とすることが合意された。

また、Agri-Fish-Web について、使いにくいという意見があり、将来的に縮小の方向を検討することとなった。

## FD 関係行事予定

- 4 月 年間の活動予定の確認
- 5 月 学部に授業参観の日程を示す（前後期）
- 6 月 授業参観
- 8 月 シラバス確認と入力のアナウンス
- 8～12 月 学部 FD 講演会、研修会の企画実施

- 11月 授業参観
- 11月 IR コンソーシアム学生アンケート実施
- 2月 ベストティーチャー賞の選考
- 2月～4月 全学FD 報告書向けの学部FD 報告書を執筆
- 2月 シラバス確認と入力のアナウンス
- 3月 全学FD 委員会に活動計画書を提出
- 4月 学部FD 報告書を提出

#### 授業参観関連日程

##### (前期)

- 5月上旬：公開授業の実施についてのお知らせ メールと学科会議
- 5月 20日(月)～5月 24日(金)：公開不可能な授業科目調査
- 5月 27日(月)～6月 27日(木)：授業参観予約
- 6月 3日(月)～6月 28日(金)：授業公開(農学部FD月間)
- 6月 3日(月)～7月 5日(金)：授業参観報告書作成・提出

##### (後期)

- 10月上旬：授業公開の実施についてお知らせ メールと学科会議
- 10月 21日(月)～10月 25日(金)：公開不可能な授業科目調査
- 10月 28日(月)～11月 28日(木)：授業参観予約
- 11月 4日(月)～11月 29日(金)：授業公開(農学部FD月間)
- 11月 4日(月)～12月 6日(金)：授業参観報告書作成・提出

#### 2) その他(今年度の課題について)(資料2)

委員長より下記のような課題が説明され、議論が行われた。

##### ・FD研修会について

今年度の年度計画にFD研修会の実施について記述があり、何らかの形での研修会の実施を検討することとなった。ベストティーチャー賞を活かした企画が考えられないか、授業参観と関連して実施できないかといった意見が挙げられた。

##### ・授業アンケートのmanaba移行について

昨年度はトラブルが原因で授業アンケートをmanabaで実施することになったが、回答率が落ちたため改善が必要であると報告された。また、農水産学研究科発足に伴い、修士の授業アンケートをどうするかという課題があることが報告された。

・研究科 FD 委員会との関係について

農水産学研究科発足に伴い、研究科 FD 委員会としての協議が必要になる課題が出てくるだろうとの説明があった。

---

第 1 回農林水産学研究科 FD 委員会

日 時：令和 元年 7 月 2 日（火） 11 時 00 分～11 時 35 分

場 所：農・獣共通棟中会議室（3 階）

出席委員：畑（委員長）、安樂（副委員長）、後藤、宮田、久米

陪 席 者：吉永、吉村

議 題

1. 授業アンケートについて

委員長から、大学院の授業アンケートの実施方法について、候補として manaba、Agri-Fish-Web、紙での実施案が提案され、manaba で実施することとなった。なお、アンケートの項目については、後日農学研究科、水産学研究科の授業アンケートの内容を勘案した案を委員長が作成し、メール会議を開催することとした。

2. FD 研修会について

委員長から、Agri-Fish-Web や manaba を活用したミニ研修会を実施してはどうかと提案され、種々意見交換した結果、Agri-Fish-Web と manaba の利用法に関する研修会をアクティブラーニングへの活用を見据える形で実施することとした。

なお、研修会の内容及び実施時期についての詳細は後日報告することとした。

---

第二回農林水産学研究科 FD 委員会（メール会議 7/3～7/11）

議 題

1. 授業アンケートについて

農学研究科と水産学研究科の授業アンケートの内容を勘案して授業アンケートの原案を作成したので検討願いたい。

議事

事務サイドの意見等も勘案し、以下のようなアンケートを実施することとなった。後日英訳も作成した。

---

#### 授業評価アンケート【大学院】

##### 質問事項

Q1. 所属コースを教えてください。

Q2. この授業は、知力・学力の向上に役立ちましたか？

(1. そう思う 2. どちらかと言うとそう思う 3. あまりそう思わない 4. そう思わない)

Q3. 知力・学力の向上に役立ったと思われる点について、具体的に記述してください。

Q4. この授業で、改善した方がいいと思われる点や、続けた方がいいと思われる点があれば、具体的に指摘してください。

Q5. この授業について、意見・要望・感想などを自由に記述してください。

ご協力ありがとうございました。

農林水産学研究科FD委員会

---

##### 報告事項

1. FD研修会の実施日時について

##### FDミニ研修会

アクティブラーニングへの活用を見据えた manaba と Agri-Fish-Web の利用法  
(仮)

9/18 (水) 15:30～(仮) 15分程度

農林水産学研究科、農学部、水産学部FD委員会共催

以上、農林水産学研究科会議と合わせて実施する旨報告した。

---

第三回農林水産学研究科FD委員会 (メール会議 9/13)

## 報告事項

### 1. FD 研修会の実施内容について

FD ミニ研修会の時程と具体的な内容について報告した。

FD ミニ研修会 「アクティブラーニングへの活用を見据えた manaba と Agri-Fish-Web の利用法」

9/18 (水) 17:00～ 合わせて10分以内程度

1. 吉永主任より A-F-Web の解説 5分程度

2. 畑より「manaba の初歩」 5分程度

農林水産学研究科、農学部、水産学部 FD 委員会共催

---

第二回農学部 FD 委員会 (メール会議 9/13～9/15)

## 議題

### 1. FD ミニ研修会について

上記ミニ研修会について、農林水産学研究科、農学部、水産学部の共催とする形でいいか確認を取り、原案通り了承された。

---

第三回農学部 FD 委員会 (メール会議 11/8～11/11)

## 議題

### 1. FD 月間連動企画について

下記の企画を提案し、原案通り了承された。

## FD 月間連動企画

「第一回農学部ベストティーチャー下桐先生の授業を見学しよう」

日時 11/28 (木) 4限目 101号教室

「生物統計学」 下桐猛先生

当日は通常の授業参観の後、少しお時間をお取り頂き、簡単な懇談会を実施したいと思います。学生の高い支持を誇る下桐先生に授業のコツなどをお聞きする機会になればと思います。

#### 第四回農学部 FD 委員会（メール会議 2/18～21）

##### 議題

##### 1. FD ミニ研修会について

下記の企画を提案し、原案通り了承された。

##### FD ミニ研修会

「学生アンケートから見る農学部生の姿」

日時・場所 3/3（火） 教授会時 10分程度

演者 農学部 FD 委員長 畑 邦彦

---

#### 第五回農学部 FD 委員会（メール会議 3/30～4/3）

##### 議題

##### 1. 令和元年度ベストティーチャー賞の選考について

ベストティーチャー賞の選考案を提案した\*。その結果、提案の通り宮田健准教授に決定された。

\*選考経過及び選考調書は別項に示す。

---

##### 3. 令和元年度農学部授業参観・授業公開

授業参観・授業公開は農学部では「FD ウィーク」として授業アンケートとともに農学部における FD 活動の基幹として位置付けられてきた。昨年度からベストティーチャー賞の投票が授業参観報告書と一体化する形で実施されており、授業参観・授業公開の重要性がより高まっている。一方で、参加率の低下が懸念されており、今年度は期間を延長して「FD 月間」として実施した。

##### （前期）

5 月上旬：公開授業の実施についてのお知らせ メールと学科会議

5 月 20 日（月）～ 5 月 24 日（金）：公開不可能な授業科目調査

5 月 27 日（月）～ 6 月 27 日（木）：授業参観予約

6 月 3 日（月）～ 6 月 28 日（金）：授業公開（農学部 FD 月間）

6月 3日(月)～7月 5日(金)：授業参観報告書作成・提出  
(後期)

10月上旬：授業公開の実施についてお知らせ メールと学科会議

10月 21日(月)～10月 25日(金)：公開不可能な授業科目調査

10月 28日(月)～11月 28日(木)：授業参観予約

11月 4日(月)～11月 29日(金)：授業公開(農学部FD月間)

11月 4日(月)～12月 6日(金)：授業参観報告書作成・提出

授業参観報告書を提出した参加者は実数43名(のべ65名)となっており、実数ベースでは参加率56%となった。昨年度は参加者実数36名(のべ51名)、参加率44%だったので、10%以上の伸びとなった。以下、参加した委員の報告書を示す。

---

食料生命科学科委員 宮田 健

今年度はFD委員としてのFD活動として、授業参観を複数回行いました。授業参観の参加率が例年低いのは、多くの業務を抱える教員がいるなかで開催期間が二週間と短いことが理由の一つであろうと推測し、FD月間と称して、一カ月間の参観期間を設けたのが2019年度でした。以前は二週間の内、一回程度が中間テスト等の期間に重複することが多かったため、実質上、参観日はほぼ一回に限られていることもあったと思いますが、今年度は一カ月も期間があったことから、複数回授業参加する、もしくはされるというよい機会に恵まれたと感じます。自分が担当する講義も毎年参観される機会を得ておりますが、今年度は複数の教員による複数回の参観という状況となり、参観される側も慣れてくることもあり、教員の緊張もなく、普段通り講義を実施できる環境づくりになっていると感じました。

授業参観の評価をするにはAgri-Fish webを利用するが、年度が更新すると過去の履歴が見られないので、振り返ることができないと感じます。それと参観する教員にもrespon等のアクティブラーニングに参加できる権限を付与するなど、学習支援システムにも改善の余地があると感じております。学生はシラバスを一度みれば、それっきり、もしくは一度もみない学生もいるかもしれません。manabaについてはレポートの提出等により、Agri-Fish webよりも閲覧頻度は高いと推測しますので、システムの統合や情報の共有化を図ることが重要ではないかと思えます。

また、FD委員として、学科教員に参観のアナウンスを定期的にしていましたが、

多くの教員は自分の講義や雑務が多くあることから、積極的に参観できる状態になっていないと感じました。もっと積極的に参加するための仕組みを作らないと、これ以上のFD活動参加率向上は望めないのかなと思います。

---

農学部教務委員会副委員長 遠城 道雄

前期開講の「植物形態学」(月曜3限)の授業を参観した。本授業は選択科目であり受講者は30名程度であった。「形態学」はこれまで、植物を分類するための指標の一つとして大きな役割を果たしてきた。今でも、その役割に変わりはないと考えているが、遺伝子解析による分類が中心となっている現在、残念ながら、「形態学」に興味を持つ学生は減ってきている。しかし、農業面からは、分類だけでなく、作物の花や葉がどのように展開し、どの部分に付いているのかであるとか、花の雌雄蕊の付き方の違いなど、栽培技術としての形態を知っておかなければならない点が数多くある。担当教員は、主にスライドを用いて、上記点を考慮されながら、詳しく解説されていた。また、合間で、これまでの授業で行った内容などについて今回の内容と結び付けて、学生を指名して問うなどし、学生にも緊張感を持たせ、集中力を持続させるような工夫もされていたと感じた。授業参観をすることで、各教員でいろいろな教授法があることを学び、自分の授業の参考となっていることは間違いない。私もミニッツペーパーの利用や見やすいスライドなど、授業参観で学んだ手法を自身の授業に反映している。一方で、これまで、毎年1から3回の参観させていただき、自身の授業も含めて共通項として強く感じることは、学生の反応の鈍さと勉強不足である。もちろん、教員は、これらを改善するために、より良い授業を目指して努力しており、そのための参観であることは十分承知している。これらは一朝一夕で向上することはできないし、授業手法だけで改善できる問題でないのは当然であるが、参観やFD講演会を通じて、何らかの糸口をつかめればと模索している。本稿の最後に、学生から見た教室の環境について書いておきたい。予算的な問題はあるが、教室の温度管理—最高最低温度設定の緩和—や音響設備のさらなる設置など、少しずつでも環境を整えることで、学生の授業中の集中力向上や動画などの利用の拡大にもつながるので、継続的な取り組みとしてお願いする次第である。

---

一方、今年度からFD月間連動企画として、上記のように「第一回農学部ベストティーチャー下桐先生の授業を見学しよう」と題した参観会を実施した。こち



らには 4 名が参加した。授業終了後に意見交換会を実施し、活発な討議が行われた。

---

農業生産科学科委員 後藤 貴文

昨年度ベストティーチャー賞を受賞された下桐 猛 准教授が開講されている「動物分子遺伝学」(水曜 2 限)を参観した。畜産科学コースの 2 年生が受講する専門の講義である。下桐先生は、ゆったりとした、フランクな語り口調で、シンプルで図の多いスライド資料を効果的に使用して、講義をされていた。資料は、学生の理解を高め、興味を引くと想像できる資料であった。また、下桐先生は、学生に配布される資料は、講義で使用する資料と同等であるが、ポイントとなる重要な事項の部分については空白としており、講義を受けながらその空白を埋めていくような作業をさせることで学生の理解を深めさせていた。

私は、講義は専門的知識の提供を基本とするが、その科目に対しての学生の好奇心を高め、その学問探究に対するモチベーションを高めることが何よりも必要だと思っている。講義後に、学生に「これは面白い」、「自ら調べてみよう」、「学んでみよう」と思わせる教員はすばらしいと思う。講義の形式の表面的なものではなく、その教員の教育哲学や思いが、多かれ少なかれ講義にオーラを与える。学生は受講後に復習をするが、そのモチベーションがこのオーラに左右されるように思う。また、教員が、自らの研究経験や実験の成功談や失敗談を交える経験が加わると、専門的知識を裏付ける臨場感が学生にも伝わり、専門的知識がより学生の頭に浸透していくように思う。その意味で下桐先生は、関西弁である影響もあるかもしれないが、力強さの中に親しみやすさがあり、自らの研究経験やデータも示しながらの講義となっており、質問に関しても丁寧に答え、全体としてよくまとまった有意義な講義となっていた。

---

#### 4. 令和元年度授業アンケート

授業アンケートは農学部の FD 活動の基幹として位置付けられており、全授業で実施されている。アンケート結果は各教員が参照できるようになっており、シラバス作成時には各授業のアンケート結果を反映させることになっている。昨年度後期からは全て manaba 上でアンケートを実施している。今年度は農林水産学研究科としてのアンケートをどうするか検討し、こちらも manaba で実施することになった。

農学部アンケート回答率は、manaba の表示では前期の通常科目で 60%、実験実習科目で 53%、後期の通常科目で 58%、実験実習科目で 61%となり、これらは昨年度後期のおよそ 63%という数値と比較してやや低下傾向となった。前年度にも危惧されたように、web アンケートの難しさが浮き彫りになった形であり、今後どのように取り組んでいくか工夫が必要になると思われる。

以下、授業アンケートの質問項目を示す。

---

授業評価アンケート(講義・演習用)【農学部】

- 1.1 この授業の出席状況を教えてください。(選択必須)
1. 全て出席 2. 1回欠席 3. 2回欠席 4. 3回以上欠席
- 1.2 この授業に関連のある参考書、論文、雑誌などを読みましたか。(選択必須)
1. はい 2. いいえ
- 1.3 この授業について、1コマあたり、どの程度予習や復習をしましたか。(レポート作成を含む)(選択必須)
1. 90分以上 2. 60～90分 3. 60分未満 4. しなかった
- 1.4 この授業から新しい関心が生まれ、関連分野の勉強をしたくなりましたか。(選択必須)
1. そう思う 2. どちらかというと思う 3. あまりそう思わない 4. そう思わない
- 1.5 この授業内容の水準はどうでしたか。(選択必須)
1. 高かった 2. 妥当だった 3. 少し低かった 4. かなり低かった
- 1.6 この授業の分量はどうでしたか。(選択必須)
1. 多かった 2. 妥当だった 3. やや少なかった 4. 少なかった
- 1.7 この授業は知力や学力の向上に役立ちましたか。(選択必須)
1. そう思う 2. どちらかといえばそう思う 3. どちらかといえばそう思わない 4. そう思わない
- 1.8 この授業は将来役立つと思いますか。(選択必須)
1. そう思う 2. どちらかといえばそう思う 3. あまりそう思わない 4. そう思わない
- 1.9 この授業の学習目標は達成できたと思いますか。(選択必須)
1. そう思う 2. どちらかといえばそう思う 3. どちらかといえばそう思わない 4. そう思わない
- 1.10 この授業は総合的にみて満足できるものでしたか。(選択必須)
1. そう思う 2. どちらかといえばそう思う 3. どちらかといえばそう思わない 4. そう思わない
- 1.11 この授業はシラバスに沿って進められましたか。(選択必須)
1. そう思う 2. どちらかといえばそう思う 3. どちらかといえばそう思わない 4. そ

う思わない

1.12 板書や使用した教科書と教材は授業の理解に役立ちましたか。(選択必須)

1. そう思う 2. 大体そう思う 3. あまりそう思わない 4. 全くそう思わない

1.13 教員の話し方は明瞭で聞きやすく、説明はわかりやすいと思えましたか。(選択必須)

1. そう思う 2. どちらかといえばそう思う 3. どちらかといえばそう思わない 4. そう思わない

1.14 教員の準備は十分で、授業に対する熱意が感じられましたか。(選択必須)

1. そう思う 2. どちらかといえばそう思う 3. どちらかといえばそう思わない 4. そう思わない

1.15 講義・演習中やオフィスアワー等で教員に質問をしましたか。(選択必須)

1. 質問した 2. 質問しなかった

1.16 質問に対する教員の対応に満足しましたか。(選択必須)

1. そう思う 2. どちらかといえばそう思う 3. どちらかといえばそう思わない 4. そう思わない 5. 質問しなかった

自由記述

この授業についての意見・要望・感想などを自由に書いてください。(例えば、授業の進め方、プレゼンテーションを含む) (入力必須)

授業評価アンケート(実験・実習用)【農学部】

1.1 この実験・実習の出席状況を教えてください。(選択必須)

1. 全て出席 2. 1回欠席 3. 2回欠席 4. 3回以上欠席

1.2 この実験・実習に関連のある参考書、論文、雑誌などを読みましたか。(選択必須)

1. はい 2. いいえ

1.3 この実験・実習について、1コマあたり、どの程度予習や復習をしましたか。(レポート作成を含む) (選択必須)

1. 90分以上 2. 60～90分 3. 60分未満 4. しなかった

1.4 この実験・実習を理解するための基礎学力はあったと思いますか。(選択必須)

1. そう思う 2. どちらかといえばそう思う 3. どちらかといえばそう思わない 4. そう思わない

1.5 この実験・実習から新しい関心が生まれ、関連分野の勉強をしたくなりましたか。(選択必須)

1. そう思う 2. まあそう思う 3. あまりそう思わない 4. そう思わない

1.6 この実験・実習の内容のレベルはどうでしたか。(選択必須)

1. 高すぎた 2. 妥当だった 3. 少し低かった 4. かなり低かった

1.7 この実験・実習の分量はどうでしたか。(選択必須)

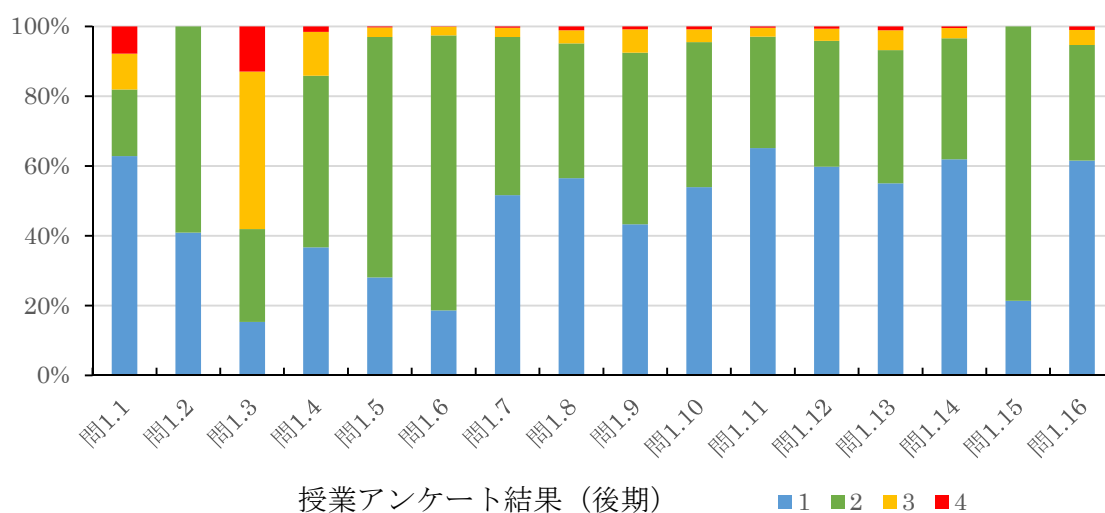
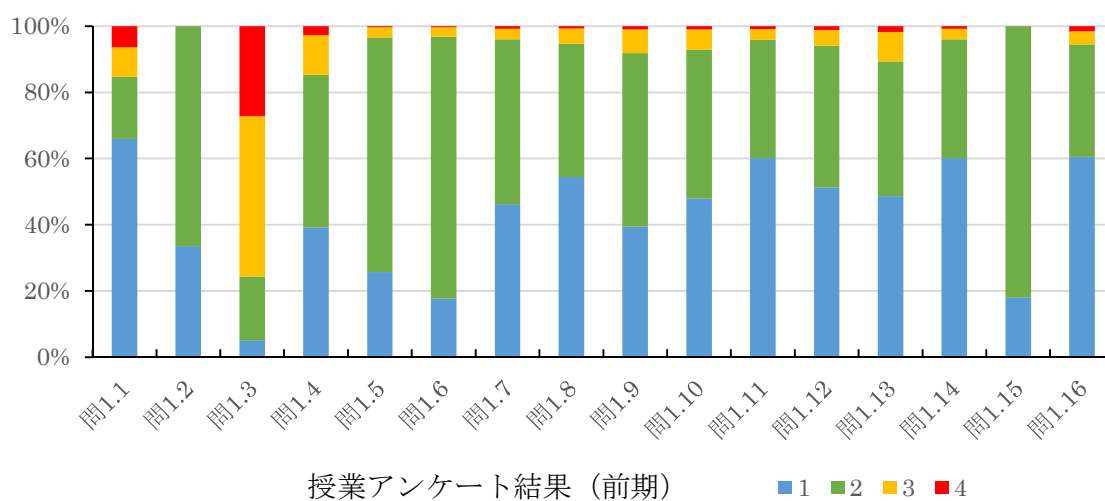
1. 多かった 2. 妥当だった 3. やや少なかった 4. かなり少なかった
- 1.8 この実験・実習は、知力や学力の向上に役立ちましたか。(選択必須)
1. そう思う 2. どちらかといえばそう思う 3. あまりそう思わない 4. そう思わない
- 1.9 この実験・実習の学習目標は達成できたと思いますか。(選択必須)
1. そう思う 2. どちらかといえばそう思う 3. あまりそう思わない 4. そう思わない
- 1.10 この実験・実習は、総合的にみて満足できるものでしたか。(選択必須)
1. そう思う 2. どちらかといえばそう思う 3. どちらかといえばそう思わない 4. そう思わない
- 1.11 この実験・実習は、シラバスに沿って進められましたか。(選択必須)
1. そう思う 2. まあそう思う 3. あまりそう思わない 4. そう思わない
- 1.12 板書、配布資料、実験マニュアルなどは実験・実習の内容理解と実施に役立ちましたか。(選択必須)
1. そう思う 2. どちらかといえばそう思う 3. どちらかといえばそう思わない 4. そう思わない
- 1.13 教員の話し方は明瞭で聞きやすく、説明はわかりやすいと思えましたか。(選択必須)
1. そう思う 2. どちらかといえばそう思う 3. どちらかといえばそう思わない 4. そう思わない
- 1.14 教員の準備は十分で、実験・実習に対する熱意が感じられましたか。(選択必須)
1. そう思う 2. どちらかといえばそう思う 3. どちらかといえばそう思わない 4. そう思わない
- 1.15 実験・実習中やオフィスアワー等で教員に質問をしましたか。(選択必須)
1. 質問した 2. 質問しなかった
- 1.16 質問に対する教員の対応に満足しましたか。(選択必須)
1. そう思う 2. どちらかといえばそう思う 3. どちらかといえばそう思わない 4. そう思わない 5. 質問しなかった

自由記述

この実験・実習についての意見・要望・感想などを自由に書いてください。(例えば、実験・実習の進め方、プレゼンテーションを含む) (入力必須)

---

以上のアンケートについて、今年度の全体的な結果を示す。問と回答は上記のアンケートを参照のこと。



回答数は、前期は1672、後期は1359であった。全体的な傾向は、どの項目も前後期でほぼ同様な傾向を示した。昨年度と比較すると、manabaによるアンケート回答を始めた後期とはやはりほぼ同様であった。すなわち、manabaでのアンケートは農学部の実態を安定的に反映していると考えて良いと思われる。

全体的な傾向としては、昨年度と同様、予習・復習に掛ける時間がやや短いこと、関連文献を余り読んでいないこと、質問を余りしていないことを除けば、概ね良好な回答が大多数を占めた。特に、授業そのものの評価を示す問1.5～1.14は全て90%以上が肯定的な評価となっていた。授業外学習の時間の短さはIRコンソーシアム学生アンケートでも浮き彫りになった問題点で、恐らく関連する問題である関連文献の学習も含め、学習時間の向上は今後の大きな課題であろう。質問しやすい環境をどう作るかと合わせ、今後検討が必要と

思われる。一方、授業そのものの評価については、かなり高いレベルにあり、現状の取り組みを継続することで現在のレベルを維持していきたい。

#### 5. 令和元年度 FD 研修会

今年度は農林水産学研究科、農学部、水産学部共催のミニ研修会を9月に、農学部 FD 委員会主催のミニ研修会を3月に実施した。いずれも、出来るだけ多くの教員の参加が可能となるよう、教授会の前に実施した。日程、タイトル等は以下の通りである。

#### FD ミニ研修会

「アクティブラーニングへの活用を見据えた manaba と Agri-Fish-Web の利用法」

9/18 (水) 17:00~17:10

1. Agri-Fish-Web の解説 演者 水産学部学生係主任 吉永 章悟
2. 「manaba の初歩」 演者 農林水産学研究科 FD 委員長 畑 邦彦

アクティブラーニングの前提となる学習支援システムとして、農学部、水産学部、農林水産学研究科で利用している Agri-Fish-Web と manaba について、基本的な機能と操作法を概説した。これらのシステム（特に前者）は全員何らかの形で利用してはいるものの、農学部と水産学部で使い方が異なり、意外と把握していない機能があることが農林水産学研究科の教務委員会で明らかになり、これらの解説を実施する機会を希望する声が上がっていた。このテーマはそれを受けてのものである。この時点ではその意図はなかったが、令和2年度には遠隔授業の必要性からこれらのツールの重要性が極めて高まった。この研修会はその布石になったと思われる。

#### FD ミニ研修会

「学生アンケートから見る農学部生の姿」

日時・場所 3/3 (火) 13:00~13:10

演者 農学部 FD 委員長 畑 邦彦

今年度より IR コンソーシアム学生アンケートの学部としての解析を求められており、興味深いデータが得られたため、それを紹介する機会としてミニ研修会を設定した。授業アンケートの項でも触れたように、農学部の問題点の一つとして時間外学習の短さがあり、それを多くの教員に紹介できたのは有意義な機会であったと思われる。

参加者は64名で、これは教員の83%となった。なお、共催の方の研修会と授業参観を合わせると、FD活動への参加は70名（のべ146名）となり、これは教員の91%となる。昨年度の参加率は85%であったため、わずかながら参加率が上昇し、90%のラインに復帰したことになる。

## 6. ベストティーチャー賞の選考

昨年度決定された以下のような選考基準に基づき、3月に選考が行われた。

### 農学部ベストティーチャー賞選考基準

- (1) 授業評価アンケートの点数化（70点満点）
- (2) 授業参観報告書に「ベストティーチャーに推薦する」項目を作り、この推薦の数を点数化（30点満点）

選考の過程及び結果は以下の通りである。

### 選考方針

- ①被推薦投票数で順位を付け、上位者を候補として各項目を点数化する。
- ②推薦のあった授業のアンケートの点数化対象とする。ただし、授業アンケートの回答率が5割を切っている授業は点数化対象から外す。
- ③複数の授業に投票があった場合、投票点はまとめて個人の被推薦数として扱う。アンケート点については、対象となる授業の平均値を取る。
- ④担当者が複数含まれる授業については投票のみカウントし、アンケートは対象から外す（実質的に複数授業への投票の場合の個人の被推薦数の上積みのみとなる）。
- ⑤授業アンケートでFD委員会として意味の大きいと思われた項目を取り上げ、点数化する。

#### 点数化する項目

1.9 この授業の学習目標は達成できたと思いますか。（20点）

1.10 この授業は総合的にみて満足できるものでしたか。（20点）

1.11 この授業はシラバスに沿って進められましたか。（20点）

#### 回答率（10点）

1.9～1.11については、1が最高、4が最低の4段階評価なので、アンケートから平均値を取り、1が20点、2.5が0点になるよう平均値を変換する（ $(2.5-x) \times (20/1.5)$ ）。回答率については100%が10点になるよう比例配分する。

・アンケート点については、一人の教員につき対象となる授業が複数入っている場合は推薦数で重み付け平均を取る。

・被推薦数を 30 点満点で点数化する。

個人の被推薦数で順位付けを行い、その順位に点数を付ける（順位は個人ベースではなく点数ベース 例：被推薦数が 3、3、3、2、1、1 の場合、3 は同率 1 位、2 は単独 2 位、1 は同率 3 位）。

単独 1 位：30 点 同率 1 位：25 点 単独 2 位：20 点 同率 2 位：15 点  
単独 3 位：10 点 同率 3 位：5 点

#### 選考結果

・今回の投票では 24 名 26 科目に投票があり、複数担当、回答率 50%以下の授業を外すと、以下の教員・授業が選考の対象となった（以下敬称略）。

宮田 健	動物性食品学（複数担当の食品タンパク質にも投票あり）	
	計 3 票	
池永 誠	食環境微生物学	計 3 票
北原 兼文	植物性食品学	計 1 票
紙谷 喜則	品質管理システム学	計 1 票
樗木 直也	植物栄養・肥料学	計 1 票

授業アンケートの結果は以下の通りであった。

	学習目標	満足度	シラバス	回答率
動物性食品学	1.58	1.34	1.20	90.65
食環境微生物学	1.93	1.63	1.56	62.32
植物性食品学	1.52	1.18	1.16	87.01
品質管理システム学	1.84	1.54	1.46	86.25
植物栄養・肥料学	1.94	1.70	1.65	74.16

これを上記の計算式に基づいて点数化した。

宮田 健	79.22
池永 誠	63.01
北原 兼文	62.16
紙谷 喜則	49.06
樗木 直也	41.91

以上より、FD 委員長としては、2019 年度ベストティーチャー賞は宮田健准教授を推薦した。これを上記のように FD 委員会に諮り、了承を得た。推薦調書



における推薦理由は以下の通りである。

---

農学部ベストティーチャー賞選考基準に基づき、農学部FD委員会が選考した結果、宮田健准教授を令和元年度のベストティーチャー賞に推薦する。

農学部ベストティーチャー賞選考基準では、農学部のFD活動の柱となっている授業参観に参加した教員による推薦と、学生による授業アンケートの結果を数値化して選考することになっているが、被推薦者は教員による推薦で1位となり、対象となった授業「動物性食品学」の授業アンケートでも極めて高い評価となっており、総合して農学部の授業の中で最高の点数となった。これにより、農学部FD委員会は推薦を決定した。選考の具体的な詳細は添付資料を参照のこと。

「動物性食品学」は複数の学科、コースにわたって多くの学生が受講する基幹的な授業であり、カリキュラム上重要な位置を占めている。授業アンケートからシラバスに則った授業の実施が伺われ、カリキュラムの基幹としての役割を十分果たしていることが分かる。学生からは身近な題材に対する親しみに加え、manabaにおける質問対応を評価するコメントが目立っており、丁寧な題材の用意と学生への対応が特に優れた点として挙げられる。manabaを利用したアクティブラーニングの実践例の一つとしても特筆すべき事例と思われる。以下、教員の授業参観報告書と学生の授業アンケートから授業の感想を抜粋して示す。

- ・manabaでの資料配布やレスポンの活用により、流れが非常にスムーズだと感じた。また、学生が集中力を継続するよう様々なトピックスを織り交ぜて話をしていたのが印象的だった。
- ・授業後にmanaba でアンケートがあり、疑問を出したら丁寧に回答してくださるのがよいと思った。
- ・マナバでの質問に丁寧に対応して下さった。
- ・身近なトピックが多く、勉強とともに普段でも役に立つ情報を沢山学ぶことができた。動物性食品学にとっても興味が湧いた。
- ・毎回の質問にも丁寧に答えてもらえて嬉しかったです。とても身近な食品の話だったので興味を持って聞けました。
- ・三年前期に受けている講義の中でも、分かりやすさや勉強のしやすさ、内容の充実性についてとても高いレベルにあり、取ってよかったと思える授業でした。ペーパーレスの講義でマナバに資料が載せられましたが、それも便利だと思います。出席がレスポンのみになると少しありがたいかなと思いました。
- ・とても興味深くおもしろい授業でした。説明もわかりやすく、manabaでの質問対応もしてくれて、信頼できる先生だなと感じました。

---

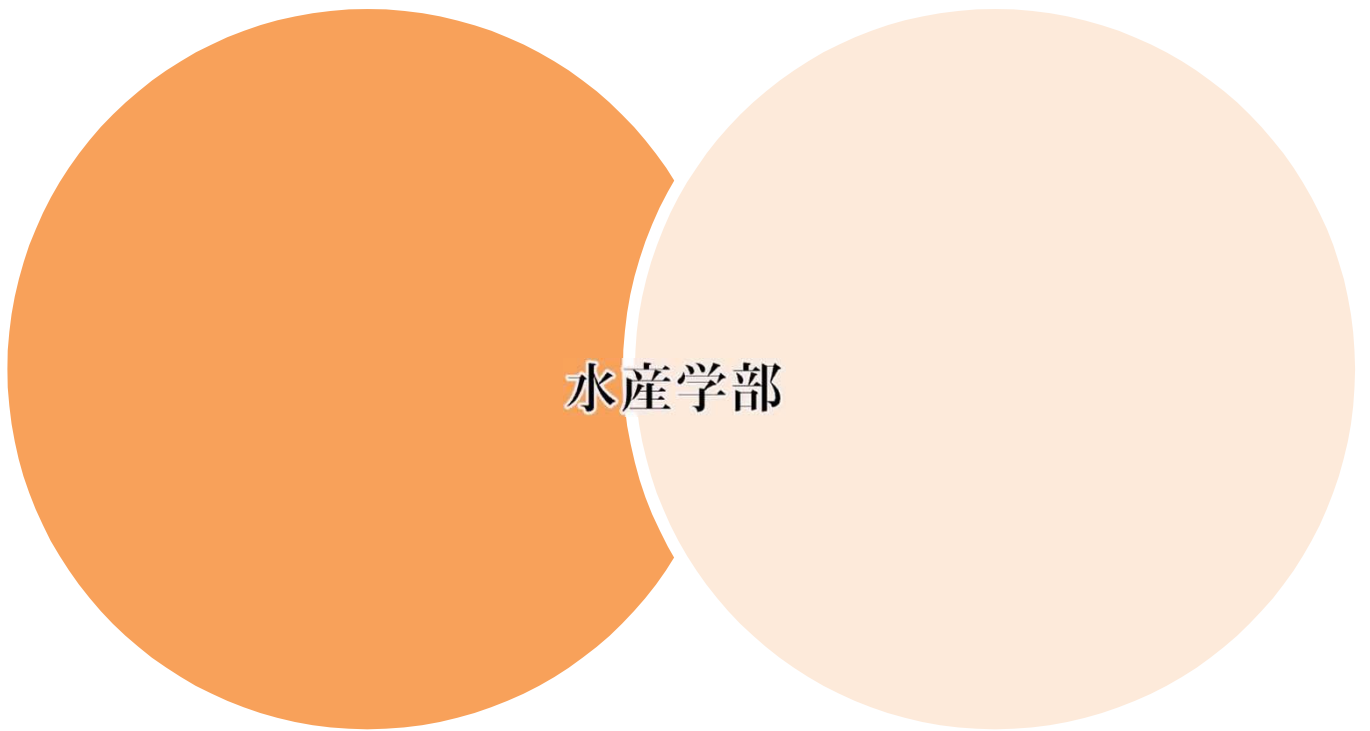
## 7. 全学FD活動への参加

農学部 FD 委員長は全学 FD 委員会に全て出席するとともに、FD 研修会・講習会 WG のメンバーとなり、また、9/9 に開催された新任教員 FD 研修会、10/5 に開催された FD・SD 合同フォーラム、12/9 に開催された学生・教職員ワークショップに補助スタッフとして参加した。

大学IRコンソーシアム学生調査結果（平成30年度実施分）の評価・分析について

農学部FD委員 畑 邦彦

	注目した知見	知見に対する解釈	改善・対応策
【1年生のみ】 本学への志望度及び高校時代の経験	第一志望率は54.9%と比較的高い。 現役合格率も80.3%と高めである。	高校生への需要が十分あることを示しており、望ましい方向と 思われる。	現在以上に鹿児島大学農学部への志望が高まるよう、引き続き広報に力を入れていきたい。
大学での学びの実態	1. 実習・フィールドワークの体験率が極めて高い。 2. 異文化理解、地域理解が顕著に上昇した 3. 数理的 능력の上昇が少ない。 4. 時間外での勉強時間が少ない。	1. 2. 農学部の目指す方向性が実現されている。 3. 農学部は生物系が主体なため、数理系を苦手とする学生が多い。カリキュラムの関係上、科目も少ない。 4. 時間外での学習についての動機付けが不足している。	1. 2. 今後もこれらの点を重視していきたい。 3. 数理系の科目を増やすのは困難だが、少なくとも減らさないようにする必要がある。 4. 時間外学習の習慣や動機付けを向上する対策を検討していきたい。
英語運用能力の熟達度及び英語学習の状況	英語運用能力は全般的に落ちており、特に表現する力が上級生で大きく落ちている。	英語は学習の機会がなければ運用能力は落ちていく。特に2年次において継続的な学習が十分でない可能性が高い。	新課程において2年後期に英語を入れたのはこの対策である。新課程開始直後まだまだ十分効果は見えていないが、状況の推移に注目したい。
大学生生活に対する意識	全体的に満足感が高めだが、上級生では時間の使い方や横の繋がりに不足な部分が見られる。	全体としては問題のない範疇と思われる。	横の繋がりを重視する科目や活動はいくつかあるので、状況の推移を見守りたい。



よりよい教育環境を創るために

学生と教職員による、学生のための  
ファカルティ・ディベロップメントの取り組み



2019 年度

鹿児島大学水産学部 FD 委員会

## 1. はじめに

鹿児島大学水産学部・FD委員会では、学生に対する指導の充実、主体的な学習を促すための方法の検討、教育・研究の場が抱える今日的課題への対応などを課題として活動に取り組んできました。2019年度に部局で企画・開催したFDイベントとして、アンケート調査等以外にも部局内の教職員の親睦を深めることを目的としたFD研修会（研究交流会）、2020年度より実施される計画となっている文科省による学生調査の概要について理解を深めることを目的としたFD講習会“文部科学省・国立教育政策研究所による「学生調査」について考える”を開催しました。また、大学の企画による若手教員を対象としたFD研修会、教職員と学生がともに大学の教育について考えるFDワークショップにも積極的に参加しました。この一年間のFD委員会の活動を振り返り、以下のようにまとめました。なお、2019年度に水産学部や大学全体で企画したFD活動への参加者は、部局FD研修会（研究交流会）に15人（専任教員の33%）、部局FD講習会（文科省実施学生調査関係）に36人（78%）、公開科目に対する授業参観科目7科目に7人（15%）、授業改善報告の作製が50科目で40人（87%）、全学FD企画への参加が計5人（10%）であり、水産学部の専任教員の100%がいずれかのFD活動に参加しました。

## 2. 授業アンケート

水産学部FD委員会では、各期の授業が終了する毎に受講した学生に対して授業アンケート（表1）を行っています。アンケートはmanabaを利用して行われ、受講生の授業を選択した動機や予習及び復習時間などの調査、授業に対する満足度を計ることを中心に据えた質問を設定し、回答の集計結果から各科目の評価を行いました。ここでは、2018年度後期から2019年度後期までのアンケートを分析した結果の概要について報告します。

### 2-1. 授業アンケート内容

昨年度のFD報告書では授業アンケートの実施が2018年前期より従来の

表1 manabaを用いた水産学部授業アンケートの質問

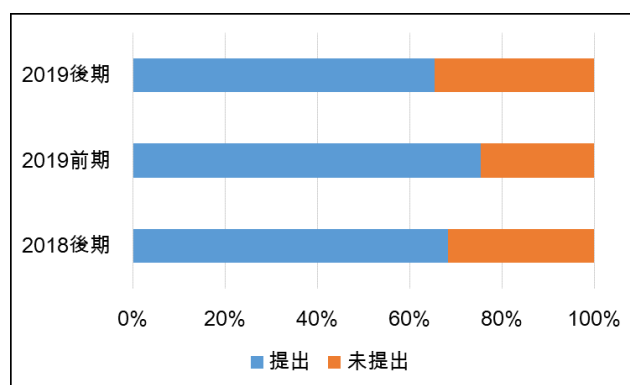
1. この授業を選んだ動機は何ですか？（複数回答可） 授業内容に興味・関心を持ったから・専攻分野との関連性を考えて・履修しやすい曜日や時間帯 だったから・必修科目だから・単位修得のため
2. この授業について、毎週平均でどのくらい自宅学習（予習、復習、宿題など）をしましたか。週あたりのおよその平均時間を記入してください。
3. 授業はシラバスどおりに進められましたか？（はい・いいえ）
4. シラバスに示された学習目標を達成できましたか？（はい・いいえ） ⇒いいえを選択した理由を以下に記入してください。
5. 授業は分かりやすかったですか？（はい・いいえ） ⇒いいえを選択した理由を以下に記入してください。
6. 授業中や授業時間外に発言や質問しやすいような配慮が感じられましたか？（はい・いいえ） ⇒いいえを選択した理由を以下に記入してください。
7. 第1回から最終回までの授業の構成や進め方は適切だと思いましたか？（はい・いいえ） ⇒いいえを選択した理由を以下に記入してください。
8. 他の科目と重複あるいは類似している内容がありましたか？（はい・いいえ） ⇒いいえを選択した理由を以下に記入してください。
9. 授業の内容は全般的にみて満足するものでしたか？（はい・いいえ） ⇒いいえを選択した理由を以下に記入してください。
10. 担当教員が次年度の授業改善に役立てますので、この授業に対する意見・要望などを自由に記述してください。

Moodle から manaba での実施に移行し、その結果提出率が上昇したと分析されています。2018 年後期及び 2019 年前期・後期のアンケートも manaba で行い、アンケート内容も継続して同じ内容で実施しました。manaba では表 1 の通り、受講生の満足度を「はい」か「いいえ」で回答した後、満足できた点あるいは、満足できなかった点について具体的な記述ができる様式になっており、より学生の講義への期待や理解を把握する結果を得られるアンケートとなっています。

## 2-2. 授業アンケート提出率と回答率

表 2 に 2018 年度後期から 2019 年度前期及び後期のアンケート提出率を示しました。2018 年度後期は 69 科目の提出がありました。学生の回答率は 25%であり、講義によって回答率が高い科目と低い科目の差が見られました。2019 年前期は 83 科目の提出があり、回答率は 42%であり、前年度の後期よりも提出率が高くなっていました。2019

表 2 水産学部授業アンケートの提出



年度後期は 66 科目の提出があり、回答率は 27%と前年度の後期と同程度の低い提出率でした。後期よりも前期は提出率が高い傾向にあり、前期は講義終了後に提出する時間がある一方、後期の場合には卒業や進級などによりアンケートに回答する時間に制約があるのではないかと考えられました。後期では講義担当者が授業の最終回にアンケートをする時間を設ける等の工夫が必要と考えられました。

## 2-3. アンケートの各項目集計結果及び総評

表 3 に基づき、各アンケート項目の集計結果について概要を報告します。

自宅学習時間平均は、2018 年度後期から 2019 年度前期及び後期の期間において平均約 1 時間でしたが、各科目別に見ると自宅学習時間には差がありました。自由記述欄からは、事前配布された講義資料が自宅での予習や復習に活用され、自習を促していることが読み取れました。

「シラバス通りの授業だったか」、「学習目標を達成できたか」という質問に対しては、いずれの年度も「はい」と答えた割合が 95%以上あり、計画的な講義が行われていることが確認できました。

「授業がわかりやすかったか」、「授業構成の進め方」、「全体的な満足度」の質問に対しては、「はい」と回答した割合がいずれの年度も 85~96%と高い値が得られました。自由記述欄には「はい」と答えた理由として、授業のわかりやすさに対しては「スライドだけでなくレジュメや板書があり

表3 各アンケート項目の集計結果. 表中の数字はアンケートに「はい」と答えた割合(%)。

	2018年後期	2019年前期	2019年後期
1. 自宅学習時間(平均)	1.0 h	1.1 h	1.0 h
2. シラバスどおりの授業だったか。	97%	97%	96%
3. シラバスの学習目標を達成できたか。	96%	97%	97%
4. 授業はわかりやすかったか。	88%	93%	91%
5. 質問や発言がしやすい配慮があったか。	88%	85%	86%
6. 授業構成や進め方は適切だったか。	94%	96%	94%
7. 授業に重複/類似している内容があったか。	24%	24%	16%
8. 全体的に内容に満足しているか。	91%	95%	93%

理解しやすかった」、「スライドに図や写真があり理解しやすかった」、「穴埋め式のテキストで大事な点がわかりやすかった」などの肯定的な意見が見られました。一方、「スライドの字や図が見えにくい」、「声が小さくて聞き取れない」、「スライドが早すぎて書きとれない、穴埋めに書く時間がない」など、授業の進め方を改善する際の参考意見がありました。

「授業構成や進め方は適切だったか」に関しては、「シラバス通りに進められていた」、「前回の講義でわからなかったことを質問したら次の回で回答と説明があった」という肯定的な意見が大半でした。一方、「講義毎に教員が変わり、流れがわかりにくかった」という意見もありました。オムニバス形式の講義が増えていますが、学生によっては様々な専門の教員が一つの講義に対して多角的に講義をすることで面白く理解しやすいと感じ、単調にならず興味が持てるという肯定的な意見を述べる者と、講義の中で内容の重複や難易度の差があり戸惑う意見を持った学生が存在し、講義担当者同士で指導方法や指導内容の共有をさらに進めることが必要と思われる。

「他の科目との重複や類似」に対しては、各年度いずれも20%程度が「重複や類似性があり」と答えていたが、それらは決して否定的な意見ではなく「他の講義の復習になる」、「関連した講義でより深く理解できる」という肯定的な意見が多く、分野の中での内容の重要性の確認や関連科目との繋がりを意識するきっかけとなっているようです。

授業の満足度を示す質問に対して、「はい」と答えたものは全ての質問に対して84~97%と高い値を得ることができました。しかし、講義によっては満足度が50%以下の科目もあり、今後とも科目担当教員は授業アンケート結果により授業振り返り、継続的に改善を検討することが大切であると考えられます。



### 3. 授業公開・参観と授業改善

授業公開については昨年度と同様に、授業公開科目を募った後に授業公開科目リストを作成、周知して授業公開を実施しました。2019年度は、下記に示す合計26科目で授業公開が行われました。昨年度よりも7科目多く公開科目が提供されました。

#### 前期（計16科目）

生物化学実験、電子工学基礎、漁具漁法学、資源生産管理学、養殖経済論、水産物流通論、食品衛生学、応用微生物学、プランクトン学、海洋学、水産海洋学、水圏生物学実験2、水産食品加工・保蔵学、基礎水産資源学、水産企業論、水産動物行動学、水産資源生物学

#### 後期（計10科目）

公衆衛生学、海洋観測乗船実習2、水圏生物学実験、水産資源解析学、食品科学基礎実験（食品コース）、水産食品科学、水質保全学、生体防御学、微生物学実験、水産総合演習I

公開科目数は昨年度よりも7科目多く提供され、座学、実験、実習の多岐にわたる科目の参観が可能となりました。FD委員会メンバーで授業参観を行い、前期科目の7科目で参観を行い、参観者による授業参観報告書が作成され、FD委員会を通じて担当教員へのフィードバックが行われました。授業参観者の意見には各教員の授業方法の工夫について参考になったとの意見が多く、まだまだ参観科目数は低い現状ですが、今後も授業公開・参観を継続することには大きな意義があると言えます。

また、授業内容をより良いものにするため、学生アンケートに基づいた「授業改善報告書」を開講者が作成しており、2019年度は下記に示す合計50科目で報告書の作成が行われました。前年度と比較すると13科目提出科目が増加しており、FD活動への取り組みが向上しています。それぞれの科目の担当教員（群）が授業アンケート結果を見つつ報告書を作成することで、授業における教授手法として継続すべき点、改善すべき点について振り返る機会となっています。水産学部では提出された授業改善報告書をHPに掲載し他教員にも閲覧可能としています。

#### 前期（合計27科目）

水産食品加工・保蔵学、プランクトン学、沿岸地域経営論、応用微生物学、海洋生態学、基礎水産資源学、基礎生化学、漁業管理学、漁具漁法学、魚類学、水産企業論、資源生産管理学、資源利用化学実験、食品衛生学、食品衛生学実験、水圏科学実験基礎、水圏生物科学野外調査実習、水圏生物学実験II、水産海洋学、水産学とキャリア、水産資源生物学、水産食料経済論、水産生物学、水産統計学演習、水産動物行動学、海洋学、栄養生理学

後期（合計 23 科目）

亜熱帯域水産調査乗船実習、海洋観測乗船実習Ⅱ、魚病学、魚類生理学、航海技術乗船実習Ⅱ、資源利用管理学、食品化学、食品科学基礎実験（食品コース）、水圏生物学実験 1、水産資源科学乗船実習Ⅱ、水産資源解析学、水産食品製造学実習、水産総合演習Ⅰ、水産増養殖学、先進資源利用科学、代謝生化学、資源生物学実験、鹿児島水産学、魚類栄養学、水圏環境保全科学、水産加工経済論、水産科学英語（水圏環境保全学分野）、微生物学実験

#### 4. FD 研修会（研究交流会）：「巨大生物 進化の謎 ～ ダイオウイカ大解剖 ～」ビデオ上映による近年の研究動向紹介

水産学部教員が協力しているダイオウイカに関わる研究成果がサイエンスドキュメンタリー映画（文科省推薦作品）にまとめられました。そこで FD 委員会ではこの機会を学部の教職員の交流と教員の研究テーマへの理解促進に活かそうと考え、このプロジェクト研究に関わっている水産学部・加藤早苗准教授を講師とし、2019 年 7 月 26 日と 7 月 31 日の 2 回、映画上映会と加藤先生による解説と質疑応答を行いました（図 1）。夕方の比較的時間を確保しやすい時間帯と、昼休み時間を利用したランチ形式での開催とし、教員 14 名、事務職員 9 名、学生 6 名の参加を得ました。加藤先生は深海生物であるダイオウイカの特に血液性状や機能についての研究を担当しており、貴重な血液サンプルの分析に取り組んでいることや、これまでの研究成果として得られているイカの血液の特徴について概略をご説明いただきました。参加者からは参加してよかったとの評価をいただき、日頃教育・研究に専心する教員とそれを支えてくれる事務職員とのよい交流の場となりました。



図 1 研究交流会の様子。水産学部 23 号教室において。

## 5. FD 講習会： 文部科学省・国立教育政策研究所による「学生調査」について考える

大学教育に対する評価指標が転換期を迎え、これまで大学や学部が独自に行ってきた学生調査に加え、文科省及び国立教育政策研究所による学部3年生を対象とした学生調査が2020年度より本格実施される計画となっています。水産学部では、この課題について一早く情報を共有すること、また学部あるいは各教員が行っている教育について調査項目に照らし合わせて自己評価してみる事を目的に、FD講習会“文部科学省・国立教育政策研究所による「学生調査」について考える”を2019年11月27日に実施しました。また、講習会では、これまで大学全体で実施している大学IRコンソーシアム学生調査の結果についても情報共有を行いました。講師は学部FD委員の安楽教授と久米准教授が務めました。

安楽先生からは、文部科学省・国立教育政策研究所により全国の大学を対象として実施される学生調査について、この調査に至る経緯と背景、大学の教育に対する評価指針の変化、2019年度より開始される試験調査、予定されている質問項目を含め詳細な説明がなされました。特に、中央教育審議会による（答申）2040年に向けた高等教育のグランドデザインの内容を抜粋し、学生調査を実施するに至る背景について情報共有がなされました。また、実際に学生に送付されるアンケート項目に自らの担当科目について予想回



図2. ワークショップの様子。水産学部大会議室において。

答してもらい、現状での各自の対応状況について自己分析する機会が設けられました。

久米先生からは、これまで鹿児島大学の1年生と3年生を対象として実施されてきた大学IRコンソーシアムアンケートの2018年度の結果の概要について講演されました。2018年度の大学IRコンソーシアムアンケートの結果から、他の国公立大学と比べて鹿児島大学の学生の学生生活への満足度は高いことが分かり、学生調査への回答も一定のよいものが得られるのではないかと考えられます。鹿児島大学は大学IRコンソーシアムに加盟し、IRを通じた学士課程教育の質的向上に取り組んできており、教育改善への継続的な取り組みについては一日の長があるのではないかと考えられます。

なお、このワークショップには教員36名の参加（専任教員の約8割）があり、多くの「講習会に参加してよかった」「学生調査についてよく理解できた」とのよいフィードバックを得ることができました。教員や学生を対象とした調査が今後増えることが予想されますが、このような情報共有の機会を作り、教職員がまずその趣旨に対する理解を深め、大学として学生に周知・依頼していく体制作りはとても重要と考えられます。

参考として、講習会時の配布資料を下に掲載しています。

2019.11.27

令和元年度 水産学部FD講習会

文部科学省・国立教育政策研究所による  
「学生調査」について考える

下記についての情報共有を目的とし実施いたします

- ・「学生調査」の背景と質問項目等の確認・情報共有 (安樂)
- ・「大学IRコンソーシアム学生調査」結果の概要 (久米)

2019年度大学IRコンソーシアムアンケート調査結果  
(2019年11月24日現在)

令和元年 月 日

文部科学省 IR 課 (教育用)

大学IRコンソーシアム学生調査2019への協力について

平素よりFD活動のご理解とご協力を感謝申し上げます。  
本学では、2012年度の試行実施より毎年、大学における教育の成果を測定することを目的として1年生、3年生を対象に大学IRコンソーシアム学生調査を行っています。また、本年度からはFD実施校での試行として、moodleを利用して全数調査を行うこととなり、ご協力もいたごいます。このうち、11月20日現在の回答率は前年より高まりとなっております。  
学校によっては、既に各自部部長等様にご案内しているところではございますが、本学調査のアンケートは、第3期中間評価の調査、また第3年調査(卒業予定の機関別認定評価のエッセンス)としても大変重要なものであり、その回答率も影響を持つものがあります。ついでに、3年生の回答率も前年と比較的な伸びがあることも、調査、実施の機会を伺って、回答率も更に上げていただきたいと思います。更なるご協力をお願いします。なお、出来るだけ多くの学生から回答を得られますようご協力を12月13日(金)まで延長させていただきますことをお願いいたします。

本学担当： 水産学部IR推進委員会 黒川・山崎  
TEL: 8305-3705  
E-mail: ianinfo@kan.kagoshima-u.ac.jp

学部	学生数	アンケート①		アンケート②	
		回答者数	回答率	回答者数	回答率
法文学部	423	214	50.6%	193	45.6%
教育学部	214	149	69.6%	128	59.8%
理学部	188	107	56.9%	90	47.9%
医学部医学科	116	59	50.8%	55	47.4%
医学部保健学科	120	50	41.7%	41	34.2%
農学部	56	29	51.8%	26	46.4%
工学部	491	252	51.3%	222	45.2%
経済学部	227	62	27.3%	53	23.3%
水産学部	151	101	66.9%	79	52.3%
共同獣医学部	32	21	65.6%	20	62.5%
合計	2004	1005	50.2%	874	43.6%

記事利用について

### 大学3年生約60万人にネット調査 勉強時間は？ 授業の工夫も見える化

2019/6/16 17:32 | 日本経済新聞 電子版

大学生の学習の実態をつかむため、文部科学省は2020年度にも、大学3年生の全員(約60万人)を対象としたインターネット調査を始める。勉強時間や授業の「役立ち感」などを聞き、大学・学部名が分かる形で結果を公表する。大学教育の状況を学生目線で「見える化」することで教育改革の機運を高め、政策立案や高校生の大学選びに役立てるのが狙いだ。

「全国学生調査」として国立教育政策研究所と共同実施する。大学や研究者による学生調査は以前からあるが、国が全学生対象に手がけるのは初めて。

事務連絡  
令和元年6月10日

各国立大学長 殿

文部科学省 高等教育局  
高等教育企画課長 巖名喜之

「全国学生調査(試行実施)」に関する意向等確認調査について(依頼)

平素より、文部科学行政に御協力をいただき、誠にありがとうございます。  
近年、各大学にどのような取り組みがあるのか、どのような学修成果を上げているのかについて、社会に対する教育の信頼を高めるため、文科省の組織強化として、昨年1月に中央教育審議会を取りまとめられました「2040年に向けた高等教育のグランドデザイン(答申)」においては、学修者本人の教育への「積極的関与」とともに、各大学の教育成果や教員に関する取組状況等の大学教育の「質に関する情報」を把握・公表していただくことの重要性を指摘する一方、国においては「社会の信頼」と受けとめる「全国的な学生調査等」を通じて「公表すべきである」と提言されています。

これを受け、文部科学省では全国的な学生調査の実施に向けて検討を開始し、令和元年5月30日(木)に開催されました中央教育審議会大学分科会教養マニフェスト特別委員会において、現在の検討状況【別添1】を報告したところです。今年度については、調査手法や設問項目を確立させるため、いくつかの大学にご協力をいただき、本年11～12月を目標に【別添2】の体制により「全国学生調査(試行実施)」を実施することを予定しています。  
つきましては、「全国学生調査(試行実施)」へのご協力の可否等について把握させていただきたいので、【別添3】「全国学生調査(試行実施)」意向等確認調査」にご回答いただき、下記期限までにご提出下さるようお願いいたします。ご不明点等がありましたら、【別添4】のQ&Aをご参照いただけますようお願いいたします。

なお、今年度は試行実施のため、ご協力いただけるご回答いただいた大学の中から、設置形態・規模・地域などを総合的に勘案の上、文部科学省において選定させていただき、後日お知らせいたします。一人でも多くの学生に参加いただけるよう、ご協力をお願いします。

「全国学生調査(試行実施)」参加大学一覧

区分	大学名	対象学生数
国立	北海道教育大学	1,225人
国立	富山県立大学	568人
国立	小樽商科大学	538人
国立	鹿児島大学	266人
国立	東北工業大学	422人
国立	朝日医科大学	182人
国立	信州大学	1,091人
国立	東京大学	564人
国立	神戸大学	882人
国立	山形大学	184人
国立	福岡大学	1,024人
国立	筑城大学	649人
国立	筑波大学	953人
国立	長崎技術大学	46人
国立	宇都宮大学	980人
国立	群馬大学	1,221人
国立	埼玉大学	1,625人
国立	千葉大学	2,498人
国立	東京理科大学	291人
国立	東京外国語大学	900人
国立	東京工業大学	1,157人
国立	お茶の水女子大学	503人
国立	東京学芸大学	1,073人
国立	東京理科大学	931人
国立	電気通信大学	756人
国立	一橋大学	1,008人
国立	東京海洋大学	494人
国立	横浜国立大学	1,722人
国立	鹿児島大学	2,548人
国立	長崎技術科学大学	463人
国立	上越教育大学	170人
国立	高松大学	1,853人
国立	金沢大学	1,865人
国立	福井大学	892人
国立	山梨大学	849人

514大学/764大学  
67.4%の大学が試行調査に参加意向

「全国学生調査(試行実施)」参加大学一覧

区分	大学名	対象学生数
私立	九州ルーテル学院大学	184人
私立	九州看護福祉大学	312人
私立	平成音楽大学	53人
私立	熊本保健科学大学	344人
私立	日本文理大学	618人
私立	南九州大学	274人
私立	九州保健福祉大学	311人
私立	鹿児島国際大学	621人
私立	志学館大学	320人
私立	鹿児島純心女子大学	141人
私立	沖縄国際大学	1,375人

図3. 参考資料：FD講習会配布資料。

**目的**  
「全国学生調査」の本格実施に向けて、令和元年度の試行調査では、適切な調査方法や設問項目などを整理・検証することを目的とする。

**調査対象**  
在籍する全ての3年生（標準修業年限が5年及び6年の場合は4年生）

**調査結果の取扱い**  
**(1) 文部科学省**  
全体の調査集計・分析結果や調査実施上の課題点等を文部科学省及び国立教育政策研究所のホームページで公表する。  
参加大学に対して、当該大学に在籍する学生の回答結果を一覧化したもの及びその集計結果を公表前に提供する。（調査項目7は除く。）このほか、集計結果をベンチマーキングに活用するための分析資料の提供を検討する。  
※自由記述（調査項目6及び7）を除く、全ての調査項目に回答したものを「有効」として、集計・分析する。なお、調査結果の詳細な分析を行うに当たっては、学部単位において「有効回答者数が30以上かつ有効回答率が10パーセント以上」又は「有効回答率が50パーセント以上」の回答を集計対象とする。  
※一般的な試行実施においては、全体の集計結果として、有効回答者数・有効回答率のほか、調査項目ごとの回答割合・平均値を公表するが（調査項目6及び7は除く。）、学生の回答結果を一覧化したもの及び参加大学・学部ごとの集計結果の公表は行わない。

**参加大学**  
対象学生を含め自大学内において、調査結果の共有を図るとともに、自大学の教育改善に活かすよう、努めるものとする。  
本試行調査の目的に鑑み、(1)により文部科学省から提供を受けた自大学に在籍する学生の回答結果を一覧化したもの及びその集計結果については、原則当該大学内の活用にとどめ、公表は行わない。

※ただし、参加大学間の合意により、当該大学間の調査結果について情報共有を図り、成果と課題を把握・検証し、教育の改善に取り組むことを妨げるものではない。

(高等教育局高等教育企画課高等教育政策室)  
- 登録：令和元年11月 -  
Copyright (C) Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology

**全国学生調査（試行実施）について**

**概要**  
● 国が全国共通項目で、学びの主体である学生目線から大学教育や学びに関する調査を実施。  
● 大学の学部3年生に、大学での学習状況や学習時間、知識や能力を身に付けるにあたって大学教育が役に立っているかなど在学中の学びの実態、について状況を把握。調査結果は大学の教育改善や大学教育に対する社会の理解促進、国における政策立案の基礎資料として活用。  
● 令和元年11月25日～12月20日（金）に実施。調査方法や設問項目などを整理・検証することを目的とした試行調査として実施。

**背景**  
● 学生がどのような能力を身に付けているのかについて、社会に対する説明や情報公開が十分との指摘。  
● 各大学が教育成果等の教育の質に関する情報を把握・公表していくこと、国は全国的な学生消費意識を把握し、比較できるような一環化して公表すべきとの要請。（「2040年に向けた高等教育のグランドデザイン」）（平成30年11月「中教審答申」）

**目的**  
● 各大学がフォーロバックされた学生の学習状況や公表された調査結果を踏まえ、各大学が教育改善に活かす。  
● 調査結果を参考に、大学教育に対する社会の理解を深める一助とする。  
● 調査結果を今後の国における政策立案の際に活用する基礎資料として活用。

**実施概要**  
【調査対象】  
● 参加大学の学部3年生（5～6年制課程は4年生）  
【調査方法】  
● Web（大卒向け）によるアンケート調査  
【調査時期】  
● 令和元年11月25日（月）～12月20日（金）  
【調査趣旨】  
● 大学での授業や経験、学習時間、知識や能力を身に付けるにあたって大学教育が役に立っているかなど  
【調査結果】  
● 全体の調査集計・分析結果や調査実施上の課題点を公表\*  
● 参加大学ごとの集計結果の公表は行わない  
● 参加大学には各大学の調査結果をフォーロバック

**実施体制**  
文部科学省 国立教育政策研究所  
参加大学  
学生  
調査結果の公表  
教育内容等の改善

答申  
**2040年に向けた高等教育のグランドデザイン**  
(答申)  
平成30年11月26日  
中央教育審議会

**2040年に向けた高等教育のグランドデザイン（答申）【概要】**

**I. 2040年の展望と高等教育が目指すべき姿**  
- 学習者主体の教育への転換 -  
● 必要とされる人材を養成するための教育への転換  
● 高等教育と社会の関係

**II. 教育研究体制**  
- 多様性と柔軟性の確保 -  
● 多様な学生  
● 多様な教員  
● 多様な柔軟な教育プログラム  
● 多様な受け止める柔軟な大学

**III. 教育の質の保証と情報公表**  
- 「学び」の真保証の再構築 -  
● 実証的データに基づく質保証の再構築  
● 教育研究の推進  
● 教育研究の推進

**IV. 10歳人口の減少を踏まえた高等教育機関の規模や地域配置**  
- あらゆる世代が学ぶ「知の基盤」 -  
● 高等教育機関への進学者と地域における高等教育  
● 地域における高等教育

**V. 各高等教育機関の役割等**  
- 多様な機関による多様な教育の提供 -  
● 各大学・専門職大学・専門職短期大学・短期大学・高等専門学校・専門学校・大学  
● 各大学・専門職大学・専門職短期大学・短期大学・高等専門学校・専門学校・大学

**VI. 高等教育を支える投資**  
- コストの可視化とあらゆるセクターからの支援の拡充 -  
● 教育・研究活動の質保証  
● 教育・研究活動の質保証

<目次>

はじめに ..... 1

I. 2040年の展望と高等教育が目指すべき姿 ..... 3  
- 学習者主体の教育への転換 - ..... 3  
1. 2040年に必要とされる人材と高等教育が目指すべき姿 ..... 3  
2. 2040年頃の社会変化の方向 ..... 7  
3. 2040年を展望した高等教育と社会の関係 ..... 10

II. 教育研究体制 ..... 14  
- 多様性と柔軟性の確保 - ..... 14  
1. 多様な学生 ..... 14  
2. 多様な教員 ..... 18  
3. 多様な柔軟な教育プログラム ..... 20  
4. 多様な受け止める柔軟な方針・手段等 ..... 22  
5. 大学の多様な「強み」の強化 ..... 25

III. 教育の質の保証と情報公表 - 「学び」の真保証の再構築 ..... 27  
- あらゆる世代が学ぶ「知の基盤」 ..... 27  
1. 高等教育機関への進学者とそれを踏まえた規模 ..... 34  
2. 国公認の役割 ..... 36  
3. 地域における高等教育 ..... 39

IV. 10歳人口の減少を踏まえた高等教育機関の規模や地域配置 ..... 42  
- あらゆる世代が学ぶ「知の基盤」 ..... 42  
1. 各大学校における特長と役割 ..... 42  
2. 大学校における特長と役割 ..... 43

V. 各高等教育機関の役割等 ..... 46  
- 多様な機関による多様な教育の提供 ..... 42  
1. 各大学校における特長と役割 ..... 42  
2. 大学校における特長と役割 ..... 43

VI. 高等教育を支える投資 ..... 49  
- コストの可視化とあらゆるセクターからの支援の拡充 ..... 46  
1. 今後の検討課題 ..... 49  
2. 今後の検討課題 ..... 49

おわりに ..... 50

図3. (続き) 参考資料：FD講習会配布資料.

**答申P27-28**

**〔我が国における質保証の取組状況〕**

我が国の大学については、上記のような高等教育の大衆化に伴う問題を前提としてとして、教育の質を保証するための取組は不十分な状況がある。例えば、国立教育政策研究所の調査によれば、大学1、2年生の授業出席時間の平均は1週間当たり約20時間、学習・復習の時間の平均は約5時間にとどまっており、授業以外の学修時間が非常に短い。そして、この数字は過去の同様の調査と比較しても改善されておらず、例えば授業以外の学修時間が11時間以上とする大学1年生が割合を超える米国の大学と比較しても学修時間が短いという指摘がある。

また、米国の大学と比べて、学生が受講する科目が多く、授業以外の学修時間の確保を難しくしているのではないという指摘もあり、密度のある学修体制を整える必要がある。この背景には、学位を与える課程全体としてのカリキュラム全体の構成や、学修者の知的習熟過程等を考慮・把握することなく、単に履修の教員が教えた内容が授業として提供され、教育課程内の位置付けや水準などを含めて体系的なカリキュラムが意識されていないという課題があると考えられる。

大学教育の質の保証については、これまでも高次の中央教育審議会等の答申で提言が行われ、文部科学省の事業を活用するなど多くの積極的な改善の努力が進められているが、一方、改訂の真面目に取り組む大学と改善の努力が不十分な大学とに二極化しているのではないという指摘もあり、大学全体として十分な信頼が得られているとは言えない。こうした状況について、社会からの説明を求めた声が続くなか、改善の必要は当然である。諸外国においても、大学進学率が上昇し、高等教育を受ける学生が増加するほど、各大学において公費を投入し、価値ある質の教育を行っているのか、説明責任が求められるようになっていく。

**答申P28-29**

**〔大学が行う「教育の質保証」と「情報公表」〕**

大学教育の質を保証するためには、第一歩として大学自らから取り組むことが重要である。このため、本答申においては、学生自治の「情報公表」レベルのみならず、全学的な内部質保証を推進することが求められる。

一方、国としては、教育内容の改善・改革に係る指針を提示し、教育マネジメントの健全な発展を促進する必要がある。教育マネジメントの健全な発展には、各大学が学長の下で、学長選定・学長任期の体制、教育課程編成・実施の方針、入学・卒業生への方針（以下「三つの方針」という。）に基づく体系的で組織的な大学教育を展開し、その成果を学生を育てる課程（プログラム）共通の考え方や尺度等に反映し、評価・改善を行うことで、学修の改善に取り組むことが必要である。なお、大学が教育を実施する際には、個別の教育内容に関する学修者の評価を行うことが重要である。

また、教育マネジメントの健全な発展には、大学の学修成果に関する情報や大学全体の学修成果に関する情報を公開し、関係者との連携を促進し、質保証に活用する必要がある。

なお、カリキュラムの策定に当たっては、卒業認定・学位授与の方針とカリキュラムの適合性や学修性を確保できよう。卒業認定にカリキュラムを保持するために必要な体制の整備やガバナンスの強化も重要である。

また、各大学の地域社会や産業界等の外部からの声や期待を踏まえ、積極的に教育責任を果たしていくという観点からも大学全体の学修成果や教育に係る取組の改善の促進が重要である。教育の質保証を促進し、社会からの信頼を回復し、社会からの期待に応えることが重要である。これに加えて、産業界等も大学の学修成果の向上について、各大学が積極的に公表することにも必要である。また、社会が理解しやすいよう、国は、全国的な学修成果や大学調査を通じて整理し、比較できるような取組を公表すべきである。

教育の質保証や情報公表の取組を進め、社会からの信頼を回復し、社会からの期待に応えることとなり、その結果として教育の質が向上することにより、社会からの期待に応えることが求められる。なお、高等教育の質保証の取組を進めることと同時に、産業界においては、採用プロセスに当たり、「求める人材」のイメージや教育内容を具体的に示していくことや、大学が持つ専門化された学修成果に関する情報を活用し、人材の育成に活用することにより、大学における学修成果を重視しているイメージを学生に対して積極的に発信することによって、社会からの信頼を回復し、社会からの期待に応えることにより、社会からの期待に応えることが求められる。その結果として、産業界の中心者として、高等教育の質保証と産業界の連携を促す必要がある。

**〔高等教育機関において、教育目標を達成するための方針を定め、教育課程の実施に係る内部組織を整備し、教育を実践するとともに、評価・改善を図りながら教育の質の向上を図る、組織的な取組を指す。〕**

**答申P29-30**

**〔国が行う「質保証システム」の改善〕**

我が国の質保証に係る制度は、大学の質保証認可による大学設置時の質保証、設置後の教育研究活動に対する様々な大学評価による質保証の組み合わせにより成り立っている。設置認可の段階においては、教育研究上の理念など設置の趣旨が具体的に示されているが、設置の趣旨に照らし教育課程は適切であるが、教育課程を構築することのみを主とした職員組織であり、かつ、校舎等施設・設備が質的に十分であるかを評価している。

大学の設置後の段階においては、様々な評価機関のうち設置を受けた機関（認証評価機関）が、自ら定める評価の基準に基づき大学を定期的に評価し、その基準を満たすかどうかについて社会に向けて明らかにすることにより、社会による評価を受けるとともに、評価結果を踏まえて大学が自ら改善を図ることを促している。

この設置認可と認証評価のシステムは、我が国の高等教育機関の質を保証していることを国内に示すものであるが、その前例となるものは、昭和31（1956）年に制定された大学設置基準である。昨今の状況の変化を受けて改訂が検討されてきたところではあるが、設置基準における学問分野の種類の見え方が現実に合っていないかどうか、高等教育への進学率が上がっている現状を踏まえた外的な基準が現実に即しているものかどうか等について検討が必要である。

2019年に施行された高等教育の質保証と方向性を踏まえ、前述したとおり「多様な評価機関が様々なシステム」を実現するためには、現在の設置基準を時代に応じたものとして、例えば、設置基準、教育方針、施設設備等について、時代の変化や情報技術の進歩、大学教育の進展を踏まえ、学生・教員双方の視点で、編入や転入学などの学生の流動性への対応、教育課程を踏まえた教員組織の在り方、情報技術を活用した授業を行う際の施設設備の在り方など、技術的に見直す必要がある。

なお、この見直しについては、新たに設置される大学のみならず、既に大学も含んだ全ての大学を対象として、我が国の大学教育全体の質保証を根拠から行おうとするもので、今後、専門的な審議を踏まえつつ、設置基準の解釈の明確化、設置計画履行状況等質保証評価の結果を踏まえた厳格な対応などについて質保証のための必要見直しを行い、速やかな対応を行うことが必要である。

**〔本学はR3に機関別認証評価を受審〕**

鹿児島大学は「大学IRコンソーシアム」の会員であり、「大学IRコンソーシアム学生調査」を実施してきている

The screenshot shows the homepage of the University IR Consortium. The header includes the name '一般社団法人 大学IRコンソーシアム' and 'IR consortium'. The main content area features a 'Contents' menu with items like Home, 本組織について, 活動内容, 事例紹介, 入会案内, 会員の方へ, and お問い合わせ. A prominent banner reads '大学IRコンソーシアム会員一員' and '2019（令和元）年10月7日現在 正会員 五十名程'.

The screenshot displays the '学生調査の実績' (Survey Results) section. It includes a table with columns for '学生調査データ' (Survey Data) and '学生の学修成果' (Student Learning Outcomes). Below the table, there is a flowchart showing the process from '調査実施' (Survey Implementation) to '結果公表' (Result Publication). The text explains that the survey is conducted annually and the results are used to improve the university's educational quality.

2017年度大学IRコンソーシアムアンケートの結果報告書について

2017年11月に、学部1年生および3年生を対象とした大学IRコンソーシアムアンケートを実施しました。このアンケートは、学生の学習意欲や学習成果を把握することを目指して実施されたものです。アンケートで収集した各様式データを他大学との比較を通して、本学の現状を把握し分析することで、今後の教育改善の参考にさせていただきます。

本アンケートの調査結果を報告いたします。

【概要】  
調査時期：2017年11月  
調査対象：2017年度学部1年生および3年生（それぞれ500名）  
調査結果：2017年度大学IRコンソーシアムアンケート結果報告書（1,130頁）  
（※学内関係者のみ閲覧可能資料となります。取り扱いは「はじめて」です。）

**〔大学IRコンソーシアム学生調査と文科省・教育政策研究所共同実施学生調査は類似と考えられる。ただし、国の行う調査は、公表を前提としている点で異なる。〕**

図3.（続き）参考資料：FD講習会配布資料.







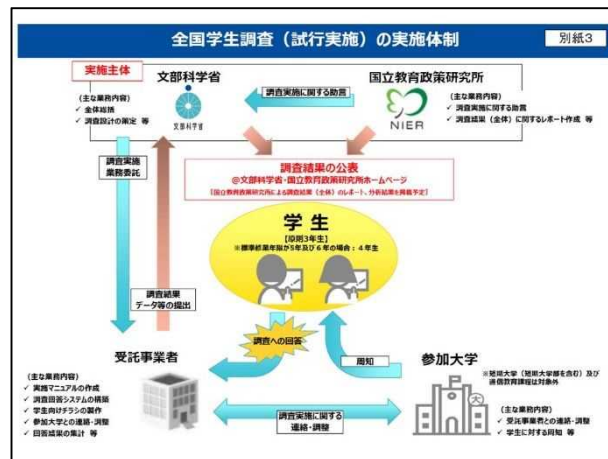
文部科学省  
NIER 国立教育政策研究所

## 大学生の学習実態に関する調査研究について(概要)

平成 28 (2016) 年 3 月

1. 調査研究の目的

この調査研究は、大学生の学習実態を包括的に把握することを通じて、大学教育の質的向上を推進するために、いかなる支援策の導入や制度的整備が必要とされるか等、政策立案に活用可能な基盤的データを構築することを目的として、国立教育政策研究所高等教育研究部が、本研究所のプロジェクト研究「大学生の学習実態に関する調査研究」(研究期間：平成 25～27 年度)として実施したものである。



令和元年度水産学部FD講習会

## 2018年度大学IRコンソーシアムアンケート 結果の概要について

## 調査目的

大学IRコンソーシアム学生調査の実施要綱に基づいて、鹿児島大学の学生の学習習慣や学習成果を把握することを目的とする。

※1 一般社団法人大学IRコンソーシアムとは、平成21年度文部科学省「大学教育の質のための戦略的連携支援プログラム」(GP)に採択された「相互評価に基づく学生支援教育保証システムの創出—国公立4大学IRネットワーク」を、発展的に継承するために設立された組織

※2 GPプログラムでは、国公立4大学の連携により、学生調査分析を軸とするIR(インスティテュショナル・リサーチ Institutional Research)機能の開発を基盤として、IRを通じた連携大学間での相互評価の結果を学生支援教育の質的向上に結びつける質保証システムの創出と全国規模のIRコミュニティの育成を目指す

※3 大学IRコンソーシアム加盟の国公立大学グループ(鹿児島大学、秋田大学、山形大学、宇都宮大学、大分大学、大阪府立大学、鹿児島大学、群馬大学、富山県立大学、千葉大学、保護医療大学、名古屋大学、長崎県立大学、北海道大学、金沢工業大学、琉球大学、和歌山大学)

## 調査方法

①1年生調査

2018年11月1日～12月14日、学部1年生を対象に、初年次セミナーⅡの授業中にmanabaで回答してもらった

②上級生調査

2018年11月1日～12月14日、学部3年生を対象に、授業中にmanabaで回答してもらった

## 調査項目

- 学生のプロフィール、授業経験、学習行動や受講態度、正課内外の活動時間、知識や能力の獲得状況、英語運用能力レベル、大学生活や大学教育に対する満足感、将来イメージ、入学前の学習経験(1年生調査のみ)、在学中に経験しておきたいこと(上級生調査のみ)
- 具体的には、「1. 回答者の基本特性」「2. 本学での学びの実態」「3. 英語運用能力の熟練度」「4. 大学生活に対する意識」

図 3. (続き) 参考資料：FD講習会配布資料.

## 有効回答数と回答率

	年生調査			
	人数		人数	
	10,852		9081	
鹿児島大学(全体)	1,229		749	
	301		40	
	132	59.7%	119	40.5%
	133	69.3%	99	48.0%
	50	48.9%	8	7.1%
	66	54.2%	48	34.1%
	35	61.4%	38	71.7%
	301	59.3%	303	59.9%
	128	59.5%	56	26.2%
	68	48.4%	14	8.9%
	21	68.6%	29	95.7%

## 1. 回答者の基本特性

1. 片道の通学時間と居住形態
2. 浪人経験の有無(1年生のみ)

## 1. 回答者の基本特性(結果)

- 本学を第一志望として入学した者の割合は45.2%。最も割合が多いのは医学部医学科(66.7%)。最も低いのは歯学部(28.1%)、水産学部は41.4%
- 79.8%の学生が現役合格者。最も割合が多いのは法文学部(90.3%)。最も低いのは歯学部(28.1%)、水産学部は75.9%

## 2. 本学での学びの実態

1. アンケート項目
  - (1) 授業を通じた学習経験
    - ・実験、実習、フィールドワークなどを実施し、学生が体験的に学ぶ
    - ・仕事に役立つ知識やスキルを学ぶ、など
  - (2) 授業内外での学習状況
  - (3) 週あたりの活動時間
  - (4) 入学後の能力の変化

## 2. 本学での学びの実態(結果)

- ポジティブな点として「仕事に役立つ知識やスキルを学ぶ」「授業の進め方に学生の意見が取り入れられる」、マイナスな点として「取りたい授業を履修登録できなかった」
- 水産学部の学生は、国公立大学Gに比べ「インターネットを使って授業課題を受けたり、提出したりした」、国公立大学G、本学の他学部と比べ「授業課題のために図書館の資料を利用した」機会が多いと捉えている

## 2. 本学での学びの実態(結果の続き)

- 国公立大学G、本学の他学部と比べ、水産学部の学生は高い割合で「教員に将来のキャリアの相談をした」「教員に親近感を感じた」と回答
- 入学後の能力の変化として「異文化の人々に関する知識」「グローバルな問題の理解」「卒業後に就職するための準備の程度」がアップ

図3.(続き) 参考資料: FD講習会配布資料.

### 3. 英語運用能力の熟達度

#### 1. アンケート項目

- (1) 英語の能力（聞く力、読む力、会話力、表現力、書く力）について、現在到達していると思うレベルを回答
- (2) 英語圏への渡航経験

### 3. 英語運用能力の熟達度（結果）

- 本学の全体的な傾向をみると、「読む力」の水準が最も高く、「会話力」の水準が最も低い
- 「会話力」を除くすべての能力水準のピークが1年生であり、3年生の能力水準は1年生よりも低い
- 国公立大学Gと比較すると、3年生の「読む力」の水準が著しく低い
- 本学の学生の殆どが渡航経験をもっていない（1年生81.3%、上級生77.4%）

### 4. 大学生活に対する意識

#### 1. アンケート項目

- (1) 大学への適応感
- (2) 大学生活の充実感
- (3) 大学教育に対する満足感
- (4) 大学設備に対する満足感
- (5) 学部卒業後の予定進路
- (6) 将来展望の有無
- (7) 卒業後に備えて大学在学中に経験したいこと（上級生のみ）
- (8) 高校時代の経験（1年生のみ）

### 4. 大学生活に対する意識（結果）

- 大学への適応感、充実感が高い
- 大学教育に対する満足感、大学設備に対する満足感が高い
- 卒業後に備えて大学在学中に経験したいこととして「職業意識の形成につながる教育を受ける」「教員が設定した特定の課題に対して、チームで取り組むプロジェクト型の授業を受ける」「自分で課題を見つけ、自分で解決していくような訓練を受ける」「卒業後の進路について、本学の卒業生や先輩と話をする」

### まとめ

- 学生調査で問われる項目の大部分が、IRコンソーシアムアンケートでカバー
- IRコンソーシアムアンケートの結果から判断すると、本学、特に水産学部の学生の満足度は高い

図3.（続き）参考資料：FD講習会配布資料.

## 6. 卒業時アンケート・修了時アンケート

水産学部では、教育 PDM の中で掲げられている学部教育目標および各分野のカリキュラム目標に対する達成度の調査として、卒業時アンケートを卒業式直前に実施してきました。アンケートでは、学部教育目標および各分野のカリキュラム目標に基づく質問、及び卒業後の進路決定に関する質問を設定しました。ここでは、2018 年度（平成 30 年度）の卒業時・修了時アンケートについてまとめます（学部回答率 53%（139 名中 74 名）、修士回答率 56%（32 名中 18 名））。

卒業時アンケートおよび修了時アンケートの設問項目を図 4 および図 5 に示します。各質問は「①十分にそう思う」「②ある程度思う」「③少し思う」「④全く思わない」の 4 段階、または「①はい」「②いいえ」の 2 段階で評価してもらいました。項目 A では学部の教育目標に対する満足度を図るための質問、項目 B では国際化に関する質問（2016 年度から追加）、項目 C では就職・進学に関する質問に答えてもらいました。卒業時、修了時アンケートの分析結果を図 6 および図 7 に示します。

教育目標に関する質問（項目 A）では、「①十分にそう思う」「②ある程度そう思う」「③少し思う」を加えると、全体として教育目標に掲げた各能力を修得できたと考える学生がほとんどでした。卒業生については、A4（水産技術者として必要な英語能力が向上した）および A6（水産技術者として必要な報告書作成、プレゼンテーション能力、問題解決型の能力が身に付いた）について、「①十分にそう思う」の割合が昨年度と比べて大幅に増加していました。その一方で、4 を除く質問で「④全く思わない」の割合が微増していました。修了生については、昨年とほぼ同様の結果となりましたが、A3（高度な水産技術者に必要な英語を運用できる能力が身についた）において「①十分にそう思う」の割合が減少し、「③少し思う」の割合が大幅に増加していました。その一方で、「④全く思わない」の含まれない質問も多く、全体としては専門分野における学修に肯定的な考えを持てたようです。

国際化に関する質問（項目 B）では、特に卒業生について、全ての質問において「①十分にそう思う」の割合が増加あるいは微増していました。国際化に対する意識を高くもつ学生が増えたようです。海外研修に参加した学生の割合は 20%ほどでしたが、そのうち 90%程度は大学として開講しているものであったことから、大学から与えられた機会をうまく活用している様子も見て取れました。修了生については、ほとんどの質問において「①十分にそう思う」「②ある程度そう思う」「③少し思う」を加えた割合が昨年と比べて増加しました。このことから、昨年と比べて国際化へ向けて積極的な取り組みをする学生が増えたことが考えられました。

就職・進学に関する質問（項目 C）では、学部生・大学院生共に「①十分にそう思う」「②ある程度そう思う」が 70%を超えており、希望する職種に就くことができた学生が多かったと考えられます。特に修了生については、未決定という回答はありませんでした。その一方で、学部生については、前年度と同程度の割合で未決定の回答があったため、細やかな就職支援が必要かもしれません。

以上、卒業時・修了時アンケートの結果、質問項目によっては昨年の結果と比べて肯定的な回答が減ったものもありましたが、全体としてみると肯定的な回答が増えており、学部・大学院の教育

目標は概ね達成できていると考えられます。

### 平成30年度 卒業時アンケート (学部生用)

- A. 水産学部が掲げる下記の教育目標について、あなた自身が修得できたかどうかを総合的な観点から評価してください。
1. 地域・国際両面で、資源・環境・食料分野に強い水産技術者に必要な教養と基本的な知識を体系的に修得した (必須)  
①十分にそう思う ②ある程度思う ③少し思う ④全く思わない
  2. 水産学の各専門分野で、実践的で高いレベルの知識・技術を修得した (必須)  
①十分にそう思う ②ある程度思う ③少し思う ④全く思わない
  3. 水産技術者として十分な基礎学力が身につく、生涯学べる能力を習得した (必須)  
①十分にそう思う ②ある程度思う ③少し思う ④全く思わない
  4. 水産技術者として必要な英語能力が向上した (必須)  
①十分にそう思う ②ある程度思う ③少し思う ④全く思わない
  5. 水産技術者として実務に必要な情報処理能力が身に付いた (必須)  
①十分にそう思う ②ある程度思う ③少し思う ④全く思わない
  6. 水産技術者として必要な報告書作成、プレゼンテーション能力、問題解決型の能力が身に付いた (必須)  
①十分にそう思う ②ある程度思う ③少し思う ④全く思わない
  7. 水産技術者として必要なレベルの現場対応能力が備わった (必須)  
①十分にそう思う ②ある程度思う ③少し思う ④全く思わない
  8. 水産技術者として適切な協働 (チームワーク) 能力や倫理観、判断力及び職業観が身に付いた (必須)  
①十分にそう思う ②ある程度思う ③少し思う ④全く思わない
  9. 水産技術者として国際社会や地域社会の課題に果敢に取り組む意識と思考力が身についた (必須)  
①十分にそう思う ②ある程度思う ③少し思う ④全く思わない
- B. グローバル化に関する考え、取り組みについて、ご回答ください。
10. 在学中に海外研修に参加しましたか? (必須)  
①はい ②いいえ
  11. その海外研修は共通教育や学部など大学として開講されているものですか? (10で「はい」と答えた方のみ)  
①はい ②いいえ
  12. 在学中に英語の力を伸ばすための取り組みを何かしましたか? (必須)  
①十分にそう思う ②ある程度思う ③少し思う ④全く思わない
  13. 在学中に、異文化理解を深めるための取り組みを何かしましたか? (必須)  
①十分にそう思う ②ある程度思う ③少し思う ④全く思わない
  14. 在学中に、他民族について理解を深めるための取り組みを何かしましたか? (必須)  
①十分にそう思う ②ある程度思う ③少し思う ④全く思わない
  15. 入学前と比較して、英語の力は向上したと思いますか? (必須)  
①十分にそう思う ②ある程度思う ③少し思う ④全く思わない
  16. これから、英語の力 (語学力) を伸ばしていこうと思いますか? (必須)  
①十分にそう思う ②ある程度思う ③少し思う ④全く思わない
  17. これから、異文化理解を深めていきたいと思いますか? (必須)  
①十分にそう思う ②ある程度思う ③少し思う ④全く思わない
  18. これから、他民族について理解を深めていきたいと思いますか? (必須)  
①十分にそう思う ②ある程度思う ③少し思う ④全く思わない
  19. これからの就職先等では、国際的に活躍すること、または国際的な知識や理解が期待されますか? (必須)  
①十分にそう思う ②ある程度思う ③少し思う ④全く思わない
  20. これから、国際的に活躍していきたいと思いますか? (必須)  
①十分にそう思う ②ある程度思う ③少し思う ④全く思わない
  21. 在学中に取得した英語資格の種類及びスコア等をお教えてください。(任意)
- C. 就職・進学について、ご回答ください。
22. あなたが修得した知識や技術が活かせて、希望する職種等に就職・進学できた (必須)  
①十分にそう思う ②ある程度思う ③少し思う ④全く思わない ⑤未決定
- D. 水産学部の教育について評価できる点、改善すべき点がありましたら、ご回答ください (任意)

図4. 2018年度卒業時アンケートの様式.

### 平成 30 修了時アンケート（大学院生用）

- A. 水産学研究科が掲げる下記の教育目標について、研究科入学時と比較してあなた自身が修得できたかを総合的な観点から評価してください。
1. 地域・国際両面で、資源・環境・食料分野の高度な専門的知識を体系的に修得した（必須）  
 ①十分にそう思う     ②ある程度思う     ③少し思う     ④全く思わない
  2. 水産学の幅広い最新の基盤的知識を持ち、新たな取り組みに対応できる能力が身についた（必須）  
 ①十分にそう思う     ②ある程度思う     ③少し思う     ④全く思わない
  3. 高度な水産技術者に必要な英語を運用できる能力が身についた（必須）  
 ①十分にそう思う     ②ある程度思う     ③少し思う     ④全く思わない
  4. 知識と体験に基づき新たな調査・研究のプロセスを実施できる能力が身についた（必須）  
 ①十分にそう思う     ②ある程度思う     ③少し思う     ④全く思わない
  5. 調査・研究計画を策定できる能力が身に付いた（必須）  
 ①十分にそう思う     ②ある程度思う     ③少し思う     ④全く思わない
  6. 高度な調査・研究機器等を利用できる能力が身についた（必須）  
 ①十分にそう思う     ②ある程度思う     ③少し思う     ④全く思わない
  7. 情報収集と資料整理・分析を高い水準でできる能力が身についた（必須）  
 ①十分にそう思う     ②ある程度思う     ③少し思う     ④全く思わない
  8. 報告書作成やプレゼンテーションができる能力が身についた（必須）  
 ①十分にそう思う     ②ある程度思う     ③少し思う     ④全く思わない
  9. 調査・研究の結果を統合的に理解・活用し纏めることができる能力が身についた（必須）  
 ①十分にそう思う     ②ある程度思う     ③少し思う     ④全く思わない
  10. 高度な水産技術者として職業能力で現場対応ができる能力が身についた（必須）  
 ①十分にそう思う     ②ある程度思う     ③少し思う     ④全く思わない
- B. グローバル化に関する考え、取り組みについて、ご回答ください。
1. 1. 研究科在学中に海外研修に参加しましたか？（必須）  
 ①はい     ②いいえ
  1. 2. その海外研修は大学として開講されているものですか？（1.1で「はい」と答えた方のみ）  
 ①はい     ②いいえ
  1. 3. 研究科在学中に英語の力を伸ばすための取り組みを何かしましたか？（必須）  
 ①十分にそう思う     ②ある程度思う     ③少し思う     ④全く思わない
  1. 4. 研究科在学中に、異文化理解を深めるための取り組みを何かしましたか？（必須）  
 ①十分にそう思う     ②ある程度思う     ③少し思う     ④全く思わない
  1. 5. 研究科在学中に、他民族について理解を深めるための取り組みを何かしましたか？（必須）  
 ①十分にそう思う     ②ある程度思う     ③少し思う     ④全く思わない
  1. 6. 研究科入学前と比較して、英語の力は向上したと思いますか？（必須）  
 ①十分にそう思う     ②ある程度思う     ③少し思う     ④全く思わない
  1. 7. これから、英語の力（語学力）を伸ばしていこうと思いますか？（必須）  
 ①十分にそう思う     ②ある程度思う     ③少し思う     ④全く思わない
  1. 8. これから、異文化理解を深めていきたいと思いますか？（必須）  
 ①十分にそう思う     ②ある程度思う     ③少し思う     ④全く思わない
  1. 9. これから、他民族について理解を深めていきたいと思いますか？（必須）  
 ①十分にそう思う     ②ある程度思う     ③少し思う     ④全く思わない
  2. 0. これからの就職先等では、国際的に活躍すること、または国際的な知識や理解が期待されますか？（必須）  
 ①十分にそう思う     ②ある程度思う     ③少し思う     ④全く思わない
  2. 1. これから、国際的に活躍していきたいと思いますか？（必須）  
 ①十分にそう思う     ②ある程度思う     ③少し思う     ④全く思わない
  2. 2. 研究科在学中に取得した英語資格の種類及びスコア等をお教えてください。（任意）
- C. 就職・進学について、ご回答ください。
2. 3. あなたが修得した知識や技術が活かせて、希望する職種等に就職・進学できた  
 ①十分にそう思う     ②ある程度思う     ③少し思う     ④全く思わない     ⑤未決定
- D. 水産学研究科の教育について評価できる点、改善すべき点がありましたら、ご回答ください（任意）

図 5. 2018 年度修了時アンケートの様式。

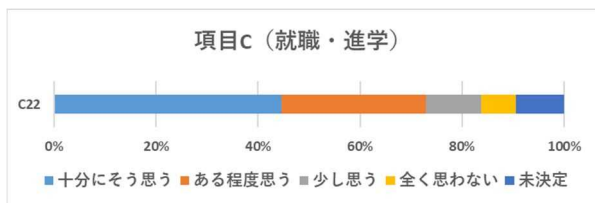
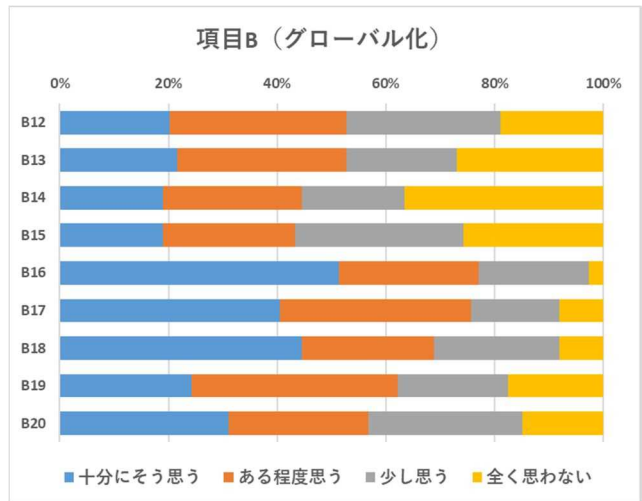
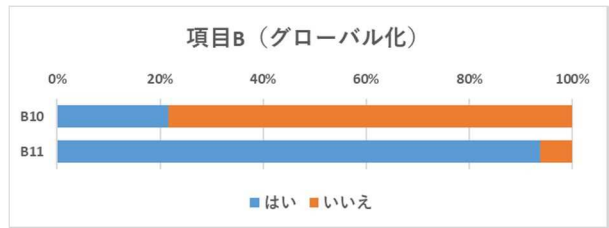
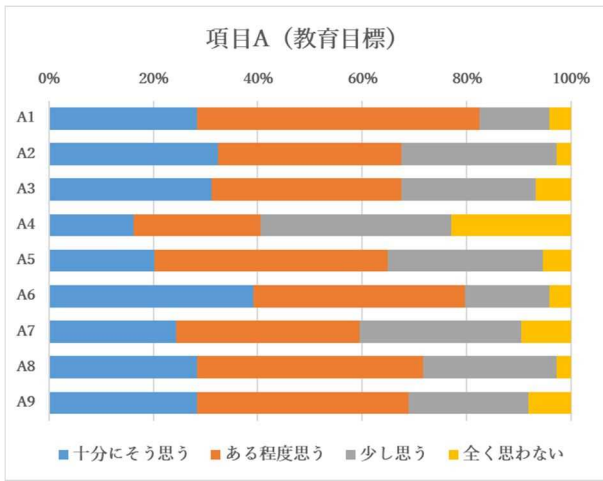


図 6. 2018 年度卒業生に関する集計結果.

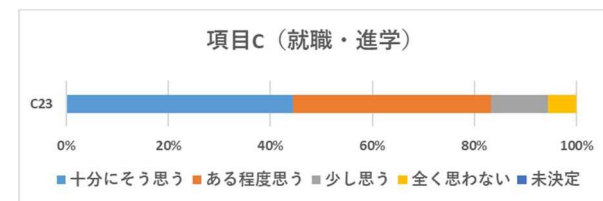
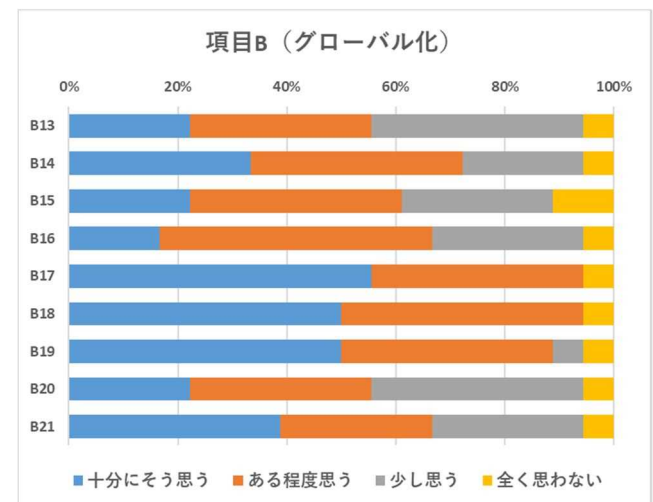
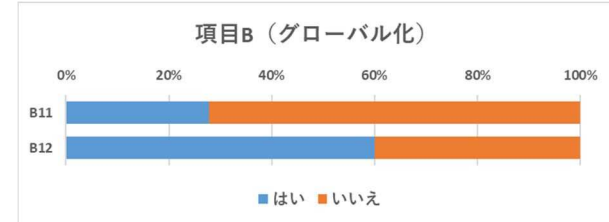
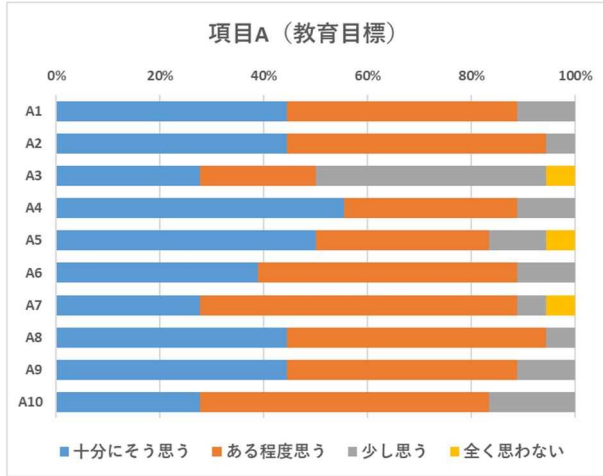


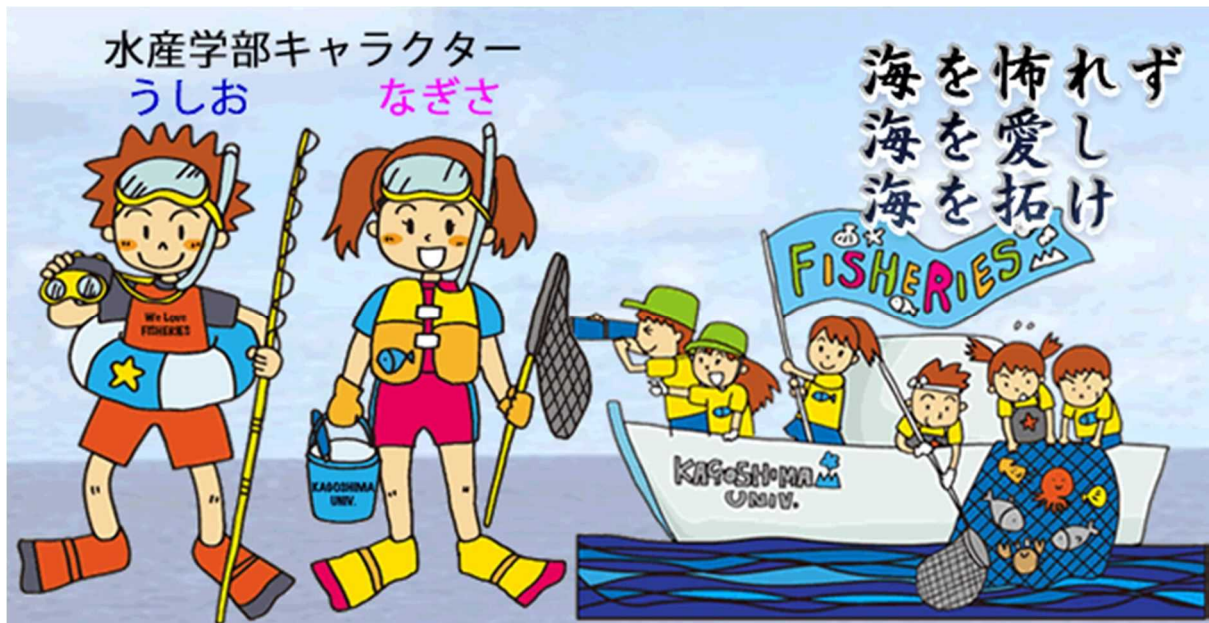
図 7. 2018 年度修了生に関する集計結果.

## 7. ベストティーチャー賞被推薦者の選出

2018年度より、優れた講義を行った教員を表彰する「ベストティーチャー賞」制度がはじまりました。本年度においても授業アンケート結果を基にFD委員会で協議しベストティーチャーとしての被推薦者の選考を行いました。水産学部では、2019年度前期および後期に実施した授業アンケートを分析し、特に授業アンケート項目の中の、授業が計画通りに実施されたか、学習目標を達成できたか、授業が分かりやすかったか、授業中や授業時間外に質問しやすい配慮があったか、授業の進め方は適切であったか、授業に満足できたかに関わる質問を重要視し、アンケートへの回答を分析しました。その結果、水産学部水産経済学分野の鳥居准教授を被推薦者として選出しました。鳥居准教授の担当科目が授業に対する学生満足度の高い上位10科目中の3科目に選出され、3科目の満足度の平均においても最も高い評価となりました。特に「沿岸地域経営論」への評価が高く、授業アンケートの学生コメントには、「板書と資料で理解しやすい作りだった」、「講義の他に、新聞の読み込みは予備知識の発達にも繋がりとても関心が持てた」などの意見が挙げられていました。

水産学部でも多くの科目が開講されていますが、ベストティーチャーの開講する科目の授業参観等を企画し、さらに学部の教育が学生にとってより良いものになるよう工夫していきたいと考えます。





編集：鹿児島大学水産学部 FD 委員会

委員長：安樂和彦

副委員長：小谷知也

委員：久米 元、田角聡志、國師恵美子、鬼頭景子、有田洋一、郡山 茂

鹿児島県鹿児島市下荒田 4-50-20 099-286-4111（代表）

大学IRコンソーシアム学生調査結果（平成30年度実施分）の評価・分析について

水産学部FD委員 鳥居 享司

	注目した知見	知見に対する解釈	改善・対応策
【1年生のみ】 本学への志望度及び高校時代の経験	①第一志望入学者の割合が低い。	①前期日程・後期日程の入学者の割合に起因するものと考えられ、概ね予想される値と解釈できさる。	①高校生に対するアピールを強化する。鹿児島県の高校生への水産学に対する理解を深める。 前期・後期日程の入学者数の継続的検討を行う。
大学での学びの実態	①入学後の能力の変化について評価が高い。 ②予習・復習時間がやや短い。	①共通教育、専門教育への満足感を概ね得ていると解釈する。 ②予習・復習の必要性は初回講義時等に説明されていると思うが、課題として与えられない場合の実施が少なくと解釈する。	①学部 PDM に沿った教育の実施を継続する。授業アンケート実施、授業改善報告書作成を継続する。 ②特に復習を促す良い方法（実施例）等を教員間で共有する。
英語運用能力の熟達度及び英語学習の状況	①上級生の書く力が他と比較して低い。	①水産学部は学部 1-3 期に実用英語 A/B/C/D を開講し、特にリスニング、発音、スピーキング、読解の指導に注力している。	①学部としては適宜、学生の資質に応じて英語教育は強化しており、今後も現在の体制を継続したい。
大学生活に対する意識	①大学への適応感や充実感、大学教育および設備に対する満足感が高い。	①各科目の担当者が確実にシラバス内容を実施していることによる。また、小規模学部が故に、	①講義等の学修や学生生活に関わる、学生との円滑なコミュニケーションの継続。

	<p>②卒業後に備えて大学在学中に経験したことについての評価が高い。</p>	<p>学生間、学生と教員間、また学生係との距離感が近いことも一因と考える。</p> <p>②水産学自体が応用学問的な側面を持ち、産業に関わる話題が講義でも大きく取り扱われていて、ことを反映したものと考える。グループワーク、アクティブラーニングは学部の様々な科目で意識的に取り組まれており、学生の主体的な学修に寄与している」と理解できる。</p>	<p>②小規模学部であり、教員学生間の風通しは比較的良いと理解しているが、今後もこの雰囲気継続するため、シラバス内容の確実な実施を行う。また、企業を招き入れて実施する業界セミナーも有益と見なせ、継続する。</p>
--	--	--	--



共同獣医学部

## 第 1 節 平成 31(令和元)年度共同獣医学部 FD 活動の記録

### I. 共同獣医学部 FD 活動組織 (FD 委員会の構成と活動状況)

委員長 帆保 誠二 教授  
委員 内藤 清惟 准教授  
委員 畑井 仁 准教授  
委員 畠添 孝 准教授  
事務担当者 安田 和義 学務課長  
吉村 学 教務係長  
豊島 剣士 教務係員

---

#### 第 1 回共同獣医学部 FD 委員会

日時：令和元年 5 月 10 日（金）11：00～11：26、場所：農・獣医 A 棟 1 階産業動物内科学分野  
学生室

出席者：帆保委員長、内藤、畑井、畠添（敬称略）、陪席者：事務部（豊島教務係員）

議題 1. 全学への平成 31 年度 F D 活動経費要求について

2. 合同 FD 研修会の役割分担について

3. その他

報告事項 1. その他

#### 第 2 回共同獣医学部 FD 委員会

日時：令和元年 8 月 30 日（金）11：00～11：20、場所：農・獣医 A 棟 1 階産業動物内科学分野  
学生室

出席者：帆保委員長、内藤、畑井、畠添（敬称略）、陪席者：事務部（豊島教務係員）

議題 1. 合同 FD 研修会：基調講演の依頼文について

2. 合同 FD 研修会：プログラム・会場について

3. 合同 FD 研修会：分科会について

4. 合同 FD 研修会：FD 報告書について

報告事項 1. その他

---

その他、その都度 F D に関する個別事項について、メール会議にて対応した。

## II. 授業公開と授業参観の取り組み

共同獣医学部では、農学部所属の平成 15 年度後期より授業公開・授業参観を実施している。平成 24 年度より共同獣医学部が発足し、本年度は共同獣医学部所属の学生のみとなった。

平成 28 年度後期より山口大学共同獣医学部も本取り組みに一部参画している。両大学の教員が互いに参観できる仕組みとしており、参加者拡大を図ると共に、本取り組みの内容をより一層充実させている。

実施については、例年どおり、授業公開に関する周知は事務経由でメールにて行い、授業参観参加希望申込みは授業担当者と参観希望者間の直接のやりとり(メールおよび電話)で行われた。授業担当者と授業参観者には、可能な限り、参観後に意見交換をお願いすると共に、参観者には様式の配布を行って、授業参観報告書を作成・提出してもらった。また、平成 26 年度からは授業担当者に参観者からの報告書に対する対策書を作成・提出してもらい、本取り組みの PDCA サイクルを確立している。

本年度の獣医学科教員の授業参観参加者数は、前期 24 名、後期 24 名、のべ 31 名の参加があった。参加率は 67%程度となっている。次年度以降、さらに参加者拡大を目指す。

### III. 学生による授業評価

令和元年度前期・後期の2回、学生による授業評価のアンケートをmanabaによって実施した。共同獣医学部では、山口大学と共通の授業評価アンケートを作成し、実施している。質問項目は下記のとおりである。

授業評価アンケート(講義・演習用)				
授業科目番号:	9999	受講者氏名	<small>(氏名の記載は任意です。)</small>	
授業科目名:	●●●●	( <input checked="" type="checkbox"/> ) 遠隔授業システム	教員名:	●●●●
* このアンケートは、授業をより良くするために行うもので、回答者の成績には一切影響ありません。考えを率直に記入してください。				
* この回答用紙は機械(OCR)で読み取り集計しますので、該当する番号の前の○印を塗りつぶしてください。				
1	あなたは、この授業にどれくらい出席しましたか?(括弧の数字は15回授業の場合の出席回数参考値です)			
	<input type="radio"/> 1. 90%以上(14回以上)	<input type="radio"/> 2. 80~90%(12~13回)	<input type="radio"/> 3. 60~80%(9~11回)	<input type="radio"/> 4. 40~60%(6~8回)
	<input type="radio"/> 5. 40%未満(6回未満)			
2	あなたはこの授業において、時間外学習(予習・復習・宿題やレポート作成・試験勉強)をどれくらい行いましたか?総時間を平均し、授業1回あたりの時間に換算してお答えください。			
	<input type="radio"/> 1. 3時間程度または以上	<input type="radio"/> 2. 2時間程度	<input type="radio"/> 3. 1時間程度	<input type="radio"/> 4. 30~50分程度
	<input type="radio"/> 5. 30分未満			
3	この授業内容の水準はどうでしたか?			
	<input type="radio"/> 1. 高かった	<input type="radio"/> 2. やや高かった	<input type="radio"/> 3. 妥当だった	<input type="radio"/> 4. やや低かった
	<input type="radio"/> 5. 低かった			
4	この授業の分量はどうでしたか?			
	<input type="radio"/> 1. 多かった	<input type="radio"/> 2. やや多かった	<input type="radio"/> 3. 妥当だった	<input type="radio"/> 4. やや少なかった
	<input type="radio"/> 5. 少なかった			
5	教員の話し方は明瞭で聞きやすく、専門用語や理論などの説明はわかりやすいと思いませんか?			
	<input type="radio"/> 1. そう思う	<input type="radio"/> 2. ややそう思う	<input type="radio"/> 3. どちらとも言えない	<input type="radio"/> 4. あまりそう思わない
	<input type="radio"/> 5. そう思わない			
6	板書やビデオ、コンピュータ並びに教科書やプリントなどの教材は、効果的に使われていましたか?			
	<input type="radio"/> 1. そう思う	<input type="radio"/> 2. ややそう思う	<input type="radio"/> 3. どちらとも言えない	<input type="radio"/> 4. あまりそう思わない
	<input type="radio"/> 5. そう思わない			
	<input type="radio"/> 6. この授業は該当しない			
7	授業中やオフィスアワーでの質問に対する教員の対応に満足しましたか?			
	<input type="radio"/> 1. そう思う	<input type="radio"/> 2. ややそう思う	<input type="radio"/> 3. どちらとも言えない	<input type="radio"/> 4. あまりそう思わない
	<input type="radio"/> 5. そう思わない			
8	この授業はシラバスに沿って進められましたか?			
	<input type="radio"/> 1. そう思う	<input type="radio"/> 2. ややそう思う	<input type="radio"/> 3. どちらとも言えない	<input type="radio"/> 4. あまりそう思わない
	<input type="radio"/> 5. そう思わない			
9	あなたは、シラバスに記載された学習目標を達成したと思いますか?			
	<input type="radio"/> 1. そう思う	<input type="radio"/> 2. ややそう思う	<input type="radio"/> 3. どちらとも言えない	<input type="radio"/> 4. あまりそう思わない
	<input type="radio"/> 5. そう思わない			
	<input type="radio"/> 6. 答えられない			
10	あなたは、この授業の内容を理解できましたか?			
	<input type="radio"/> 1. そう思う	<input type="radio"/> 2. ややそう思う	<input type="radio"/> 3. どちらとも言えない	<input type="radio"/> 4. あまりそう思わない
	<input type="radio"/> 5. そう思わない			
11	この授業は、あなたにとって満足のいくものでしたか?			
	<input type="radio"/> 1. そう思う	<input type="radio"/> 2. ややそう思う	<input type="radio"/> 3. どちらとも言えない	<input type="radio"/> 4. あまりそう思わない
	<input type="radio"/> 5. そう思わない			
* 以下は、遠隔授業システムに関する質問です。該当する場合(授業科目名の横にチェックあり)、送信・受信に関わらず回答してください。				
12	教員の音声は聞き取りやすかったと思いますか?			
	<input type="radio"/> 1. そう思う	<input type="radio"/> 2. ややそう思う	<input type="radio"/> 3. どちらとも言えない	<input type="radio"/> 4. あまりそう思わない
	<input type="radio"/> 5. そう思わない			
13	教員やモニター画面の映像は見やすかったと思いますか?			
	<input type="radio"/> 1. そう思う	<input type="radio"/> 2. ややそう思う	<input type="radio"/> 3. どちらとも言えない	<input type="radio"/> 4. あまりそう思わない
	<input type="radio"/> 5. そう思わない			
14	教員の授業の進め方はスムーズでしたか?			
	<input type="radio"/> 1. そう思う	<input type="radio"/> 2. ややそう思う	<input type="radio"/> 3. どちらとも言えない	<input type="radio"/> 4. あまりそう思わない
	<input type="radio"/> 5. そう思わない			
15	授業中は、授業に集中できる環境や雰囲気であったと思いますか?			
	<input type="radio"/> 1. そう思う	<input type="radio"/> 2. ややそう思う	<input type="radio"/> 3. どちらとも言えない	<input type="radio"/> 4. あまりそう思わない
	<input type="radio"/> 5. そう思わない			
16	対面式の講義と遜色ない、一体感・臨場感のある授業だったと思いますか?			
	<input type="radio"/> 1. そう思う	<input type="radio"/> 2. ややそう思う	<input type="radio"/> 3. どちらとも言えない	<input type="radio"/> 4. あまりそう思わない
	<input type="radio"/> 5. そう思わない			
* 以下は、授業担当教員の各自設定質問です。教員によって異なりますので、指示があれば回答してください。				
17 (自由質問 ①)				
	<input type="radio"/> 1. 選択肢 1	<input type="radio"/> 2. 選択肢 2	<input type="radio"/> 3. 選択肢 3	<input type="radio"/> 4. 選択肢 4
	<input type="radio"/> 5. 選択肢 5			
18 (自由質問 ②)				
	<input type="radio"/> 1. 選択肢 1	<input type="radio"/> 2. 選択肢 2	<input type="radio"/> 3. 選択肢 3	<input type="radio"/> 4. 選択肢 4
	<input type="radio"/> 5. 選択肢 5			
<b>自由記述</b>				
この授業についての意見・要望・感想などを自由にご記入下さい。スペースが足りない場合、適宜裏面にご記入下さい。				
ご協力ありがとうございました。				
共同獣医学部ファカルティ・ディベロップメント委員会				

平成 29 年後期の様式より、新たに【教員からの自由質問欄】を設けた。これにより、各授業担当教員個々の質問設定が可能となり、教員が必要とする独自の意見収集が可能となった。

なお、様式に記載している「遠隔授業」とは、遠隔授業システムを使って、教員の映像や音声、授業の資料等をリアルタイムで送信あるいは受信して行う授業である。共同獣医学部では、この「遠隔授業」に関する設問を用意し、学生の授業環境に対する満足度を測っている。

共同獣医学部所属の学生に対して実施し、共同獣医対象の共通教育科目と専門教育科目において、前期 50 科目（講義・演習：35 科目、実験・実習：15 科目）、後期 58 科目（講義・演習：41 科目、実験・実習：17 科目）、計 108 科目分の回答を回収した。

次のページより、今年度のアンケート集計結果を紹介する。



●アンケート集計結果（全科目集計）

【講義・演習科目】前期：48科目、後期：37科目

No.	質問項目	回答	R1前期	% (R1前)	R1後期	% (R1後)
1	この授業にどれくらい出席しましたか。	90%以上	345	80.6%	155	83.3%
		80～90%	78	18.2%	30	16.1%
		60～80%	3	0.7%	1	0.5%
		40～60%	0	0.0%	0	0.0%
		40%未満	2	0.5%	0	0.0%
		<b>計</b>	<b>428</b>	<b>100.0%</b>	<b>186</b>	<b>100.0%</b>
2	この授業において、時間外学習をどれくらい行いましたか。（授業1回あたりの時間）	3時間程度または以上	82	19.2%	22	11.8%
		2時間程度	94	22.0%	45	24.2%
		1時間程度	157	36.7%	66	35.5%
		30～50分程度	51	11.9%	29	15.6%
		30分未満	44	10.3%	24	12.9%
		<b>計</b>	<b>428</b>	<b>100.0%</b>	<b>186</b>	<b>100.0%</b>
3	この授業内容の水準はどうでしたか？	高かった	80	18.7%	35	18.8%
		やや高かった	175	40.9%	57	30.6%
		妥当だった	157	36.7%	89	47.8%
		やや低かった	10	2.3%	4	2.2%
		低かった	6	1.4%	1	0.5%
		<b>計</b>	<b>428</b>	<b>100.0%</b>	<b>186</b>	<b>100.0%</b>
4	この授業の分量はどうでしたか？	多かった	118	27.6%	36	19.4%
		やや多かった	154	36.0%	64	34.4%
		妥当だった	144	33.6%	84	45.2%
		やや少なかった	9	2.1%	2	1.1%
		少なかった	3	0.7%	0	0.0%
		<b>計</b>	<b>428</b>	<b>100.0%</b>	<b>186</b>	<b>100.0%</b>
5	教員の話し方は明瞭で聞きやすく、専門用語や理論などの説明はわかりやすいと思いませんか？	そう思う	151	35.3%	81	43.5%
		ややそう思う	161	37.6%	65	34.9%
		どちらとも言えない	73	17.1%	28	15.1%
		あまりそう思わない	30	7.0%	10	5.4%
		そう思わない	13	3.0%	2	1.1%
		<b>計</b>	<b>428</b>	<b>100.0%</b>	<b>186</b>	<b>100.0%</b>
6	板書やビデオ、コンピュータ並びに教科書やプリントなどの教材は、効果的に使われていましたか？	そう思う	162	38.0%	85	45.9%
		ややそう思う	149	35.0%	60	32.4%
		どちらとも言えない	68	16.0%	23	12.4%
		あまりそう思わない	39	9.2%	14	7.6%
		そう思わない	8	1.9%	3	1.6%
		この授業は該当しない		0.0%		0.0%
		<b>計</b>	<b>426</b>	<b>100.0%</b>	<b>185</b>	<b>100.0%</b>
7	授業中やオフィスアワーでの質問に対する教員の対応に満足しましたか？	そう思う	136	31.8%	66	35.5%
		ややそう思う	125	29.2%	48	25.8%
		どちらとも言えない	152	35.5%	65	34.9%
		あまりそう思わない	9	2.1%	5	2.7%
		そう思わない	6	1.4%	2	1.1%
		<b>計</b>	<b>428</b>	<b>100.0%</b>	<b>186</b>	<b>100.0%</b>
8	この授業はシラバスに沿って進められましたか？	そう思う	188	43.9%	82	44.1%
		ややそう思う	122	28.5%	55	29.6%
		どちらとも言えない	104	24.3%	43	23.1%
		あまりそう思わない	9	2.1%	5	2.7%
		そう思わない	5	1.2%	1	0.5%
		<b>計</b>	<b>428</b>	<b>100.0%</b>	<b>186</b>	<b>100.0%</b>

9	あなたは、シラバスに記載された学習目標を達成したと思いますか？	そう思う	95	22.7%	31	16.8%
		ややそう思う	177	42.3%	86	46.5%
		どちらとも言えない	105	25.1%	55	29.7%
		あまりそう思わない	28	6.7%	11	5.9%
		そう思わない	13	3.1%	2	1.1%
		答えられない		0.0%		0.0%
		<b>計</b>	<b>418</b>	<b>100.0%</b>	<b>185</b>	<b>100.0%</b>
10	あなたは、この授業の内容を理解できましたか？	そう思う	105	24.5%	37	19.9%
		ややそう思う	204	47.7%	113	60.8%
		どちらとも言えない	82	19.2%	26	14.0%
		あまりそう思わない	29	6.8%	7	3.8%
		そう思わない	8	1.9%	3	1.6%
				<b>計</b>	<b>428</b>	<b>100.0%</b>
11	この授業は、あなたにとって満足のいくものでしたか？	そう思う	125	29.2%	62	33.3%
		ややそう思う	197	46.0%	89	47.8%
		どちらとも言えない	69	16.1%	27	14.5%
		あまりそう思わない	24	5.6%	6	3.2%
		そう思わない	13	3.0%	2	1.1%
				<b>計</b>	<b>428</b>	<b>100.0%</b>
※12	教員の音声は聞き取りやすかったと思いますか？	そう思う	186	51.1%	77	56.2%
		ややそう思う	105	28.8%	38	27.7%
		どちらとも言えない	55	15.1%	17	12.4%
		あまりそう思わない	11	3.0%	4	2.9%
		そう思わない	7	1.9%	1	0.7%
				<b>計</b>	<b>364</b>	<b>100.0%</b>
※13	教員やモニター画面の映像は見やすかったと思いますか？	そう思う	175	49.0%	64	48.5%
		ややそう思う	114	31.9%	47	35.6%
		どちらとも言えない	54	15.1%	15	11.4%
		あまりそう思わない	8	2.2%	5	3.8%
		そう思わない	6	1.7%	1	0.8%
				<b>計</b>	<b>357</b>	<b>100.0%</b>
※14	教員の授業の進め方はスムーズでしたか？	そう思う	163	46.0%	72	55.0%
		ややそう思う	115	32.5%	37	28.2%
		どちらとも言えない	56	15.8%	13	9.9%
		あまりそう思わない	13	3.7%	8	6.1%
		そう思わない	7	2.0%	1	0.8%
				<b>計</b>	<b>354</b>	<b>100.0%</b>
※15	授業中は、授業に集中できる環境や雰囲気であったと思いますか？	そう思う	155	44.2%	69	52.7%
		ややそう思う	115	32.8%	40	30.5%
		どちらとも言えない	57	16.2%	17	13.0%
		あまりそう思わない	18	5.1%	4	3.1%
		そう思わない	6	1.7%	1	0.8%
				<b>計</b>	<b>351</b>	<b>100.0%</b>
※16	対面式の講義と遜色ない、一体感・臨場感のある授業だったと思いますか？	そう思う	129	36.8%	55	42.3%
		ややそう思う	110	31.3%	42	32.3%
		どちらとも言えない	76	21.7%	24	18.5%
		あまりそう思わない	29	8.3%	5	3.8%
		そう思わない	7	2.0%	4	3.1%
				<b>計</b>	<b>351</b>	<b>100.0%</b>

※設問 No.12～16 は、遠隔授業科目のみ対象の設問

【実験・実習科目】前期：11科目、後期：14科目

No.	質問項目	回答	R1前期	%(R1前)	R1後期	%(R1後)
1	この授業にどれくらい出席しましたか。	90%以上	99	98.0%	55	96.5%
		80~90%	1	1.0%	2	3.5%
		60~80%	0	0.0%	0	0.0%
		40~60%	0	0.0%	0	0.0%
		40%未満	1	1.0%	0	0.0%
		計	101	100.0%	57	100.0%
2	この授業において、時間外学習をどれくらい行いましたか。(授業1回あたりの時間)	3時間程度または以上	20	19.8%	4	7.0%
		2時間程度	13	12.9%	6	10.5%
		1時間程度	32	31.7%	13	22.8%
		30~50分程度	31	30.7%	17	29.8%
		30分未満	5	5.0%	17	29.8%
		計	101	100.0%	57	100.0%
3	この実験・実習を理解するための基礎学力はあったと思いますか？	そう思う	23	22.8%	5	8.8%
		ややそう思う	50	49.5%	36	63.2%
		どちらとも言えない	17	16.8%	11	19.3%
		あまりそう思わない	8	7.9%	4	7.0%
		そう思わない	3	3.0%	1	1.8%
		計	101	100.0%	57	100.0%
4	教員の話し方は明瞭で聞きやすく、実験・実習の方法などの説明はわかりやすいと思われましたか？	そう思う	56	55.4%	29	50.9%
		ややそう思う	33	32.7%	23	40.4%
		どちらとも言えない	5	5.0%	4	7.0%
		あまりそう思わない	7	6.9%	1	1.8%
		そう思わない	0	0.0%	0	0.0%
		計	101	100.0%	57	100.0%
5	板書や配布資料、実験マニュアルなどは、実験・実習の内容理解と実施に役立ちましたか？	そう思う	66	65.3%	37	64.9%
		ややそう思う	26	25.7%	15	26.3%
		どちらとも言えない	6	5.9%	4	7.0%
		あまりそう思わない	1	1.0%	1	1.8%
		そう思わない	2	2.0%	0	0.0%
		計	101	100.0%	57	100.0%
6	実験・実習中やオフィスアワーでの質問に対する教員の対応に満足しましたか？	そう思う	51	50.5%	39	68.4%
		ややそう思う	29	28.7%	13	22.8%
		どちらとも言えない	18	17.8%	5	8.8%
		あまりそう思わない	1	1.0%	0	0.0%
		そう思わない	2	2.0%	0	0.0%
		計	101	100.0%	57	100.0%
7	動物を扱う実験・実習は、安全性に重点が置かれていましたか？	そう思う	65	67.7%	26	52.0%
		ややそう思う	23	24.0%	19	38.0%
		どちらとも言えない	6	6.3%	4	8.0%
		あまりそう思わない	2	2.1%	1	2.0%
		そう思わない	0	0.0%	0	0.0%
		計	96	100.0%	50	100.0%
8	この実験・実習は、シラバスに沿って進められましたか？	そう思う	57	56.4%	31	54.4%
		ややそう思う	26	25.7%	18	31.6%
		どちらとも言えない	16	15.8%	8	14.0%
		あまりそう思わない	2	2.0%	0	0.0%
		そう思わない	0	0.0%	0	0.0%
		計	101	100.0%	57	100.0%

9	あなたは、シラバスに記載された学習目標を達成したと思いますか？	そう思う	37	38.5%	21	36.8%
		ややそう思う	39	40.6%	23	40.4%
		どちらとも言えない	17	17.7%	11	19.3%
		あまりそう思わない	2	2.1%	2	3.5%
		そう思わない	1	1.0%	0	0.0%
		答えられない		0.0%		0.0%
		<b>計</b>	<b>96</b>	<b>100.0%</b>	<b>57</b>	<b>100.0%</b>
10	あなたは、この授業の内容を理解できましたか？	そう思う	42	41.6%	23	40.4%
		ややそう思う	47	46.5%	29	50.9%
		どちらとも言えない	11	10.9%	4	7.0%
		あまりそう思わない	1	1.0%	1	1.8%
		そう思わない	0	0.0%	0	0.0%
		<b>計</b>	<b>101</b>	<b>100.0%</b>	<b>57</b>	<b>100.0%</b>
11	この授業は、あなたにとって満足のいくものでしたか？	そう思う	52	51.5%	34	59.6%
		ややそう思う	36	35.6%	20	35.1%
		どちらとも言えない	10	9.9%	2	3.5%
		あまりそう思わない	2	2.0%	1	1.8%
		そう思わない	1	1.0%	0	0.0%
		<b>計</b>	<b>101</b>	<b>100.0%</b>	<b>57</b>	<b>100.0%</b>
※12	教員の音声は聞き取りやすかったと思いますか？	そう思う	21	65.6%	12	57.1%
		ややそう思う	6	18.8%	5	23.8%
		どちらとも言えない	5	15.6%	4	19.0%
		あまりそう思わない	0	0.0%	0	0.0%
		そう思わない	0	0.0%	0	0.0%
		<b>計</b>	<b>32</b>	<b>100.0%</b>	<b>21</b>	<b>100.0%</b>
※13	教員やモニター画面の映像は見やすかったと思いますか？	そう思う	15	57.7%	10	52.6%
		ややそう思う	9	34.6%	5	26.3%
		どちらとも言えない	1	3.8%	3	15.8%
		あまりそう思わない	1	3.8%	1	5.3%
		そう思わない	0	0.0%	0	0.0%
		<b>計</b>	<b>26</b>	<b>100.0%</b>	<b>19</b>	<b>100.0%</b>
※14	教員の授業の進め方はスムーズでしたか？	そう思う	13	52.0%	9	47.4%
		ややそう思う	9	36.0%	4	21.1%
		どちらとも言えない	1	4.0%	6	31.6%
		あまりそう思わない	1	4.0%	0	0.0%
		そう思わない	1	4.0%	0	0.0%
		<b>計</b>	<b>25</b>	<b>100.0%</b>	<b>19</b>	<b>100.0%</b>
※15	授業中は、実験・実習に集中できる環境や雰囲気であったと思いますか？	そう思う	10	41.7%	8	44.4%
		ややそう思う	11	45.8%	8	44.4%
		どちらとも言えない	1	4.2%	2	11.1%
		あまりそう思わない	1	4.2%	0	0.0%
		そう思わない	1	4.2%	0	0.0%
		<b>計</b>	<b>24</b>	<b>100.0%</b>	<b>18</b>	<b>100.0%</b>
※16	対面式の実験・実習と遜色ない、一体感・臨場感のある授業だったと思いますか？	そう思う	13	52.0%	8	44.4%
		ややそう思う	7	28.0%	4	22.2%
		どちらとも言えない	2	8.0%	5	27.8%
		あまりそう思わない	2	8.0%	1	5.6%
		そう思わない	1	4.0%	0	0.0%
		<b>計</b>	<b>25</b>	<b>100.0%</b>	<b>18</b>	<b>100.0%</b>

※設問 No.12～16 は、遠隔授業科目のみ対象の設問

#### IV. 令和元年度 山口大学・鹿児島大学共同獣医学部 合同FD研修会

##### 1. はじめに

本年度は、第6回目の合同FD研修会として鹿児島大学共同獣医学部主催により、令和元年9月17日（火）に鹿児島大学を主会場として実施され、両共同獣医学部教員の合計77名が参加した。

同研修会は、14時より鹿児島大学共同獣医学部 宮本 篤 学部長の挨拶の後、教育講演として鹿児島大学学術情報基盤センター サイバー・セキュリティ戦略室 佐藤 豊彦 特任教授により「鹿児島大学の情報セキュリティ」をテーマとした教育講演が実施された。その後、「共同教育のあり方について」をテーマとした意見交換会が、山口大学共同獣医学部 佐藤 晃一 学部長を座長として開催された。

次いで、基礎、病態予防、伴侶動物臨床及び産業動物臨床の4分野に分かれ、遠隔授業システムも活用したワークショップが実施された。その後、分科会報告が各分科会世話役により行われた。

最後に、山口大学共同獣医学部 佐藤晃一 学部長の閉会の挨拶により閉会となった。

##### 2. 研修会次第

日時： 令和元年9月17日（火）14時～18時  
場所： 鹿児島大学共同獣医学部（鹿児島大学主催）  
山口大学共同獣医学部（遠隔授業システム）

###### 【プログラム】

14:00～14:05（場所：307講義室）

開会の挨拶：鹿児島大学共同獣医学部 宮本篤 学部長

14:05～15:20（場所：307講義室）

教育講演：「鹿児島大学の情報セキュリティ」

鹿児島大学 学術情報基盤センター サイバー・セキュリティ戦略室  
佐藤 豊彦 特任教授

15:30～16:00（場所：307講義室）

意見交換会：「共同教育のあり方について」

座長 山口大学共同獣医学部 佐藤 晃一 学部長

16:10～17:40 教育ワークショップ

基礎分野（世話役：松元先生）

<鹿児島大学組織学実習室、山口大学2番教室>

テーマ：講義実習などの改善すべきこと

病態予防分野（世話役：一二三先生）

<鹿児島大学302講義室、山口大学5番教室>

テーマ：総合感染症実習の現行の形と今後のあり方、その他の感染症・衛生系の講義実習について

伴侶動物臨床分野（世話役：遠藤先生）

<鹿児島大学301講義室、山口大学動物医療センター>

テーマ：成績不振者への対応、学生のモチベーションの維持について、参加型臨床実習のあり方

産業動物臨床分野（世話役：畠添先生）

<鹿児島大学307講義室>

テーマ：講義および実習（臨床前および臨床）の問題点等について

17:15～（場所：307講義室）

分科会報告：各分科会世話役

閉会の挨拶：山口大学共同獣医学部 佐藤晃一 学部長

18:00～20:00 情報交換会

鹿児島大学学術交流プラザ

### 3. 教育ワークショップ参加者

#### 1) 基礎分野

鹿児島大学会場：佐藤、加納、日暮、羽原、松元、辻尾、宮本、宇野、浅野、白石、内藤、ヘンリー

山口大学会場：木曾、日下部、木村、島田

## 2) 病態予防分野

鹿児島大学会場：清水、渋谷、西垣、早坂、三宅、森本、柳田、渡邊、中馬、安藤（匡）、小澤、小尾、小原、田仲、藤本、正谷、松尾、畑井

山口大学会場：桜井、高野

## 3) 伴侶動物臨床分野

鹿児島大学会場：高橋（雅）、奥田、水野、馬場、谷、矢吹、原口、西川、高橋（香）、十川、藤木、古澤、岩永、遠藤、伊賀瀬

山口大学会場：中市、井芹、板本

## 4) 産業動物臨床分野

鹿児島大学会場：田浦、高木、角川、帆保、窪田、安藤、永井、百武、井尻、畠添

## 4. 各セッションの概要

### 1. 教育講演

演題「鹿児島大学の情報セキュリティ」

佐藤豊彦特任教授（鹿児島大学 学術情報基盤センター サイバー・セキュリティ戦略室）

近年、大学におけるサイバー・セキュリティ対策が大きな課題となっており、教員個人での自己防衛が非常に重要な意味を持つ。国内最高峰のセキュリティ・サービス会社である株式会社ラックから、クロスアポイントメント制度を利用して鹿児島大学に出向されている佐藤豊彦特任教授により、大学におけるサイバー・セキュリティ対策および教員個人における自己防衛についての講演会が実施された。

教育講演に使用されたスライド資料は巻末に添付する。

### 2. 教育ワークショップ報告

#### 1) 基礎分野

##### 1. 講義・実習における両大学のシラバス内容の現状確認について

- ・ 生理学分野を除いて、講義のシラバスは両大学で一致していることを確認した。
- ・ 同様に実習もほぼ一致していたが、薬理及び実験動物分野でコア・カリに準拠しているもの若干の違いがあることが報告された。
- ・ 生理学分野もコア・カリに準拠してシラバスを統一する努力をする。

##### 2. カリキュラムの変更に伴う教育効果について

- ・ 学年の気質もあるが、教育効果が上がったという実感を感じられない。
  - ・ 成績の二極化が見られ、下位者に酷い成績の者がいるのは憂慮すべきである。このことが講義のターゲットの設定を難しくしている。
  - ・ 講義が先行することで実習での補講の負担が減った。
  - ・ 専門科目を1年前期から開始することには否定的な意見が出された。
3. 実習に使用する動物の種類と数について
- ・ EAEVE で指摘のあった種と数は最小限必要である。
  - ・ 山大では動物への侵襲性の高い実習を減らすゼロプロジェクトを推進中である。ビデオ、模型、シュミレーター等の代替品の利用ばかりでなく開発も必要である。
  - ・ 学生から動物利用の要望もあり、それを実施すると学生の反応が良かった。
  - ・ 生体を使った実習は必要だが、下等な動物への変更や数を減らす工夫をしている。
  - ・ 動物実験に対する一般の賛同者の数を増やす努力も必要である。

## 2) 病態予防分野

以下の3つの議題について議論した。各議題の内容等については下記のとおり。

### ①総合感染症学実習（山大）、家保実習（鹿大）について

最初に双方の実習の今年度の実施状況や実習内容について報告した。共同獣医学部が発足した当初は鹿児島大学の学生も総合感染症学実習を受講していたが、現在は受講しておらず、このような状況になった背景について議論があった。共同獣医学部であるにもかかわらず、お互いに違う内容の実習を行っていることに疑問を持つ学生もいるとの意見があり、希望者する学生はもう一方の大学の実習に参加できるように取り計らうなどの対応策も必要ではないかという意見が挙げられた。これについては学生が負担する旅費の問題も合わせて指摘された。双方の実習の内容をすり合わせることも検討されたが、山大は総合感染症学実習を「コア科目」、鹿児島大学は家保実習を「アドバンス科目」と捉えており、根本の部分揃える必要があることという意見も挙げられた。シラバス上はコアの部分を作り、双方の実習の担当者同士で内容をすり合わせることは可能であるとのことであった。

多くの先生方からたくさんの意見が出たが、双方の実習の内容、シラバスの内容等を病態予防分科会で協議し、意見を取りまとめたものを執行部に上げ、今後の双方の実習の方向性を検討していただく、ということで最終的には落ち着いた。

### ②食品衛生学、と畜場実習など EAEVE に関わる実習について

これまでのワークショップ等で十分な議論がなされたうえでシラバス・実習内容が統一されており、特に問題はない。



### ③感染症系の講義について

動物感染症学と人獣共通感染症学の講義の期間が重なっていること、またH30年以降入学者からは鹿児島大学では受講する時期が早くなることについて議論があった。特に後者について、受講時期が早すぎるなどの問題が指摘され、学生からの不満が出ることも懸念されるとの意見があった。





### 3) 伴侶動物臨床分野

伴侶動物臨床分科会では以下の3項目について検討を行った。

#### ①成績不良者への対応

臨床系科目は学年が進んでから組まれていることもあり、成績不良者であっても心情的に不合格にしにくい実情がある。この点について出席者間で再確認したところ、追再試験は実施するが、成績の評価は厳格に行うことで意見の一致を見た。ただし開講時期によっては、5年生の後期が再試験実施時期の最後となる可能性があるため、このような科目については事前にこの点を学生に周知する必要性も指摘された。オムニバス形式の科目では、再試験の実施が困難となることがあるため、内容を再検討しても良いのではないかという意見も挙げられた。再試験についてはまた開講中に出席が足らなくなる可能性がある学生については、事前に担任あるいは指導教員に報告して注意してもらっている科目があることも報告された。

#### ②学生のモチベーションの維持について

双方向形式の講義では、やはり送信先にいる学生の居眠りなどが多い傾向が見受けられるため、何らかの対策が必要であることが確認された。ただし現状では具体的な対策法は示すことはできなかった。

参加型臨床実習については、個人差はあるものの、履修時間数が増えたこともあり、やった分だけ学生は応えてくれているように感じられる、という意見が多かった。Day One Skillの習得については、参加型臨床実習に入る前から意識させることで、よりよい教育効果が

上げる可能性が指摘された。いっぽうでDay One Skillの内容を現状よりより高度にすることでモチベーションがさらに上がるのではないかという意見もあった。参加型臨床実習の内容などについては学生からの意見聴取の必要性も報告された。

### ③参加型臨床実習のあり方

今後カリキュラムの変更があり、全体的に前倒しになることになる。現在、参加型臨床実習を行っている時間枠に少し余裕ができる見込みである。その枠を含め参加型臨床実習の全体像をどのようなものにするか検討した。基本的な方向性は協議会のWGで検討されることになると思われるが、選択制にしてアドバンスコースを設定するという意見や、詰め込みすぎると授業の平坦化につながらない、あるいは就職活動や卒業論文の作成にも影響が出る、という考え方も議論された。もし時間的余裕ができれば、学生の相互乗り入れの是非についても検討してもよいのではないか、という意見が出された。





#### 4) 産業動物臨床分野

講義および実習（臨床前および臨床）の現状を確認し、その問題点等について意見交換を行った。

現在、牛診療学Ⅰおよび豚診療学は鹿児島大学発信の双方向科目、牛診療学Ⅱ、豚診療学、獣医繁殖学はそれぞれの大学での科目である。例年、双方向科目では鹿児島大学の学生の成績が良い傾向にある。その理由として、そもそも鹿児島大学では大動物診療に興味を持っている学生が、山口大学より多いのではないかとの意見があった。

また、山口大学の1年生への取り組みとして、牛、山羊、ポニーの飼養管理を生物学実験の科目として単位化したとのことであった。その目的は、低学年時から産業動物へふれあい、授業へのモチベーションを高めることであるとのことであった。

その他の科目および臨床前の実習はそれぞれの大学で行っているが概ね問題ないことを確認した。産業動物関連のポリクリについては、鹿児島大学が非常に多い現状であるが、山口大学でもDay One Skillsは修得できているとのことであった。山口大学で産業動物に意欲を示す学生が鹿児島大学での産業動物系ポリクリの参加を希望した場合は受け入れてほしいとの要望もあった。また、鹿児島大学では牛の一次診療体制を構築できる段階にあるので、学部の執行部と協議の上、推進していくことが確認された。



V. 共同獣医学部専任教員のFD参加率

<b>合計参加率</b>		<b>97.8 % (専任教員 46 名中 45 名 参加)</b>
企画別参加率	合同FD研修会	78.3 % (専任教員 46 名中 36 名 参加)
	授業評価アンケート	60.9 % (専任教員 46 名中 28 名 参加)
	授業公開・授業参観	67.4 % (専任教員 46 名中 31 名 参加)
備考		

講座等	研究室	職域	氏名	合同FD研修会	授業評価アンケート	授業公開・授業参観	カウント
基礎獣医学	解剖学	教授	松元 光春	○	○	○	○
		助教	辻尾 祐志	○			○
	生理学	教授	白石 光也	○	○	○	○
		准教授	内藤 清惟	○	○	○	○
	分子病態学	教授	藤田 秋一		○	○	○
	薬理学	教授	宮本 篤	○	○		○
		准教授	宇野 泰広	○		○	○
病態予防獣医学	実験動物学分野	教授	浅野 淳	○	○	○	○
		教授	三好 直彰		○	○	○
	組織病理学	准教授	畑井 仁	○	○	○	○
		准教授	小尾 岳士	○	○	○	○
	動物微生物学	准教授	松尾 智英	○	○	○	○
	寄生虫病学	准教授	松尾 智英	○	○	○	○
	感染症学	教授	田仲 哲也	○	○	○	○
	動物衛生学	准教授	小澤 真	○	○	○	○
	獣医公衆衛生学	教授	中馬 猛久	○	○	○	○
		准教授	安藤 匡子	○	○	○	○
	臨床獣医学	伴侶動物内科学	教授	遠藤 泰之	○	○	
教授			大和 修		○	○	○
画像診断学		教授	三角 一浩		○		○
		教授	帆保 誠二	○	○	○	○
外科学		助教	石川 真悟			○	○
		准教授	畠添 孝	○	○	○	○
産業動物獣医学		教授	窪田 力	○	○		○
		准教授	安藤 真朗	○		○	○
附属施設		附属動物病院	教授	三浦 直樹		○	○
	教授		矢吹 映	○	○	○	○
	教授		藤木 誠	○	○	○	○
	准教授		高橋 雅	○			○
	准教授		乙丸 孝之介			○	○
	助教		十川 英	○			○
	助教		岩永 朋子	○		○	○
	助教		齋藤 靖生				○
	助教		高橋 香	○			○
	助教		古澤 悠	○			○
	大隅産業動物診療 研修センター	助教	永井 克尚	○			○
		助教	百武 幸治	○			○
		教授	小原 恭子	○	○	○	○
		准教授	松鶴 彩		○		○
	TADセンター	准教授	正谷 達膳	○	○	○	○
		准教授	藤本 佳万	○	○	○	○
		助教	一二三 達郎			○	○
		助教	井尻 萌	○	○	○	○
	獣医学教育改革室	准教授	有村 卓朗	○		○	○
	共同獣医学研究科	准教授	Smith Henry Ivan	○		○	○
	教員数		46			参加者数 合計参加率	45 97.8%

大学 IR コンソーシアム学生調査結果（平成 30 年度実施分）の評価・分析について

共同獣医学部 FD 委員 帆保 誠二

	注目した知見	知見に対する解釈	改善・対応策
【1 年生のみ】 本学への志望度及び高校時代の経験	学部卒業後の「就職」希望率	前年度 67.9%、前々年度 72.4% に比較すると、本調査年度は 83.3% と就職希望率は上昇しているが、16.7% が就職について不確定であった。	獣医師の職種は多岐に渡っていることや、大学院進学も考えている結果とは思われるが、目標を明確にすることにより学習意欲も向上すると考えられるので、外部講師も含め教職員全体で将来ビジョンの構築を補助したい。
大学での学びの実態	入学後の能力の変化	全ての調査項目において、大学全体よりも低値であった。	共同獣医学部は 6 年間の教育機関であるため、入学当初の学習意欲が 3 年生辺りで薄れている結果だと思われるので、臨床教育を含めた教育を低学年から開始する方向でカリキュラムの改善に努めていきたい。
英語運用能力の熟達度及び英語学習の状況	英語能力の読む力、書く力、表現力	医学部医学科について高い水準であった。	英語を専門とする教員を採用し、学部教育における英語教育に力を注いでいる。今後も継続

<p>大学生生活に対する意識</p>	<p>「教員と話をする機会」、「多様な考え方を認め合う雰囲気」、「大学での経験全般」に満足する割合が全学部の中で最も低かった。</p>	<p>教員や上級生とのコミュニケーション不足が関与しているように思われる。</p>	<p>し、世界に通じる人材教育を実施していきたい。 共同獣医学部は6年間の教育機関であるため、教員や上級生のコミュニケーションが不足していると思われるので、授業のみならず、他のイベントも含めてコミュニケーションをはかることにより解消していきたい。</p>
--------------------	---	---	---





理工学研究科

令和元年度 鹿児島大学大学院理工学研究科

ファカルティ・ディベロップメント委員会報告書

(令和2年4月)

# 鹿児島大学大学院理工学研究科

## ファカルティ・ディベロップメント委員会報告

### 目次

はじめに	1
第1章 令和元年度鹿児島大学理工学研究科のFD活動	
1.1 鹿児島大学の中期目標・年次計画と理工学研究科のFD活動	2
1.2 理工学研究科FD委員会	2
第2章 理工学研究科FD講演会とFD活動	
2.1 理工学研究科FD講演会	3
2.1.1 第1回理工学研究科・理学部・工学部合同FD講演会	3
2.1.2 第2回理工学研究科FD講演会	4
2.2 海外実習報告	5
2.3 他機関主催FD研修会参加報告	6
第3章 学生による授業評価	
3.1 博士前期課程の授業評価アンケートの分析結果	8
3.1.1 工学系専攻の授業評価アンケートの結果報告	8
3.1.2 理学系専攻の授業評価アンケートの結果報告	9
3.2 博士前期課程の各専攻における授業評価アンケートの分析結果	9
3.2.1 機械工学専攻	9
3.2.2 電気電子工学専攻	10
3.2.3 建築学専攻	11
3.2.4 化学生命・化学工学専攻	11
3.2.5 海洋土木工学専攻	12
3.2.6 情報生体システム工学専攻	13
3.2.7 数理情報科学専攻	14
3.2.8 物理・宇宙専攻	14
3.2.9 生命化学専攻	15
3.2.10 地球環境科学専攻	16
3.3 授業計画改善書の活用	16
第4章 GPA制度の現状と学習成果	18
第5章 学生の研究活動と教育成果	22
第6章 特筆すべき取組及び改善事例	24
第7章 今後の理工学研究科FD活動への期待	24

- 参考資料-1 令和元年度理工学研究科 FD 委員会議事要旨
- 参考資料-2 令和元年度理工学研究科博士前期課程 授業評価アンケート質問・回答内容
- 参考資料-3 授業計画改善書の様式

## はじめに

理工学研究科の教育目標は、「今日の諸課題に対応できる倫理的判断力及び人間生活を取り巻く自然についての総合的な知識をもち、自然科学に関する学問の高度化と多様化に幅広く柔軟に対応できる、次世代を担う技術者、研究者、さらには高度専門職業人を養成する」ことである。鹿児島大学の教育理念に基づき、この教育目標を達成すべく、教育の内容及び方法の改善を図るため、理工学研究科のファカルティ・ディベロップメント委員会（以下、FD委員会）は設置された。

理工学研究科の教員は、研究科と併せ、理学部と工学部を兼担し、教育・研究に当たっているため、研究科におけるFD活動は学部でのFD活動と重なる活動もあるが、授業の改善への取り組みも含め、各専攻での年度の始めに立てた計画に従って実施している。

令和元年度は、前年度に倣い（1）学生による授業アンケートとそれに基づいた各教員による授業改善計画書の提出、（2）FD講演会の実施、（3）他機関主催FD研修会参加、（4）理工学研究科構成員の活動等の自己点検、（5）学生の研究活動と教育成果の点検を実施した。本報告書においては、これらの活動の概要について報告する。

尚、本報告書は学部FD委員を兼務する理工学研究科FD委員各位のとりまとめや事務職員と事務支援室職員によるアンケート調査の整理等の協力により完成したことを明記し、深く感謝する。

令和元年度鹿児島大学理工学研究科ファカルティ・ディベロップメント委員会

委員長 甲斐 敬美(全学FD委員会委員)

令和元年度 鹿児島大学理工学研究科ファカルティ・ディベロップメント委員会委員

委員長	甲斐 敬美	全学FD委員会委員（工学部委員）
委員	松崎 健一郎	機械工学専攻
委員	重井 徳貴	電気電子工学専攻
委員	柴田 晃宏	建築学専攻
委員	鮫島 宗一郎	化学生命・化学工学専攻
委員	三隅 浩二	海洋土木工学専攻
委員	大橋 勝文	情報生体システム工学専攻
委員	中岡 宏行	数理情報科学専攻
委員	愛甲 正	数理情報科学専攻
委員	三井 好古	物理・宇宙専攻
委員	池永 隆徳	生命化学専攻
委員	相場 慎一郎	地球環境科学専攻
委員	富安 卓滋	地球環境科学専攻

## 第1章 令和元年度鹿児島大学理工学研究科のFD活動

### 1.1 鹿児島大学の中期目標・年次計画と理工学研究科のFD活動（甲斐 敬美）

鹿児島大学の中期目標・年次計画の大学院課程におけるFDに関連が深い項目を表1.1にまとめた。これらの方針にそって、理工学研究科のFD委員会ではFD活動を実施した。

表1.1 鹿児島大学の第3期中期目標・年次計画の大学院課程におけるFDに関連が深い項目

中期目標	中期計画
【A1】「進取の精神」を発揮して課題の解決に取り組むことのできる多様な人材を育成する。	【B2】大学院課程において、専門性を活かしつつ地球的課題に取り組むことのできる人材を育成するために、課題解決型学修（PBL：Problem Based Learning）等、多様な学修機会を平成31年度までに整備してその成果を評価・検証する。
【A2】地（知）の拠点として、地域課題の解決に取り組むことのできる人材を育成する。	【B4】鹿児島の特徴（島嶼、火山等）を活用し、自治体等との連携に基づいて把握した地域課題やニーズを踏まえ、地域志向意識を醸成し、地域課題解決の基盤となる汎用的能力の育成を図る「地域志向一貫教育カリキュラム」を平成30年度までに整備するとともに、その成果を基礎として、地元就職率向上を目指す「地域キャリア教育プログラム」を平成31年度までに整備し、本プログラムの受講者を年間150人以上に増やす。これらの人材育成にあたっては、試験結果や共通ルーブリックに基づくレポートやプレゼンテーションの評価、ポートフォリオ等のデータを収集・分析してその成果を評価・検証する。
【A3】教育目標の達成に向け、体系的カリキュラムを整備するとともに、学修成果を可視化し、教育内容・方法の改善サイクルを確立し、全学的な教育の内部質保証システムを整備する。	【B8】在学生や卒業生の要望、卒業生に対する社会からの評価を収集し、教育センター高等教育研究開発部及び担当教員を中心とした情報分析体制を平成30年度までに整備し、分析結果を大学全体で共有した上で具体的な教育改善策を実施する。
【A4】学術研究院制度や国際認証制度等を活用し、教育の質の向上を図る教育研究体制を整備する。	【B10】教員の指導力向上を図るため、新任教員等に対する研修制度を立ち上げ、必要に応じて教育学部や附属学校、教育センター高等教育研究開発部から教員を派遣し、カリキュラム開発や指導法、教育相談等に関する研修会を全教員に向けて定期的に開催し、平成28年度までに全専任教員の75%以上の参加を達成する。
【A15】グローバル化が進む社会の現状を理解し、国際的に活躍できる人材を育成するとともに、海外の学術機関等との教育・研究の交流を深め、国際貢献を推進する。	【B32】理系大学院課程において、シラバス及び教員が作成する講義資料の英語化、柔軟な学年暦の整備等を進め、国際的通用性を向上させる。また、学部・大学院の課程において、外国語（英語）による授業科目を、平成33年度までに平成26年度と比較して1.5倍に拡充する。
【A36】学内規則を含めた法令遵守の徹底により、大学活動を適正かつ持続的に展開する。	【B77】研究活動上の不正行為や公的研究費の不正使用を防止するため、鹿児島大学における研究活動に係る行動規範、オーサーシップ・ポリシー、公的研究費の不正使用防止対策に関する基本方針について、教本やパンフレット等を作成し、講習会を実施する機会を増やすなどにより教職員や関係する学生に周知徹底する。また、外部資金の申請等には講習会への参加を義務付ける。更に法令遵守に関わる相談受付、助言等のための環境を整備する。

### 1.2 理工学研究科FD委員会（甲斐 敬美）

理工学研究科は平成21年度から部局化に伴って新しい理工学研究科としてスタートした。理学系が4専攻、工学系が6専攻の10専攻から選出された委員から構成されている。令和元年度は理工学研究科のFD委員会を2回行った。第1回は、令和元年5月13日に開催した。本委員会では、令和元年度FD活動計画について議論を行い、次の項目を実施することが承認された。

(1) 理工研 FD 講演会の実施, (2) 学生による授業評価アンケート実施及び授業計画改善書の提出, (3) 他機関主催 FD 研修会への教員派遣 (4) 理工学研究科構成員の活動等の自己点検. また, 第 2 回は, 令和元年 12 月 18 日～23 日の期間にメール会議として開催した. 本委員会において, 令和元年度第 2 回理工学研究科 FD 講演会の開催について諮られ, 原案のとおり開催することが承認された. 第 3 回は令和 2 年 2 月 12 日～25 日の期間にメール会議として開催した. 本委員会では, 令和 2 年度 FD 活動計画および令和元年度研究科 FD 活動報告書の作成について審議した. その後, 各委員へ報告書の原稿作成について依頼がなされた.

## 第 2 章 理工学研究科 FD 講演会と FD 活動

### 2. 1 理工学研究科 FD 講演会

#### 2. 1. 1 第 1 回理工学研究科・理学部・工学部合同 FD 講演会 (甲斐 敬美)

令和元年度の第 1 回理工学研究科 FD 講演会は, 理学部, 工学部合同および第 1 回知財セミナーとして企画され, 令和元年 7 月 27 日 (土) 13 時～17 時 40 分, 稲盛会館で開催された. AI 時代の到来を控え, 今後の教育で重要視されている主体性 (換言すると, 一生学び続けて生きる力) を如何に育てるかについて, 文部科学省の方針や企業戦略等の状況を踏まえた上で, 生徒・学生に対して一貫的な教育を行うために鹿児島県内の高校や大学で今後何を実践すべきかを考えることを目的とした講演会であった. 講演会は以下のように 4 部の構成とした.

第 1 部: 企業戦略の方向性

「デザイン思考」及び「知財・標準戦略」とその教育の必要性

杉浦博明氏 (三菱電機株式会社)

変化を許容する風土と, 自主性発揮の仕組みが実現する働き方

福留進一氏 (株式会社現場サポート)



第 2 部: 将来を見据えた教育施策の変革

「持続可能な社会の創り手」の育成を目指して～高大接続改革, 学習指導要領, SDGs～

大杉住子氏 (文部科学省)



### 第3部：鹿児島県内の教育の現状と課題

鹿児島県SSH指定15年目の成果・課題・展望～主体性とコンソーシアムを

キーワードとして～

山崎巧氏（鹿児島県立錦江湾高等学校）

錦江湾高SSHのI・II期（鹿児島大学との高大連携）～創造的でローカルな主体的

課題研究を模索した8年～

樋之口仁氏（鹿児島県立指宿高等学校）

甲南高等学校におけるSGHの実践経験と課題

堀切友弥氏（鹿児島県立甲南高等学校）

鹿児島大学工学部で何をどう教えるべきか

二井晋教授（鹿児島大学）



### 第4部：総括質疑応答

本講演会の参加者は教員40名（理系：6名，工系：27名，他部局7名），事務職員15名のほかにも学生や学外からの参加者もあった。

## 2. 1. 2 第2回理工学研究科FD講演会（甲斐 敬美）

令和元年度の第2回理工学研究科FD講演会は，理工学研究科地域コトづくりセンターと理工学研究科FD委員会の共同主催として企画され，令和2年1月15日（水）13時30分～14時45分，総合研究棟プレゼンテーションルームで開催された。講師は一般社団法人産学協働イノベーション人材育成協議会（C-ENGINE）事業責任者の藤森義弘氏，講演題目は「C-ENGINEの取組みについて」，参加者は教員86名（理系：36名，工系：94名，他部局4名），事務職員5名の合計139名であった。

一般社団法人産学協働イノベーション人材育成協議会は，文部科学省および経済産業省の支援を受け，研究インターンシップを通じた産学協働イノベーション人材育成事業に取り組んでいる組織である。本研究科でも，イノベーションマインドを有する人材を育成するための国内中長期研究型インターンシップを推進しており，令和2年度からは博士前期課程の選択必修科目としても新たにスタートする。そのため，本講演会では，協議会が産学で取り組んでいる研究インターンシップの現状とその効果，さらに大学および企業のそれぞれの立場での課題等について，実例を踏まえてご紹介頂いた。

最初にC-ENGINEの設立の背景，概要および活動について紹介された。日本国内においては大学院学生の中長期研究インターンシップを充実させるためにはその環境整備





が必要という課題を解決するために平成 26 年 1 月に C-ENGINE は設立された。令和元年 9 月時点で C-ENGINE の会員は大学が 17、企業/団体が 37 である。平成 26 年度のマッチング成立件数は 6 件であったが、年々上昇し、令和元年度は 100 件を越えるマッチング成立件数が見込まれている。現在の課題としては、博士学生の登録比率の低下およびマッチング数が停滞していること、および地域別の浸透差があり、現在は登録学生の半数が関西圏の学生となっていることが挙げられた。

新たな試みとして、Mathematical Problem Based Internship やトランスファラブルスキル”RISE”の導入などの紹介もなされた。RISE には、大学で学ぶべき基本的なスキルで企業や研究機関等でも役立つスキル、企業や研究機関等で研究を進めるにあたって特に重要視されるスキルで大学との違いを感得してほしいスキル、および研究成果を社会実装するためのスキルなどが含まれている。研究インターンシップではその学生に必要なトランスファラブルスキルが開発される。

また、学生、企業および大学の三者が win-win となるインターンシップについての説明もなされた。学生にとっては、実地体験により学習意欲が喚起されることや視野が広がりキャリアパスの選択肢が広がる。企業にとっては、学生の発想力・知識・知見を取り込めることや、大学との共同研究につなげる機会が得られる。大学は学生や企業のメリットを取り込める。

最後に文部科学省が検討している実務型研究インターンシップについての紹介もなされた。文部科学省は修士課程学生の就職活動が長期化することを問題視しており、この問題の解決と同時に実務型研究インターンシップを促進するため、実務型研究インターンシップを修論審査の終了後に導入する案などの紹介があった。

講演に引き続き、質疑応答が実施され、多くの質問がなされた。毎年、企業会員の出入りがあるが退会する理由については、事業間取引 (BtoB) が事業の主体である企業は優良企業であっても学生にとって知名度が低いため、マッチングの成立が難しいことが説明された。また、紹介された文部科学省の案については、企業側の立場で考えると、一時期に大勢の学生を引き受けることは非現実的であることが指摘されたが、そのままの形で導入することは難しいが、文部科学賞が検討を始めたことは歓迎されることであり、導入されるにしてもすべての学生が対象となるのではなく、そのような枠組みが作られ、一部から導入されるのではないかということであった。

令和 2 年度から研究インターンシップは博士前期課程の選択必修科目としても導入されるため、本講演会は、教員が学生へ重要なポイントなどを説明する際に大いに参考となるものであり、有意義な講演会であった。

## 2. 2 海外実習報告 (松崎 健一郎, 池永 隆徳)

理工学研究科では、「グローバルに活躍できる理工系人材」を育成することを目標に、グローバル人材育成支援室を設置し、平成 27 年度から、大学院共通科目として「理工系国際コミュニケーション海外研修 (Graduate Overseas Engineering and Science Studies for Innovation: GOES)」を開講し、その中で、海外での語学研修と、大学、企業などでのインターンシップ等を行っている。令和元年度も、Q2 期に 11 名が参加した。その概要を以下に示した。

開講期	実習場所	参加人数	語学研修先	地域貢献活動
Q2	サンディエゴ	M1：1名	サンディエゴ州立大学 付属語学学校	RHFleet Science Center
Q2	パース	M1：10名	西オーストラリア大学 付属英語学校	各自が選んだ訪問先 (3か所)

平成28年度が18名、平成29年度が9名、平成30年度が6名と参加者が年々減少傾向にあったが、今年度は増加した。今後も参加者の事後報告会などを通して、参加者の増加を図っていききたい。

GOES以外に工学系では、令和元年9月15日～9月22日に修士課程学生15名が国立成功大学（台湾・台南）を訪問し、ワークショップへの参加・研究室見学・講義への参加及び討論を行った。令和元年10月3日～10月10日に修士課程学生18名がノースダコタ州立大学（米国・ファーゴ）を訪問し、シンポジウムへの参加・研究施設見学・講義への参加及び討論を行った。令和元年10月26日～11月8日にM2の学生2名がボローニャ大学（イタリア）を訪問し、二国間交流事業共同研究による共同実験を実施した。

理学系では、令和元年8月5日～8月24日にM2の学生1名がマレーシアにて野外生態調査を実施した。令和元年10月26日～11月8日にはM1の学生1名がジョーンズホプキンス大学（米国）を訪問し、宇宙物理学に関する共同実験を実施した。また、令和2年1月10日～1月30日にはD4の学生1名がマレーシアトレンガヌ大学を訪問し、マングローブ汽水域に生息するゴカイ科多毛類の分類に関する野外調査と標本の顕微鏡観察などを実施した。

## 2. 3 他機関主催FD研修会参加報告（上田 岳彦）

令和2年3月18～19日に京都大学で開催された2019年度第26回大学教育研究フォーラム「2040年の社会と高等教育・大学を展望する」（主催：大学教育研究フォーラム実行委員会、共催：京都大学高等教育研究開発センター・京大オリジナル株式会社、協賛：学校法人河合塾 教育研究開発本部・関西地区FD連絡協議会）に参加したので、以下に報告する。ただし、2019年末に発生した新型コロナウイルスの全世界的流行に伴い、多くの学会が中止に追い込まれる中で、本フォーラムは完全オンライン開催に急遽切り替わり、口頭発表・ポスター発表をZoomで、またシンポジウムをYouTube+Mentimeterにより実施することで、インターネット上の完全双方向通信環境下でリモートに行われたことは、いち早い先駆的な取り組みであった。当初の参加登録者の大部分（500名以上）がオンライン参加したことがシンポジウムの冒頭で報告された。

本フォーラムは2部構成で、第1部では、シンポジウム、第2部では分科会、ポスターセッション、参加者企画セッションが行われた。第1部では、2つのテーマのシンポジウム、シンポジウム①「学術の展望と『大学』の未来」、シンポジウム②「AIを活用した政策提言と高等教育の未来」、そしてパネルディスカッションを聴講した。まず、京都大学総長の山極 壽一先生のシンポジウム①では、「知識集約型社会の中で大学が国際的な課題にどう向き合うか、少子高齢化社会の日本の課題にどういう方策を用意するか、そして大学の自律的な運営を支えるために産業界とどのように連携するか」、について哲学的視点から歴史を振り返り、将来への展望と提言がなされ

た。印象深かったことは、学術の現代的役割について再考し、人口増加や資源の枯渇傾向の中で、バイオや情報テクノロジーを巧みに取り入れながら、知識を重視する教育を越えて、個人の価値観、暮らしやコミュニティの充実、自然や野生生物との共生、資源の共有化、経済の分散化などに取り組む人材を育成するために教育の目的と方法を再構築しなければならないという提言であった。特に大学は社会の公共財としての役割を自覚し、大人と子供をつなぐ単なる教育機関ではなく、将来の新しい形のコミュニティを支えるメディアとしての役割を持つべきであると考えられる。今すぐ着手できる改革として、知識を伝える教育は過去のものであると認識し、未知の世界に向き合う方法を教え、大学以外にも学びの場があることへの気づきを促すことが重要であると指摘された。

次に、京都大学こころの未来研究センター教授 広井 良典先生のシンポジウム②では、2050年の未来予測として日本社会が持続可能かどうかをビッグデータから分析するというアプローチについて紹介された。経済・産業・労働・人口動態、その他ありとあらゆる利用可能なデータとそのモデルを組み合わせ、今後の社会を表す各種指標の相関からそれらの時間発展を推定し、国の債務残高、経済格差、少子化、個人の社会的孤立度、コミュニティの機能低下、などの推移が論じられた。持続可能かどうかについての判断基準として、破局的なシナリオに近いかが採用された。これは、財政破綻、人口減少加速、出生率低下、若者困窮、格差・貧困拡大、失業率上昇、地方都市空洞化、買物難民拡大、農業空洞化、などの指標を基準に数値化された。2万通りを超える様々な形の政策モデルについてその時間発展を追跡すると、重要な機能を都市に集約する「都市集中型」政策はどれも破局的なシナリオへと漸近するのに比べ、持続可能シナリオへと近づく政策はどれも「地方分散型」社会へと導く政策であった。しかも、この持続可能か破局かを分ける分岐は現在から8～10年後の政策の方向づけにより決まってしまう、後から方向転換するのは難しいのだという。社会政策論からのアイデアとして、「地方分散シナリオへの分岐を実現するには、労働生産性から資源生産性への転換を促す環境課税、地域経済を促す再生可能エネルギーの活性化、まちづくりのための地域公共交通機関の充実、地域コミュニティを支える文化や倫理の伝承、住民・地域社会の資産形成を促す社会保障などの政策が有効である。」と結論付けられた。この、「地域コミュニティを支える文化や倫理の伝承」における教育の役割が重要であり、それが大学の使命として自覚されるかが課題であると思われる。実際、持続可能な社会への分岐を決定づける要因の重要度ランキングで、1位「地域公共交通」、2位「人口」、3位「道徳性」、4位「出生率」、...と続く中で、第18位「大学進学率」、第21位「教育投資」、第22位「留学生数」、第23位「研究者数」、第24位「地方大学の振興」が指摘され、上位全てが都市集中を回避する政策要素であること、教育と大学の役割が重要な要因であることが示されていることは興味深い。

続くパネルディスカッションでは、これらの講演を踏まえて参加者が意見交換を行い、様々なアイデアが出され活発に議論された。山極先生のアイデアとして、日本の大学教育の質の高さを活かし、観光や娯楽で立国するのではなく、外国人に対して良質な教育を施すグローバルな教育サービスの提供を中心としたインバウンド拡充を目指すという切り口が提示され、その波及効果や教育資源の産業化について討論されたのが印象深かった。

第2部では「現実の課題を自分事化する学び—SDGsの自分事化と地球共生系PBL&フィールドワーク—」「協議ワークを取り入れたピアレビューの実演形式のパフォーマンス課題への適用に関する検討」「Google Classroomを活用した効率的な反転授業の実践—Google Apps Scriptを用いた自動化—」などに参加した。どれも教育効果を数値的かつ統計的に処理することで客観的な評価を得るように工夫されており、自身の講義やFDに結び付けて考えていきたい内容であった。特に大阪工業大学の矢野浩二郎先生の発表では、教師がアバターとしてスライド内容を説明するビデオ教材を作成して発表されており、非常に刺激となった。

以上のように他機関主催FD研修会等への参加は、教育の動機付けから教育の社会発展への効果、教育技術のトレンド、教育アナリティクスの普及の程度など、教育向上に資する様々な情報を得ることができ、ぜひより多くの教職員がこのような研究会やフォーラムに積極的に参加することをお勧めしたい。

### 第3章 学生による授業評価

#### 3.1 博士前期課程の授業評価アンケートの分析結果

##### 3.1.1 工学系専攻の授業評価アンケートの結果報告（重井 徳貴）

平成26年度から令和元年度までの工学系専攻の授業評価アンケート結果を比較したものを図3.1.1に示す。令和元年度は前年度に比べ、①出席と②予習と復習以外の全項目で比較的大きく増加している。②予習と復習以外の項目は、4ポイント台の高い水準を維持しており、授業改善の効果ができていると考えられる。一方、②予習と復習はこれまででも3ポイント前後の低い水準にあったが、令和元年度は前年度よりもさらに低下しており、今後注視し必要に応じて対策を講じていく必要がある。また、平成30年度までは紙で実施していたアンケートを令和元年度からWebで実施しており、結果がその影響を受けている可能性もあるので、当面はこの点を踏まえて分析を行う必要がある。

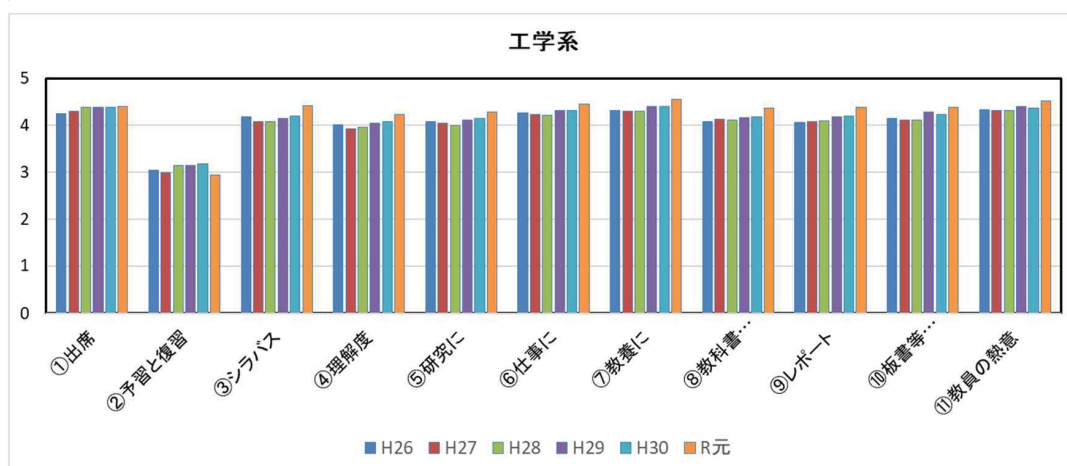


図3.1.1 博士前期課程（工学系専攻）授業評価アンケート結果の推移

### 3.1.2 理学系専攻の授業評価アンケートの結果報告（富安 卓滋）

平成 26 年度から令和元年度までの理学系専攻の授業評価アンケート結果を図 3.1.2 に示す。「予習復習」以外の全ての項目において、平成 27 年度からスコアは上昇傾向にあり、令和元年度は、最も高いスコアとなった。全体として、受講生の講義に対する満足度が上昇している結果と言える。4.5 以上の高いスコアは、昨年度は、「教養に」の一項目だけが 4.65 だったが、令和元年度は、「シラバス」4.56、「教養に」4.75、「板書等の明瞭さ」4.63、「教員の熱意」4.67 と 4 項目にも増えたのは、特記に値しよう。「②予習・復習」の項目は、過去 6 年間に渡って、改善すべき項目であることに変わりはなく、昨年度は上昇したものの、今年度は、低下し、一年ごとに上下変動を示す結果となった。講義内容や教員からの働きかけに、このような変動はないと考えられることから、その年の学生の資質とも考えられるが、上昇させるための工夫について検討が必要であろう。

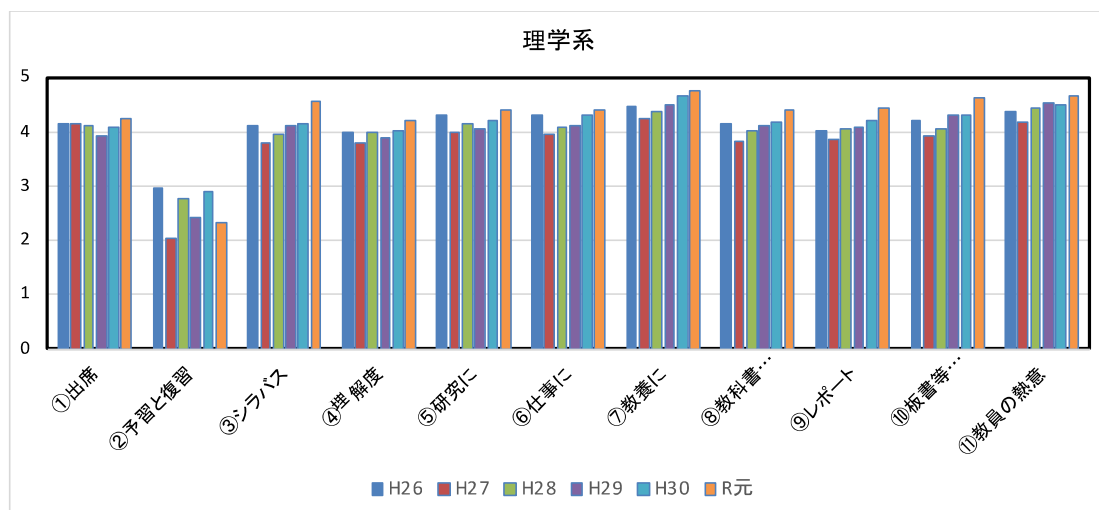


図 3.1.2 博士前期課程（理学系専攻）授業評価アンケート結果の推移

## 3.2 博士前期課程の各専攻における授業評価アンケートの分析結果

### 3.2.1 機械工学専攻（松崎 健一郎）

機械工学専攻の講義科目に対して実施された授業評価アンケートの結果を図 3.2.1 に示す。この結果は、主なアンケート項目の評価点について 1 年間に開講された科目で平均した点の過去 6 年間における推移を示している。

平成 29 年度よりアンケートの回答選択項目が「5.大いにそう思う, 4.そう思う, 3.どちらともいえない, 2.そう思わない, 1.全くそう思わない」の 5 段階から、「5.そう思う, 4.どちらかと言えばそう思う, 3.どちらとも言えない, 2.どちらかと言えばそうは思わない, 1.そうは思わない」の 5 段階へと変更となっている点に注意が必要である。この変更により、高い評点の場合より高く、低い評点の場合より低く表れると推察されるものの、図 3.2.1 に示す通り平成 26 年度からはほぼ横ばいの傾向を示しており影響は軽微であった。

項目②の「予習と復習」について見ると、平成 30 年度まで増加傾向にあったが、今年度は低下

した。講義や課題の内容が大きく変わったとは考えられないため、低下した原因は不明であるが、学生が積極的に予習・復習に取り組むような工夫が必要であろう。それ以外の項目についてはいずれも高い水準を維持しており、教員が授業改善に意識して取り組んでいる結果であろう。

今後も継続的な授業評価アンケートの実施と分析により、教員と学生の意識改善に役立てていくことが重要である。

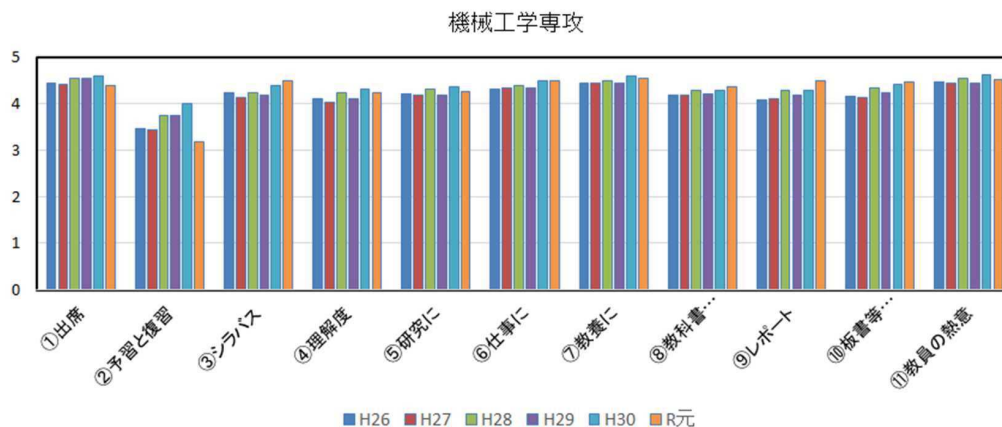


図 3.2.1 機械工学専攻の授業評価アンケート結果の推移

### 3.2.2 電気電子工学専攻（重井 徳貴）

図 3.2.2 に、電気電子工学専攻の過去 6 年分（平成 26 年度から令和元年度）の授業評価アンケート結果の推移を示す。令和元年度は前年度に比べ、①出席と②予習と復習以外の全項目で比較的大きく増加している。工学系の平均でもほぼ同様の傾向であることから、平成 30 年度までは紙で実施していたアンケートを令和元年度から Web で実施したことによる影響の可能性がある。しかしながら、その中でも改善の幅が特に大きい③シラバス、⑧教科書、⑨レポートなどは真に改善されている可能性が高いと思われる。大幅な増加が確認できなかった①出席、②予習と復習に関しては、前年度に引き続き大学院生の学力低下と気質の変化の影響を受けていると考えられ、この点に対応した授業の改善に引き続き取り組む必要がある。

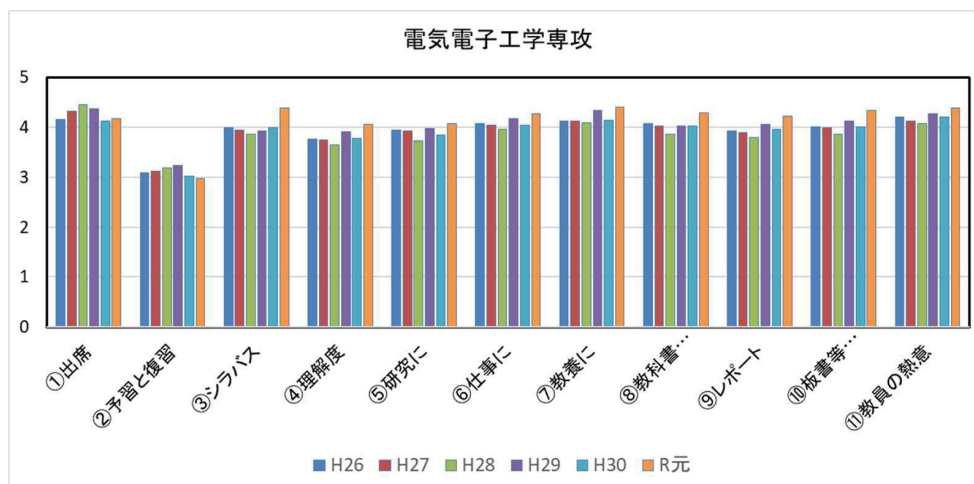


図 3.2.2 電気電子工学専攻の授業評価アンケート結果の推移

### 3.2.3 建築学専攻（柴田 晃宏）

建築学専攻の令和元年度の授業アンケートについて、設問項目の平均を図 3.2.3 に示す。11 項目中 10 項目が前年度を上回り、良好な結果であった。前年度を下回った項目は「⑩板書等の明瞭さ」であるが、評点は 4.0 以上である。経年的な評点の上下変動はあるが、ここ数年で見ると全体的に評点は上昇傾向にあり、教員による改善努力の成果と考えられる。しかし評点に着目すると、10 項目は 4.0 以上であるが、「②予習と復習」は評点 3.74 であり、低い値を示している。前年度からの上昇率は 12% で最も高いため、今後の改善を見守りたい。また、「②予習と復習」以外で前年度からの上昇率が高い項目は、「④理解度、⑪教員の熱意」であり、教員が熱意を持って学生の理解度向上に努めたことが伺える。

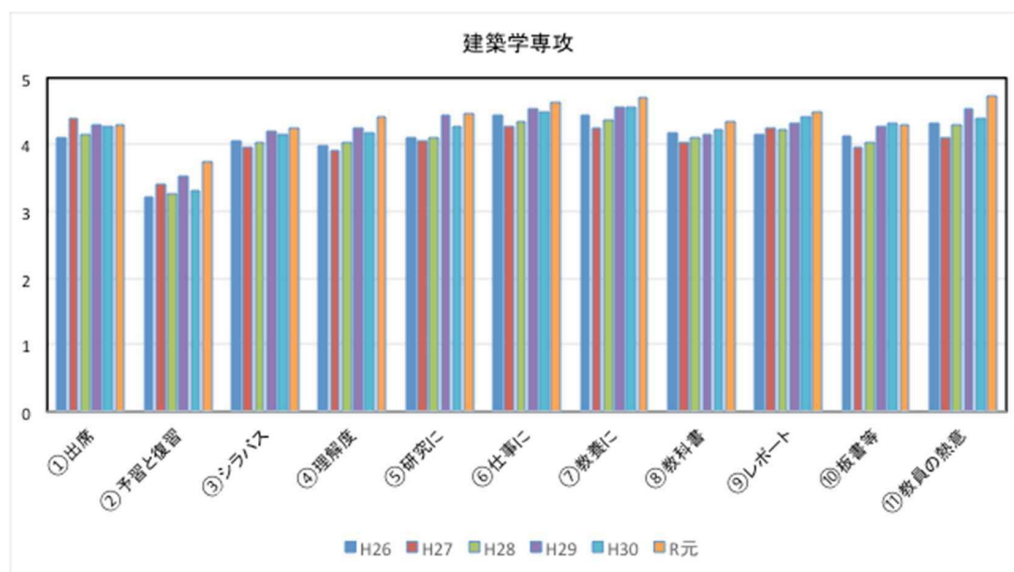


図 3.2.3 建築学専攻の授業評価アンケートの結果の推移

### 3.2.4 化学生命・化学工学専攻（鮫島 宗一郎）

化学生命・化学工学専攻の最近 6 年間（平成 26～令和元年度）の授業アンケート結果を図 3.2.4 に示す。項目②“予習と復習”の評価は 2.2-2.9 と低いのを除き、ほとんどの項目で 4.02-4.54 であり、総じて高い評価を得ている。項目①出席は年々上昇傾向であるが、②予習と復習は低下傾向にある。出席さえすれば良いと考えている学生が多くなっていることを危惧する結果である。その他の項目は、例年に比べて大きな変化はない。項目⑪教員の熱意は 4.2-4.5 と高いレベルを維持している。これより教員の授業に対する熱意を学生は感じ取り、総じて学生の講義に対する満足度は高いと言える。R 元年度の各項目を理工学研究科（工学系）の平均と比較すると、項目②予習と復習を除き、0.94-1.00 で他専攻とほぼ同様な評価を得ている。H26 から H29 の 4 年間は項目①②以外はほとんど工学系平均を上回っていた。教員数の減少、財政の劣悪化や諸業務の肥大化が教育を侵食し始めていることが危惧されるが、このような状況においてもできる範囲での改善に努めたい。R 元年度の項目②予習と復習は 2.19 と他項目より著しく低く、また工学系平均の 2.95 よりも極めて低い。学生の意識を変える方策が必要である。

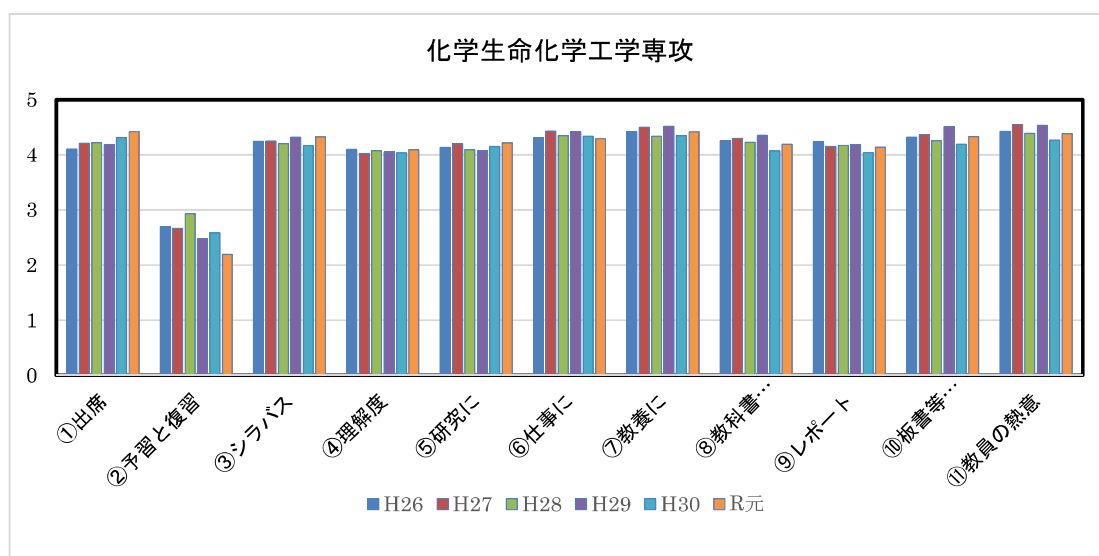


図 3.2.4 化学生命・化学工学専攻の授業評価アンケート結果の推移

### 3.2.5 海洋土木工学専攻（三隅 浩二）

本専攻において、平成 26 年度～令和元年度の 6 年度間に実施した授業評価アンケートの結果を図 3.2.5 に示す。ここでは、各項目に対するアンケート実施科目全体の平均評価を示している。図 3.2.5 より、令和元年度の評価は、⑦「授業の内容は自身の教養や学力を高めるうえで役立つと思う。」を除くその他の項目で平成 30 年度の評価より劣っている状況が見て取れる。原因は分からないが、来年度は気を引き締めて教育活動に勤しむことが必要であると思われる。ただし、令和元年度の評価は、②「予習と復習は 1 コマ（90 分）の授業に対して、どれくらいしましたか（レポート作成時間も含まれます）」と⑩「使用した教科書や教材は授業の理解に役立つ。」を除くその他の項目で理工学研究科の平均値を上回った。また、②を除くその他の項目で工学系の平均値を上回った。

各項目を見ると、①「授業にどれだけ出席しましたか。」の評価は、平成 27 年度に大きな低下が見られたが、平成 28 年度以降回復した。また、③「この授業のシラバス記載内容は受講申請に役立ちましたか。」、④「授業はほぼ理解でき、学習目標は達成できそうだ。」、⑤「授業の内容は自身の研究を進める上で役立つと思う。」の評価は、平成 28 年度に大きく低下し、理工学研究科および工学系の平均値を下回ったが、平成 29 年度には、いずれも回復し、理工学研究科および工学系の平均値を上回った。ただし、②「予習と復習は 1 コマ（90 分）の授業に対して、どれくらいしましたか（レポート作成時間も含まれます）」の評価は、他の項目よりも依然として低い。しかも令和元年度の評価が 6 年度間で一番低い。単に、レポートの提出回数を増やすのみならず、講義の内容やその周辺領域に対して、より深い関心を持つよう大学院生を導くといった工夫が必要であろう。また、講義の資料を事前に配布して予習させることも必要であると思われる。



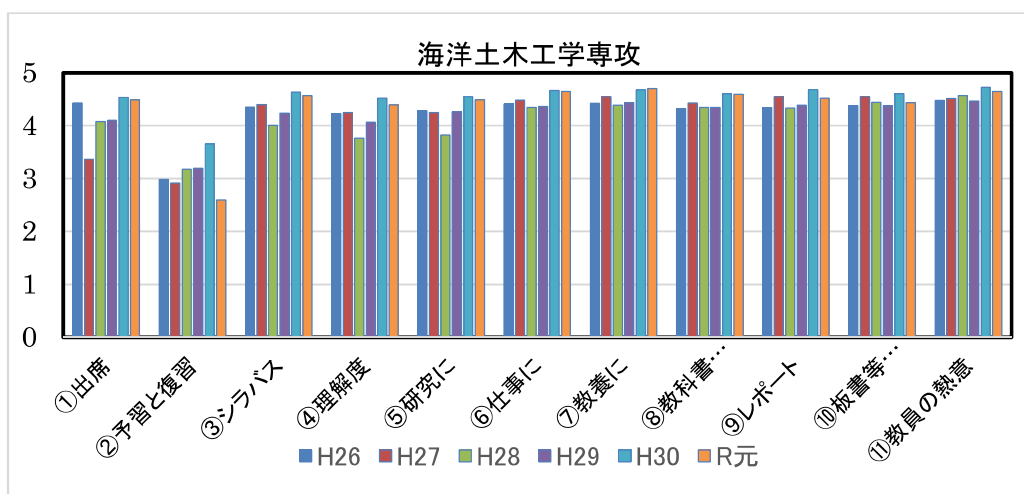


図 3.2.5 海洋土木工学専攻の授業評価アンケート結果の推移

### 3.2.6 情報生体システム工学専攻（大橋 勝文）

平成 21 年度に改組が行われ、情報工学専攻と生体工学専攻生体電子工学講座が統合して情報生体システム工学専攻が立ち上がり、11 年が経過した。情報生体システム工学専攻の FD 授業評価アンケートは平成 21 年度から令和元年度分の 11 年間のデータが収集されていることになる。ここではその 11 年間のうち直近の 6 年間の経年変化を見ることにする。今年度の FD 活動報告書では、情報生体システム工学専攻のデータと令和元年度の工学系専攻の平均値及び令和元年度の理工学研究科全専攻の平均値と比較することによって評価と論評を加えたい。

比較対象となった 11 項目について情報生体システム工学専攻の集計結果を図 3.2.6 に示す。集計した科目数は、18 科目（前期 9 科目，後期 9 科目）であった。平成 26 年度～令和元年までで、令和元年の今年の数値は全ての項目に対して大きく上昇した。しかしながら、工学系全体と比較すると、数値的には多くの項目で評価が低くなっている。これらの点は、次年度以降、改善すべき課題である。

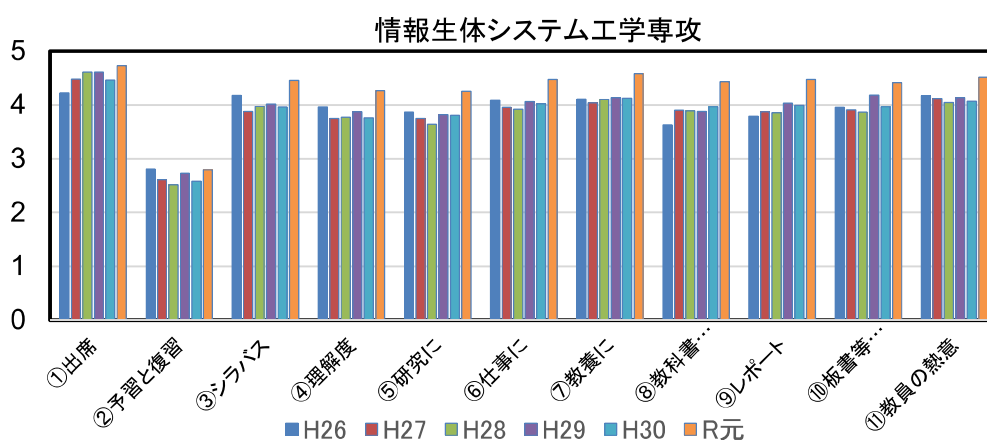


図 3.2.6 情報生体システム工学専攻の授業評価アンケート結果の推移

### 3.2.7 数理情報科学専攻（愛甲 正）

直近6年の授業評価アンケートの結果を下の図に示す。H27年度のデータが無いのは、受講者が少人数だったことから授業評価アンケートを行わなかったためである。この図からわかるように、例年ほとんどすべての調査項目で高い評価を得ているが、調査項目「予習と復習」だけは低い評価に留まっている。大学院での課程を修了するためには、自身の研究分野に直接関連しない講義も履修し単位修得する必要がある。そのような講義では、大学院生に「予習と復習」を要求することは難しいように思える。また、大学院生は講義の受講や自身の研究以外にもTAの勤務等、学業・研究以外で忙しい時間を過ごさねばならない。このことが「予習と復習」に時間を割くことを難しくしているように思われる。

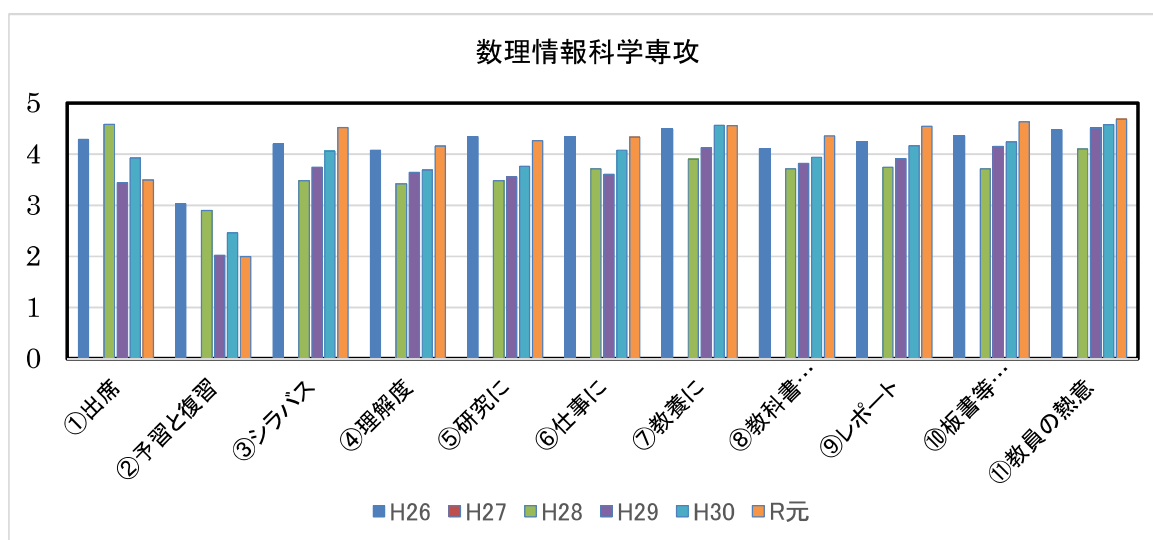


図 3.2.7 数理情報科学専攻の授業評価アンケート結果の推移

本専攻の講義の多くは受講者が10名前後であり、専門外の学生の受講が多い講義では教員がきめ細かく配慮した講義を行っていることが調査項目「教員の熱意」より推測できる。

### 3.2.8 物理・宇宙専攻（三井 好古）

平成26年度から令和元年度までのアンケート結果を比較したグラフを図3.2.8に示す。昨年度からわずかに減少している項目もある。しかし、5カ年の動向では、H26年度が突出している項目が何項目かあるが、それぞれの項目のスコアは横ばいか上昇傾向である。今年度の各項目のスコアを理学系全体および研究科全体の平均と比較すると、④理解度のスコアが0.3低い。また、②予習と復習については、他項目のスコアが概ね4以上であったのに対し、2.87となり例年と同様低いことから引き続き改善が必要と考えられる。予習・復習が励行されることで④理解度についても改善が期待できる。

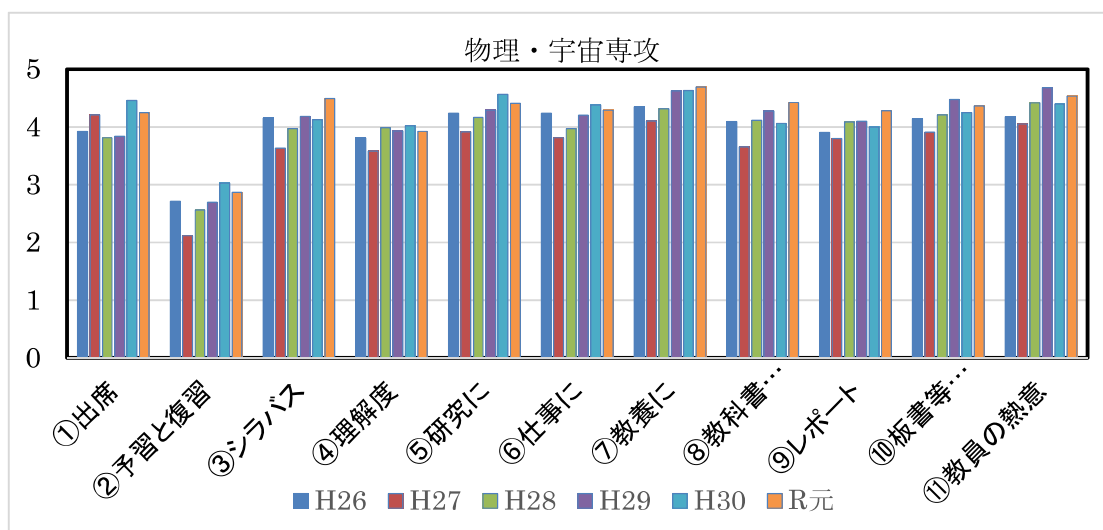


図 3.2.8 物理・宇宙専攻の授業評価アンケート結果の推移

### 3.2.9 生命化学専攻（池永 隆徳）

生命化学専攻での平成 26 年度から令和元年度までのアンケート結果を比較したものを図 3.2.9 に示す。令和元年度は、②予習と復習以外はいずれのアンケート項目も昨年度に比べてスコアが上昇していた。中でも、全 11 項目のうちの 7 項目（③シラバス、⑤研究に、⑦教養に、⑧教科書、⑨レポート、⑩板書等、⑪教員の熱意）においては過去 6 年間で最も高い値を示しており、各教員が授業の改善を意識し、かつ熱意を持って取り組んでいる結果が反映されていると思われる。一方、②予習と復習については、平成 27 年度に次ぐ低スコア (2.16) であり、近年では平成 28 年度以降毎年下降している。この値は研究科の平均 (2.77) や理学系 (2.34) の平均に比べても低い数値である。この原因については不明であるが、いずれにしても学生の予習復習に対する取組が十分でないことを示す。今後は各講義において予習復習を促すように講義の内容を工夫することが望まれる。

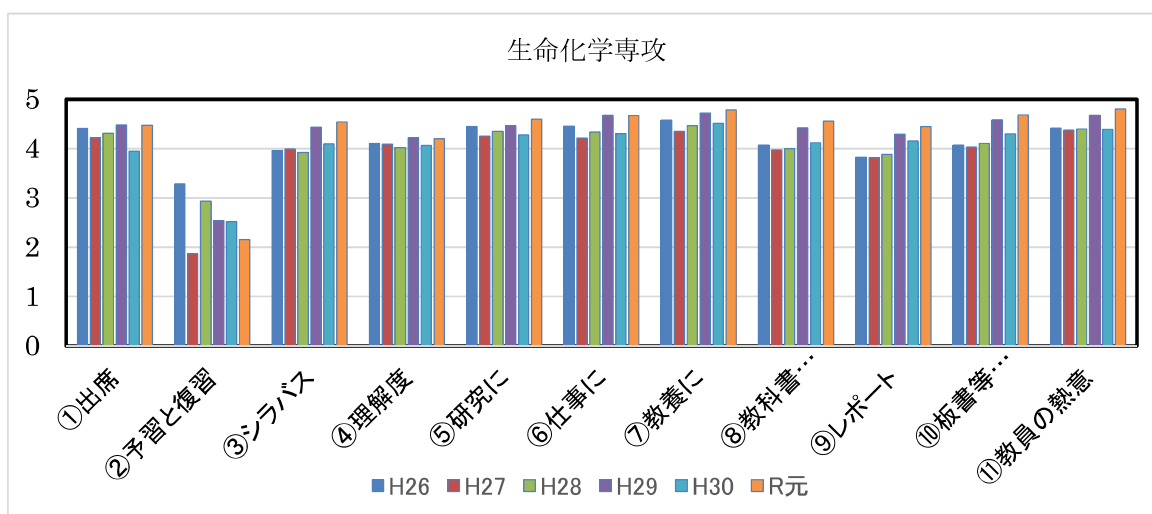


図 3.2.9 生命化学専攻の授業評価アンケート結果の推移

### 3.2.10 地球環境科学専攻（富安 卓滋）

平成 26 年度～令和元年度のアンケート結果を図 3.2.10 に示す。全体としてスコアは上昇傾向にあった。11 項目中、昨年度を下回ったのは、「予習と復習」が 3.40 から 2.13, 「仕事に」が 4.46 から 4.29, 「教科書・教材」が, 4.68 から 4.25 となった 3 項目だけであり, それ以外の 8 項目では全て, スコアは上昇した。「仕事に」と「教科書・教材」も低下したとは言え, 4.0 以上の高い評価だったことから, 改善が必要という状況にはないと考えられる。「予習と復習」に関しては, H30 年度の 3.40 から 1 ポイント以上低下したが, H29, H27 は, 2.22, 2.11 と今年度とほぼ同じスコアであり, 奇数年度に低く, 偶数年度に高くなるという変動を示していた。この原因は明確ではないが, 今後の継続した追跡とともに, スコア上昇に繋げる対応策を検討する必要はあろう。一方, 4.5 を超える極めて高いスコアの項目は, 「出席」4.71, 「シラバス」4.75, 「理解度」4.84, 「教養に」5.00, 「レポート」4.63, 「板書等の明瞭さ」5.00 および「教員の熱意」4.71 で, 11 項目中の 3 分の 2 を占める 7 項目あった。教員のスキルも上昇し, 学生の満足度の上昇につながったとみることもできる。「出席」は, 過去 5 年間は, ほぼ 4.0 付近で横ばいだったにも関わらず, 今年度は, 急激に上昇した。全体的な FD 活動の取り組みを進める中で, 学生の意識改革がなされてきたためなのか, たまたま上昇しただけなのかは, 現時点ではわからないが, 何か原因があるのであれば, その原因を明らかにすることで, 経験を今後に生かし, 高いスコアを維持できるように務めることも可能となる。今後の継続的な追跡が必要である。

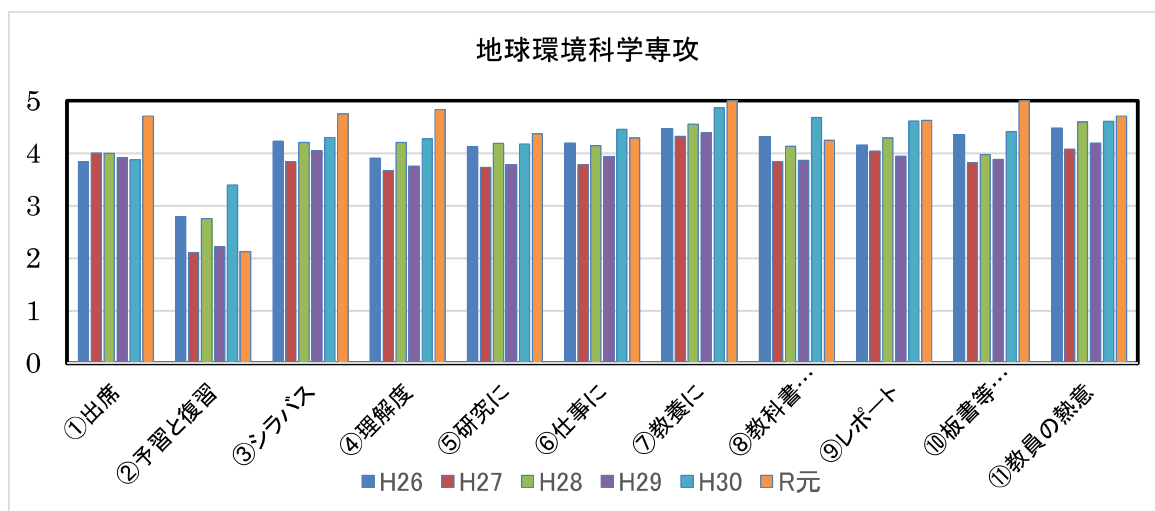


図 3.2.10 地球環境科学専攻の授業評価アンケート結果の推移

### 3.3 授業計画改善書の活用

#### (1) 機械工学専攻

学部（学科）と同様に, 専攻の FD 委員が収集した授業計画改善書は, 授業評価アンケートの評価点や科目 GPA とともに専攻教育評価委員会が整理して分析を行っている。専攻教育評価委員会は, 整理した内容と分析した結果を「専攻教育評価委員会報告書」としてまとめている。

る。この報告書は冊子と CD-ROM の形で保管され、授業改善を実施する際の資料として利用できるように全教職員に公開されている。

## **(2) 電気電子工学専攻**

授業計画改善書は、各科目の授業評価アンケート評点とそのレーダーチャート、および授業評価アンケート回答用紙（実施済みのもの）と共に学科事務室にて保管され、教員はいつでも閲覧できる。主として理工学研究科 FD 委員が管理し、専攻 FD 委員会において授業改善に向けた活用方法等を議論している。

## **(3) 建築学専攻**

授業改善計画書に関しては、全科目の評点を専攻内で閲覧可能にして問題点を共有することになっている。建築学専攻では、コースワーク科目など複数教員で担当する科目も多いため、それらの科目では、授業アンケートの結果を複数教員で確認し、また、定期的に授業方針等の打合せを行い、検討した結果を授業改善に反映させている。しかし、授業改善計画書は各期末に提出することになっているが、各教員からの提出状況は芳しくない。3.2.3 で述べたように、授業アンケートの結果からも教員による授業改善の意識は高いと思われることから、授業改善計画書が形式的な書類となっている可能性がある。大学における個人の業務時間の増加傾向から考えるに、授業改善計画書の簡易化など、名を捨てて実を取る改善が必要と考える。

## **(4) 化学生命・化学工学専攻**

各教員は、授業計画改善書の作成により授業内容や進め方に問題がなかったか再確認するとともに、改善に向けた取り組みを継続的に行っている。令和元年度当専攻の評価は前年並みであった。改善書を活用して評価向上に取り組むたい。FD 委員は、各教員より提出された授業計画改善書を確認し、保管する。不備がある場合は、FD 委員が差し戻しを行い、不備箇所を指摘して再提出してもらっている。問題が発見された場合には、専攻長と協議の上、対応を検討する。

## **(5) 海洋土木工学専攻**

理工学研究科 FD 委員会が博士前期課程の大学院生に対して実施する授業評価アンケートの結果に基づき、海洋土木工学専攻の各教員は、担当科目の授業計画改善書を作成する。本専攻のコースワークは、環境システム工学コースと建設システム工学コースの二つのコースで構成されており、各コースで必修科目が異なる。教員は、いずれか一つのコースを担当し、それぞれのコースに対して、環境システム科目部会または建設システム科目部会を開催する。これら二つの科目部会において、上記の授業計画改善書を活用しながら、教育の点検及び改善を継続的に実施している。

#### (6) 情報生体システム工学専攻

情報生体システム工学専攻では平成 22 年度より、授業計画改善書を学科事務室に保管し、全ての教員が閲覧可能となるように管理している。各教員による授業改善への取組み及び結果を教員全員で共有することで、情報生体システム工学専攻全体の教育内容への継続的な改善が試みられている。

#### (7) 数理情報科学専攻

担当教員は授業アンケートに対して授業計画改善書を提出し、保管は FD 委員または授業担当教員自身が行っている。授業計画改善書には昨年と一昨年の評点を記入する欄があり、各教員が、授業計画改善書を作成する際に評点の推移を確認することが継続的かつ効率的な授業改善につながる重要な要素となっている。今のところ授業アンケートおよび授業計画改善書を専攻内の他の教員に公開する制度とはなっていない。また、例年受講生者が 10 名前後の講義が大半であるため、アンケートの回答数も多くなく、回答率もあまり高くない。

#### (8) 物理・宇宙専攻

令和元年度には、授業計画改善書の提出があった講義は 1 つと少ない。しかしながら、3.1.8 で述べたように、授業アンケートの各項目のスコアは概ね横ばいか上昇傾向である。このことから、各講義はアンケート結果をもとに改善されているのではないかと想定される。今後も継続した講義の改善によって学生の理解度を深めることが重要である。

#### (9) 生命化学専攻

各講義の担当教員が作成した授業計画改善書は FD 委員が収集し、保管している。本年度の授業計画改善書の回収は 3 名の教員からのみであった。しかしながら、3.2.9 の専攻の学生による授業評価でも述べたように、今年度は多くの項目で昨年度に比べてスコアが上昇していることから、各教員の講義の内容は改善されていることが伺える。提出された改善書では、いずれの教員も予習と復習の項目のスコアの低さについて言及し、その改善策についても検討をしており、来年度の授業の改善に反映されることが期待される。

#### (10) 地球環境科学専攻

授業担当教員は、アンケート結果に基づき、授業計画改善書を作成することによって、授業内容や授業技法の改善に継続的に取り組んできている。その結果、令和元年度の高評価のアンケート結果につながったものと考えられる。今後も、継続的な授業改善を推進することが肝要である。ただし、個々の授業の受講者数が少ない場合、アンケート結果が年度によって大きく変動する可能性があることにも留意すべきであろう。

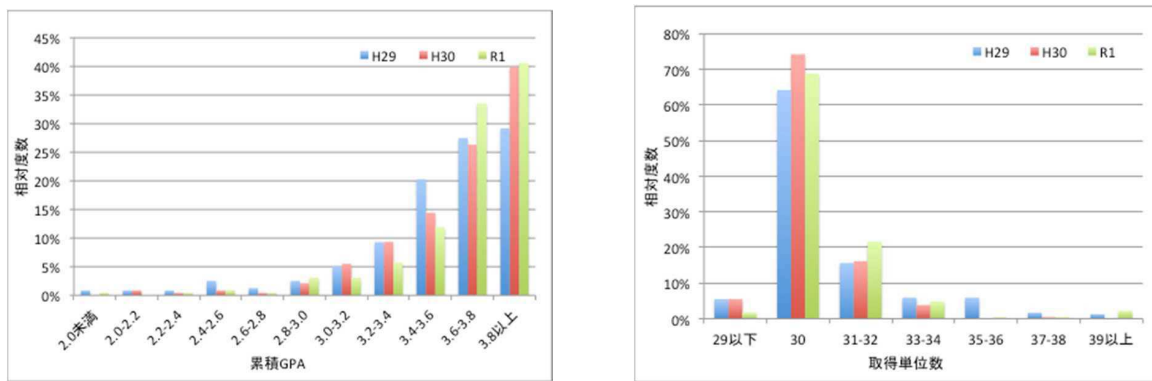
### 第 4 章 GPA 制度の現状と学習成果

理工学研究科では平成 20 年度より GPA 制度が導入された。ここでは、平成 30 年度および令和

元年度の M2 及び M1 学生のデータをもとに GPA 制度の現状について検討する。

#### 4.1 工学系専攻の GPA 制度の現状と学習成果報告（柴田 晃宏）

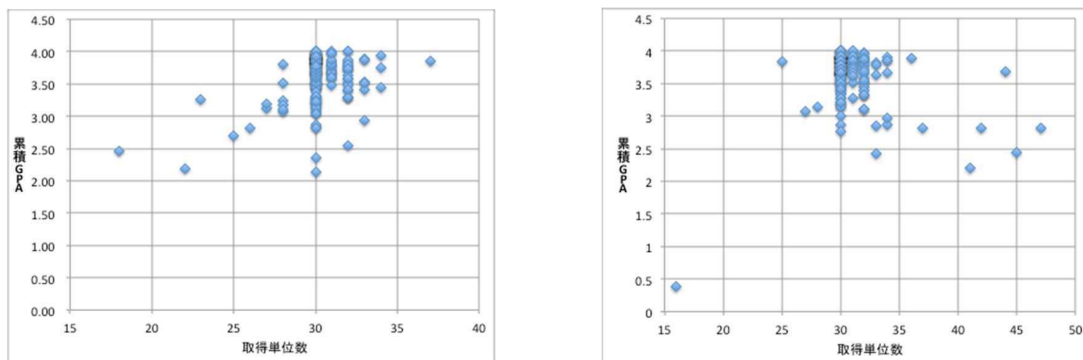
工学系専攻における平成 30 年度および令和元年度の M2 学生の累積 GPA および取得単位数のヒストグラムを、図 4.1 に示す。累積 GPA に関しては、令和元年度における 3.8 以上の割合は前年度とほぼ変わらず約 40%、3.6 以上 3.8 未満の割合は前年度比約 7%ポイント増の約 33%となっており、また、3.3 未満はほぼ変わらないが 3.0 以上 3.6 未満の割合が減少していることから、3.0 以上であった学生が GPA を延ばした結果と推察される。一方、取得単位数に関しては、修了要件の 30 単位の割合及び 29 単以下位の割合が共に令和元年度は前年より減少し、30 単を超えて単位を取得する学生の割合が増加している。図 4.2 も取得単位数と累積 GPA の相関を示す。前年度は相関係数が 0.34 であったが、令和元年度は-0.1 となった。これまでの報告書でも指摘されてきた様に、取得単位数については、修了要件の 30 単である学生が多い傾向があるため、取得単位数と累積 GPA の相関は係数では捉え難い。しかし、グラフから、前年度は概ね正の相関であったが、令和元年度は負の相関に転じていることが伺え、今後も注意深く見守る必要がある。



(a) 累積 GPA

(b) 取得単位数

図 4.1 平成 29, 30 年度及び令和元年度の M2 の累積 GPA と修得単位数のヒストグラム



(a) 平成 30 年度（相関係数 0.34）

(b) 令和元年度（相関係数-0.10）

図 4.2 M2 の履修単位数と年間 GPA の相関

## 4.2 理学系専攻の GPA 制度の現状と学習成果報告（愛甲 正）

理学系の研究科における令和元年度博士前期課程 2 年次に在籍する理系大学院生全 67 名の累積 GPA の分布図を図 4.2(1)に示した。累積 GPA は 95%の大学院生が GPA3.0 以上であり, GPA3.6 ~4.0 の高領域に 68%が分布していることから, 大学院生の学業・研究に対する意識は高いものと考えられる。前年度の調査でもこの傾向は見受けられた。

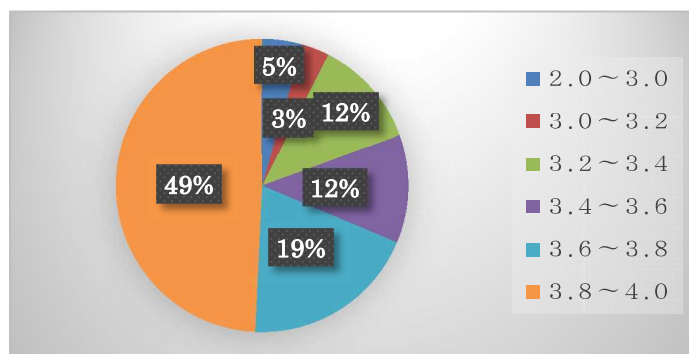


図 4.2 (1) 令和元年度 M2 (理学系) 累積 GPA の分布

また, 総修得単位数の分布を次のグラフに示す。履修基準の 30~32 単位の範囲に 57%の大学院生が分布している一方で, 25%の大学院生が 40 単位以上に分布しており, 広く横断的に学習し幅広く学ぶ大学院生が増加したものと推測できる。このことから多くの大学院生が自身の専門分野に直接的に関連した講義に限定して履修する一方で, 自身の専門以外の分野に興味関心を持つ大学院生も多くなったと推察できる。

次に, 平成 29 年度~令和元年度の 3 年間の累積 GPA および総修得単位数の推移を図 4.3 (1) と図 4.3 (2)に示した。累積 GPA の推移分布より, GPA3.0 以上の割合が 3 年とも 93%以上である。大学院では単位の習得はもちろんのこと, 自身の専門分野に関する研究の比重が大きくなり, 大学院生としての意識の高さが要因になっているものと思われる。さらに, GPA3.6 以上の割合も 70%に近い割合になっている。一方, 総修得単位数の推移からは, 前回の調査でもそうであったように明確な傾向は見られない。また, 平成 29 年度以降, 40 単位以上を修得する大学院生も少なからず存在する。より正確な傾向を見いだすには, 今後のデータの蓄積が必要であるが, 令和 2 年度より大学院改組により履修課程も大きく変更となり, 自身の専門分野に関する必修科目や選択必修科目, また研究教育マネジメント, 国内学会特別研修や国際学会特別研修, 研究インターンシップ I, II 等の自身の専門分野と直接関係のない科目習得が必要になる。このことが累積 GPA や習得単位数にどのように影響するのか注視し, さらに検討分析が必要になると思われる。



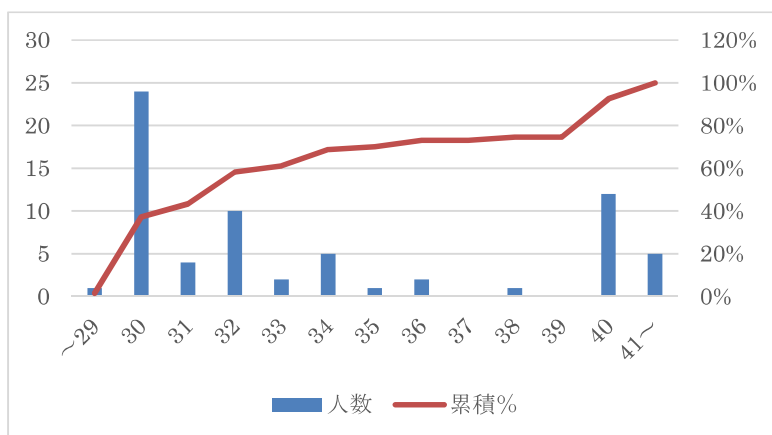


図 4.2 (2) 令和元年度 M2 (理学系) 総修得単位数の分布

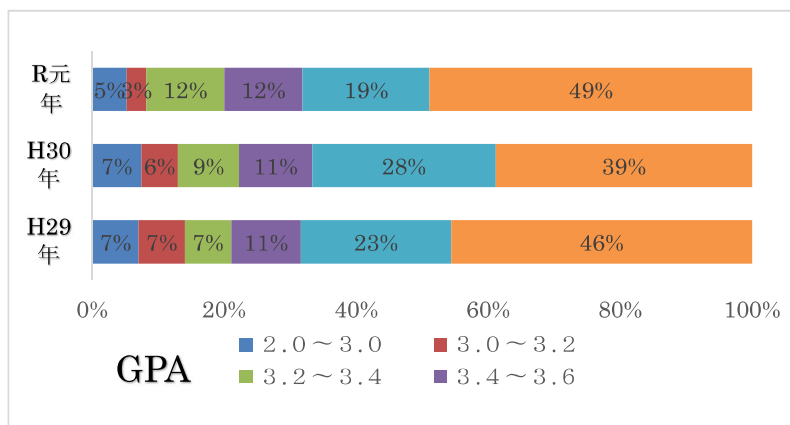


図 4.3 (1) 平成 29 年度～令和元年度 M2 (理学系) 累積 GPA の推移分布

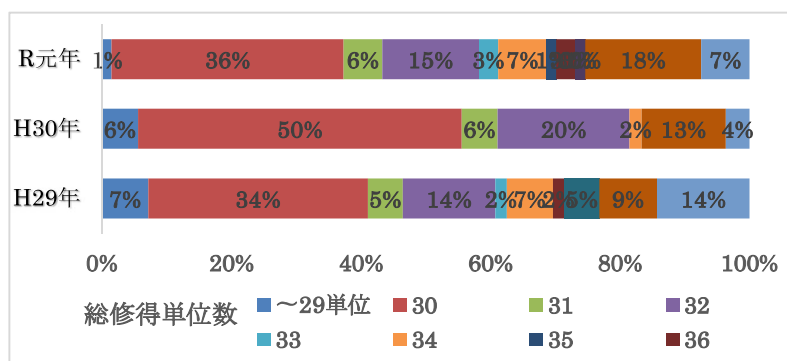


図 4.3 (2) 平成 29 年度～令和元年度 M2 (理学系) 総修得単位数の推移分布

## 第5章 学生の研究活動と教育成果（三井 好古， 鮫島 宗一郎）

大学院生の研究発表の支援は FD 活動の目的の一つであることから，その実績を把握するために調査を実施した（表 5.1）．当該年度における在籍者数を表 5.2 に，受賞実績について表 5.3 に示す．

表 5.1 大学院生の研究成果の発表数

年度	分類		機械	電気	建築	化学	海洋	情報	数理	物理	生命	地環	合計
平成22年度	口頭発表 (含むポスター発表)	国際会議	3	7	2	53	4	2	1	6	27	11	116
		国際会議以外	44	65	38	126	29	46	4	9	41	19	421
	論文	査読あり	19	12	3	39	17	19	1	4	29	2	145
		査読なし	7	30	26	20	2	36	0	6	7	2	136
平成23年度	口頭発表 (含むポスター発表)	国際会議	1	5	1	49	2	6	0	3	8	11	86
		国際会議以外	15	60	38	135	34	35	1	14	26	26	384
	論文	査読あり	4	13	0	25	27	9	1	3	9	8	99
		査読なし	3	18	6	7	9	7	1	6	3	0	60
平成24年度	口頭発表 (含むポスター発表)	国際会議	6	21	2	43	20	3	0	9	15	3	122
		国際会議以外	32	66	46	141	18	28	0	49	52	20	452
	論文	査読あり	10	30	9	36	11	11	0	8	7	4	126
		査読なし	4	38	0	9	5	7	0	10	6	0	79
平成25年度	口頭発表 (含むポスター発表)	国際会議	9	27	2	40	8	15	0	2	10	4	117
		国際会議以外	80	78	32	104	15	50	0	17	34	8	418
	論文	査読あり	15	33	6	24	14	22	0	5	9	3	131
		査読なし	10	28	0	1	4	22	0	3	9	0	77
平成26年度	口頭発表 (含むポスター発表)	国際会議	8	25	2	28	2	12	0	8	7	7	99
		国際会議以外	68	88	24	164	25	56	3	36	32	13	509
	論文	査読あり	21	27	1	24	21	27	0	11	6	3	141
		査読なし	1	10	0	0	2	31	0	0	1	1	46
平成27年度	口頭発表 (含むポスター発表)	国際会議	8	13	1	63	2	6	0	20	7	0	120
		国際会議以外	64	54	31	182	22	43	5	36	39	15	491
	論文	査読あり	14	21	1	30	13	18	3	14	5	3	122
		査読なし	0	8	14	3	2	16	0	6	7	1	57
平成28年度	口頭発表 (含むポスター発表)	国際会議	10	14	12	71	3	2	0	7	23	1	143
		国際会議以外	47	42	34	195	12	48	1	32	56	17	484
	論文	査読あり	10	7	9	28	8	7	0	4	17	1	91
		査読なし	0	11	19	9	2	6	0	0	4	3	54
平成29年度	口頭発表 (含むポスター発表)	国際会議	11	15	0	66	10	12	0	7	10	3	134
		国際会議以外	60	67	37	138	19	35	6	20	54	8	444
	論文	査読あり	4	9	4	25	12	16	0	9	11	1	91
		査読なし	3	2	3	2	0	18	0	1	2	31	
平成30年度	口頭発表 (含むポスター発表)	国際会議	20	16	6	77	4	5	0	15	15	0	158
		国際会議以外	47	81	35	168	8	30	14	19	38	12	452
	論文	査読あり	7	13	2	31	11	5	0	10	9	0	88
		査読なし	0	1	0	2	17	7	0	1	0	28	
令和元年度	口頭発表 (含むポスター発表)	国際会議	11	18	79	0	8	7	0	18	8	0	149
		国際会議以外	43	73	135	53	13	18	4	34	19	8	400
	論文	査読あり	7	8	26	4	8	14	0	13	14	3	97
		査読なし	0	2	9	8	9	0	0	1	11	40	

表 5.2 在籍者数（博士前期課程）

専攻名	機械	電気	建築	化学	海洋	情報	数理	物理	生命	地環	合計
平成22年度	109	106	46	132	39	85	25	30	36	36	644
平成23年度	116	105	52	88	32	89	24	28	32	30	596
平成24年度	116	104	52	88	32	89	24	28	32	30	595
平成25年度	99	95	43	84	26	84	21	32	34	33	551
平成26年度	93	96	46	85	30	90	20	36	33	31	560
平成27年度	105	104	59	80	26	94	15	38	43	33	597
平成28年度	112	98	67	89	18	87	13	37	47	29	597
平成29年度	112	85	62	97	27	84	19	32	35	23	576
平成30年度	105	93	61	101	24	88	20	33	43	26	594
令和元年度	96	108	54	98	22	85	22	34	47	16	582

表 5.3 受賞など

博士前期課程

<物理・宇宙専攻>

受賞者名	学年	受賞賞名等
宇野友理	M2	VLBI懇談会シンポジウム口頭発表賞

<生命化学専攻>

受賞者名	学年	受賞賞名等
赤坂舞子	M1	Third Position Award, Poster Presentation in 5th NDSU-KU Joint Symposium on Biotechnology, Nanomaterials and Polymers
金丸 愛望	M2	第21回生体触媒化学シンポジウムベストプレゼンテーション賞

<機械工学専攻>

受賞者名	学年	受賞賞名等
大島貴裕	M2	SI2019優秀講演賞(第20回計測自動制御学会SI部門講演会)

<電気電子工学専攻>

受賞者名	学年	受賞賞名等
小池 省吾	M1	電気学会優秀論文発表賞B賞
幸森 雄三	M1	2019年度 応用物理学会九州支部 学術講演会 発表奨励賞
岩永 英俊	M2	日本知能情報フアンジ学会九州支部学術講演会 学生優秀講演賞
鬼丸 隆太郎	M2	Global Symposium on Millimeter Waves (GSMM)2019 Best Student Paper Award
	M2	2019 Excellent Student Award of the IEEE Fukuoka Section
中尾 太陽	M2	Taiwan and Japan Conference on Circuits and Systems, Best Student Paper Award
山下 悠也	M2	平成30年度西部支部研究発表会 優秀講演者
山田 鳳文	M2	2019年電気学会産業応用部門大会 YPC(ヤングエンジニアポスターコンペティション) 優秀発表賞

<建築学専攻>

受賞者名	学年	受賞賞名等
佐藤 由奈	M1	2019年度日本建築学会大会(北陸)学術講演会 若手優秀発表賞
有馬 真輝	M1	コロキウム構造形態の解析と創生2019優秀講演賞
中尾 有希	M2	鹿児島住宅デザインコンペティション2019 佳作
坂元 利伎	M2	「第5回学生・若手実務者のための構造デザインコンペティション」優秀賞

<化学生命・化学工学専攻(応用化学・生命工学コース)>

受賞者名	学年	受賞賞名等
上田 暖	M1	Taiwan-Japan Bilateral Workshop 2019 (2019 TJBW), 「Best Presentation Award」
大城 章瑚	M1	5th NDSU-KU Joint Symposium on Biotechnology, Nanomaterials and Polymers, 「Award Poster Presentation」
	M1	九州地区高分子若手研究会・冬の講演会、「優秀ポスター発表賞」
下田 裕栄	M1	2019年度 日本生化学会九州支部例会、「優秀ポスター賞」
中原 健成	M1	Taiwan-Japan Bilateral Workshop 2019 (2019 TJBW), 「Best Presentation Award」
幸 勝治	M1	5th NDSU-KU Joint Symposium on Biotechnology, Nanomaterials and Polymers, 「Award Poster Presentation」
Lee Le Hooi	M1	2019 Kyushu-Seibu/Pusan-Gyeongnam Joint Symposium on High Polymers (19th) and Fibers (17th)Best Poster Award
桐原 晃希	M1	環境科学会2019年会 優秀発表賞(富士電機賞)
田中 敦	M1	エネルギー学会西部支部第4回若手研究発表会優秀学生賞
大嶋 健人	M2	第56回化学関連支部合同九州大会、「高分子・繊維若手研究者奨励賞」
長谷部 稜弥	M2	日本ゾルゲル学会第17回討論会、「ベストポスター賞」
円城寺 佑貴	M2	第92回 日本生化学会大会、「若手優秀発表賞」

<化学生命・化学工学専攻(化学工学コース)>

受賞者名	学年	受賞賞名等
二宮 大樹	M1	2019年度ソノケミストリー学会奨励賞
北島 光明	M1	第9回九州若手セラミックスフォーラム&第49回窯業基礎九州懇話会優秀ポスター賞
	M2	2019 Japan/Taiwan/Korea Chemical Engineering Conference Excellent Poster Award
平 雄也	M2	日本エネルギー学会西部支部第4回学生・若手研究発表会優秀学生賞(ポスター発表)
	M2	第25回流動化・粒子プロセスシンポジウム優秀ポスター賞
	M2	日本エネルギー学会西部支部第4回学生・若手研究発表会優秀学生賞(ポスター発表)
宮島 董	M2	The 32nd International Symposium on Chemical Engineering Best Poster Presentation Award
濱砂 玲音	M2	令和元年度化学工学学会九州支部学生賞審査会 学生賞(修士の部)
福原 芳樹	M2	第56回化学関連支部合同九州大会 優秀ポスター賞
辻 侑真	M2	The 32nd ISChE(化学工学に関する国際シンポジウム)Best Oral Presentation Award
堀 貴寧	M2	第9回九州若手セラミックスフォーラム&第49回窯業基礎九州懇話会優秀ポスター賞

<海洋土木工学専攻>

受賞者名	学年	受賞賞名等
中島 亮輔	M1	第54回地盤工学研究発表会 優秀発表者賞
馬場 咲也子	M1	第54回地盤工学研究発表会 優秀発表者賞
川畑 雅樹	M1	鹿児島大学進取の精神学生表彰
湯舟 広海	M1	鹿児島大学進取の精神学生表彰
馬場 崇吉郎	M2	JCI九州支部 支部長賞

<情報生体システム工学専攻>

受賞者名	学年	受賞賞名等
鈴木 崇大	M1	学生奨励賞, 2019年度人工知能学会全国大会(第33回)

博士後期課程

<総合理工学専攻>

受賞者名	学年	受賞賞名等
久富あすか	D2	Excellent Paper Award, 2019 International Conference on Technologies and Applications of Artificial Intelligence
坂本 和也	D3	JCI九州支部 支部長賞
小林領太	D2	合同学術講演会(日本金属学会 日本鉄鋼協会 軽金属学会 九州支部 共催)ポスター賞
	D2	MCS (Medicinal Chemistry Symposium) 優秀賞
山田 慧	D2	JMC (Journal of Medicinal Chemistry) 特別賞受賞
迫田和之	D3	国際会議ICSP2019 Best Presentation Award

## 第6章 特筆すべき取組及び改善事例（甲斐 敬美）

平成27年度より理工学研究科では「学年4期分割授業日程」を導入するとともに、Q2期間と夏季休業期間を通じた約3ヶ月を利用した短期留学により、国際コミュニケーションを通して、グローバルな理工系の課題・解決に取り組み、将来、国際社会で活躍する技術者・研究者を目指しグローバルに活動するための経験を養うことを目的として「理工系国際コミュニケーション海外研修（4単位）」を新設した。2.2で紹介したように令和元年度も、Q2期に11名が参加した。

今年度から授業評価アンケートはmanabaで実施された。解析作業の効率化に繋がった反面、回答率が低下するという問題もある。授業時間内に回答について周知することを各科目で徹底することによってある程度改善できることも分かった。

## 第7章 今後の理工学研究科FD活動への期待（甲斐 敬美）

理工学研究科では、教育内容に対する選択の多様性を認めつつ、高度な専門教育だけでなく、社会の流れに則したイノベーションマインド（革新精神）を有する人材育成を目的として改組により教育システムを大幅に改革した。令和2年度から科目を5つの科目群（知の探求科目群・知の探索科目群・実践力養成科目群・大学院横断科目群・語学関連科目群）に整理し、それぞれの科目群に新規の科目を導入した。今後も活発なFD活動により、新たなシステムが効果的に機能し、大学院教育が充実することを期待する。

## 令和元年度第1回理工学研究科FD委員会議事要旨

日時：令和元年5月13日(月)12:55～13:18

場所：工学部共通棟4階 会議室

委員：1号委員；甲斐(委員長)

2号委員；松崎、野見山(代理)、柴田、鮫島、三隅、大橋、村上(代理)、  
三井、池永、小林(代理)

3号委員；甲斐(再掲)、小林(再掲、代理)

4号委員；欠員

陪席：立和名学務課長、武総務係員

議事に先立ち、委員長の挨拶および委員の紹介後、前回議事要旨が確認された。

### ○報告事項

#### 1 平成30年度研究科FD活動報告及び令和元年度研究科FD活動計画について

委員長から報告事項1資料に基づき、平成30年度研究科FD活動について報告があった。

引き続き委員長から令和元年度研究科FD活動計画について、昨年度同様で全学へ提出済みである旨の説明があった後、同資料に基づき、本年度のFD活動計画について報告があった。

#### 2 授業評価アンケートの実施について

委員長から口頭により、授業評価アンケートの実施について報告があり、本年度よりmanabaでアンケートを行い、設問内容やその他については例年同様の実施予定である旨の説明、及び各専攻委員へ実施に係る協力依頼があった。

大橋委員より、アンケートの設問内容について一部の設問を見直す必要がある旨の意見が専攻より出たことを述べられ、委員長より次年度以降、設問内容を見直すことが確認された。

#### 3 その他

なし

### ○議題

#### 1 FD経費予算要求について

委員長から、FD経費予算要求について諮られ、議題資料1に基づき、各企画に係る予算要求(案)について説明があり、審議の結果、原案のとおり承認された。

## 2 委員の活動分担及びFD報告書原稿作成分担について

委員長から、委員の活動分担及びFD報告書原稿作成分担について諮られ、議題資料2に基づき、本年度の研究科FD活動計画における分担、及び年度末のFD報告書原稿作成分担について説明があり、審議の結果、原案のとおり承認された。

なお、FD報告書作成に係る各項目の執筆担当は、次回（12月～翌年1月開催予定）の委員会にて決定することとした。

## 3 その他

なし

## 令和元年度第2回理工学研究科FD委員会（メール会議）議事要旨

日時：令和元年12月18日(水)～12月23日(月)正午

委員：1号委員；甲斐(委員長)

2号委員；松崎、重井、柴田、鮫島、三隅、大橋、愛甲、三井、池永、富安

3号委員；甲斐(再掲)、富安(再掲)

4号委員；欠員

### 議題

1 令和元年度第2回理工学研究科FD講演会の開催について

委員長から、令和元年度第2回理工学研究科FD講演会の開催（令和2年1月15日(水) 13:30～14:30予定）について諮られた。

審議の結果、特に異論はなく原案のとおり開催することが承認された。

2 その他

なし

## 令和元年度第3回理工学研究科FD委員会（メール会議）議事要旨

日時：令和2年2月12日(水)9:00～2月25日(火)12:00

委員：1号委員；甲斐(委員長)

2号委員；松崎、重井、柴田、鮫島、三隅、大橋、愛甲、三井、池永、富安

3号委員；甲斐(再掲)、富安(再掲)

4号委員；欠員

### 議題

- 1 令和2年度FD活動計画について  
委員長から、令和2年度FD活動計画について諮られた。  
審議の結果、特に異論はなく原案のとおり承認された。
- 2 令和元年度FD活動報告書の作成について  
委員長から、令和元年度FD活動報告書の作成について、資料2に基づいた業務分担の担当者割振りが諮られた。  
審議の結果、特に異論はなく原案のとおり承認された。
- 3 その他  
なし

### 報告事項

- 1 令和元年度FD研修等の参加について  
委員長から、令和元年度FD研修等の参加について、化学生命・化学工学専攻・上田岳彦准教授からFD研修の申請があり、承認したことの報告があった。
- 2 その他



A(受講態度等について)

設問1 授業にどれだけ出席しましたか。(選択必須)

1.1

- 1. 全て出席
- 2. 1回欠席
- 3. 2回欠席
- 4. 3回欠席
- 5. 4回以上欠席

設問2 予習と復習は1コマ(90分)の授業に対して、どれくらいしましたか。(レポート作成時間も含まず)(選択必須)

1.2

- 1. 3時間より多く
- 2. 2~3時間
- 3. 1~2時間
- 4. 30分~1時間
- 5. 30分未満

【自由記述A】

その他、受講態度等を含めて感想や授業改善に役立つと思われる意見を回答用紙の自由記述欄に簡潔に書いてください。

1.3
-----

B(授業内容等について)

設問3 この授業のシラバス記載内容は受講申請に役立ちましたか。(選択必須)

1.4

- 1. そう思う
- 2. どちらかと言えばそう思う
- 3. どちらとも言えない
- 4. どちらかと言えばそうは思わない
- 5. そうは思わない

設問4 授業はほぼ理解でき、学習目標は達成できそうだ。(選択必須)

1.5

- 1. そう思う
- 2. どちらかと言えばそう思う
- 3. どちらとも言えない
- 4. どちらかと言えばそうは思わない
- 5. そうは思わない

設問5 授業の内容は自身の研究を進める上で役立つと思う。(選択必須)

1.6

- 1. そう思う
- 2. どちらかと言えばそう思う
- 3. どちらとも言えない
- 4. どちらかと言えばそうは思わない
- 5. そうは思わない

設問6 授業の内容は目指す(職業上の)高度専門知識として役立つと思う。(選択必須)

1.7

- 1. そう思う
- 2. どちらかと言えばそう思う
- 3. どちらとも言えない
- 4. どちらかと言えばそうは思わない
- 5. そうは思わない

設問7 授業の内容は自身の教養や学力を高める上で役立つと思う。(選択必須)

1.8

- 1. そう思う
- 2. どちらかと言えばそう思う
- 3. どちらとも言えない
- 4. どちらかと言えばそうは思わない
- 5. そうは思わない

**【自由記述B】**

授業内容全般について感想や授業改善に役立つと思われる意見を回答用紙の自由記述欄に簡潔に書いてください。

特に、理解できない場合にはどこに原因があると考えますか。

1.9	▲	▼
◀		▶

**C(授業方法等について)**

設問8 使用した教科書や教材は授業の理解に役立った。  
(教材等を使用しなかった場合には記入しなくて良い。)(選択必須)

1.10

- 1. そう思う
- 2. どちらかと言えばそう思う
- 3. どちらとも言えない
- 4. どちらかと言えばそうは思わない
- 5. そうは思わない

設問9 レポートなどは授業の理解に役立った。  
(無かった場合には記入しなくて良い。)(選択必須)

1.11

- 1. そう思う
- 2. どちらかと言えばそう思う
- 3. どちらとも言えない
- 4. どちらかと言えばそうは思わない
- 5. そうは思わない

設問10 板書などは明瞭だった。(選択必須)

1.12

- 1. そう思う
- 2. どちらかと言えばそう思う
- 3. どちらとも言えない
- 4. どちらかと言えばそうは思わない
- 5. そうは思わない

設問11 教員の熱意が感じられた。(選択必須)

1.13

- 1. そう思う
- 2. どちらかと言えばそう思う
- 3. どちらとも言えない
- 4. どちらかと言えばそうは思わない
- 5. そうは思わない

【自由記述C】

授業方法全般について感想や授業改善に役立つと思われる意見を回答用紙の自由記述欄に簡潔に書いてください。

1.14	▲
	▼
◀	▶

授業計画改善書(令和元年度 ○期 講義・演習用)

1. 授業アンケート結果に基づいて、授業科目ごとに記載して下さい。
2. 複数で担当されている科目は、アンケートに応じて代表者の方あるいは分担者が記載して下さい。
3. この文書を 月 日( )までに専攻のFD委員に添付ファイルで送付して下さい。
4. この文書は3年間保管して下さい。

記入年月日： 令和 年 月 日

授業科目名： \_\_\_\_\_

授業担当者(代表者)名： \_\_\_\_\_

※ Pt. 8ゴシックで記入して下さい。

※ 自由記述欄については、授業評価アンケート実施の有無に関わらず記入してください。

評価項目		アンケートの評点			現時点での自己分析と改善の方策
		今回	前回	前々回	
(A) 受講態度について	①出席				
	②予習と復習				
	※自由記述				
(B) 授業内容について	③シラバス				
	④理解度				
	⑤研究に				
	⑥仕事に				
	⑦学力・教養に				
	※自由記述				
(C) 授業方法について	⑧教科書・教材				
	⑨レポート等				
	⑩板書等の明瞭さ				
	⑪教員の熱意				
	※自由記述				

登録者数		名 名 名
受験者数(A)		
単位取得者数(B)		
比率(B/A)		

【総括】

成績の評価基準	
学習目標の達成	
その他(自由記述)	

授業計画改善書(令和元年度 ○期 講義・演習用)

1. 授業アンケート結果に基づいて、授業科目ごとに記載して下さい。
2. 複数で担当されている科目は、アンケートに応じて代表者の方あるいは分担者が記載して下さい。
3. この文書を 月 日( )までに専攻のFD委員に添付ファイルで送付して下さい。
4. この文書は3年間保管して下さい。

記入年月日： 令和 年 月 日

授業科目名： \_\_\_\_\_

授業担当者(代表者)名： \_\_\_\_\_

※ Pt. 8 ゴシックで記入して下さい。

※ 自由記述欄については、授業評価アンケート実施の有無に関わらず記入してください。

評価項目		アンケートの評点			現時点での自己分析と改善の方策
		今回	前回	前々回	
(A) 受講態度について	①出席				
	②予習と復習	2.50	2.25	2.80	予習・復習の時間が1から2時間であり、本科目の内容を習得するためには不足しているので、課題を増やしたい。
	※自由記述				
(B) 授業内容について	③シラバス				
	④理解度	3.16	3.00	3.20	今年度は少し理解度を上げることができた。小テストなどで理解度の向上を図り、次年度は評点3.5となるようにしたい。
	⑤研究に				
	⑥仕事に				
	⑦学力・教養に				
	※自由記述				
(C) 授業方法について	⑧教科書・教材				
	⑨レポート等	3.70	3.20	3.50	今年度は5回のレポートを提出させた。昨年度は3回(評点は3.20)であったので、少し改善することができた。次年度は評点4.0となるようにしたい。
	⑩板書等の明瞭さ				
	⑪教員の熱意				
	※自由記述				

登録者数	14	名
受験者数(A)	14	
単位取得者数(B)	14	
比率(B/A)	100%	

【総括】

成績の評価基準	シラバスに従い、試験7割、レポート課題3割の割合で評価した。
学習目標の達成	合格者の平均はC(78点)であり、大学院の成績としては、十分ではない。レポート課題への取り組みが十分ではないことが考えられるので、次年度は何らかの改善をしたい。
その他(自由記述)	



医歯学総合研究科

# 医歯学総合研究科 FD 活動報告

## 1. はじめに

医歯学総合研究科 FD 委員会は、大学及び研究科が目指す大学院教育の質向上と研究環境の改善を目的として活動している。さらに、医学部 FD 委員会、歯学部 FD 委員会と連携し、桜ヶ丘キャンパスの全ての教職員を対象とした FD 活動を行っている。

令和元年度は、授業公開、留学生を対象とした英語による授業評価及び研究支援に対するアンケートを継続し、学習支援システム manaba 利用講習会は医学部 FD 委員会医学科部会との共催として実施した。

令和元年度の専任教員の FD 参加率は、医歯学総合研究科の構成員である医学部（142 名中 109 名参加）及び歯学部（125 名中 103 名参加）の数を合算して算出し、79.4%（267 名中 212 名参加）であった。

## 2. 授業公開

授業公開は「優れた授業を公開し、参観をした教員が授業方法を学ぶ機会を提供する」ことを目的として実施している。授業内容にも関心を持って参加していただくために、昨年を引き続き、研究倫理に関する授業を公開授業とした。

日時	2019 年 11 月 5 日（火） 6 限目
科目・テーマ	生命医療倫理学（修士課程）・医歯学倫理学（博士科目） テーマ：疫学研究の倫理的側面
講師	嶽崎 俊郎（国際離島医療学分野 教授）
会場	桜ヶ丘共通教育棟 5 階 503 講義室
参観者	13 名（研究科教員 10 名 大学院生 3 名（科目受講者を除く））
概要	修士及び博士課程の大学院生が研究倫理について学習する科目。人を対象にする研究において、必須事項である倫理面への適切な対応、さらに対象の人権に配慮し情報や資料を収集することへの理解と興味を促す授業であった。参観者からの授業評価、アンケートを講師にフィードバックし、講師からも有意義であったとの感想が得られた。

### 3. 学生による授業評価アンケート

**実施方法の概要** 現在、講義等を主体とする授業科目の評価アンケートに加え、演習・実験科目の評価として研究環境と研究指導に関するアンケートを、日本語と同じ内容の留学生用の英語のアンケート用紙により実施している。医歯学大学院係がアンケート用紙を作成、対象学生に配布、回収して集計業務を行った。また集計結果は科目責任者にフィードバックした。

**講義科目アンケート** 講義を主体とする科目アンケートは3名以上の受講生がいる科目を対象として授業評価9項目、学習に対する自己評価2項目、全体評価とし、無記名により各項目について7段階の評定尺度で回答し、自由な意見も記載してもらった。

対象は「受講生3名以上」の科目であり、前期は対象22科目110枚、後期は対象13科目88枚の回答が得られた。授業評価の評価項目3「講義はの内容はよく理解できましたか」及び自己評価評価項目1「この授業で新しい知識や考え方を習得しましたか」の回答は、評価尺度7及び7+6の比率が前年度に比べ10%以上増加しており、講義内容が改善され学生の理解度が高まっている傾向が示された。

**演習、実験科目のアンケート** 演習、実験科目についてのアンケートは2月に実施し、無記名で医系歯系の別、入学年度、演習科目の授業形態、内容と指導3項目、実験科目（研究指導）6項目、研究中断の有無、さらに正課、課外における英語によるコミュニケーション3項目について回答を求めた。選択項目以外は、5段階の評定尺度で回答した。

医系77枚（内留学生7名）、歯系36枚（内留学生2名）の回答が得られた。

**医系** 入学年度は平成21年度が最も古く、在学期間が長期の学生が在籍しているものの改善傾向が見られる。項目7で、個人的理由以外での研究の中断が8%となっており、昨年度の10%よりやや低下はしたが、さらなる改善が求められている。科目の有用性は高いものの、教員の研究支援、英語での指導は、十分あるいは概ねできたとする回答が大半であるが、自由記載に、研究指導、研究に関する時間の確保等の改善点が指摘されている。

**歯系** 学生の在籍期間は5年以内であり、個人的な理由以外での研究の長期中断もなく、履修の環境は良い状況にある。科目の有用性、教員の対応・支援は昨年度と同様の高い評価を得ている。

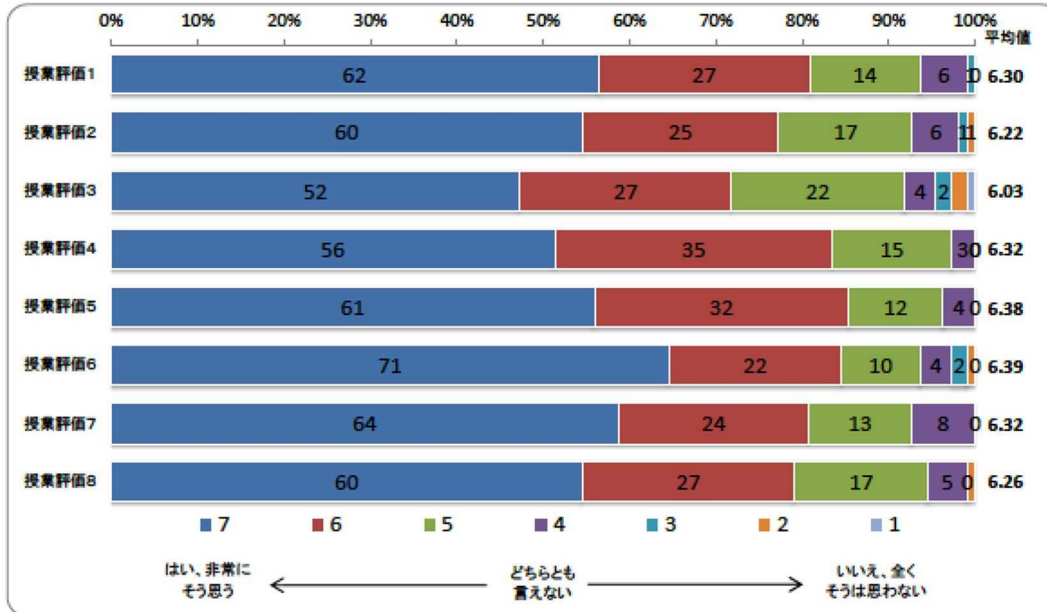


医歯学総合研究科 授業に関するアンケート全体集計 (R元年度 前期)

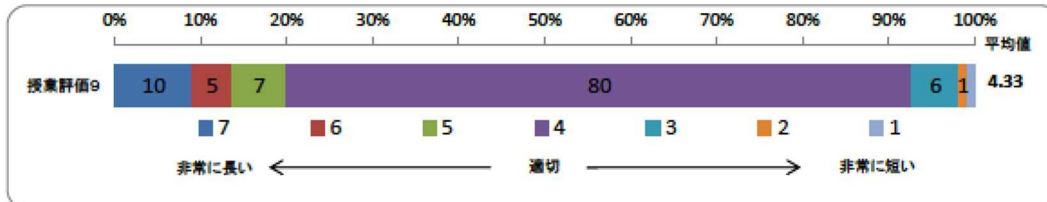
集計 22 科目 アンケート回収枚数 110 枚

【授業評価】

- 1 この科目はあなたのニーズに合っていましたか
- 2 この科目はあなたの現在、将来の研究に有用な内容でしたか
- 3 講義の内容はよく理解できましたか
- 4 この科目のシラバスには、必要な情報が記載されていましたか
- 5 シラバスに記載された学習項目、教育方法、評価が行われましたか
- 6 講義内容や配付資料などはよく準備されていましたか
- 7 教員はあなたの質問を促し、適切に対応しましたか
- 8 教員は参考資料の掲示など、発展的な学習、研究を支援しましたか

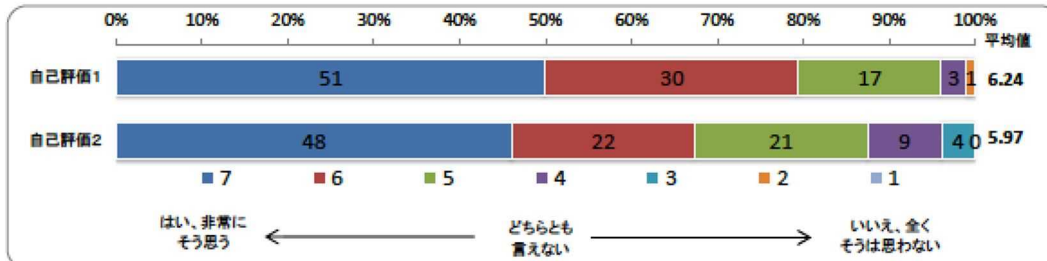


9 講義時間は適切でしたか



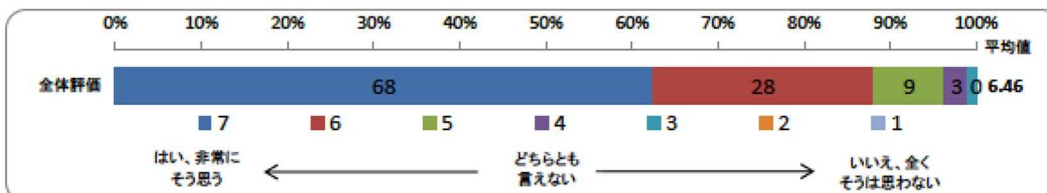
【自己評価】

- 1 この科目で新しい知識や考え方を習得しましたか
- 2 授業には積極的に参加しましたか(質問、自習など)



【全体評価】

- 1 この授業に満足し、他の学生にも受講を薦めますか

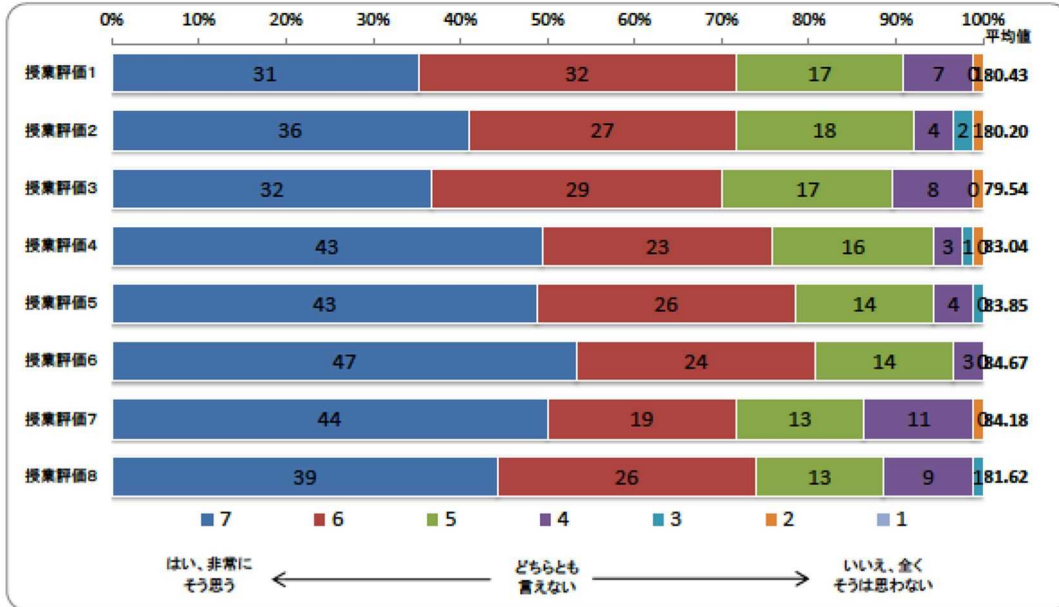


医歯学総合研究科 授業に関するアンケート全体集計 (R元年度 後期)

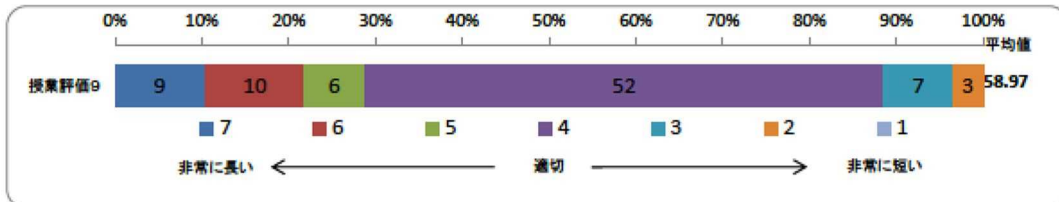
集計 13科目 アンケート回収枚数 88枚

【授業評価】

- 1 この科目はあなたのニーズに合っていましたか
- 2 この科目はあなたの現在、将来の研究に有用な内容でしたか
- 3 講義の内容はよく理解できましたか
- 4 この科目のシラバスには、必要な情報が記載されていましたか
- 5 シラバスに記載された学習項目、教育方法、評価が行われましたか
- 6 講義内容や配付資料などはよく準備されていましたか
- 7 教員はあなたの質問を促し、適切に対応しましたか
- 8 教員は参考資料の提示など、発展的な学習、研究を支援しましたか

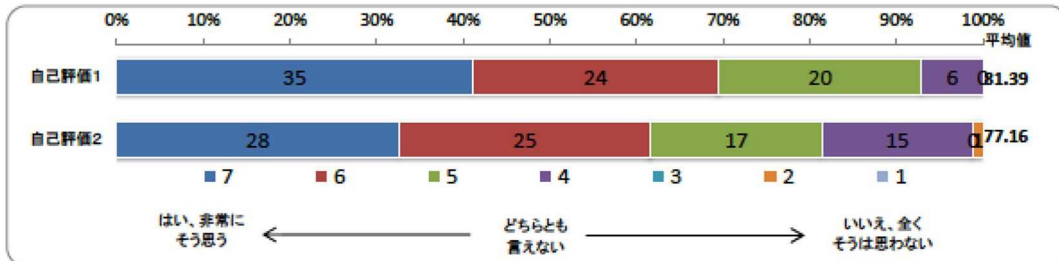


9 講義時間は適切でしたか



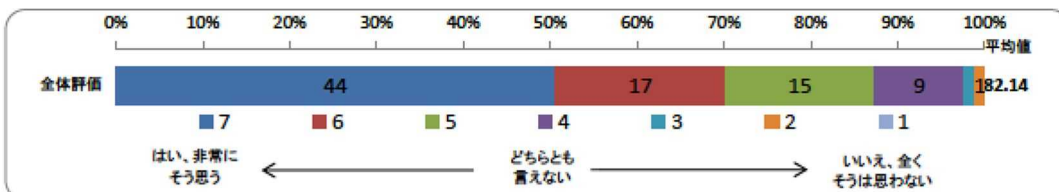
【自己評価】

- 1 この科目で新しい知識や考え方を習得しましたか
- 2 授業には積極的に参加しましたか(質問、自習など)



【全体評価】

- 1 この授業に満足し、他の学生にも受講を薦めますか



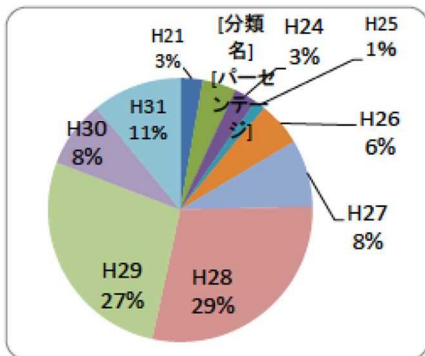
実験科目等アンケート

医 系

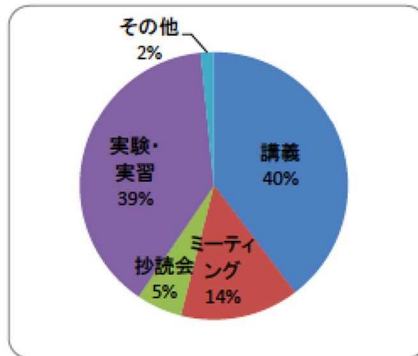
研究指導に係る学生アンケート(2020年 2月実施)

アンケート回収枚数(医系) 77 枚(内、留学生7名)

2 入学年度はいつですか



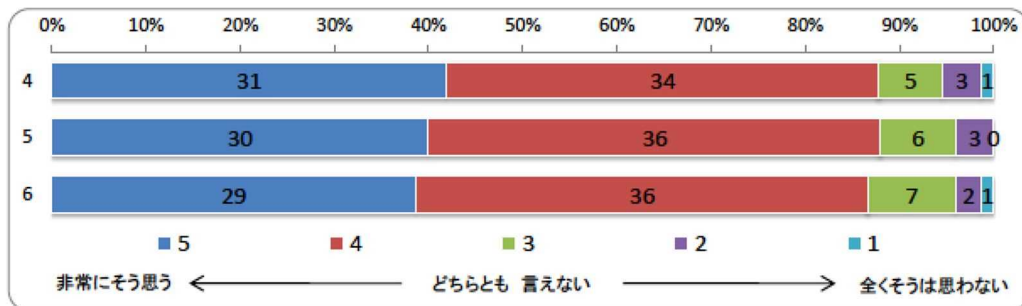
3 あなたが受講している授業科目の授業形態は、次のうちのどれですか(複数回答可)



4 あなたが受講している授業科目はあなたの研究に有用な内容でしたか

5 教員はあなたの質問を促し、適切に対応しましたか

6 教員は発展的な学習、研究を支援しましたか



実験科目(研究指導)

1 直面している問題を解決するために常に教員と話し、指導を受けることはできましたか

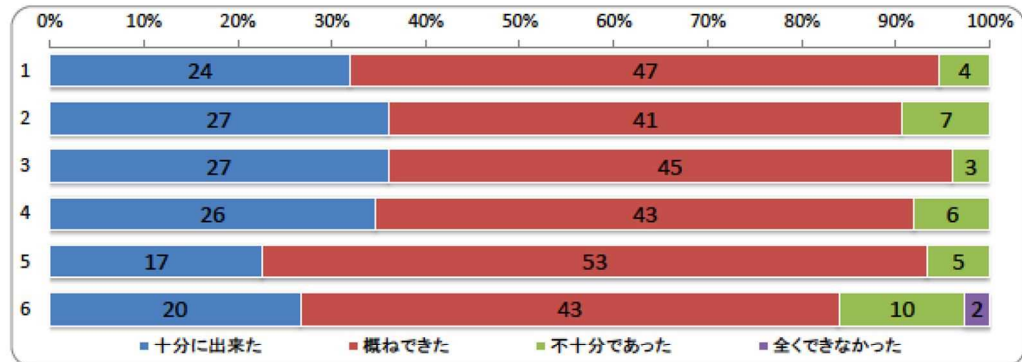
2 研究の遂行と発表に関する倫理的対応の指導を受けましたか

3 論文や参考資料を用いる環境は整備されていましたか

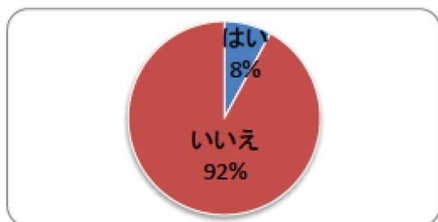
4 効率的、効果的な研究を用いる環境は整備されていましたか

5 研究開発に必要な考え方を修得できましたか

6 論文作成を自ら行うための指導は受けましたか

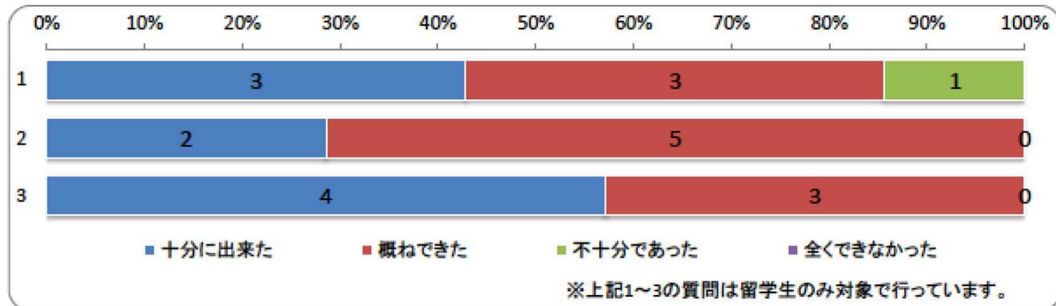


7 個人的な理由以外で研究を長期にわたって中断せざるを得ないことはありましたか



以下は正課・課外における英語でのコミュニケーションに関する質問です。各質問にお答えください。

- 1 あなたの指導を担当する教員や研究室のスタッフの英語能力に満足していますか。
- 2 英語もしくはあなたの母国語によって学習や研究、滞在に関する十分な情報を得ることができていますか？
- 3 英語で教えてもらう授業に満足していますか。



### 自由記載

特に良かった点をお聞かせください

- 社会人学生という立場ですが、時間を合わせてくれてミーティングを行って下さったこと
- 自分の論文作成において、よい指導をしていただいた
- 疫学研究のフィールドを学び、解析も実践することが出来た
- シラバスで案内されている以外のことも教わることが出来た
- 視野を広げることが出来た
- 自由に研究をさせて頂いております
- 社会人博士ということで、どうしても自発的行動がほとんどになってしまう。
- 知りたかった知識がある程度得られた
- 質問しやすい
- Unrestricted availability of experiential reagents
- Easy access to references, reagent and assay needed
- Get new skills and knowledges which are useful for future research and development
- easy to considers every experiment
- We are allowed for critical thinking by exercises

改善すべき点をお聞かせください

- 臨床との兼ね合いで中々論文作成が出来ない
- 特定の先生の研究指導が理不尽で圧迫過ぎる。報告日が近づくと眠れなくなる
- トップダウン形式の指示が多く、指導を受けている気がしない。研究のスタンダードな進め方ではなく持論を展開される。最低限の教育的態度を身につけて欲しい
- 一緒になって研究・相談できる同期・同僚が少ない
- 方針の指導を受ける回数が少ない
- There should be enough exposure in international Conferences performed outside Japan
- Increasing laboratory Equipments
- Everyone who are not involved in theory, also included in authors
- 

医歯学総合研究科における英語でのコミュニケーションについてご意見があればお知らせください。

※この質問は留学生のみ対象で行っています。

- Not every person/in staff Kagoshima University can speak in English  
I hope in the future there will be more staff/person who can speak English so it will be easier to communicate.
- everybody should improve their English, at least to daily talk.
- It is satisfactory, But students office staffs in sakuragaoka very poor at English.

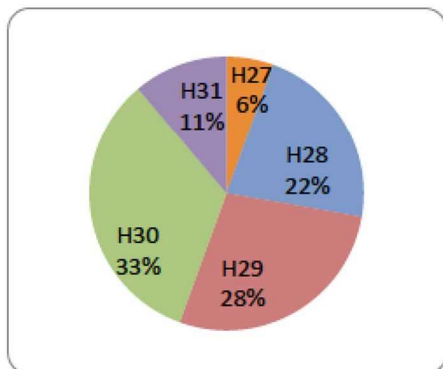
その他、自由に感想をお書きください

- 指導者の指導力・教育力の向上を目的とした研修を継続的に実施し、教育レベルの質の向上をお願いいたします。
- 共同実験室の器機のメンテナンスはされているか疑問に感じる
- Nature Genetics など重要な論文をインターネットで取得できないのは問題だと思う

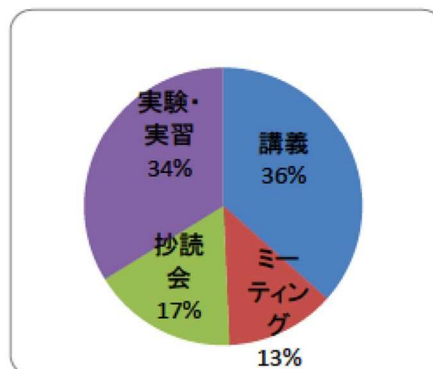
### 研究指導に係る学生アンケート(2020年 2月実施)

アンケート回収枚数(歯系) 36 枚(内、留学生2名)

2 入学年度はいつですか



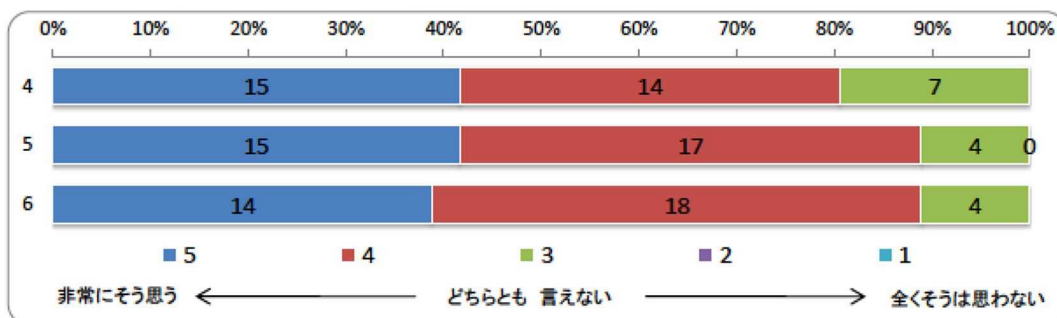
3 あなたが受講している授業科目の授業形態は、次のうちのどれですか(複数回答可)



4 あなたが受講している授業科目はあなたの研究に有用な内容でしたか

5 教員はあなたの質問を促し、適切に対応しましたか

6 教員は発展的な学習、研究を支援しましたか



#### 実験科目(研究指導)

1 直面している問題を解決するために常に教員と討議し、指導を受けることはできましたか

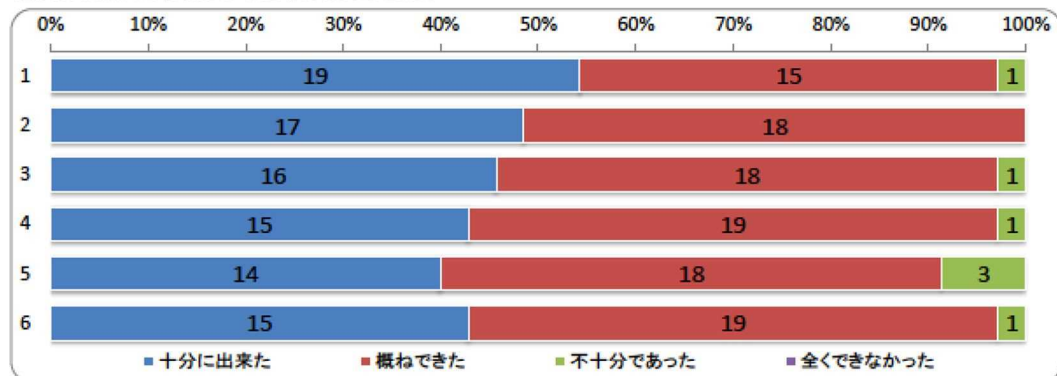
2 研究の遂行と発表に関する倫理的対応の指導を受けましたか

3 論文や参考資料を用いる環境は整備されていましたか

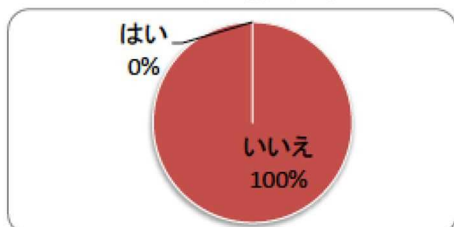
4 効率的、効果的な研究を用いる環境は整備されていましたか

5 研究開発に必要な考え方を修得できましたか

6 論文作成を自ら行うための指導は受けましたか



7 個人的な理由以外で研究を長年にわたって中断せざるを得ないことはありましたか



### 自由記載

特に良かった点をお聞かせください

- 指導を受ける機会が多かった
- 頻りに研究内容の話し合いができた
- 研究に関しては、そのために必要な知識を惜しみなく与えてくれるような環境と雰囲気を感じた
- 生命医療倫理学ではメディアでの受講ができるようになり、当科は火曜にロングオベ・自身の当直で呼び出されることが多かったため非常に助かった
- 分かりやすく指導してもらえた
- Form experimental easy
- The faculty member support what I am doing for research, and we have simultaneously discussion about the progress of the research.
- Other faculty member who rarely related to my experiment whom I took the class are also very welcome to discuss about experimental conclusions/problems

改善すべき点をお聞かせください

- So far so good
- Once I found it difficult to find english textbook regarding experiment(PCR) in the KAGOSHIMA SAKURAGAOKA campus library. I hope in the future maybe they can add more English books(textbooks) of journal

歯学部総合研究科における英語でのコミュニケーションについてご意見があればお知らせください。

※この質問は留学生のみ対象で行っています。

- For foreign students, teach`s by English. That`s a good point.
- Despite I also trying my best to learn to sommunicate in Japanese. I guess in my opinion english communication should/must be improved. Based on my experience and others International students—regarding administrative need we find it difficult to communicate. (like credit plannings, scholarship, etc)

その他、自由に感想をお書きください

- 必要な考え方の習得が不十分であるため、今後修得できるように頑張りたい。
- We have and always try to be able to communicate in Japanese, but sometimes this does not happen otherwise, so It will read to miscommunication & misunderstanding. I hope KAGOSHIMA UNIVERCITY will improve the ability of communicating in English better.

#### 4. e-learning 講習会

日時	2019年7月18日(木) 16:00~17:00
テーマ	Manaba 利用講習会
講師	森 裕生 (鹿児島大学高等教育研究開発センター 助教)
主催	医学部 FD 委員会医学科部会
共催	医歯学総合研究科 FD 委員会
会場	共通教育棟6階 マルチメディア情報演習室
参加者	25名 (教員20名、事務職員5名)
概要	Manaba の利用方法の講習会を共催した。 (1) manaba と respon の概要の説明 (2) manaba と respon を活用した授業事例の紹介 (3) respon の回答を体験 (4) respon の設定を体験 (5) 質疑応答

#### 5. おわりに

医歯学総合研究科の教職員は学部教育に深く関わっていることから、研究科のFD活動は大学院教育の支援を通して、また医学部、歯学部FD委員会と連携して、教育への関心と理解を促し、教育技能を向上する事を目的としている。昨年度の目標であった国際化の支援が、本年度の授業評価アンケートの改善につながっている可能性もあり、継続した調査と評価結果の活用を推進していくことが重要である。

FD活動に参加、支援いただいた多くの教職員、学生の皆様に感謝いたします。



臨床心理学研究科



## 臨床心理学研究科 令和元年度FD活動報告

臨床心理学研究科FD委員長 大石 英史

臨床心理学研究科FD委員 金坂 弥起

### 1. はじめに

臨床心理学研究科FD委員会では、FD活動の強化を目的に平成27年度から定例の研究科FD会議（FD研修会を含む）をほぼ毎月行うように体制を整えた。また、本年度は、より実践的なFD活動実施に向けて毎月テーマを決め、授業改善のための相互研修だけでなく、学習管理システム **manaba** 導入に向けての研修会や奄美大島から外部講師を招聘しての研修を開催するなど、FD活動のさらなる充実を図った。

以下に、活動全体の概要を具体的に報告する。

### 2. 全教員による研究科FD会議及びFD研修会の実施

上に示したように、平成27年度から定例のFD会議（FD研修会を含む）を、ほぼ毎月行うべく体制を整え、より実践的なFD活動実施に向けてテーマを定め、さらなるFD活動の充実を図った。

まず、教育の質を向上させるための組織的な取組みとして、本研究科は他の臨床心理士養成大学院と比べ、臨床心理実習教育の充実に力点を置いているが、本年度の授業評価においては、実習科目の評価方法に対する学生からの意見が見られたことを受け、臨床心理実習科目の教育方法の改善及び評価方法等に関する検討を継続して行った。

次に、FD研修会については、第4回FD会議では、次年度の本研究科への **manaba** 導入に向けて、鹿児島大学高等教育研究開発センター助教の森裕生氏に、その操作方法についてわかりやすく解説していただいた。このシステムを導入することで、本研究科の教育の中核とも言える臨床実習に関する学生の振り返りレポート等を一括管理し、今後個々の学生のポートフォリオとしても活用していけるシステム上の基盤整備を図った。

また、第5回FD会議では、南西諸島との学術的な交流と連携を深めるために、奄美大島の奄美地区障がい者等基幹相談支援センターから2名の講師を招聘し、「奄美地区の現状と障害福祉について」と題する講話を通して、奄美の歴史的理解と障害者支援の現状と課題について認識を深めることができた。これによって、西南諸島との今後の共同研究や支援連携に関する基盤づくりを行うと共に、その必要性についての認識を深めることができた。

さらに、第6回FD会議では、研究科内の実務家教員でありまたFD委員でもある金坂准教授から、臨床心理実習の評価についての話題提供を踏まえた研修会が開催された。

加えて、本年度3月に開催された第10回FD会議では、2018年5月に公布された著作権法の一部改正を受けて、今後、教育教材の利用法がどう変わっていくのかについて、大石FD委員長よりe-Learningにおける著作権等についての情報提供が行われ、全教員でそ

の情報を共有した。

なお、令和元年度に実施されたFD会議及びFD研修会の日程とテーマについては、表1に示す通りである。

表1. 令和元年度FD活動実績

	年 月 日	内 容
第1回FD会議	平成31年4月17日(水) 13:30~14:00	1. 平成31年度FD会議日程 2. 平成31年度FD活動計画 3. 平成31年年度FD活動予算要求
第2回FD会議	令和元年5月15日(水) 10:45~11:30	1. 令和元年度授業評価アンケート項目の検討 2. 学習管理システムmanabaの活用
第3回FD会議	令和元年6月19日(水) 10:45~11:30	令和元年度前期第1回授業評価アンケート結果報告と意見交換
第4回FD会議	令和元年7月17日(水) 13:30~15:00	学習管理システムmanaba活用 に向けての研修会
第5回FD会議	令和元年8月7日(水) 13:30~15:30	奄美大島から講師招聘によるFD研修会 「奄美地区の現状と障害福祉について」
第6回FD会議	令和元年9月25日(水) 13:30~15:00	1. 実務家教員向けFD研修会 2. 令和元年度前期第2回授業評価アンケート結果報告と意見交換 3. 令和元年度前期フォローアップセッションの振り返りと意見交換(実習委員会との合同開催)
第7回FD会議	令和元年10月16日(水) 10:45~11:15	1. 来年度nanabaの導入について 2. 授業デザインワークショップ報告と課題の共有
第8回FD会議	令和元年11月20日(水) 10:30~11:00	1. 令和元年度後期第1回授業評価アンケート結果報告と意見交換 2. コンプライアンスに関する研修会報告

第9回FD会議	令和2年2月26日(水) 13:30~14:30	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 令和元年度後期第2回授業評価アンケート結果報告と意見交換</li> <li>2. 令和元年度後期フォローアップセッションの振り返りと意見交換(実習委員会との合同開催)</li> <li>3. 本年度FD活動の振り返りと来年度に向けての課題</li> </ol>
第10回FD会議	令和2年3月18日(水) 13:30~14:30	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. e-Learningにおける著作権等についての情報交換</li> <li>2. FDに関する全学の動向と本研究科の今後のFD活動について</li> </ol>

※ は研究科内研修会

※定例会議に位置づけたことにより、教員の出席率については第4回FD会議の87.5%以外は全て100%であった。

### 3. 授業評価アンケート及びフォローアップセッション実施に対する検討

#### (1) 実施対象科目と実施時期

学生による授業評価アンケートは、本研究科開講科目の全て(全ての講義科目、演習科目、実習科目)が対象となり、前期は6月初旬と7月中旬の2回、後期は11月中旬と1月中旬の2回、毎年計4回のアンケートが実施された。なお、各セメスター2回目のアンケートは、その評価結果に対する授業改善報告を最終回には必ず学生に行えるようにするために本年度も最終の授業回までに(14回目を目途に)行った。

#### (2) 評価項目

評価項目は、学生自身の理解度評価や授業内容に関する評価、ならびに自由記述で行った。具体的には以下の通りである。

<講義科目>

1. あなたは本講義科目を熱心に受講しましたか。
2. 本講義科目のテキスト・資料等は適切でしたか。  
(テキスト・資料等を使用した場合のみ回答してください)。
3. 本講義科目の内容は理解できましたか。
4. 本講義科目を通して臨床心理学の理論に興味が増しましたか。
5. 本講義科目の内容に満足していますか。
6. 本講義科目を総合的に5段階で評価してください。
7. 本講義科目に対するご意見を自由に書いてください。

<演習科目>

1. あなたは本演習科目を熱心に受講しましたか。
2. 本演習科目の内容は理解できましたか。
3. 本演習科目の内容に満足していますか。
4. 本演習科目を通して講義(理論)の理解や実習体験の理解につながりましたか。
5. 本演習科目を通して臨床心理学に興味が増しましたか。
6. 本演習科目を総合的に5段階で評価してください。
7. 本演習科目に対するご意見を自由に書いてください。

<実習科目>

1. あなたは本実習科目に熱心に取り組みましたか
2. 本実習科目での実習体験を通して臨床心理学や臨床業務についてのイメージが増しましたか。
3. 本実習科目で講義や演習で学んだことが役に立ちましたか。
4. 本実習科目での実習体験に満足していますか。
5. 本実習科目を総合的に5段階で評価してください。
6. 本実習科目に対するご意見を自由に書いてください。

(3) 結果

結果は以下の通りであった。

表2. 前期第1～2回目の講義科目における授業評価  
(集中講義形式は1回目のみ実施。1回目：2科目平均評価点，2回目：1科目評価点)

	第1回目			第2回目		
	最高	最低	平均	最高	最低	平均
1. あなたは本講義科目を熱心に受講しましたか	5.0	3.0	4.2	5.0	3.0	4.4
2. 本講義科目のテキスト・資料等は適切でしたか	5.0	3.0	4.1	5.0	3.0	4.2
3. 本講義科目の内容は理解できましたか	5.0	3.0	4.0	5.0	3.0	4.2
4. 本講義科目を通して臨床心理学の理論に興味が増しましたか	5.0	3.0	3.9	5.0	3.0	4.5
5. 本講義科目の内容に満足していますか	5.0	3.0	4.1	5.0	3.0	4.4
6. 本講義科目を総合的に5段階で評価してください	5.0	3.0	4.0	5.0	3.0	4.5

(科目名)臨床心理学原論／コミュニティ心理学特論

表3. 前期第1～2回目の演習科目における授業評価（8科目平均評価点）

	第1回目			第2回目		
	最高	最低	平均	最高	最低	平均
1. あなたは本演習科目を熱心に受講しましたか	5.0	3.0	4.4	5.0	3.5	4.7
2. 本演習科目の内容は理解できましたか	5.0	3.4	4.5	5.0	3.5	4.6
3. 本演習科目の内容に満足していますか	5.0	3.4	4.5	5.0	3.4	4.7
4. 本演習科目を通して講義(理論)の理解や実習体験の理解につながりましたか	5.0	3.1	4.5	5.0	3.6	4.7
5. 本演習科目を通して臨床心理学に興味が増しましたか	5.0	3.3	4.5	5.0	3.6	4.7
6. 本演習科目を総合的に5段階で評価してください	5.0	3.3	4.5	5.0	3.6	4.8

(科目名)臨床心理査定演習Ⅰ／臨床心理面接演習Ⅰ／臨床心理関連行政論／臨床心理事例研究演習Ⅰ／総合的事例研究演習Ⅰ／学校心理臨床論／福祉心理臨床論／成人・老年期心理臨床論

表4. 前期第1～2回目の学内実習科目における授業評価（4科目平均評価点）

	第1回目			第2回目		
	最高	最低	平均	最高	最低	平均
1. あなたは本実習科目に熱心に取り組みましたか	5.0	3.3	4.6	5.0	3.5	4.7
2. 本実習科目での実習体験を通して臨床心理学や臨床業務についてのイメージが増しましたか	5.0	3.0	4.7	5.0	3.5	4.8
3. 本実習科目で講義や演習で学んだことが役に立ちましたか	5.0	3.0	4.6	5.0	3.5	4.8
4. 本実習科目での実習体験に満足していますか	5.0	3.3	4.6	5.0	3.3	4.7
5. 本実習科目を総合的に5段階で評価してください	5.0	3.5	4.7	5.0	3.0	4.7

(科目名)臨床心理査定・面接実習Ⅰ／臨床心理査定・面接実習Ⅲ／臨床心理実践研究Ⅰ／臨床心理実践研究Ⅲ

表5. 前期第1～2回目の学外実習科目における授業評価（2科目平均評価点）

	第1回目			第2回目		
	最高	最低	平均	最高	最低	平均
1. あなたは本実習科目に熱心に取り組みましたか				5.0	3.5	4.7
2. 本実習科目での実習体験を通して臨床心理学や臨床業務についてのイメージが増しましたか				5.0	3.5	4.8
3. 本実習科目で講義や演習で学んだことが役に立ちましたか	(実施なし)			5.0	3.5	4.8

4. 本実習科目での実習体験に満足していますか				5.0	3.5	4.8
5. 本実習科目を総合的に5段階で評価してください				5.0	3.5	4.8

(科目名)臨床心理地域援助実習Ⅰ／臨床心理地域援助実習Ⅲ

表6. 後期第1～2回目の講義科目における授業評価（2科目平均評価点）

	第1回目			第2回目		
	最高	最低	平均	最高	最低	平均
1. あなたは本講義科目を熱心に受講しましたか	5.0	4.0	4.5	5.0	3.5	4.5
2. 本講義科目のテキスト・資料等は適切でしたか	5.0	3.5	4.6	5.0	3.5	4.5
3. 本講義科目の内容は理解できましたか	5.0	3.5	4.6	5.0	3.5	4.3
4. 本講義科目を通して臨床心理学の理論に興味が増しましたか	5.0	3.5	4.6	5.0	3.5	4.7
5. 本講義科目の内容に満足していますか	5.0	3.5	4.6	5.0	4.0	4.7
6. 本講義科目を総合的に5段階で評価してください	5.0	3.5	4.5	5.0	4.0	4.6

(科目名)臨床心理面接学原論／ストレスマネジメント論

表7. 後期第1～2回目の演習科目における授業評価

(集中講義形式は1回目のみ実施。1回目：6科目平均評価点，2回目：5科目平均評価点)

	第1回目			第2回目		
	最高	最低	平均	最高	最低	平均
1. あなたは本演習科目を熱心に受講しましたか	5.0	3.3	4.5	5.0	3.2	4.6
2. 本演習科目の内容は理解できましたか	5.0	3.3	4.4	5.0	3.2	4.4
3. 本演習科目の内容に満足していますか	5.0	3.3	4.4	5.0	3.2	4.5
4. 本演習科目を通して講義(理論)の理解や実習体験の理解につながりましたか	5.0	3.3	4.4	5.0	3.2	4.6
5. 本演習科目を通して臨床心理学に興味が増しましたか	5.0	3.3	4.5	5.0	3.2	4.6
6. 本演習科目を総合的に5段階で評価してください	5.0	3.3	4.5	5.0	3.2	4.5

(科目名)臨床心理査定演習Ⅱ／臨床心理面接演習Ⅱ／臨床心理事例研究演習Ⅱ／総合的事例研究演習Ⅱ／青年期心理臨床論／エスノグラフィック心理臨床論

表8. 後期第1～2回目の学内実習科目における授業評価（4科目平均評価点）

	第1回目			第2回目		
	最高	最低	平均	最高	最低	平均

1. あなたは本実習科目に熱心に取り組みましたか	5.0	3.5	4.7	5.0	3.5	4.6
2. 本実習科目での実習体験を通して臨床心理学や臨床業務についてのイメージが増しましたか	5.0	3.5	4.7	5.0	3.5	4.7
3. 本実習科目で講義や演習で学んだことが役に立ちましたか	5.0	3.5	4.7	5.0	3.5	4.6
4. 本実習科目での実習体験に満足していますか	5.0	3.3	4.6	5.0	3.5	4.6
5. 本実習科目を総合的に5段階で評価してください	5.0	3.5	4.7	5.0	3.5	4.7

(科目名)臨床心理査定・面接実習Ⅱ／臨床心理査定・面接実習Ⅳ／臨床心理実践研究Ⅱ／  
臨床心理実践研究Ⅳ

表9. 後期第1～2回目の学外実習科目における授業評価（2科目平均評価点）

	第1回目			第2回目		
	最高	最低	平均	最高	最低	平均
1. あなたは本実習科目に熱心に取り組みましたか				5.0	3.5	4.7
2. 本実習科目での実習体験を通して臨床心理学や臨床業務についてのイメージが増しましたか				5.0	3.5	4.6
3. 本実習科目で講義や演習で学んだことが役に立ちましたか	(実施なし)			5.0	3.5	4.6
4. 本実習科目での実習体験に満足していますか				5.0	3.5	4.6
5. 本実習科目を総合的に5段階で評価してください				5.0	3.5	4.6

(科目名)臨床心理地域援助実習Ⅱ／臨床心理地域援助実習Ⅳ

(4) 集計結果のフィードバックと授業評価報告書の提出及び授業改善に向けた組織的対応  
 学生による授業評価結果の取扱いについては、本年度も匿名性が担保された状態で各担当教員に集計結果がフィードバックされ、各担当教員は集計結果の確認後に授業に対する自己評価と照合したうえで、改善方向及び改善策を含めた授業評価報告書の作成を行った。  
 次いで、該当月の教授会にて全教員でアンケート結果に関する報告を行うことに加え、FD会議では教育内容及び方法の改善について検討された。特に、自由記述欄での意見を含めた授業評価結果については全教員による検討を行い、学生の教育ニーズに応じた授業科目の内容検討及び改善について協議するなど、ファカルティ・ディベロップメントに活かすことができた。

(5) 臨床心理学研究科独自の取組みとしてのフォローアップセッション

本研究科では、専門職大学院における臨床心理実習の評価方法として、平成20年度より、九州大学との共同による専門職GPとして「臨床心理実習における客観的評価の方法の構築」

と題する臨床心理実習到達度チェックシステムを導入し、各セメスターにおいて臨床心理実習の客観的評価を実施してきたが、これらの評価システムは学生や教職員の負担が大きかったため、平成 23 年度～平成 25 年度の間中断された。しかしながら、臨床心理実習において、学生が主体的に到達度評価を行い、かつ教員が学生に対して適切なフィードバックを行える形での教育方法の実践は、実務実習教育上やはり重要であることが再確認されたことから、平成 26 年度より臨床心理実習到達度チェックシステムの中から、学生が学内外実習体験を指導教員と共有することを目的としたフォローアップセッションの部分が再開されることとなった。本年度も、より客観的な臨床心理実習評価の実現とそれを反映した教育方法の改善を目指し継続された。

なお、この試みは臨床心理実習科目の GPA 導入を視野に入れた新たな評価方法の構築可能性を検討することを目的としていたこともあり、これまで学生にもセルフモニタリングの機会としてポートフォリオの作成を義務付けていたが、こうした作業自体に負担感を感じている学生もいるため、平成 29 年度からポートフォリオ作成については、各臨床ゼミの方針に委ねることとなった。そのため、本年度も統計的な数値化は行わず、質的な側面を重視した形のフォローアップセッションを実施した。

学生たちは自分の主体的な到達度評価を行うための目標設定、例えば、「今期の目標」、「成長した点」、「課題」、「フォローアップセッションでの気づき」を自身で記入するとともに、実習終了後にはその到達度をポートフォリオとして記入することで、2 年間の成長を自己点検する作業を行っている。このような形態による指導教員とのフォローアップセッションを通して、学生たちは相互的にその教育効果を確認し、自身の臨床力を向上させていくことが期待される。このような見地から、ポートフォリオ作成を導入することの意義については、本研究科の組織的な F D 活動の取組みの一環として、今後も継続的に検討を重ねていくことが重要である。

#### 4. 研究科 F D 研修会の開催とその意義

本年度の本研究科における F D 活動に関する新たな取り組みとして、以下、3 つの研修会を開催した。

第一は、鹿児島大学学習管理システム manaba 導入に向けての研修会である。これまで大学院臨床心理学研究科は、臨床心理分野専門職学位課程として、高度専門職業人である臨床心理士養成教育の要である臨床心理実習の充実に努め、先進的かつ独創的な教育改善を実践してきた。その教育の中で学内・学外の臨床実習は、教育の中核となる領域である。

この臨床実習を学生一人一人が自己の経験を丁寧に振り返り、今後の支援活動に活かしていくことは、臨床心理実践において必要不可欠な学習過程である。このプロセスを教員が理解し、学びのサポートを行っていくことは重要な教育活動である。鹿児島大学学習管理システム manaba は、これら学生一人一人の臨床実習の経験を教育としてより適切に評価しつつ展開していくことを可能にするシステムとして活用することができる。実習後に学



生たちが提出するレポート等を学年ごとに管理し、これまで本研究科が独自に行ってきたフォローアップセッションとも連動させながら教育に活かしていくことが期待できる。

そこで、本研究科では次年度からの manaba 導入に向けて、鹿児島大学高等教育研究開発センター助教の森裕生氏に、その操作方法についてわかりやすく解説していただいた。この研修によって、本研究科の教育の中核とも言える臨床実習に関する学生の振り返りレポート等を一括管理し、今後個々の学生のポートフォリオとしても活用していけるシステム上の基盤づくりの第一歩を踏み出すことができた。

第二は、奄美地区から講師を招聘しての研修会である。臨床心理士という高度専門職業人の養成に際して、教育の中核であると同時に地域貢献の一環として学内実習施設である附設心理臨床相談室がある。そこでは教育上必須である行動観察システム等を用いた個別指導や集団指導を行い、年間延べ 1,200 件以上の相談件数を受理し、成果の一部は相談室紀要にて報告している。併行して、平成 22 年度からは、地域支援プロジェクト研究により、地域と大学を双方向に結ぶモバイル情報コミュニケーションシステム (MICT: Mobile Information and Communication Technologies: 携帯情報伝達技術) を導入して、デリバリー型地域支援教育の開発を推進してきており、今後は、地理的事情から心理臨床相談室を直接利用しにくく、種々の支援も得にくい南西諸島地域の自治体や団体等と協同した心理支援 (テレビ会議システムを活用した各種コンサルテーションや事例研究会等) に関する研究と実践を想定・計画している。

上記の設備を活用した活動は、鹿児島大学の中期目標における【A2】「地域課題の解決に取り組むことのできる人材を育成する」【A9】「地域特有の課題を解決する研究等を推進する」【A13】「地域を志向した教育・研究を推進することにより、地域社会の発展に貢献する」という目標と合致するものであり、中期計画【B23】の「地域社会の課題解決につながる」支援や【B27】「自治体・企業との交流や共同・受託研究等を通じて地域社会に還元する」に向けた活動に該当するものである。

そこで、本研究科では令和元年 8 月 7 日 (水) に、臨床心理学研究科の FD 研修会として、奄美地区障害者基幹相談支援センター (ぴあリンク奄美) のセンター長 (精神保健福祉士) 大津敬先生と、相談支援専門員の福崎伸悟先生を招聘し、「奄美地区の現状と障害福祉について」と題する講話をいただいた。その後、本研究科教員より、支援の現状等についての質情報交換と質疑応答が行われた。特に奄美の環境と歴史についての講話の中で、行政としては鹿児島県でありながら琉球文化を持つ奄美群島の背景や奄美地区地域自立支援協議会の取組みについて詳しい情報提供をいただいた。離島という環境の中で、臨床心理士等の専門職が地域との協働で何を期待されており、それに持続可能な形で応えていく

ためにはどうしたら良いかといったことについて深く考えさせられる研修会となった。

以下2枚の写真は、当日の研修会の様子である。



第三は、9月25日（水）に開催された実務家教員向け研修会である。中央教育審議会大学分科会大学院部会の専門職大学院ワーキング（2016）では、ファカルティ・ディベロップメントによって実務家教員と研究者教員の連携を図るための取組みが適切に実施されているかを認証評価において確認することが必要であるとされている。また、「2040年を見据えた大学院のあるべき姿（審議まとめ）」概要の中では、実務家教員用のFDの開発・実施等、実務家教員の最新の情報や最先端の技術等を踏まえた教育の実施状況を確認するための教育課程連携協議会の活用について記載されている。このような将来的課題を踏まえて、本研究科では高度専門職業人育成の中核とも言える臨床実習の評価の在り方について研修の機会を設けた。具体的には、金坂FD委員より、この点に関する学会資料に基づき話題提供がなされた。(1)モデル・コアカリキュラム（公認心理師には専門家養成のためのモデル・コアカリキュラムがないこと）、(2)プロフェッショナリズム（医学教育における神殿モデル、アンプロフェッショナルな学生の事例についての情報提供）、(3)公認心理師法における心理実践実習（心理に関する支援を要する者等を対象とした担当ケース）、(4)大学院に

おける「標準シラバス」(2020年月上旬までに日本心理学会が先導して「標準シラバス」を公開していく予定であること)等の内容について解説がなされた。

その後、これらの内容について教員全体で意見交換を行った。その中で、「公認心理士師の試験対策のみが重視され過ぎると心理学教育の広がりや深まりがなくなってくるのではないか」、「プロフェッショナルに向いていない学生のケースはどのように改善されたのかが知りたい」、「実習で単位を認められなかった学生をどう支援・指導していくのか」、「臨床心理実習は内容が曖昧で多岐に渡っているため評価が困難である」、「教員だけではなく患者からの評価を指標に加えることの是非について」など多くの意見が出され、活発な議論が行われた。当研究科における臨床実習を教育としてどのように展開し、それを評価していくのか、心理学教育のモデルをどう作っていくかが今後の重要な課題であるとの共通認識が図られた。

以上の研修会は、いずれも高度専門職業人である臨床心理士を養成する専門職大学院における重要な課題に対応するものであり、今後の教育方法のあり方に対する指針を教員間で共有する良い機会となった。

本年度、本研究科が独自に実施した外部講師の招聘および研究科内教員によるFD研修会は、表10に示す通りである。

表10. 令和元年度に実施された研究科FD研修会

<p>(1) 学習管理システム manaba 導入に向けての研修会            日時：令和元年 7月 17日 (水) 13:30~15:00            場所：共通教育棟 1号館 3階 137 教室            講師：鹿児島大学高等教育研究開発センター助教 森裕生氏            出席者：本研究科教員 (宇都宮、稲谷、久保、吉村、中村、金坂、大石)</p>
<p>(2) 奄美地区から講師を招聘しての研修会            日時：令和元年 8月 7日 (水) 13:30~15:30            場所：総合教育研究棟 4階 カンファレンスルーム            講師：奄美地区障がい者等基幹相談支援センター            センター長 (精神保健福祉士) 大津 敬 先生            相談支援専門員 福崎 伸悟 先生            講演 「奄美地区の現状と障害福祉について」            出席者：本研究科教員 (宇都宮、稲谷、久保、吉村、高橋、中村、金坂、大石)</p>
<p>(3) 実務家教員向け研修会            日時：令和元年 9月 25日 (水) 13:30~            場所：法文学部 1号館 1階 小会議室</p>

講師：臨床心理学研究科准教授 金坂弥起氏

「臨床実習の評価のあり方について」

出席者：本研究科教員（宇都宮、稲谷、久保、吉村、高橋、中村、金坂、大石）

## 5. 全学個人情報保護管理等の関する研修会への参加と情報共有

本学では令和元年年 11 月 1 日（金）、令和元年度個人情報保護管理等に関する研修会が開催され、本研究科長の宇都宮敦浩教授とFD委員長の大石教授が参加した。研修内容は、情報セキュリティ、個人情報保護管理、コンプライアンスに関する講演であった。その後、11 月 20 日（水）の本研究科FD会議において、研修内容を報告し、教員全体で共有することによって、個人情報保護、文書管理、コンプライアンス等に関する意識の向上が図られた。

## 6. 特筆すべき取組みや改善事例

### 1) 研究科内FD研修会の充実

FD活動に関しては、平成 26 年度までの活動をさらに組織的な取組みとして充実、強化させることを目的に、平成 27 年度から研究科の定例会議として位置づけ、継続的に研究科FD会議を行うよう体制を整え、本年度は計 10 回のFD会議を開催した。また、定例会議として位置づけたことにより、参加率は第 4 回FD会議の 87.5%以外はすべて 100%であった。

本年度、本研究科におけるFD活動に関する新たな取組みとして、以下、3つの研修会を開催した。

第一は、鹿児島大学学習管理システム manaba 導入に向けての研修会である。この研修によって、本研究科の教育の中核とも言える臨床実習に関する学生の振り返りレポート等を一括管理し、今後個々の学生のフォローアップセッションとも連動させたポータルサイトとしても活用していけるシステム上の基盤づくりの第一歩を踏み出すことができた。

第二は、奄美地区から講師を招聘しての研修会である。本研究科では令和元年 8 月 7 日（水）に、臨床心理学研究科のFD研修会として、奄美地区障害者基幹相談支援センター（ぴあリンク奄美）のセンター長（精神保健福祉士）大津敬先生と、相談支援専門員の福崎伸悟先生を招聘し、「奄美地区の現状と障害福祉について」と題する講話をいただいた。その後、本研究科教員より、支援の現状等についての質情報交換と質疑応答が行われた。特に奄美の環境と歴史についての講話の中で、行政としては鹿児島県でありながら琉球文化を持つ奄美群島の背景や奄美地区地域自立支援協議会の取組みについて詳しい情報提供をいただいた。離島という環境の中で、臨床心理士等の専門職が地域との協働で何を期待されており、それに持続可能な形で応えていくためにはどうしたら良いかといったことについて深く考えさせられる研修会となった。これは、鹿児島大学の中期目標における「地域課題の解決に取り組むことのできる人材を育成する」、「地域特有の課題を解決する研究

等を推進する」、「地域を志向した教育・研究を推進することにより、地域社会の発展に貢献する」という目標と合致するものであり、中期計画の「地域社会の課題解決につながる」支援や「自治体・企業との交流や共同・受託研究等を通じて地域社会に還元する」に向けた活動に該当するものである。

第三は、9月25日（水）に開催された実務家教員向け研修会である。中央教育審議会大学分科会大学院部会の専門職大学院ワーキング（2016）では、ファカルティ・ディベロップメントによって実務家教員と研究者教員の連携を図るための取り組みが適切に実施されているかを認証評価において確認することとなっている。また、「2040年を見据えた大学院のあるべき姿（審議まとめ）」概要の中では、実務家教員用のFDの開発・実施等、実務家教員の最新の情報や最先端の技術等を踏まえた教育の実施状況を確認するための教育課程連携協議会の活用について記載されている。このような将来的課題を踏まえて、本研究科では高度専門職業人育成の中核とも言える臨床実習の評価の在り方について研修の機会を設けた。

これらはいずれも高度専門職業人である臨床心理士を養成する大学院における重要な課題に対応するものである。

## 2) 授業評価アンケート結果を踏まえた授業改善に向けての工夫

本年度も引き続き、学生の授業評価アンケート結果での意見を授業改善に活かすために、本年度も各semester第1回目のアンケートを7回目の授業で、第2回目のアンケートを14回目の授業において実施し、翌回の第8回目と第15回目には、学生の意見に対するフィードバックと改善への工夫を各教員が授業内で行うことを組織的な取り組みとして実施した。その結果、学生たちは自分たちの意見が教員に伝わる手応えを感じ取ることができるとともに、改めて教員の授業の進め方の意図を理解できたとの感想を得ることができた。

また、学生の授業評価アンケートの活用に関する具体的な改善策としては、アンケート結果を授業担当教員にフィードバックし、授業評価報告書を提出することだけに留めず、該当月の教授会にて全教員でアンケート結果に関する検討を行うことで、教育内容及び方法の改善の検討をタイムリーに行うことができた。さらに、自由記述欄での学生からの意見を含めた授業評価結果については、全教員によるFD会議だけでなく、実習委員会と合同で検討を行い、学生の教育ニーズに応じた授業科目の内容検討および改善へと繋げる努力を行った。

## 3) 臨床ゼミ指導教員によるフォローアップセッションの効果的実施

臨床心理実習をより充実したものにするために、実務家教員による実習指導だけでなく、各臨床ゼミ担当教員による学生個人または集団を対象としたフォローアップセッションを義務化した。これによって、学生の臨床実習に伴う不安が軽減され、充実した学外及び学外実習を行えただけでなく、臨床心理士としてのアイデンティティと実践力の基盤づくり

が可能となったのではないかと考えられる。

また、年度当初に主体的な到達度評価を行うための目標設定と課題を学生各自が明確にし、それをポートフォリオ化した。これによって、専門職大学院に在籍する2年間の自己成長の確認をより効果的に行うことができたものと考えられる。

以上



連合農学研究科

# F D活動報告書

(令和元年度)



鹿児島大学大学院連合農学研究科

令和2年3月



# 大学院連合農学研究科FD活動報告

## 1. はじめに

大学院連合農学研究科は、佐賀大学、琉球大学と鹿児島大学の3大学が連合した農水産学系の博士課程大学院で、高度な専門的能力と豊かな学識をそなえた研究者の養成を目的として、構成大学が連合し、多彩な教員組織を構築して、研究施設及び設備も連合しながら教育研究体制を整えて、社会・世界に貢献する博士人材を養成している。また、社会人並びに外国人留学生を積極的に受け入れ、東アジアにおける農水産学の教育研究の中核となるとともに、農水産業及び地域の発展に寄与することを目的としている。

本研究科は、1988(昭和63年)に設立され、平成19年度宮崎大学の離脱に伴って、平成21年度に4専攻11連合講座を3専攻9連合講座に改組し、単位制導入の改革を行った。平成31年4月1日現在、日本人学生58名、外国人留学生54名、計112名が在籍している。

博士の学位(農学、水産学、学術)は、12単位以上修得の上、学位論文の審査及び最終試験に合格して授与されるが、職業人教育や国際感覚を養うことを意図した人材養成学生支援セミナーや国際農学特別講義などを通じて大学院教育の実質化を目指している。さらに、年に一度、地理的に離れた3構成大学の学生が一堂に会して行う農学特別講義Ⅰ(一般セミナー)の実施や、多地点制御遠隔講義システム(SINET)を用いた授業を行うことで教育方法等の工夫を行っている。特に、SINETによる「農学共通講義(英語)」では、全国6連大から選出された教員(鹿児島連大からは2名選出)による先端研究に関する講義を英語で実施し、学生は、専門知識の習得に加えて、全国6連大の様々な地域の学生と同一の講義を共有し、幅広い視野を持つことができるユニークな教育連携に取り組んでいる。このような連大組織ならではの教育連携をさらに強固にするために、平成29年10月に、全国6連合農学研究科の博士課程学生の教育・研究指導委託に関する覚書を取り交わした。

また、本研究科では、学生1人に対し、主指導教員1人、副指導教員2人の計3人による指導体制をとっており、1年次の学生には「中間報告会」、2年次の学生には「中間発表会」を課し、その達成状況の検証を実施している。

FD活動に関しては、平成19年度に代議委員会のサブ委員会としてFD委員会が設けられ、農学特別講義Ⅰ(一般セミナー)を中心とした授業アンケートや修了生アンケートの集計・解析評価を行い、改善に向けて取り組んでいる。

令和元年度の活動報告では、主に、鹿児島大学郡元キャンパスで開催した農学特別講義Ⅰ(一般セミナー)、人材養成学生支援セミナー、分野別セミナー、修了生・在学生を対象としたアンケート、及びティーチング・アシスタント/リサーチ・アシスタント制度による活動について取りまとめている。

## 2. 「農学特別講義 I (一般セミナー)」

令和元年度鹿児島大学大学院連合農学研究科(博士課程)「農学特別講義(一般セミナー)」が、令和元年11月5日(火)から11月7日(木)までの3日間、鹿児島大学郡元キャンパスで開催された。開講趣旨は、本連合農学研究科に在籍する学生に本学の教育理念に基づき、幅広い専門領域の先端知識に触れるとともに、各学生によるプレゼンテーション、専攻セミナーなどを通じて発表能力、課題探求能力、創造性を養うことにあり、本研究科開設以来、各構成大学の輪番制で継続実施されている。本年度は鹿児島大学農学部が当番校として担当した。内容は、外部より招聘した講師による講義4コマ、2年生による「情報交換セミナー(ポスターセッション)」、1年生による「専攻セミナー(口頭発表)」、交流会および施設見学だった。参加学生数は54名(1年生23名、2年生26名、3年生5名)で、うち海外からの留学生は25名だった。

初日：11月5日(火)

学習交流プラザ2階の学習交流ホールにおいて、14時から受講受付ののち、14時30分に開講された。

総司会と進行は、本講義全体を通じて鹿児島大学農学部坂上潤一代議委員により執り行われた。

開講式では、まず榊井和朗連合農学研究科長による式辞、さらに続いて橋本文雄鹿児島大学農林水産学研究科長(農学部長)の歓迎と励ましの挨拶があった。その後、坂上潤一代議委員から諸日程と注意事項が説明された。

続いて15時30分から17時まで、学習交流ホールにてセミナーAが実施された。講師は鹿児島大学大学院医歯学総合研究科教授の古川龍彦博士で、講義題目は「がん細胞はどのようにできるか?」だった。がん細胞の特徴やその複雑な成長過程を病理学的な視点から平易にかつ専門的な最新の知見をも交えながら興味深く解説され、まだいわゆるがんの危険年齢には遠い若い学生諸君もたいへん熱心に聴講していた。コーディネーターは鹿児島大学水産学部小松正治代議委員。

休憩後17時15分から、学習交流プラザ1階のフードコーナーに移動して、「交流会」が行われた。司会は、鹿児島大学農学部 徳興代議委員が務め、榊井和朗研究科長による挨拶、橋本文雄農林水産学研究科長による乾杯発声、講師の紹介などののち学生・教員が楽しく交流・歓談した。後半には、各構成大学の学生がグループごとに並び、学生ひとりひとりの短いスピーチと集合写真撮影などが行われ、なごやかなひと時を過ごした。19時過ぎに寺田竜太副研究科長の発声による手締めでお開きとなった。



セミナーA 古川先生のご講演



交流会

二日目：11月6日(水)

前日に引き続き、学習交流ホールにおいて、9時から10時30分まで、セミナーBとして、東京農工大学大学院教授、藤井義晴博士による講義「植物由来の生理活性物質の探索と利用」が行われた。先生の膨大な業績に基づく情熱にあふれた講義で、植物の他感物質探索とアレロパシーの不思議で奥深い世界に引き込まれる90分間だった。関連する分野で研究する内外の学生も多く、熱心な質問が出され、充実した議論が続いた。コーディネーターは、琉球大学農学部モハメド アムザド ホサイン代議委員。

続いて、10時40分から12時10分までは、セミナーCとして、農業・食品産業技術総合研究機構・農業環境変動研究センターのデイビッド スプレイグ博士による講義があった。講義題目は「古地図から人工衛星画像まで活用する農業環境の時系列変化の研究」で、同博士は、流麗で平易な英語を中心に時折日本語による懇切な解説も交えながら、日本農業に歴史地理学的な視点で切り込むユニークな研究を紹介した。現在の農地や農業に対する地形や土壌などの自然的条件の影響とともに人々の土地改変の営みの大いなる力に瞠目させられ、地理学研究の面白さや最新の地理情報システムや衛星データの活用技術の一端にも触れることができた。コーディネーターは、鹿児島大学農学部芝山道郎代議委員。

昼食休憩の後、13時10分より、14時40分まで、同ホールにおいてセミナーDが行われた。講師は農業・食品産業技術総合研究機構・畜産研究部門家畜育種繁殖研究領域の谷口雅章博士で、講義は「日本の家畜遺伝資源と在来ブタ遺伝資源に関する国際共同研究」と題して行われた。わが国の主要家畜動物種のウシ、ブタ、ニワトリの主な品種が紹介されたあと、それらの遺伝資源を保全するジーンバンクとその取り組みが説明された。さらに近年、わが国とベトナムとの間で共同研究として取り組まれているベトナム豚の遺伝資源保全と利活用の最新事情が紹介された。ミニブタによるヒト臓器の培養技術の説明や最近の豚コレラなど家畜伝染病の問題なども絡めた内容に、内外の諸学生の関心度も高く熱心な質疑応答があった。コーディネーターは、佐賀大学農学部和田康彦代議委員。

セミナーDの講義終了後、休む間もなく14時50分には、学生・教員はバス2台に分乗して、農学部を出発、市内南栄町の本坊酒造株式会社に移動した。15時30分より16時30分まで同社の見学者用展示施設で、同社係員による焼酎製造に関する説明を聞き、ビデオを視聴した。琉球大学農学部モハメド アムザド ホサイン代議委員および鹿児島大学農学部侯 徳興代議委員が、製造工程の日本語説明を留学生向けに英語で解説した。施設内の試飲コーナーでは、各種の焼酎を自ら飲み比べて鹿児島特産のいも焼酎の特性に関する知見を体得した学生も多かった。その後、再びバスに分乗して、17時に鹿児島大学に帰着、解散した。



セミナーB 藤井先生のご講演



セミナーC スプレイグ先生のご講演



セミナーD 谷口先生のご講演



施設見学（本坊酒造株式会社）

三日目：11月7日（木）

午前8時30分より、農学部農・獣医共通棟で受付開始、9時より101講義室で2年生による「情報交換セミナー」がポスター発表形式で行われた。会場とポスター貼付などは連大事務室により設営・準備されていた。鹿児島大学農学部坂上潤一代議委員による進行手順の説明ののち、発表課題を2グループに分けてそれぞれ30分のコアタイムで研究内容説明と議論が行われた。後半の残り20分間は自由討論時間にあてられた。発表課題数は28だった。なお優秀ポスター発表賞を選定するための全員投票が、3課題番号連記で行われ、重みづけを教員：学生=3：1として集計した。

続いて10時40分より12時10分まで、1年生による「専攻セミナー」がスライドを使った口頭発表形式で行われた。お互いに比較的近いと考えられる専攻分野別に2・3年生を含む9名から18名の4グループに分かれ、それぞれ農・獣医共通棟内の4つの講義室に移動した。1年生は予めパワーポイントによる発表資料を連大事務室に提出しており、各講義室のPCにデータとして保存・準備された。進行・指導は代議委員などの教員により行われ、1人当たり約10分の持ち時間で、自己紹介、研究概要紹介や今後の研究計画などを英語または日本語で発表し、参加学生や教員からの質問やコメントを受けた。

12時15分、農・獣医共通棟1階正面玄関前において、参加者全員による集合写真が撮影された。

12時20分、再び101講義室に全員が集合し、閉講式に先立って、優秀ポスター発表賞の受賞者が発表された。優秀賞（佐賀大学・松村崇志さん）ならびに最優秀賞（鹿児島大学・早坂央希さん）それぞれ1名に、靱井和朗連合農学研究科長より表彰状と副賞が授与された。

続いて閉講式が鹿児島大学農学部坂上潤一代議委員の司会進行により執り行われた。靱井和朗連合農学研究科長の閉講の式辞、橋本文雄農林水産学研究科長による学生への期待と激励の言葉に続いて、学生代表の鹿児島大学中尾祥宏さんがスピーチし、感謝の意と今後の抱負・決意を述べた。最後に次回当番校を代表して、琉球大学農学部大田伊久雄代議委員が、引継ぎと次回セミナーへのお誘いを含む挨拶をして、13時にすべての日程を終えた。



情報交換セミナー



専攻セミナー



最優秀賞表彰



学生代表スピーチ

2019年度 農学特別講義(一般セミナー) 日程表

会場: 鹿児島大学学習交流プラザ等

	9:00	10:00	11:00	12:00	13:00	14:00	15:00	16:00	17:00	18:00
11/5(火)						14:00	14:30	15:15 15:30	17:00 17:15	
						受付 14:00-14:30	開講式・写真撮影 14:30-15:15	休息	セミナーA 「がん細胞ほどのようにできるか？」 フルカワ タカユキ 古川 龍彦 鹿児島大学大学院 医歯学総合研究科 15:30-17:00	休息
11/6(水)	9:00	10:30 10:40	12:10	13:10	14:40 14:50	16:20 16:30	18:00			
	受付 8:30-9:00	セミナーB 「植物由来の生体活性物質の探索と利用」 フジイ ヨシヘ 藤井 純晴 東京農工大学大学院 9:00-10:30	休息 セミナーC 「古地区から人工衛星画像まで活用する農業環境の時系列変化の研究」 デイビッド スプレイ 農業・食品産業技術総合研究機構 農業環境変動研究センター 10:40-12:10	昼食 12:10-13:10	セミナーD 「日本の家畜遺伝資源と在来ブタ遺伝資源に関する国際共同研究」 タニグチ マサキ 谷口 雅章 農業・食品産業技術総合研究機構 畜産研究部門家畜畜種繁殖研究領域 13:10-14:40	休息	施設見学 14:50-16:20	休息	施設見学 16:30-18:00	
11/7(木)	9:00	10:30 10:40	12:10 12:20	13:50						
	受付 8:30-9:00	情報交換セミナー(2年生ボスターセッション) 9:00-10:30	休息 専攻セミナー(1年生プレゼンテーション) 10:40-12:10	休息 閉講式 12:20-12:50						



令和元年度鹿児島大学大学院連合農学研究科 農学特別講義 (一般セミナー)  
令和元年11月5～7日 於：鹿児島大学学習交流プラザ&農・獣医共通棟

令和元年度「農学特別講義Ⅰ（一般セミナー）」参加学生へのアンケートの集計結果は次表のとおりである。〔参加学生：54名 アンケート提出者：54名 アンケート回収率：100%〕

### 令和元年度農学特別講義Ⅰ（一般セミナー）アンケート調査結果

#### ・セミナーの理解度について

〔回答項目〕	セミナーA	セミナーB	セミナーC	セミナーD
ほぼ理解できた	28名 (52%)	37名 (69%)	17名 (32%)	26名 (48%)
半分程度理解できた	25名 (46%)	17名 (31%)	33名 (61%)	24名 (45%)
理解できなかった	1名 (2%)	0名 (0%)	4名 (7%)	4名 (7%)

#### ・セミナーの企画・運営等について

〔回答項目〕	日程（時期）	日程（日数）	会場
良い	48名 (90%)	54名 (100%)	54名 (100%)
悪い	3名 (5%)	0名 (0%)	0名 (0%)
その他	3名 (5%)	0名 (0%)	0名 (0%)

#### ・専攻セミナーについて

〔回答項目〕	グループの分け方
良い	48名 (89%)
改善すべき	6名 (11%)
無回答	0名 (0%)

#### ・専攻・情報交換セミナーについて

〔回答項目〕	プレゼンテーション	ポスターセッション	交流会について
意義がある	38名 (70%)	43名 (80%)	36名 (67%)
少しは意義がある	14名 (26%)	8名 (15%)	13名 (24%)
その他	2名 (4%)	3名 (5%)	5名 (9%)
無回答	0名 (0%)	0名 (0%)	0名 (0%)

#### ①セミナーの理解度について

参加者から「身近な問題のため興味があった」、「専門外でも興味深く聞くことができた」という意見が聞かれる一方で、「専門外のため英語がどうしても聞き取れなかった」、「専門用語等を調べながら対応したが分からない単語が多すぎて講義についていけなかった」との意見もあった。

#### ②セミナーの運営・企画等について

「時期」「日数」「会場」については、90%以上の学生から「良い」との評価を得られた。

#### ③専攻セミナー・ポスターセッションについて

専攻セミナーは、入退室を自由にしてほしい、他分野も聞いてみたいという意見が聞かれた。ポスターセッションは、発表時間が短かった、もう少し時間がほしいとの意見が聞かれた。

#### ④セミナー全般について（学生の意見・感想）

- ・普段接することがない先生を招聘して講義を行うことは大変意味があると感じた。
- ・他大学の学生さんと交流でき、様々な研究に触れることができる非常に有益な機会だった。
- ・自身の研究のプレゼンをする機会があり、他者とアイデアを共有できてよい機会だった。
- ・分野が離れていると単語でつまずき、その間に話が進むので理解するのが難しい時がある。
- ・自身の専攻以外の講義を聞くことができるので新鮮である一方、専攻外の専門英語などは知識不足から理解するのが大変だった。
- ・水産の学生としては、講義の内容で1つでも水産関連のトピックがあるとありがたいと感じた。

次年度の鹿児島大学農学部当番の開催においては、今回のアンケート結果を踏まえて、検討していくこととした。

### 3. 人材養成学生支援セミナー

令和元年8月7日（水）に佐賀大学農学部学生演習室をメイン会場として、鹿児島大学大学院連合農学研究科会議室と琉球大学農学部の会場を SINET で結び、「人材養成学生支援セミナーI 2019」が開催された。昨年度と同様に各会場に講師をお招きして講義をしていただく方式で実施され、鹿児島大学の会場から2つの演題、琉球大学と佐賀大学の会場からそれぞれ1つの演題が配信された。連大生の受講者に加え、連大以外の学生や教員の参加も見られ、充実したセミナーであった。

セミナーは4つの講演と質疑応答からなり、その概要は以下のとおりである。

#### 講演1 大前 英 氏（研究開発法人 国際農林水産業研究センター 熱帯・島嶼研究拠点）

題目：地球の食料の未来のために熱帯・島嶼研究が果たすべき役割

本講演では大前先生が鹿児島大学大学院連合農学研究科の博士課程等を経て、研究能力、倫理観、社会性、国際性、社会経験、リーダーシップ、責任感などをどう身に付けてきたかについて、先生が歩んでこられた職歴を、年代ごとに振り返りながら説明された。そして、最後に、先生が現在勤務されている国際農林水産業研究センターの熱帯・島嶼研究拠点で現在抱えておられる課題とそれに対する解決策および将来に向けての抱負を述べられた。

#### 講演2 野原 恵子 氏（国立環境研究所）

題目：国立環境研究所における健康影響研究

本講演では野原先生が現在研究されている「継世代影響」と呼ばれるマウスの母親が妊娠中に環境化学物質に暴露された場合、仔の精子に変化が起これ、その影響がさらに孫世代の疾患の増加に関与するという現象についてご説明いただいた。そして、その研究を遂行するにあたって必要となる研究グループ作りや共同研究の進め方、学会活動や委員会活動などについてもご講演いただいた。

#### 講演3 吉ざわ 努 氏（農林水産省九州農政局 鹿児島県拠点）

題目：農林水産省関連の行政。研究機関について

本講演では農林水産省関連の行政・研究機関の業務について、農林水産省本省、動物検疫所、動物医薬品検査所、国立研究開発法人 農業・食品産業技術総合研究機構などの業務内容等についてご説明いただいた。

#### 講演4：玄 丞 氏（(株)ビーエムジー；鹿児島大学共同獣医学部）

題目：生体材料学の基礎研究から臨床応用まで

本講演ではポリグリコール酸を用いた国産初の生体内分解吸収性の外科用縫合糸や、グリコール酸/乳酸共重合からなる三次元多孔質メンブレンを用いた歯周疾患治療のための組織誘導再生膜、生体内分解吸収性ポリ乳酸高強度・高弾性率吸収性骨折治療材、フィブリン糊にかわる生体に優しい医療用接着資材 LYDEX について具体的に紹介いただいた。

最後に、本セミナーを開催するにあたって快くご講演いただいた講師の先生方に厚く御礼しますとともに、各会場で機器のセットアップや講演の準備をしていただいた各構成大学の代議委員、事務職員の皆様に感謝いたします。また、このセミナーが連大生の今後の人生や将来のキャリア形成に役立つことを祈念いたします。

### 人材養成学生支援セミナー I 2019 日程表

8:50	9:00	10:30	10:40	12:10	13:30	15:00	15:10	16:40
8月7日(水)	開講挨拶	講義 1 地球の食料の未来のために熱帯・島嶼研究が果たすべき役割 <b>村マヒ</b> 大前 英 研究開発法人国際農林水産業研究センター熱帯・島嶼研究拠点拠点所長	休憩	講義 2 国立環境研究所における健康影響研究 <b>ハシ ケイ</b> 野原 恵子 国立環境研究所フェロー(元 国立環境研究所環境健康研究センター長)	昼食	講義 3 農林水産省関連の行政・研究機関について <b>シザワ ツム</b> 吉奥 努 農林水産省九州農政局 地方参事官(鹿児島県担当)	休憩	講義 4 生体材料学の基礎研究から臨床応用まで <b>ゲン ショウキウ</b> 玄 丞彦 (株)ビーエムジー 代表取締役社長
講義大学		琉球大学		鹿児島大学(水)		佐賀大学		鹿児島大学(農)

場所：各大学SINET設置教室  
 佐賀大学：佐賀大学農学部1号館南棟1階学生演習室  
 鹿児島大学(農)：鹿児島大学連合農学研究科3階会議室  
 鹿児島大学(水産)：鹿児島大学附属図書館水産分館セミナールーム  
 琉球大学：琉球大学農学部2階会議室



講演 4 玄先生のご講演



SINETにて配信



#### 4. 分野別セミナーの開催

平成 24 年度から、構成大学間の連携を促進し、さらに地域特性に根ざした産学官の連携も視野に入れて、連大生を中心とした若手研究者の意欲の向上に資することを目的とした「分野別セミナー」を開催している。令和元年度は、2 件の分野別セミナーが開催された。

(1) セミナー名称：分野別セミナー（農芸化学）

開催日時：令和 2 年 2 月 27 日（木）～28 日（金）

会 場：佐賀大学農学部 1 号館第 3 講義室

セミナー初日は、講演とポスター発表を実施した。最初は、九大院工教授の神谷典穂先生に「酵素が触媒する架橋反応に注目した複合バイオ材料の設計と応用」と題した講演で、最新のタンパク質架橋技術の基礎とその多岐にわたる応用利用について、基礎から応用までわかりやすく説明していただいた。

ついで、九大生医研教授の馬場健史先生に「超臨界流体抽出分離技術が拓く次世代代謝物分析」と題した講演をいただいた。超臨界流体抽出分離技術で実際に研究機器を開発した実績までをわかりやすく説明していただいた。両先生ともに各講演中にも質疑応答のある活発な講演会となった。ポスター発表 12 題では、前半発表組と後半発表組とに分け、教員、学生が入れ替わりで討論した。最後に交流会が行われ、参加者の交流を深めた。2 日目は、日本酒酒蔵の佐賀県中部の天山酒造と佐賀県東部の基山商店を見学した。ともに酒蔵の特徴を生かした酒造りを行っており、見学をしながら清酒の製造法を教えていただいた。

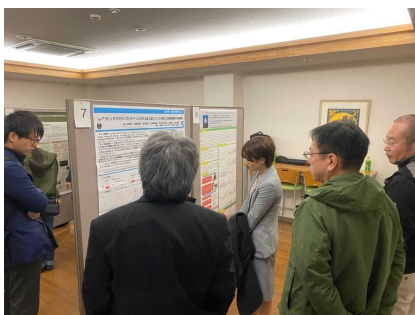
本セミナーに参加した農芸化学系の研究分野に所属している学生は、最先端の研究内容に触れ、幅広い専門分野の知識を習得する機会を得た。特に、セミナー講師の神谷先生、馬場先生は、ともに数多くの企業と共同研究をされており、学生だけでなく、教員も産学の連携研究の意義や方策について学ぶ貴重な機会になった。また、ポスター発表や交流会では、発表スキルの向上、学位論文のまとめ方の参考、教員、学生間の交流を行うことができた。農芸化学関連企業の見学を通して、農芸化学分野の応用利用のあり方を学ぶことができた。セミナー全体を通して、大学院生同士の情報交換や指導教員以外の教員からのアドバイスを受ける絶好の機会となり、教育研究の効果が広まったと思われる。



神谷先生のご講演



馬場先生のご講演



ポスター発表



天山酒造



基山商店

(2) セミナー名称：環境問題と農村コミュニティ ―日本とアジア―

開催日時：令和2年2月8日（土）

会場：佐賀大学農学部学部運営会議室

現在、佐賀大学農学部では、連合大学院の地域・国際資源経済学連合講座に属するメンバーとその修了生らにより、Environmental problems of rural communities in developing countries と題されたプロジェクト研究を行っている。これまで、日本のほかに、スリランカの灌漑農村における獣害問題・森林破壊問題、バングラデシュの残留農薬問題、ラオス、アフリカ農村のフードセキュリティと健康問題、インドネシア低平地の酸性土壌問題など、アジアを中心とした途上国の環境問題について、事例研究が蓄積されてきた。本研究は、これらの研究をまとめ今後の研究協力や教育協力につなげるため、調査手法や行政および調査対象地との関係などについて討論をおこない、今後の体制を整えるために開催された。講演者として漁村研究・海洋生物学の藤井直紀氏、講師として別紙のと通りの4名に加え、現役の連合大学院学生も現況報告をおこない、その後、コメンテーターの山田直子氏、E・ワファレッタ氏をむかえて討論がなされた。

セミナーでは、有明海の漁業研究についての講演のあと、環境問題や自然災害などによって農山漁村が直面している困難、およびそれらに研究者らがどのように取り組んでいるかについての報告が行われ、その手法などについての情報が共有された。それらの結果、自然災害と灌漑システム、貨幣経済化の進展と水の汚染や土壌流出、洪水への対処など、水問題に対する社会システムの研究がきわめて重要でかつ協働して取り組むことができる共通テーマであるという認識にいたった。また、今後の体制について、共同研究や博士課程の学生の交換だけではなく、修士や学部学生の研修や単位互換まで含めて共同研究を行うことができるような体制案について議論が行われ、来年度から組織的な交流を試みる予定となった。

## 5. 修了生、在学生を対象としたアンケートの実施

例年、修了生を対象としたアンケートを実施している。

これは、自己点検・評価の参考とするため、平成18年4月に、平成11～17年度修了者を対象に郵送により実施したのが始まりで、以後は修了時に学生から回答してもらう形を取っており、平成24年度からは、Webによる入力方式で行っている。

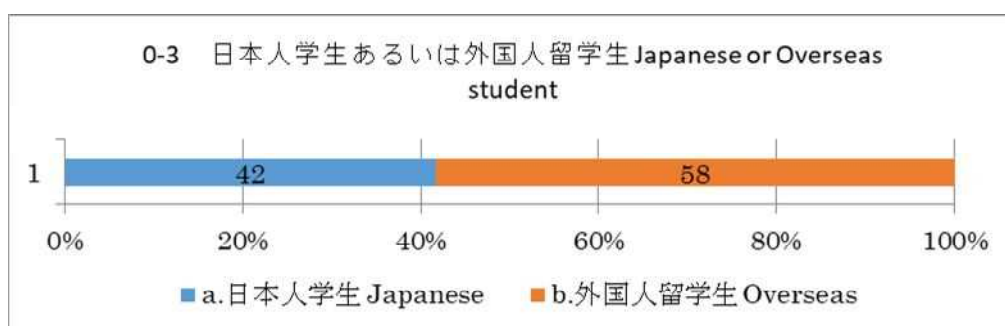
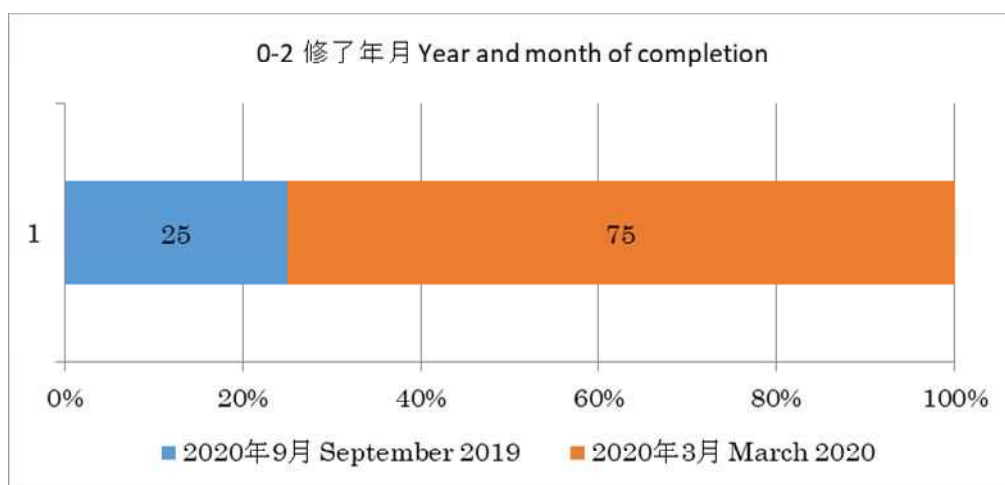
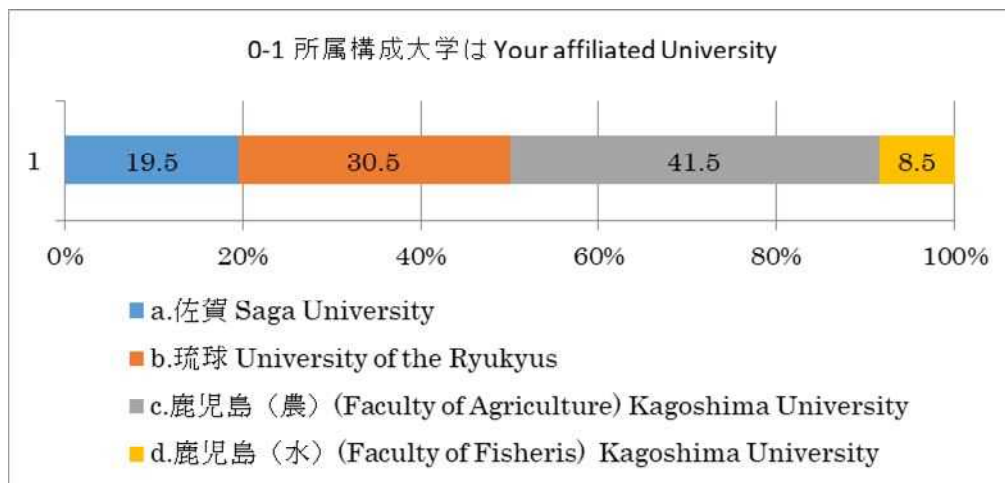
さらに、平成25年度からは在学生へのアンケートを開始した。これは、FD委員会において、現在連大で学ぶ学生から一番身近な現場の声を聞くことで、より学生の声が反映されるのではないかとの見解から、実施を決定したものである。

### (1) 令和元年度修了生へのアンケート集計結果

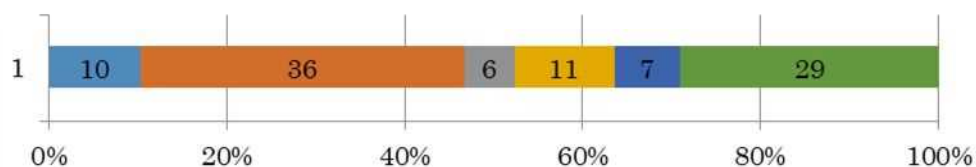
令和元年9月修了生7名中、回答学生6名（回答率86%）

令和2年3月修了生25名中、回答学生18名（回答率72%）

(以下アンケート項目より一部抜粋)

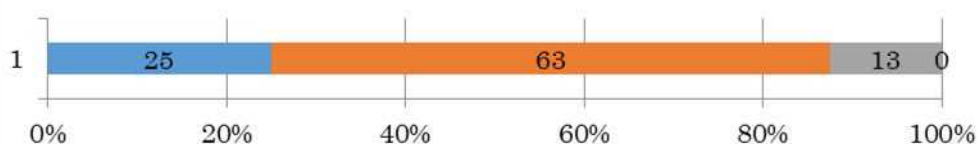


0-4 奨学金受給状況 Scholarship status



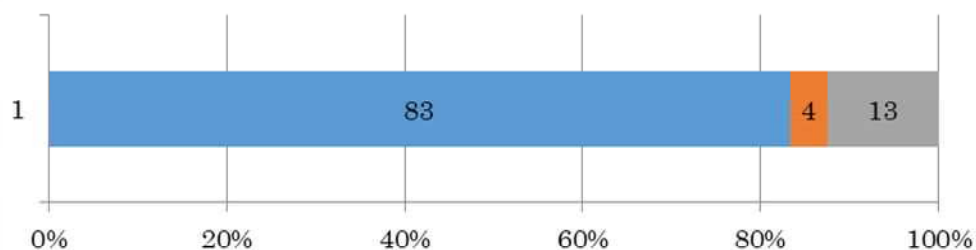
- a. 日本学生支援機構 (旧日本育英会) JASSO (Ikuei-kai)
- b. 国費留学生 MEXT
- c. 外国政府派遣留学生 (Non Monbusho) National (Government of home country) scholarship
- d. その他奨学金 Other scholarship(s)
- e. 社会人 Working professional
- f. 自費 Without any scholarship

0-5 連大への入学目的 The purpose of study in the UGSAS



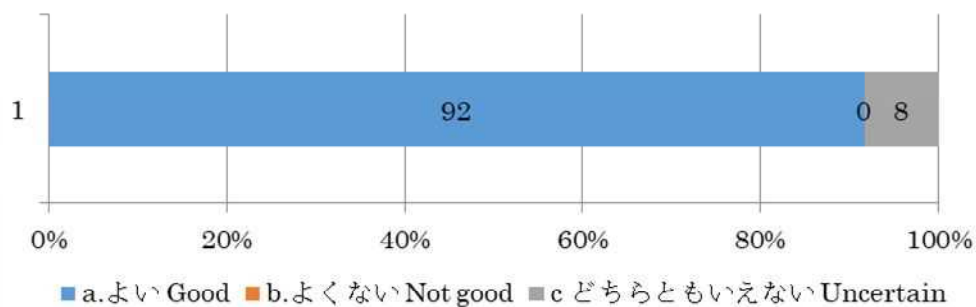
- a. 研究をさらに発展させるため Further development of the research (in Master's Course)
- b. 学位の取得のため To get the Ph.D. degree position
- c. 研究職に就きたいため To get a researcher post
- d. その他 others

農学特別講義 (一般セミナー) の内容・方法について  
On the contents and method of Agricultural science (General Seminar))



- a. よい Good
- b. よくない Not good
- c. どちらともいえない Uncertain

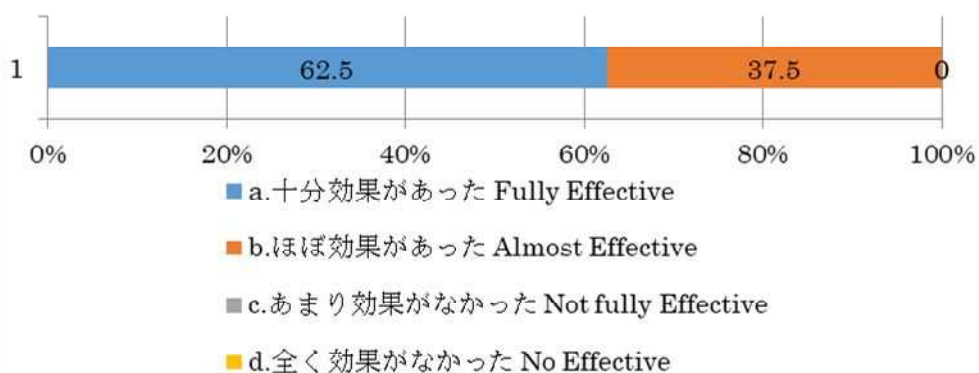
専攻別講義・特論の内容・方法について  
On the contents and method of the Course Subjects (Lecture・Intensive Lecture)

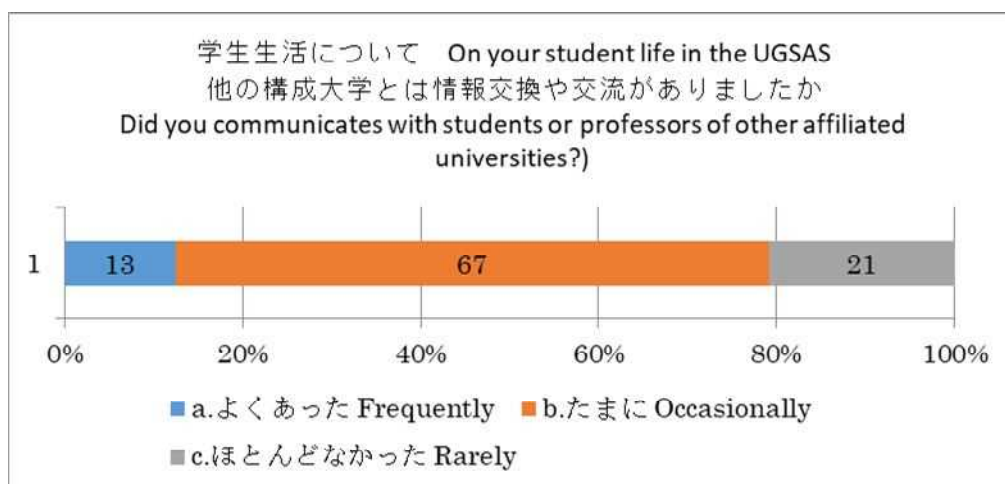


全般的に見て教員の指導に満足しましたか  
On the suggestions from your advisors



中間発表はあなたの研究を進める上で効果がありましたか  
Do you think that midterm presentation (midterm PhD defense) was effective for your research





アンケートの回答率は令和元年9月修了生で86%、令和2年3月修了生で72%だが、両者を平均すると75%の回答率である。回答率が高いことから、回答者の構成大学の割合と修了年月、日本人学生と留学生の割合は3年次在籍者の構成比とほぼ同じである。奨学金受給状況では、64%の学生が何らかの奨学金を受給しており、そのうち、国費留学生と外国政府派遣留学生の割合は42%となっている。

連合農学研究科への入学の目的は、「学位取得のため」が最も63%と多く、次いで「研究をさらに発展させるため」が25%、「研究職に就きたいため」が13%となっている。このことから、連合農学研究科に入学する学生の目的意識は高く、学位を持った研究者になることと明確である。

連合農学研究科の講義、セミナー、専攻別講義、特論の内容や方法については、肯定的な評価が農学特別講義で83%、専攻別講義・特論で92%となっており、満足度が高いと評価できる。また、教員の指導についても肯定的な評価が79%であった。また、学生生活については、他の大学の学生との交流や情報交換があったと回答した学生は80%に達し、セミナー参加やメール、SNS等を介しての交流が見られた。

また、中間発表会は全ての修了生が研究を進める上で非常に有効であったとの高く評価し、研究成果についても92%が肯定的な評価だった。学生満足度を今後も同水準で維持するために、令和2年度におけるFD活動の一環として反映させるようにしたい。

## (2) 令和2年度2年生へのアンケート集計結果

対象学年(2年生)27名中、回答学生24名(回答率89%)

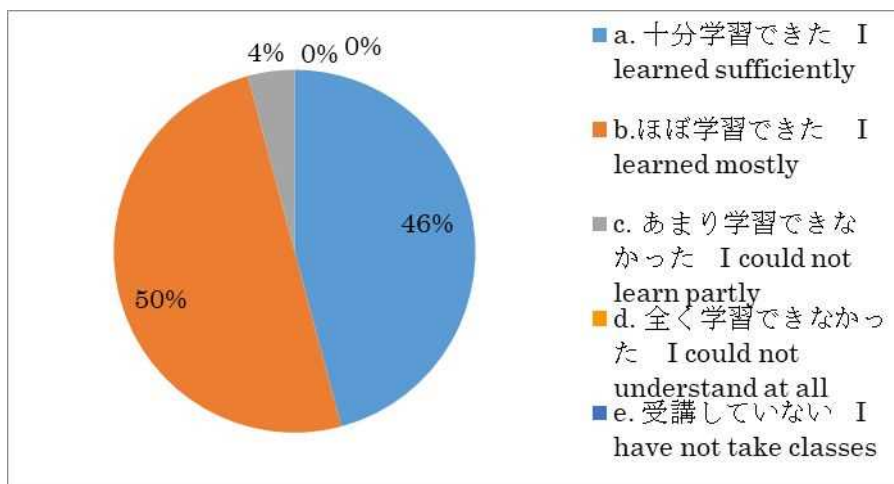
(以下アンケート項目より一部抜粋)

・講義・セミナーについて Lectures/Seminars

1-1.研究科共通セミナーについて、十分学習できましたか。

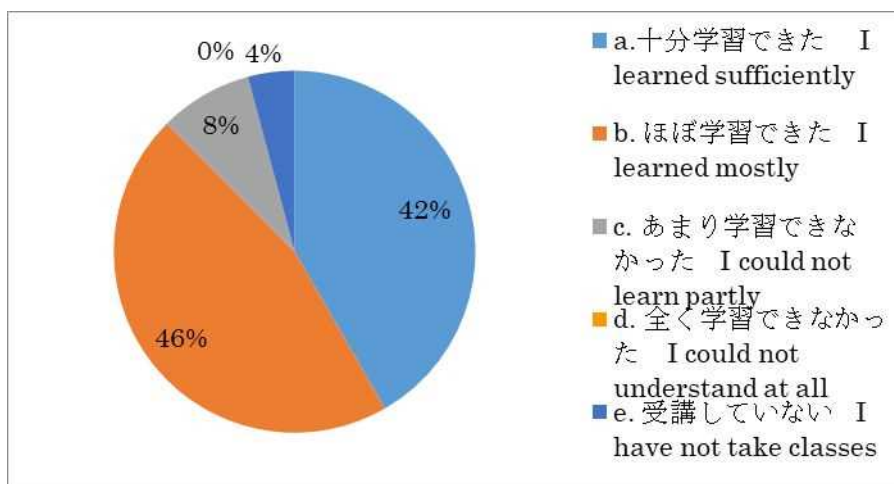
Did the joint Graduate School seminars teach you what you wanted to know?

(1) 農学特別講義Ⅰ（一般セミナー） Special Agriculture Lectures 1 (General Seminars)

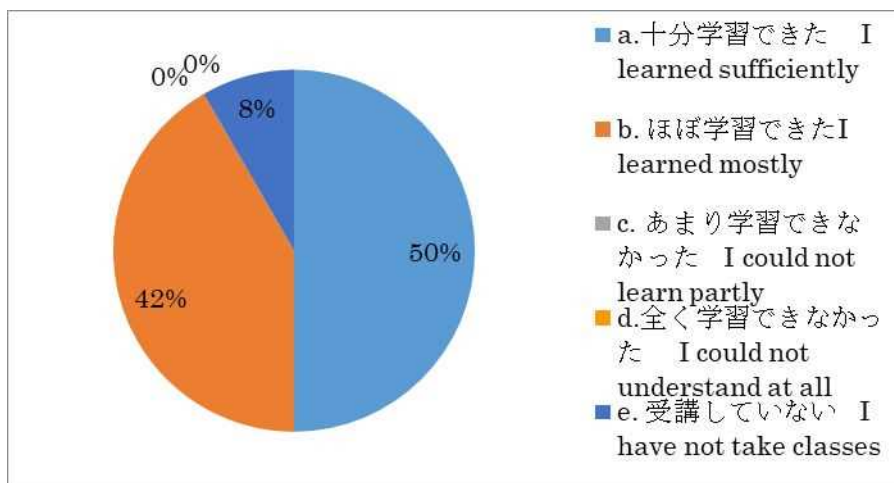


(2) 農学特別講義Ⅱ（連合一般ゼミナール（日本語6月・英語11月））

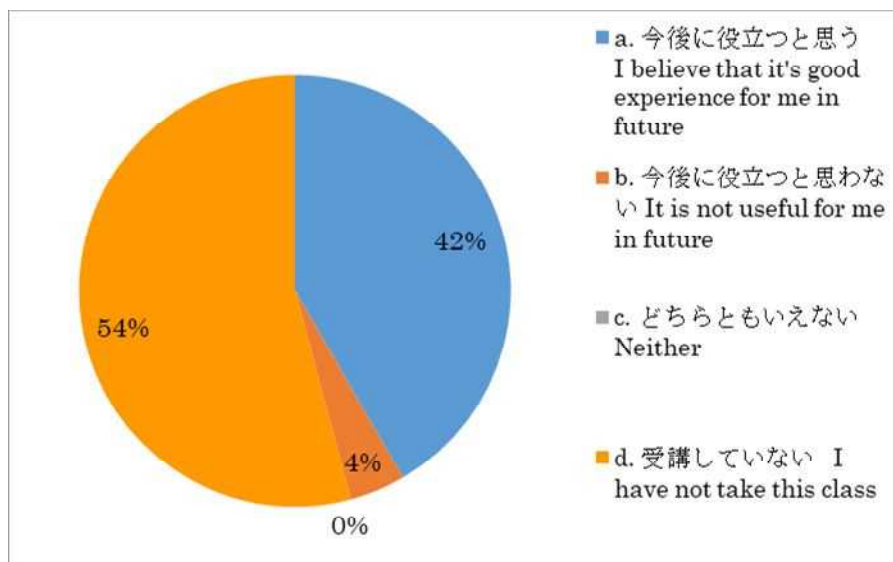
Special Agriculture Lectures II (United General Seminar/Japanese・English)



(3) 専攻別特別講義・特論 Lectures/Special seminars for each Major

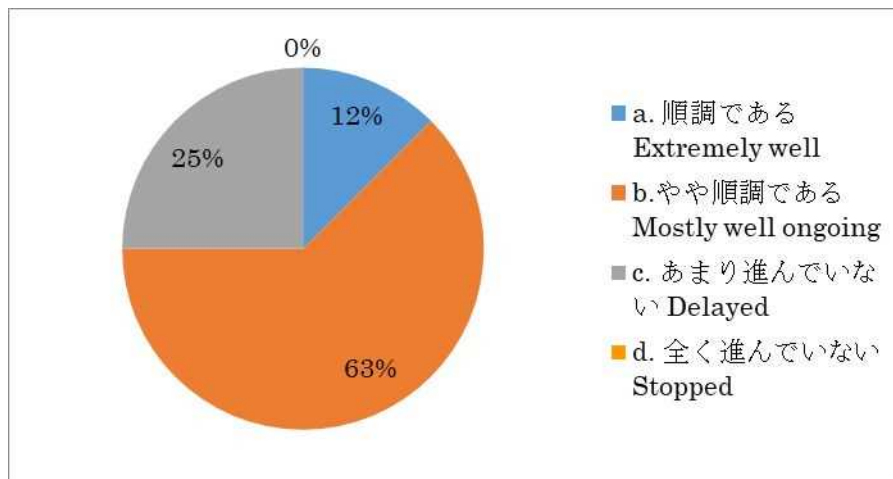


(4) 人材養成学生支援セミナー Student support seminars for human resource development



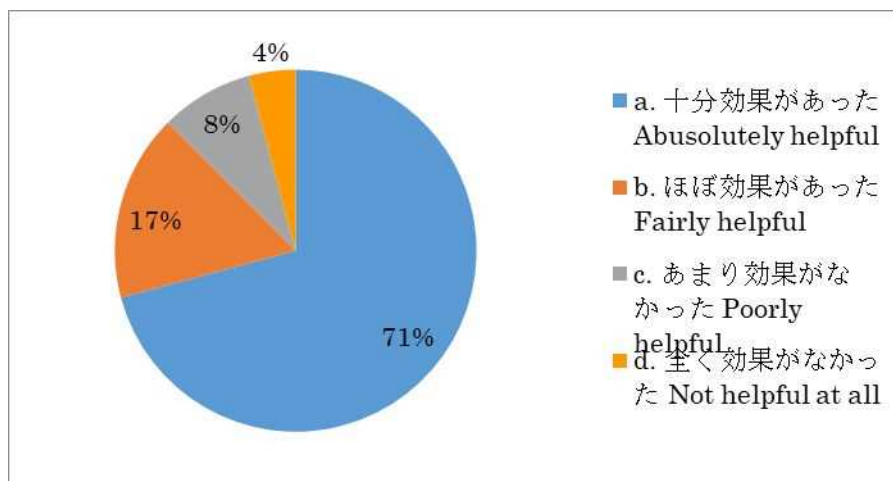
2. 研究・指導について Research/Teaching

2-1. 研究の進捗状況について教えてください。How is your research progressing?



2-2. 中間報告会及び中間発表会は、あなたの研究を進める上で効果がありましたか。

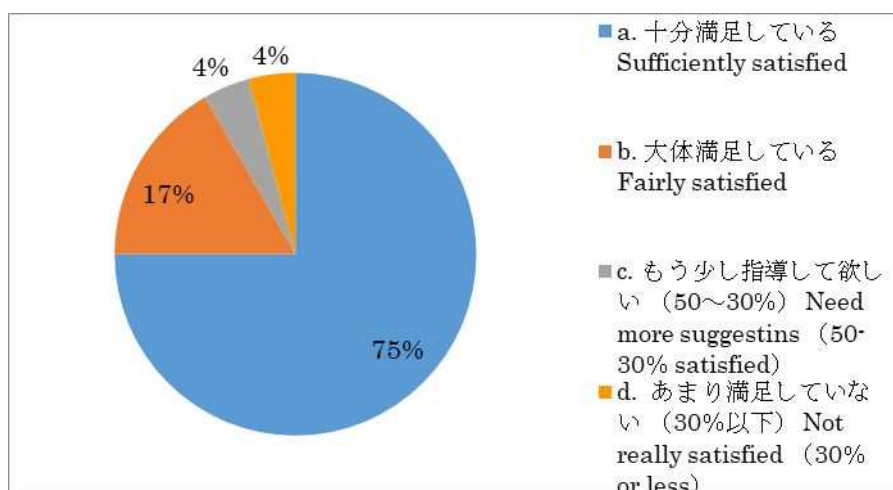
Were the mid-term reporting and mid-term presentations helpful in progressing your research?





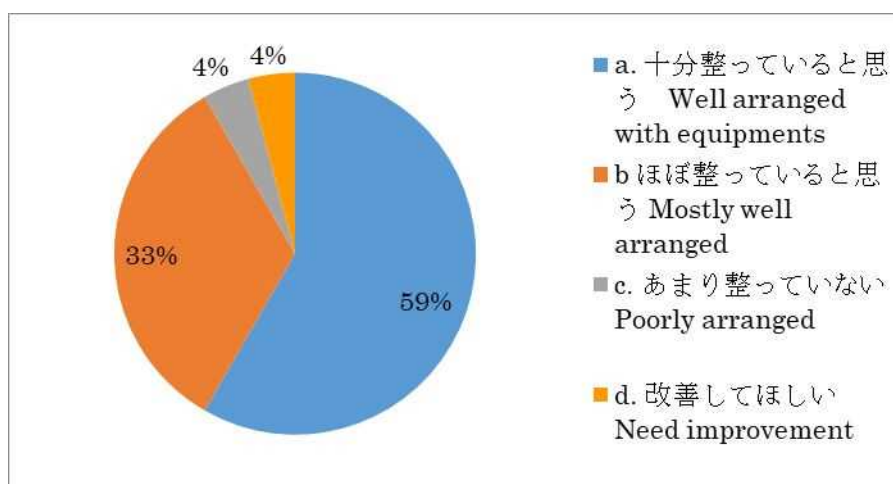
2-3. 全般的に見て主指導教員及び第1副指導教員の指導に満足していますか。  
(アドバイス・サポート等)

Overall, are you satisfied with the instructions by principal and first deputy supervisors?  
(Advice, support, etc.)



2-4. 研究設備・環境等は十分整備されていると思いますか。

Are the research facilities/environment organized well enough?



在学生(2年生)へのアンケートは、回答率89%と修了生へのアンケートと同等の水準だった。各セミナーの内容、教員の指導、研究設備等に関しては、肯定的な評価が農学特別講義Iで96%、農学特別講義IIで88%、専攻別特別講義・特論で92%に達し、高い満足度が得られた。一方、人材養成学生支援セミナーでは、肯定的な評価が42%だったが、受講していない学生が54%に達した。実際、同セミナーの受講者の評価は高いものの、受講者数が少ないことから、開講期や周知のあり方について検討する必要があると考えられた。

今後も高い満足度を維持するために現状の見直しを行い、FD委員会を中心に改善策を検討し、FD活動の一環として反映させていきたい。これらのアンケートについては、今後も継続して実施し、年度ごとの比較も含めてデータ分析を行い、FD活動の源として本研究科の教育研究の将来に役立たせていきたいと考える。

## 6. その他のFD活動

ティーチング・アシスタント／リサーチ・アシスタント制度による活動実態把握

ティーチング・アシスタント（TA）制度は、大学院学生の処遇の改善とともに、指導者としてのトレーニングの機会提供を目的として実施している。また、リサーチ・アシスタント（RA）制度は、本研究科の構成大学における学術研究の一層の推進に資する研究支援体制の充実・強化並びに若手研究者の養成・確保を促進するため、本研究科の構成大学が行う研究プロジェクト等に、本研究科の優れた学生を研究補助者として参画させ、研究活動の効果的推進、研究体制の充実及び若手研究者としての研究遂行能力の育成を図ることを目的として、実施している。

連大においては、各構成大学でTA採用学生を対象にTA研修会を開催した。それぞれで開催されたTA研修会では具体的には、「鹿児島大学の教育理念とTAの心構え」、「TA業務に関わる注意事項」および「安全衛生について」の項目で、それぞれの代議委員が日本語と英語で説明を行った。令和元年度のティーチング・アシスタントの採用数は43名で、リサーチ・アシスタントの採用数は、17名であった。ティーチング・アシスタントには、アンケートシステムによる「TA活動実施報告書」を提出させており、「TAは将来学生を指導する際のトレーニングとして有益でしたか？」という問いに対する回答はとても参考になった：75%、まあまあ参考になった：21%で、学生の約96%が参考になったという意見であった。

次年度においても、TAとしての心構えの徹底および技能の向上をはかり、大学院生のそれぞれの専門分野での研究および教育上の指導者としての能力向上に資するよう継続的に改善を講じていく。そのため、大学院生の指導教員からより積極的に指導・助言するよう学内周知を徹底することに努めたい。RAは、本研究科の各構成大学で実施される研究プロジェクト等の効率的推進のため、研究補助者としての役割が期待されているとともに、RA期間は大学院生自身の研究能力を磨く貴重な機会である。したがって本研究科教員が研究代表者を務めるプロジェクト等では積極的にRAを採用するとともに、周囲の研究科教員もRA受入者として継続的・協調的に適切な指導を行うなど、本研究科大学院生の若手研究者としての資質向上に向け、研究科全体で協力して取り組む必要がある。

## 7. おわりに

本報告書では、農学特別講義Ⅰ（一般セミナー）、人材育成学生支援セミナー、分野別セミナー、修了生・在学生を対象としたアンケート、及びティーチング・アシスタント／リサーチ・アシスタント制度による活動について取りまとめた。特に、農学特別講義Ⅰ（一般セミナー）では、日本人学生、留学生、社会人学生及び代議委員が一堂に会し、先端的でトピック性のある講義（英語のみ、あるいは日本語と英語の併用）を同時に受け、さらにポスターセッション等を通じて学生各自の研究内容の紹介を行い、プレゼンテーション能力を向上させるとともに、他大学の多様なバックグラウンドを持つ教員・学生との討論・意見交換を行うものである。本講義は、学生が確かな説明能力を身につけ、グローバルな視野を備えた研究者の養成に寄与するものと考えられる。

一方で、アンケート結果によれば、高い専門知識が要求される講義内容に十分に対応できていない学生や情報交換セミナーのポスターセッション・プレゼンテーションに意義を感じていない学生も含まれている。今回のアンケート調査によれば、セミナーA、C、Dにおいて、それぞれ、1名、4名、4名の学生が理解できなかったと回答している。この点は、農学で対象とする分野が、社会科学から物理・化学・生物を基盤とした生命科学や環境科学などに渡っており難しい課題ではあるが、今後、代議委員で構成するFD委員会で見直しを行い、博士課程学生に対する教育ならびに指導方法について、改善が必要な点に関しては適切に対応していきたい。

また、人材育成学生支援セミナーでは、企業等と協働した、多様かつ具体的なロールモデルの提供を

行っている。本セミナーは、社会に貢献し、豊かな学識を備えた研究者の養成に寄与しており、博士号取得後の民間企業への就職の動機づけとしても有意義である。なお、学生の本セミナーへの参加者が少ない点があり、学生に広くセミナーの内容を周知するとともに、学生が参加しやすい開催時期についても再検討する必要がある。

令和元年度では、報告書本文に記載した以外に、以下の2点を強調したい。まず、令和元年9月6日、研究科教授会に先立って、鹿児島大学障害学生支援センターの今村智佳子先生から、「発達障害のある学生の理解と支援」と題してご講演いただいた。博士課程学生の教育・研究指導において、教員が理解しておくべき基本的かつ重要なテーマである。このような講演を通じて、ひいてはハラスメント等に関わるリスクマネジメントに対する連大の教員集団間での合意形成を図ることができる。次に、平成30年より開始した連大資格取得者研修会を、令和元年度もSINETを通じて、新しく資格を取得した連大教員に対して実施した。連大が、3構成大学連合して学生指導に当たっていること、特に、主指導教員と2人の副指導教員と密接な連絡を取りながら研究指導を行っていることについて、新しく資格を得た連大教員が学生指導前に十分に理解していることが重要であることから、今後も、継続して実施していく予定である。以上、連大独自の講演会や研修会を通じて、日ごろは異なる大学に所属している構成教員間の意見交換・情報交換を行い、ファカルティ・デベロップメントの観点から連大として改善できる部分については、さらに見直しを図り、教職員一丸となって進めていく。



**今村智佳子先生のご講演**  
**「発達障害のある学生の理解と支援」**  
**(令和元年9月6日開催)**



**連大資格取得者研修会**  
**(令和2年1月10日開催)**

令和元年度 鹿児島大学大学院連合農学研究科FD委員会委員

委員長	糴 井 和 朗	研究科長
委員	寺 田 竜 太	副研究科長
委員	和 田 康 彦	(佐賀大学)
委員	大 島 一 里	(佐賀大学)
委員	モハト・アマト・村伊	(琉球大学)
委員	大 田 伊 久 雄	(琉球大学)
委員	芝 山 道 郎	(鹿児島大学)
委員	坂 上 潤 一	(鹿児島大学)
委員	吉 川 毅	(鹿児島大学)